

上塩治築山古墳の再検討

2018

出雲弥生の森博物館

序

今から約 130 年前の 1887（明治 20）年、上塩治築山古墳の石室が開かれました。西南戦争から 10 年、ようやく維新の動乱が収まったころでした。

この古墳の美しい切石積み石室と巨大な石棺、きらびやかな副葬品の数々は多くの市民や研究者の注目を集めるとともに、山陰を代表する後期古墳としての評価が高まり、1924（大正 13）年、古墳は国の史跡に指定され保護が図られました。

20 世紀の終わり、島根県古代文化センターは、上塩治築山古墳を総合的に研究した成果を『上塩治築山古墳の研究』として上梓しました。東アジア的視野からの分析などを通じて、この古墳の歴史的意義に迫るものでした。さらに、本古墳の出土品は『古代出雲歴史文化展』（1997 年、東京・松江・大阪）や『日本考古展』（2004 年、ドイツ）への出陳を通して、日本を代表する考古資料として認められるところとなりました。

発見から 100 年以上も地元で大切に保存されていたこれらの出土品は、2010（平成 22）年に開館した出雲弥生の森博物館でも重要な展示資料のひとつです。これをさらに未来へと継承していくため、当館では文化庁と島根県教育庁の指導の下、国立文化財機構の諸機関などの協力をえて上塩治築山古墳の総合的な調査研究をおこないました。この 20 年間に進展した科学的分析手法や遺跡周辺での考古学的調査成果は、上塩治築山古墳とその出土品に新たな光をあててくれました。本書はその成果報告です。ご指導、ご教示、ご協力いただいた関係者と関係機関に篤くお礼申し上げます。

本書の内容をわかりやすく市民に伝えること、そして今後の新たな発見に備えて出土品を確実に未来へと保全していくことが博物館の使命だと考えていますので、これからもご支援のほどよろしくお願ひいたします。

2018 年 3 月

出雲弥生の森博物館

館 長 花谷 浩

例　言

- 本書は、島根県出雲市上塩治町 262-6 ほかに所在する国指定史跡・上塩治築山古墳の出土品について、出雲市の所蔵資料を中心に行った整理事業の調査報告書である。
- 出土品の整理事業は、下記の期間及び体制で実施した。

〈平成 27 年度（2015）〉出土品・図面整理

出雲市市民文化部 学芸調整官 花谷 浩

同 文化財課 課長 佐藤隆夫 課長補佐 野坂俊之
係長 原田和紀 主任 坂本豊治
主事 安部百合子

室内整理作業員 妹尾順子、中島和恵、吹野初子

〈平成 28 年度（2016）〉出土品・図面整理

出雲市市民文化部 学芸調整官 花谷 浩

同 文化財課 課長 佐藤隆夫 課長補佐 野坂俊之
係長 原田和紀 主任 坂本豊治
主事 安部百合子 主事 景山このみ

室内整理作業員 糸賀伸文、妹尾順子、中島和恵、吹野初子、
吉村香織

〈平成 29 年度（2017）〉出土品・図面整理、報告書作成

出雲弥生の森博物館 館長 花谷 浩

出雲市市民文化部文化財課 課長 佐藤隆夫 課長補佐 大梶智徳
係長 三原一将 主任 坂本豊治
主任 安部百合子 主事 景山このみ

臨時職員 吉村香織 室内整理作業員 飯國陽子、鵜口令子

- 報告書作成にあたって、下記の方から玉稿を賜った（敬称略、順不同）。
上山晶子（島根県教育庁埋蔵文化財調査センター）、田村朋美（奈良文化財研究所）

- 調査及び報告書作成にあたって、次の方々及び機関からご指導・ご協力をいただいた。
ご芳名を列記し、謝意を捧げる（敬称略）。

文化庁文化財部美術学芸課、島根県教育庁文化財課、島根県古代文化センター、島根県埋蔵文化財調査センター、島根県立古代出雲歴史博物館、善通寺市教育委員会、武雄市教育委員会、奈良文化財研究所、九州国立博物館、京都大学総合博物館、鳥取県埋蔵文化財センター、米子市埋蔵文化財センター、能勢町教育委員会、

淺沼政誌、赤田昌倫、池瀬俊一、牛嶋茂、大谷晃二、笠川龍一、澤田正明、重金誠、田中大、
豊島直博、西尾良一、松尾充晶、松本岩雄、村上由美子、桃崎祐輔、柳浦俊一、渡邊貞幸

5. 平田市(現・出雲市)文化財保護審議会委員を務められた西尾良一氏が玄室内で採集した鉄鏃 1 点、水晶算盤玉 1 点、水晶丸玉 1 点、ガラス小玉 4 点、木片 1 点を出雲市へ寄贈していただいた。記して感謝する。
6. 本書の執筆者については、文末及び下記に記す。編集は、坂本が行った。
- 第1章(坂本)、第2章(景山)、第3章(坂本)、第4章(坂本)、第5章(花谷、坂本、景山)、第6章第1節(上山)、第6章第2節(田村)、第7章第1節(坂本)、第7章第2節(花谷)、第7章第3節(景山)、第7章第4節(坂本)、第8章(坂本)
- *第5章第6節は、原田昌幸、横須賀倫達(文化庁文化財部美術学芸課)の指導のもと作成した、出雲市所蔵品の重要な考古資料目録である。
7. 本書に掲載した写真は、坂本が撮影し、一部を牛嶋 茂(図版6 装飾品、図版7)と赤田昌倫(図版33~35)が撮影した。また、金属製品のX線透過写真(図版8)は澤田正明、ガラス玉の顕微鏡写真(第6章第2節、図版27)は田村朋美が撮影した。出土品の集合及び須恵器、埴輪などの大形品の撮影にあたっては、島根県立古代出雲歴史博物館の協力をえた。
8. 本書に掲載した出土品の実測は、金銅冠(第12図)を坂本が、馬具と銅鈴(第19~31図)を花谷が、馬具以外の金属製品と玉類(第13~18図、第32~38図)を景山が担当した。また、須恵器、埴輪(第39~46図)は坂本と景山、吉村、田中大が実測し、これらの実測にあたっては、既往の報告書を参照した。なお、出雲市の所蔵品でない出土品(第47~50図)の図面は、既往の報告書から転載した。
9. 本書で用いた測地系は世界測地系第Ⅲ系であり、方位は座標北、レベルは海拔高を示す。
10. 本書に掲載した出雲市所蔵の出土品、図面及び写真は、出雲弥生の森博物館で保管している。
11. 本書で共通して引用する報告書は下記のとおりである。文中では略称で表記し、第5章、第7章の表中では①~④の番号で表記する。その他の参考文献は各節・項の文末に記す。
- ①松本岩雄編 1999『上塙治築山古墳の研究』—島根県古代文化センター調査研究報告4— 島根県古代文化センター ※本書では上記の報告書を『県報告』と略称する。
- ②三原一将・高橋智也編 2004『上塙治築山古墳』出雲市教育委員会
- ③本書 ※第5章第6節の目録において、本書の掲載図番号を示す際に用いる。
- ④須賀照隆編 2006『上塙治築山古墳の調査』『出雲市埋蔵文化財発掘調査報告書』第16集 出雲市教育委員会 1~8頁
12. 本書で用いる須恵器編年は、大谷晃二による下記の論文に拠る。文中では、「須恵器編年出雲〇期」と表記した。
- 大谷晃二 1994「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第14集 島根考古学会 39~82頁
大谷晃二 2001「上石堂平古墳と出雲西部の横穴式石室」曾田辰雄編『上石堂平古墳群』平田市埋蔵文化財調査報告書第8集 平田市教育委員会 43~54頁
13. 第5章に掲載する出土品実測図(第12~46図)の資料番号は、重要文化財の通番である。附指定のものはその数字を□で囲った。また、指定品以外の出土品には、カタカナやアルファベットを附した。

目 次

第1章 過去の調査研究と本書の目的	1
第1節 古墳の発見から『県報告』まで	1
第2節 『県報告』以降の調査と周辺古墳の調査	3
第3節 出土品と遺跡の保護・活用	4
第4節 本書の目的	5
第2章 古墳の立地と歴史的環境	7
第1節 上塙治築山古墳の立地	7
第2節 歴史的環境	8
第3章 墳丘と石室	11
第1節 墳丘	11
第2節 石室	13
第3節 石棺	16
第4節 小結	18
第4章 出土品の現況と副葬状況	19
第1節 出土品の収蔵状況	19
第2節 石室内の出土品副葬状況	20
第5章 出土品の詳細	23
第1節 金属製品	23
第2節 玉	49
第3節 土製品	52
第4節 その他の出土品	66
第5節 小結	72
第6節 重要考古資料目録	73
第6章 自然科学分析	91
第1節 金属製品の蛍光X線分析	91
第2節 ガラス玉の考古科学的検討	101
第7章 総 括	127
第1節 金銅冠の検討	127
第2節 馬具の検討	135
第3節 子持壺の検討	147
第4節 円筒埴輪の検討	157
第8章 結 語	171

図 版

報告書抄録

挿図目次

第1図	上塩治築山古墳のこれまでの 発掘調査位置図	3	第45図	円筒埴輪実測図（3）	61
第2図	上塩治築山古墳の位置	7	第46図	円筒埴輪実測図（4）	62
第3図	出雲平野の主要遺跡	8	第47図	京都大学総合博物館所蔵品実測図	66
第4図	上塩治築山古墳周辺の後期古墳・横穴墓	10	第48図	東京大学総合研究博物館所蔵品実測図	66
第5図	上塩治築山古墳の墳丘	12	第49図	東京国立博物館所蔵品実測図	67
第6図	出雲西部における主墳丘部規模	13	第50図	所在不明勾玉実測図	68
第7図	横穴式石室実測図	14	第51図	蛍光X線分析スペクトル（1）	95
第8図	出雲における横穴式石室の玄室規模	15	第52図	蛍光X線分析スペクトル（2）	96
第9図	石棺実測図	16	第53図	蛍光X線分析スペクトル（3）	97
第10図	出雲西部における石棺規模	17	第54図	蛍光X線分析スペクトル（4）	98
第11図	石室内副葬品の出土位置と復元図	20	第55図	蛍光X線分析スペクトル（5）	99
第12図	金銅冠実測図	24	第56図	蛍光X線分析スペクトル（6）	100
第13図	金装銀耳環実測図	26	第57図	管玉のCR画像	102
第14図	金銀装円頭大刀実測図	26	第58図	顯微鏡写真	103
第15図	金銀装振環頭大刀及び鉄刀実測図	27	第59図	No.16, No.18～20のCR画像	103
第16図	鉄矛身・石突実測図	29	第60図	AR画像	104
第17図	鐵鍛実測図	31	第61図	化学組成によるカリガラスの分類	105
第18図	鞍金具実測図	33	第62図	化学組成によるソーダガラスの分類	106
第19図	金銀装鏡板付轡・辻金具実測図	34	第63図	上塩治築山古墳に近接するガラス玉出土 古墳	109
第20図	轡残片実測図	35	第64図	毛利光復元案	127
第21図	金銀装鞍金具前輪実測図	36	第65図	旧復元案1	128
第22図	金銀装鞍金具後輪実測図	37	第66図	旧復元案2	128
第23図	銀装鞍金具実測図	38	第67図	新復元案破片配置図	130
第24図	鎧金具実測図	38	第68図	新復元案完全図	130
第25図	金銀装・銀装雲珠実測図	39	第69図	桑57号墳の金銅冠	131
第26図	金銀装辻金具実測図（1）	41	第70図	王墓山古墳の金銅冠復元図	132
第27図	金銀装辻金具実測図（2）	42	第71図	新復元案	132
第28図	銀装辻金具実測図	43	第72図	復元製作した革紐8本編みの組絡	136
第29図	金銅装・銀装杏葉実測図	44	第73図	金銅装四脚辻金具と繫復元図 銀装四脚辻金具の繫	137
第30図	鉢具実測図	45	第74図	岡田山1号墳の櫛	139
第31図	銅鈴実測図	46	第75図	石州府5号墳の馬具（1）	141
第32図	大形刀子実測図	47	第76図	石州府5号墳の馬具（2）	142
第33図	鹿角装刀子実測図	47	第77図	小畠3号墳の馬具	143
第34図	鉤状鉄製品実測図	48	第78図	須恵器編年出雲2～4期の主な 出雲型土持壺と出土遺跡	149
第35図	不明金銅板実測図	48	第79図	出雲西部の土持壺出土遺跡	152
第36図	不明鉄製品実測図	48	第80図	出雲西部の土持壺（1）	152
第37図	水晶・瑪瑙玉類実測図	49	第81図	出雲西部の土持壺（2）	153
第38図	ガラス玉実測図	51	第82図	本筋で取り扱う円筒埴輪出土古墳	157
第39図	斐壹実測図（1）	53	第83図	天神原古墳の円筒埴輪実測図	161
第40図	斐壹実測図（2）	54	第84図	今市大念寺古墳の円筒埴輪実測図	164
第41図	子持壺実測図（1）	55	第85図	3古墳の円筒埴輪の胴部調整比較	166
第42図	子持壺実測図（2）	56	第86図	4古墳の円筒埴輪の突堤高比較	166
第43図	円筒埴輪実測図（1）	58			
第44図	円筒埴輪実測図（2）	59			

第 87 図	3 古墳の円筒埴輪の胴部高比較	167	第 90 図	狭結駆と上塙治築山古墳の位置	174
第 88 図	3 古墳の円筒埴輪の基底部高比較	167			
第 89 図	出雲西部における古墳時代後期の円筒埴輪 の変遷とその特徴	168			

挿表目次

第 1 表	上塙治築山古墳の主な調査研究 の経過	2	第 15 表	築山 4 号墳ガラス玉分析結果 (2)	118・119
第 2 表	石室内出土品一覧	19	第 16 表	刈山 5 号墳ガラス玉分析結果 (1)	118・119
第 3 表	銅鈴法量一覧	46	第 17 表	刈山 5 号墳ガラス玉分析結果 (2)	120・121
第 4 表	上塙治築山古墳の円筒埴輪の 特徴と分類	57	第 18 表	刈山 5 号墳ガラス玉分析結果 (3)	122・123
第 5 表	上塙治築山古墳の円筒埴輪の属性 (1)	63	第 19 表	刈山 5 号墳ガラス玉分析結果 (4)	124・125
第 6 表	上塙治築山古墳の円筒埴輪の属性 (2)	64	第 20 表	須恵器編年出雲 2~4 期の主な出雲型 子持壺の特徴一覧	149
第 7 表	上塙治築山古墳の円筒埴輪の属性 (3)	65	第 21 表	池淵 2004 による型式分類・編年の 基準	151
第 8 表	上塙治築山古墳出土品の蛍光 X 線 分析結果一覧 (1)	93	第 22 表	出雲西部出土子持壺の特徴一覧	153
第 9 表	上塙治築山古墳出土品の蛍光 X 線 分析結果一覧 (2)	94	第 23 表	天神原古墳円筒埴輪の破片数と その特徴	159
第 10 表	上塙治築山古墳ガラス玉分析結果 (1)	112・113	第 24 表	天神原古墳円筒埴輪観察表	160
第 11 表	上塙治築山古墳ガラス玉分析結果 (2)	114・115	第 25 表	今市大念寺古墳円筒埴輪の破片数と その特徴	163
第 12 表	築山 2 号墳ガラス玉分析結果 (1)	114・115	第 26 表	今市大念寺古墳円筒埴輪観察表	163
第 13 表	築山 2 号墳ガラス玉分析結果 (2)	116・117	第 27 表	妙蓮寺山古墳円筒埴輪の破片数と その特徴	165
第 14 表	築山 4 号墳ガラス玉分析結果 (1)	116・117			

図版目次

- | | |
|----------------------------|---------------------|
| 図版 1 石室（1） | 図版 19 金と銀の馬具 |
| 図版 2 墳丘外観 | 図版 20 雲珠・辻金具（1） |
| 図版 3 石室（2） | 図版 21 辻金具（2）・杏葉（1） |
| 図版 4 石室（3） | 図版 22 杏葉（2）・鉗具 |
| 図版 5 主要出土品 | 図版 23 銅鈴 |
| 図版 6 主要金属製品・装飾品 | 図版 24 大形刀子・鹿角装刀子 |
| 図版 7 金制冠 | 図版 25 鋤状鉄製品 |
| 図版 8 金装銀耳環・金銀装大刀（1） | 図版 26 不明金銅板・不明鉄製品・玉 |
| 図版 9 金銀装大刀（2） | 図版 27 ガラス玉顯微鏡画像 |
| 図版 10 金銀装大刀（3）・鉄刀・主要鉄矛身・石突 | 図版 28 主要土製品・須恵器甕 |
| 図版 11 鉄矛身・石突 | 図版 29 須恵器子持壺 |
| 図版 12 鉄鏃・鞍金具（1） | 図版 30 円筒埴輪（1） |
| 図版 13 鉄鏃・鞍金具（2） | 図版 31 円筒埴輪（2） |
| 図版 14 曹金具（1） | 図版 32 円筒埴輪（3） |
| 図版 15 曹金具（2）・鞍金具（1） | 図版 33 馬具 CT 画像（1） |
| 図版 16 鞍金具（2） | 図版 34 馬具 CT 画像（2） |
| 図版 17 鞍金具（3） | 図版 35 鞍金具 CT 画像 |
| 図版 18 鞍金具（4）・鎧金具 | |

第1章 過去の調査研究と本書の目的

1887(明治20)年3月6日、上塩治築山古墳の石室が開口した。この時の経緯は発見者が『古墳発見之序次』として記録し、その全文が『島根縣史』に掲載された(野津1925)。発見された整美な切石積み横穴式石室と豊富な副葬品は、多くの研究者の注目を集め研究が積み重ねられた。それらを集大成したのが、『県報告』である。これを参照してこれまでの経緯をまとめたのが第1表である。

第1節 古墳の発見から『県報告』まで

1 墳丘

墳丘は、後世の掘削をかなり受けている。ウィリアム・ガウランドは現況からダブルマウンド(前方後円墳)と報告した(渡辺1980)が、その後の研究者は円墳と推定する。

墳丘の発掘は、1986(昭和61)年に始まる。出雲市教育委員会のトレント調査で(第1図)、円筒埴輪や須恵器子持壺が出土した(川上編1986)。これを1次調査と呼ぶ。ただし、この時点では墳丘規模に関する情報を得ることはできていない。『県報告』では、墳丘の現状や石室の規格から直径45m前後の円墳と推定されている。

2 石室

石室は墳丘の南西方向に開口する全長14.6mの整美な切石積みの横穴式石室である。玄室と羨道からなり、石材は凝灰角礫岩が用いられている。発見時の記録によると、石室の羨門部に加工された大きな石を多数含む閉塞石が、また、玄室の玄門部にも切石を整然と積み上げた閉塞石があったようである。したがって、羨門と玄門に閉塞がある二重閉塞の石室だったことがわかる。

3 石棺

玄室には大小の家形石棺が置かれている。ともに凝灰角礫岩を削り抜いた石棺で、身に横口をもつのが特徴である。これら2基の棺は石室構築と同時に設置されたと推定される。

4 出土品

石室内の出土品副葬状況については、発見時の記録や大正期の梅原末治や野津左馬之助らの調査が参考とされ、『県報告』でまとめられている。

『県報告』では現存する出土品をすべて調査・図化し、詳述している。時期がわかる副葬品は須恵器編年出雲3期(陶邑TK43型式期)に比定されている。

第1表 上塙治築山古墳の主な調査研究の経過

年月日	内 容
1887/3/6	石室の発見
1887/3/8付	今市警察署に『御届』、出土品66点を提出、警察による実地調査
1887/3/11付	警察本部に報告、この時の写しが東京国立博物館に保管、出土品66点も県庁へ移送
1887/3/13・15付	発見時の状況を『山陰新聞』が掲載
1887/4	鳥根県から宮内大臣宛てに処分の『伺』を提出、石室と石棺の図に、遺物の出土位置が添付された図
1887/5	宮内省が指定した6点を東京国立博物館へ送付
1887/9/27・28	ウィリアム・ガウランドが鳥根県庁で出土品を見学・図化
1887/9末	県庁で保管されていた出土品60点が土地所有者に返却
1889/10初	ウィリアム・ガウランドが今市警察署および郡役所で事情聴取、墳丘を前方後円墳と認識
1887/10	土地所有者が博物館に提出した6点を寄付
1887/10/4前後	「洞窟石櫛模写図」6葉を博物館に送付、この絵図は現在も東京国立博物館で保管
1888/春	東京大学の坪井正五郎が古墳見学
1889/夏	東京大学の大野延太郎が古墳見学、石室・出土品の図化
1898/9	東京大学に出土品6点を寄贈
1906/10	大社高校がめのう勾玉2点を購入
1917	京都大学に出土品6点を寄贈
1919	京都大学の梅原未治が古墳を『築山古墳』として広く学会に紹介、円墳と認識
1924/12/9	『上塙治築山古墳』として国指定史跡となる
1925	郷土史家の野津左馬之助が『鳥根県史』に紹介
1951	鳥根大学の山本清が『出雲市誌』に紹介
1953以降	振環頭大刀が陸上自衛隊出雲駐屯地へ貸し出され、武器資料室で展示
1959	土地所有者の所蔵品が出雲市指定文化財となり、鳥根県立博物館へ寄託
1960	土地所有者の所蔵品が出雲市が一括購入
1961/6/13	出雲市所蔵資料一括が鳥根県指定文化財となる
1980～1982	出雲市所蔵資料のうち、金属製品を元興寺文化財研究所で保存処理
1984	自衛隊出雲駐屯地へ貸出されていた振環頭大刀を土地所有者が出雲市へ寄贈、県立博物館へ寄託
1986	出雲市教育委員会が墳丘のトレーニング調査開始（1次調査）
1991	出雲市所蔵品が県立博物館寄託から出雲市立出雲文化伝承館寄託へ
1996	島根県古代文化センターによる出土品の調査・研究開始
1999/3	島根県古代文化センターが『上塙治築山古墳の研究』を発刊
2000～2001	出雲市教育委員会による墳丘トレーニング調査（2次調査）
2004～2005	ドイツで開催された『曙光の時代－日本考古学の連続と変革－』展に主な出土品を陳列
2005	出雲市教育委員会による墳丘トレーニング調査（3次調査）
2003～2007	築山古墳群を見学
2007	出雲市教育委員会による墳丘トレーニング調査（4・5次調査）
2009/3	上塙治築山古墳駐車場等整備
2010	出雲弥生の森博物館が開館し、出雲市所蔵品が出雲文化伝承館から博物館へ
2015/4	出雲市所蔵品の整理事業開始
2015/7/16・17	第1回出土品検討会
2016/4/21・22	第2回出土品検討会
2016/11/1・2	第3回出土品検討会
2017/6/13・14	第4回出土品検討会
2017/10/6	桃崎祐輔氏による講演会「瀬田郡の馬具・心葉形十字文透馬具と虎頭鉢・多角形鉢をめぐって」
2017/11/8	奈良文化財研究所保存修復科学研究室の石室環境調査（他に今市大念寺古墳・国富中村古墳）
2018/3/9	文化審議会による重要文化財指定の答申
2018/3/30	本書刊行

(1999年以前は『県報告』をもとに作成。機関名は現在)

5 結論

以上のことが『県報告』時点で確認されたことであり、次のように結論付けられた。

古墳の時期は、石室・石棺の構造と出土品から須恵器編年出雲3期（TK43型式期）で、石室や石棺規模・副葬品の豊富さなどから、被葬者は、西部出雲の頂点にたつ大首長であり、彼の支配領域は神戸川流域を中心に島根半島西部に及んでいた。

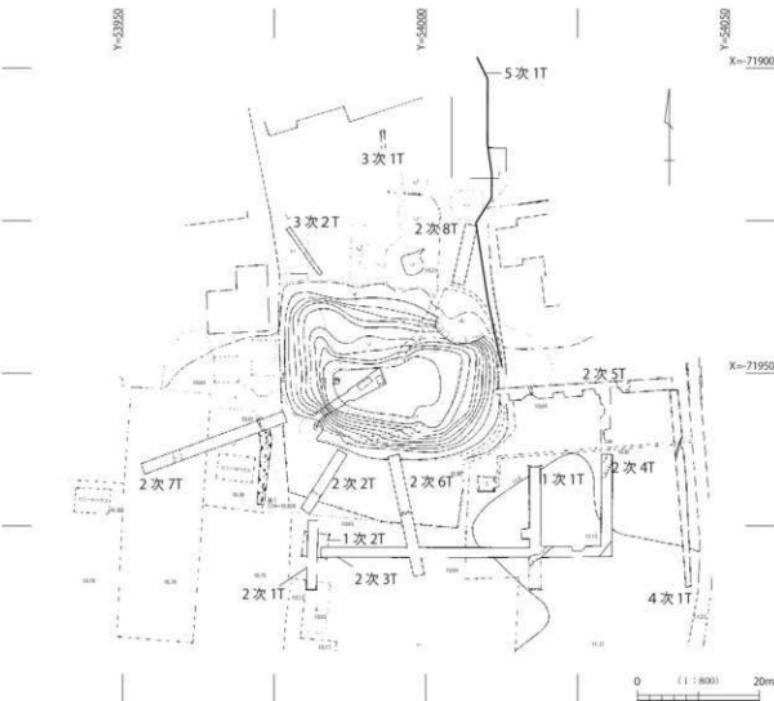
第2節 『県報告』以降の調査と周辺古墳の調査

1 墳丘確認調査（第1図）

2000（平成12）年以降、出雲市教育委員会は墳丘確認のためのトレンチ調査を4回実施した（2～5次調査、第1図）。これらの調査により周溝が確認され、直径約46mの円墳であることが推定できるようになった（本書第3章第1節）。また、円筒埴輪、子持壺なども多量に出土した。

2 出雲市内の後期古墳の調査

出雲西部における横穴式石室の発見・発掘は、江戸時代（文政年間）の今市大念寺古墳にさかのぼる。その後、明治1887（明治20）年には上塩治築山古墳が発見された。その後も、大正年間に放レ山古墳が発見された。これらの古墳については、発見時の聞き取りや絵図による報告がある。この他、国史跡の上塩治地藏山古墳も古くから確認されているが、その開口がいかつかは分かっていない。



第1図 上塩治築山古墳のこれまでの発掘調査位置図

市内で最初に学術調査されたのが妙蓮寺山古墳である。1958（昭和33）年に島根県立出雲高校が、1963（昭和38）年には島根県教育委員会が発掘調査を行い、調査報告書も刊行された（山本編1964）。

2000年代には、出雲市が築山遺跡や国富中村古墳（調査時は中村1号墳）の発掘調査を行った。それぞれの報告の中で上塩治築山古墳との関係も検討されている。

県道今市古志線改良工事に伴って発掘調査が実施された築山遺跡では、上塩治築山古墳の南～東側で計8基の円墳群が確認された。築山古墳群と総称しているこれらの古墳は上塩治築山古墳と築造時期や石室の主軸方向が近く、古墳群の配置に計画性があったことが指摘されている（原・高橋編2009）。すなわち上塩治築山古墳は「孤高の大形古墳」ではなかったのである。

上塩治築山古墳の北東約9kmにある国富中村古墳は未盗掘でみつかり、緻密な発掘調査を実施した。古墳の築造時期は須恵器編年出雲4期前半（陶邑TK43末～TK209型式期）である。出土状況や一括性の高い副葬品の検討から時期決定が行われ、出雲の古墳築造年代を決める上で定点となる古墳と評価できる。国富中村古墳の報告では、石室構造と子持壺の型式が上塩治築山古墳と似ることから、両者を須恵器編年出雲4期前半の築造と推定し、上塩治築山古墳がTK43型式期末、国富中村古墳がTK209型式期とみた。つまり、上塩治築山古墳の築造時期を『県報告』よりは新しく考えたのである（坂本編2012）。また、この報告書では出雲の後期古墳の研究をまとめ、墳丘や石室規模から階層構造があったことを示している。

以上のように周辺の後期古墳の研究が進み、上塩治築山古墳の意義を捉え直す環境が整ってきた。

第3節　出土品と遺跡の保護・活用

現在、出土品は、出雲市の他、東京国立博物館、東京大学総合研究博物館、京都大学総合博物館で所蔵されている。各機関の所蔵品については、第4章第1節および第5章第4節に記載する。

土地所有者が所蔵していた出土品は1959（昭和34）年に出雲市指定文化財となり、翌1960（昭和35）年にこれらを出雲市が一括購入した。そして、1961（昭和36）年には「塩治築山古墳出土品一括」として島根県指定文化財となり、島根県立博物館（松江市・当時）へ寄託された。金属製品の多くは腐食が進んでいたため、1980（昭和55）年から3年をかけて保存修理されている。

1991（平成3）年には、出雲市の展示施設である出雲文化伝承館が開館し、地元で出土品の一部が常設展示されるようになった。2010（平成22）年には、市立の考古博物館である出雲弥生の森博物館が開館し、出雲市所蔵品が考古専門の学芸員の管理のもと保管・展示されるようになった。

この間の2004（平成16）～2005（平成17）年にはドイツで開催された『曙光の時代－日本考古学の連続と変革－』展で上塩治築山古墳の出土品が陳列され好評をえた（二木・一坪編2005）。

上塩治築山古墳は、1924（大正13）年に現存する墳丘部分（南半）が国指定史跡となった。その後、周辺環境はほとんど変わらなかったが、2000年代になって周辺で行われた道路の改良工事に伴い、2009（平成21）年、出雲市は古墳の南西側に駐車場を整備し、古墳見学の利便性を高めた。

以上のように、出土品の展示や古墳周辺環境の整備により上塩治築山古墳の活用が進められている。

第4節 本書の目的

『県報告』から 15 年が経ち、この間、墳丘調査によってその規模が明確になった。合わせて須恵器子持壺や円筒埴輪も多く出土した。これらの成果は、個別の報告書にまとめられているが、総合的に検討がなされることはなかった。また、出土金属製品の保存処理が実施されてから 35 年が経過し、遺物の状態確認と、再処理の検討も必要になっていた。

このようななか、2014（平成 26）年、上塩治築山古墳の出土品を国の重要文化財指定候補として調査したいと文化庁美術学芸課から打診があった。これを受けて出雲市文化財課は、2015（平成 27）年から出土品整理事業を開始した。この事業では、文化庁美術学芸課、島根県教育庁文化財課、島根県立古代出雲歴史博物館の指導のもと、4 回の出土品検討会を開催し、出雲市所蔵出土品の目録および管理台帳の作成を行った。

その中で、『県報告』段階では実施されなかった金属製品とガラス製品の自然科学分析の調査が必要となった。金属製品の蛍光 X 線分析は島根県埋蔵文化財調査センター・奈良文化財研究所、デジタル X 線撮影は島根県立古代出雲歴史博物館、X 線 CT 撮影は九州国立博物館、ガラス製品の自然科学分析は奈良文化財研究所に依頼した。この他、出雲市所蔵の大刀片 2 点を京都大学総合博物館に持ち込み、京都大学総合博物館所蔵の大刀片 1 点との接合確認を行った。

また、金剛冠や馬具、円筒埴輪については個別に研究者の指導を賜った。特に福岡大学の桃崎祐輔氏には出雲市文化財課の職員向け研修会で講演をしていただいた（桃崎 2017）。

以上のような整理作業を経て、出土品の目録と管理台帳を作成した。そして、2018（平成 30）年 3 月 9 日に国の文化審議会による重要文化財指定の答申が文部科学大臣に対しなされた。

本書は、2015～2017 年度に出雲市文化財課が実施した、上塩治築山古墳の出土品整理事業の成果をまとめた報告書である。

（坂本豊治）

【参考文献】

- 梅原末治 1919 「出雲に於ける特殊古墳（中ノ上）」『考古学雑誌』第 9 卷第 5 号 日本考古学会 16～32 頁
大谷晃二・松尾充晶 1999 「放れ山古墳」『上塩治築山古墳の研究』島根県古代文化センター 208～211 頁
勝部昭・西尾克己編 1980 「出雲・上塩治地域を中心とする埋蔵文化財調査報告書」島根県教育委員会
川上稔編 1986 「築山遺跡範囲確認発掘調査」『塩冶地区遺跡分布調査』Ⅰ 出雲市教育委員会
坂本豊治編 2012 「中村 1 号墳」出雲市の文化財報告 15 出雲市教育委員会
須賀照隆 2006 「上塩治築山古墳の調査」『出雲市埋蔵文化財発掘調査報告書』第 16 集 出雲市教育委員会
1～8 頁
二木たまき・一坪泰博編 2005 「日本の考古学ードイツで開催された「曙光の時代」展」小学館
野津左馬之助 1925 「島根県内の古墳」『島根縣史』4 島根縣
原俊二・高橋誠二編 2009 「築山遺跡 IV」県道今市古志線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 出雲市の

文化財報告6　出雲市教育委員会

三原一将・高橋智也編 2004『上塙治築山古墳』出雲市教育委員会

三原一将編 2015『平成26年度　出雲市文化財調査報告書　築山遺跡　上塙治築山古墳』出雲市の文化財報告

27　出雲市教育委員会

桃崎祐輔 2017『額田部の馬具一心葉形十字文透馬具と虎頭鉢・多角形鉢をめぐって』出雲弥生の森博物館　弥生の森研究会 第66回例会資料

山本清ほか 1963『島根の文化財』第3集 島根県教育委員会

山本清編 1964『妙蓮寺山古墳調査報告』島根県教育委員会

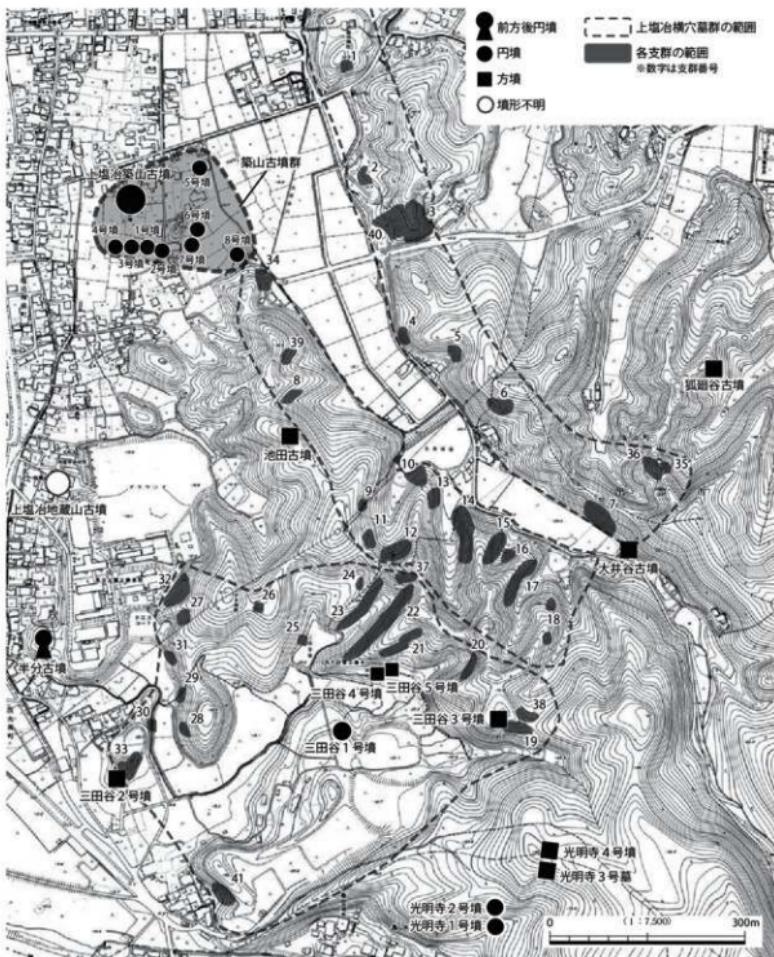
渡辺貞幸 1980「ガウランド氏と山陰の古墳（下）」「八雲立つ風土記の丘」No.40　島根県立八雲立つ風土記の丘資料館　2～6頁

渡辺貞幸 2000「東京国立博物館所蔵「出雲国塙治村古墳石柳石棺図」について—正投影法で描かれた日本人による最古の石室図面—」『MUSEUM』東京国立博物館研究誌 568号 49～64頁

第2章 古墳の立地と歴史的環境

第1節 上塩治築山古墳の立地

上塩治築山古墳は、出雲市上塩治町字築山 262-6 ほかに所在する（第2・3図）。神戸川と斐伊川



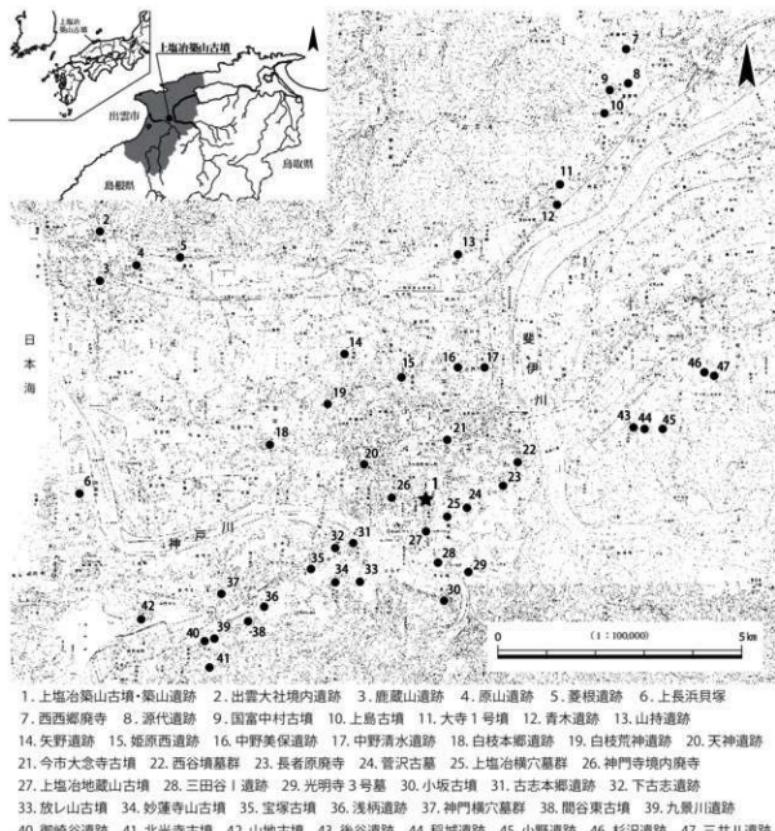
第2図 上塩治築山古墳の位置

に挟まれた標高 10 m の微高地にあり、周囲には中国山地から派生した低丘陵が伸びる。周辺では縄文時代後晚期から居住域が形成されて以降、古墳時代には多くの古墳や横穴墓が築かれた。

第2節 歴史的環境

1 縄文・弥生時代

出雲平野で人々の活動が始まるのは、海進期にあたる縄文時代早期である。早期から前期の遺跡には、島根半島山麓の菱根遺跡（5）や、砂丘地に位置する上長浜貝塚（6）がある。その後、海退が進んだ後期から晩期にかけては、河川の沖積作用も相まって微高地が形成された。居住域は平野の縁



第3図 出雲平野の主要遺跡

辺部から中央部へ拡大し、築山遺跡（1）、山持遺跡（13）や矢野遺跡（14）で集落が形成された。

続く弥生時代には、縄文時代後晩期に形成された集落が前期以降も継続して営まれ、新たに古志本郷遺跡（31）や青木遺跡（12）なども出現する。中期以降は、河川の氾濫に伴う冲積作用で微高地が拡大し、平野部を中心に集落が増加する。荒神谷遺跡で380点もの青銅器が大量埋納された中期末頃には、古志本郷遺跡、下古志遺跡（32）、天神遺跡（20）など周囲に環濠を巡らせる集落もみられるようになる。弥生時代の墓地については調査例が少ないが、原山遺跡（4）で前期の配石墓、中野美保遺跡（16）で中期中葉の方形貼石墓が発見されている。中期後葉頃には青木遺跡で最古段階の四隅突出型埴丘墓が出現する。後期後葉になると、平地を見下ろす南の丘陵上に全国最大級の埴丘や豊富な副葬品をもつ四隅突出型埴丘墓が築かれる。西谷3号墓を擁する西谷埴墓群（22）である。西谷3号墓は出雲平野の王墓と考えられ、吉備から搬入された土器や、北陸などの影響を受けた土器、さらに朝鮮半島（楽浪郡）との関わりを示す水銀朱やガラス製品等の出土品が交流関係の広さを物語る。

2 古墳時代

古墳時代に入ると、弥生時代から継続して営まれた集落は前期にピークを迎えるが、中期までに急激な衰退をみせる。古墳の築造は前期末にようやく始まり、島根半島部の丘陵上には現状で出雲平野最古の前方後円墳である大寺1号墳（11）、神西湖東岸には山地古墳（42）のほか、間谷東古墳（38）などの礫床を伴う円墳が築かれる。

中期には、神戸川右岸の三田谷I遺跡（28）、同左岸の浅柄遺跡（36）や御崎谷遺跡（40）で集落が営まれる。この頃築かれた古墳には、穴道湖南岸の神庭岩船山古墳や、神西湖南岸の北光寺古墳（41）がある。いずれもかつて水辺に面し、水上交通を掌握した首長らの古墳と考えられる。

出雲平野における古墳時代の画期は後期にある。集落は、三田谷I遺跡に加え、神西湖西岸の九景川遺跡（39）などでも掘立柱建物等が確認でき、前期以来低調だった集落形成が活気を帯びる。このような人口増加状況は後期古墳の築造と相関関係にあり、特に後期後半以降、出雲平野では古墳の築造が急増する。神戸川右岸では今市大念寺古墳（21）、上塩治築山古墳（1）、上塩治地蔵山古墳（27）など、出雲西部最大級の古墳が次々と築造される。左岸でも、右岸に次ぐ規模の妙蓮寺山古墳（34）、放レ山古墳（33）、宝塚古墳（35）が築かれ、出雲平野における首長墳の系譜を追うことができる。島根半島部でも、上島古墳（10）や未盗掘古墳として注目された国富中村古墳（9）が築かれた。

さらにつきこの時期、埴丘を持つ古墳に加えて、大規模な横穴墓群が形成されるのも出雲平野の特徴である。その代表的な事例は、神戸川右岸の上塩治横穴墓群（25）41支群230穴以上と、左岸の神門横穴墓群（37）12支群123穴であり、全国的にも最大級の規模を誇る。

上塩治築山古墳が築造された築山遺跡周辺は、古墳や横穴墓の密集地である（第4図）。従来、単独で築造されたと考えられていた上塩治築山古墳だが、周辺の発掘調査で8基の円墳が発見され、首長墳を複数の古墳（築山古墳群）が取り巻く構図であったことが明らかとなった。さらに、周辺の丘陵部に展開する上塩治横穴墓群は、築山古墳群の被葬者に次ぐ地位の人々が葬られたと推測され、首長を頂点とした社会構造が築造された古墳や横穴墓群に如実に表れている。

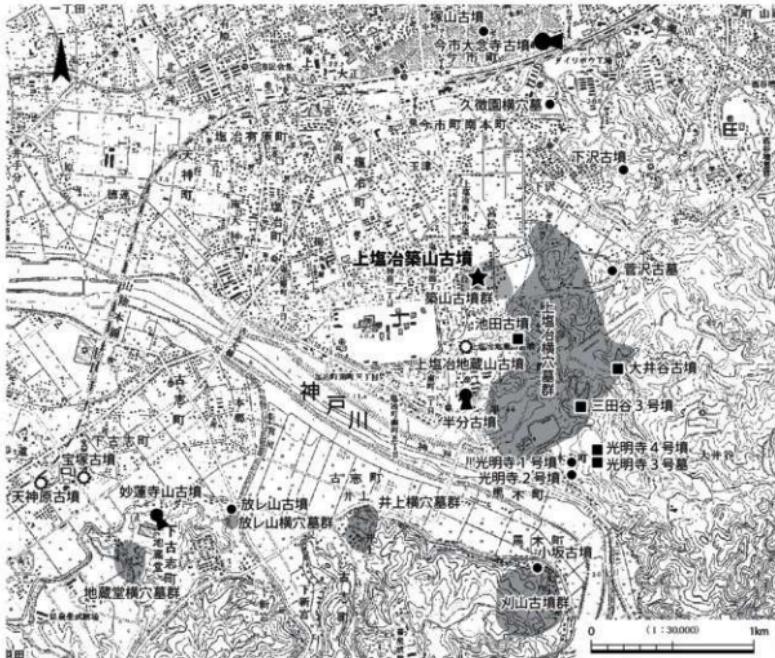
3 奈良・平安時代

律令期の出雲平野は、『出雲国風土記』等にも記されるように、斐伊川を境として東は出雲郡、西は神門郡に属した。これまでに、前者は正倉跡が発見された後谷遺跡（43）や小野遺跡（45）周辺、後者は大型建物跡が発見された古志本郷遺跡周辺に郡家があったと推定されている。また、国府・各郡家間を結ぶ古代山陰道跡が杉沢遺跡（46）等で確認されており、上塙治築山古墳の北側を通過するルートが推定されている（江角・宍道編 2017）。このほか、官衙関連遺跡には三田谷Ⅰ遺跡や鹿戻山遺跡（3）、青木遺跡がある。さらに、仏教伝来に伴う遺跡には、広島県寺町廃寺と同范の軒丸瓦が出土した瓦窯跡・三井II遺跡（47）や、長者原廃寺（23）、神門寺境内廃寺（26）などの古代寺院跡、小坂古墳（30）、光明寺3号墓（29）などの火葬墓（石櫃）がある。

(景山このみ)

参考文献

- 江角 健・宍道年弘編 2017『出雲国古代山陰道発掘調査報告書—出雲市三井II・杉沢・長原遺跡の調査』出雲市の文化財報告33 出雲市教育委員会
 岸 道三編 1997『遺跡が語る古代の出雲』出雲市教育委員会
 渡邊貞幸・坂本豊治編 2015『西谷3号墓発掘調査報告書』島根大学考古学研究室調査報告第14冊・出雲弥生の森博物館研究紀要第5集 島根大学考古学研究室・出雲弥生の森博物館



第4図 上塙治築山古墳周辺の後期古墳・横穴墓

第3章 墳丘と石室

第1節 墳丘

1 発掘調査成果の概要（第5図、図版2）

上塩治築山古墳は、周囲を民家と畑に囲まれており、墳丘の改変が著しい。現存墳丘は東西36m、南北28m、高さ5mのいびつな方形形状をなし、周溝の痕跡も観察できない。

現存墳丘と石室の位置から詳細な検討を行った山本清は、直径42～43m、墳丘高約6.5mの円墳と推定した（山本ほか1963）。その後の『県報告』でも約45mの円墳と推察している。

墳丘の形状や規模を確認するための発掘調査は、出雲市教育委員会により1986（昭和61）年に始まった（川上編1986）。その後、2007（平成19）年まで5次にわたるトレンチ調査が実施された。

（1）墳丘と周溝

ここでは、出雲市教育委員会のトレンチ調査の成果をまとめる。

トレンチは、調査可能な現存墳丘の南に多く設定されている。そのため、南側で墳端を多く確認した。墳端は、2次2Tと5～7T、3次2Tでみつかり、標高は、9.5～9.6mであった。また、周溝外側の立ち上がりを、2次3～5Tと7T、3次1Tで確認した。以上の状況から、直径約46m、墳丘高6.2m以上の円墳で、周溝底の幅が約14mと推測できる。周溝の深さが不明であるが、周溝を含めた規模は直径77m以上と考えられる。

墳丘は、地山整形後、石室を築造し、盛土で築造されている。

（2）外周溝か

2次4Tの南端と4次1Tの北端で、周溝の外側にめぐる溝が確認されている。溝の底幅は約2.4m。この溝が古墳に伴うものであれば、外周溝となり、二重周溝をもつ直径98m以上の古墳となる。二重周溝は、すぐ南に築造された築山2・4・7号墳で確認されており（原・高橋編2009）、築山古墳群の頂点にたつ上塩治築山古墳にも二重周溝があった可能性が十分にある。ただし、確認箇所がわずかなため、今後の課題としておきたい。

（3）外表設備

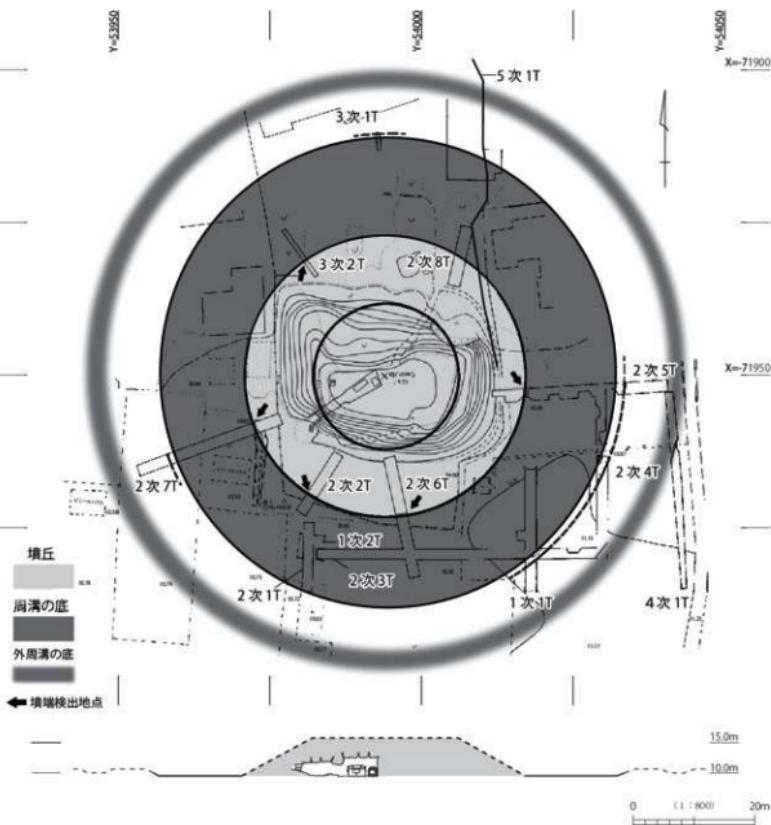
墳丘斜面の地表面に葺石は確認できない。また、トレンチ調査でも転石が出土しなかったことから、葺石はなかったと考える。

各トレンチからは円筒埴輪と須恵器子持壺、数は少ないが形象埴輪や須恵器の甕も出土する。これらは、墳丘の全方位から出土しており、墳丘を囲むように設置されたと推測する。残念ながら、これらは原位置を保って出土していないため、設置の状況は不明である。

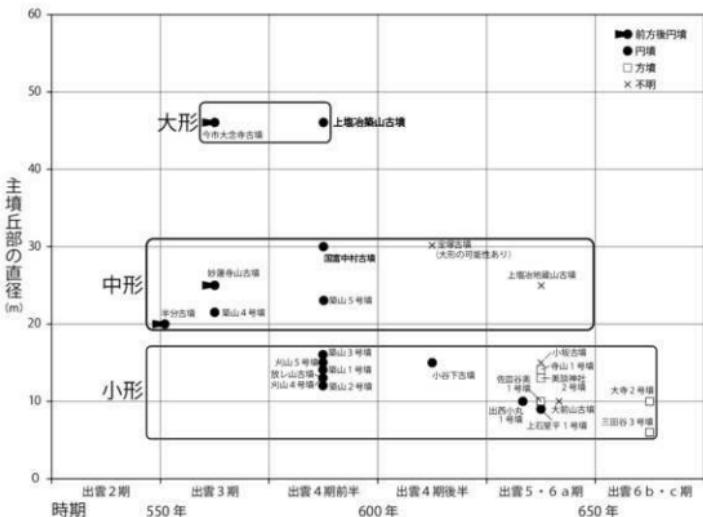
2 出雲西部における主墳丘部の規模比較（第6図）

国富中村古墳（中村1号墳）の報告で、出雲西部における後期古墳の主墳丘部⁽¹⁾の規模比較を行い、時期別の階層構造を明確にした（坂本編 2012）。それに若干の修正を加えたのが第6図である。出雲西部の後期古墳は、主墳丘部規模が6～46mの範囲にあり、大形（46m）、中形（20～33m）、小形（6～17m）に分類できる。第6図に示すとおり、今市大念寺古墳と上塩治築山古墳は約46mでほぼ同じである。

須恵器編年出雲4期前半（陶邑TK43末～TK209型式期）には、主墳丘部規模に3層の階層構造が存在する。上塩治築山古墳の墳丘は大形で、出雲西部地域の最上位に位置する古墳である。



第5図 上塩治築山古墳の墳丘



第6図 出雲西部における主墳丘部規模

第2節 石室

1 概要 (第7図、図版1・3・4)

上塩治築山古墳の内部主体は、奥行のある玄室と長い狭道からなる横穴式石室である。石室の開口方向は南西である。この開口方向は、須恵器編年出雲3期 (TK43型式期) の今市大念寺古墳に採用され、それにならって妙蓮寺山古墳、放レ山古墳、宝塚古墳、国富中村古墳、築山1・3・4号墳の石室も同じく南西方向に開口する。今市大念寺古墳と同じ頃に築造された岡山県こうもり塚古墳や奈良県五条野丸山古墳の石室も南西方向に開口し、共通する築造意識があったと推測する。

石室の全長は、14.6 mあり、山陰地域で最長である。石材は近傍で産出される凝灰角礫岩や凝灰質砂岩、礫岩で、整美な切石に加工され積まれている。

玄室には大小2つの石棺があり、玄室の中ほどに大石棺、奥壁側に小石棺がある。

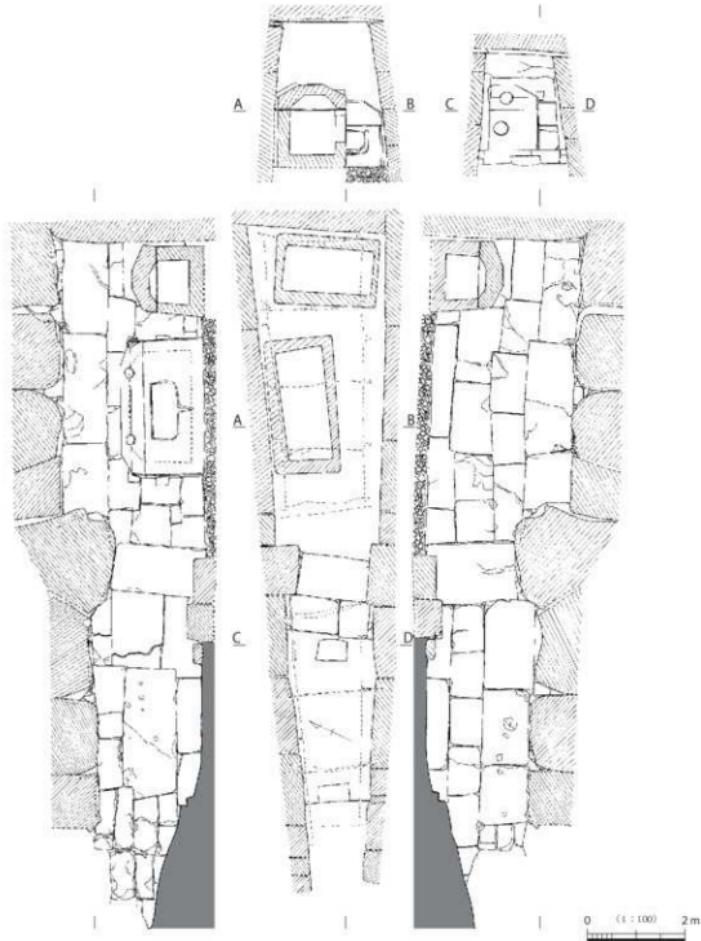
2 玄室

玄室の平面形は主軸方向に長い長方形で、玄門側がやや狭い。長さ 6.6 m、幅 2.8 m、高さ 2.9 m である。奥壁は1枚の切石を用い、両側壁は直方体の切石を4段に積んでいる。側壁は内傾し、天井部の幅は 2.0 m となる。よって、玄室の断面形は台形である。各石材の表面は平坦に削られており、一部に幅 4 cm 前後の平刃のノミ痕が良く残る。また、切石の一隅を L字状にカットし、上の段に積ま

れた石を支えるために切組積みにしている。切組積みは、国富中村古墳などにも類例がある。

天井には4枚の巨大な自然石を架ける。出雲西部で天井石に4枚の巨石を架ける石室は他に今市大念寺古墳のみで、その他の石室は3枚以下である。

玄門部は、角柱状の袖石が側壁からせり出した両袖式である(図版1)。袖石は奥壁側に傾斜し、その上には自然石の楣石が直接架けられている。また、楣石は、玄室および羨道の側壁にも支えられている。楣石の上には玄室の天井石や前壁は積まれていない。これと同じ特徴の玄門部をもつ石室は、



第7図 横穴式石室実測図

国富中村古墳や宝塚古墳にある（坂本編 2012）。玄門部床面には樋石がある。玄室床面には拳大の玉砂利が敷かれている。石材は安山岩や流紋岩が多く、中には三瓶山産出の石英安山岩もあり、当古墳の南方を流れる神戸川から持ち込まれたものもある（『県報告』24 頁）。

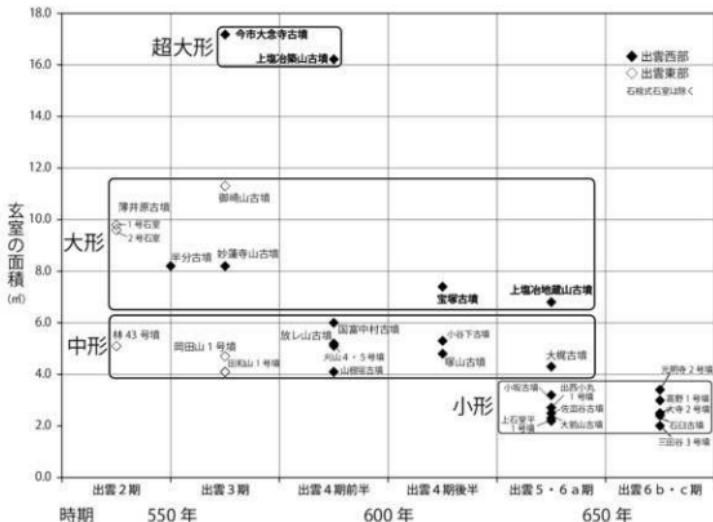
3 溝道

溝道の平面形は主軸方向に長い長方形で、開口部がやや狭い。長さ 5.6 m、幅 1.8 m、高さ 2.2 m である。両側壁は直方体の切石を 3 段に積んでいて、玄室の側壁より 1 段低い。側壁は内傾し、天井部の幅は 1.3 m となる。よって、溝道の断面形は台形である。石材は、凝灰角礫岩の他、凝灰岩、凝灰質砂岩、礫岩が使われている。天井には 3 枚の巨大な自然石を架ける。

石室の発見時の記録によると、石室の溝門部に加工された大きな石を多数含む施設が、また、玄室の玄門部にも切石を整然と積み上げた閉塞石があったようである。その閉塞石の名残が樋石の上と溝道側に現在も残る（図版 1）。したがって、溝門と玄門に閉塞がある二重閉塞の石室だったことがわかる。出雲西部の二重閉塞は、須恵器編年出雲 3 期の今市大念寺古墳と妙蓮寺山古墳で知られ、強い閉塞意識があったことがうかがえる。これら 3 基の閉塞方法はそれぞれ異なるが、出雲西部地域の横穴式石室導入期の特色と考えている。

4 石室の規模比較（第 8 図）

国富中村古墳（中村 1 号墳）の報告で、出雲における横穴式石室の玄室面積から、時期別に階層構



第 8 図 出雲における横穴式石室の玄室規模

造があることを示した（坂本編 2012）。それに若干の修正を加えたのが第8図である。

出雲の玄室は、超大形・大形・中形・小形に分類できる。須恵器編年出雲3期には、超大形・大形・中形に区分されていたものが、須恵器編年出雲4期前半には、超大形と中形の2層の階層構造へ変化している。上塩治築山古墳の玄室が超大形で、大形の石室が分布した神戸川左岸の放レ山古墳（妙蓮寺山古墳の後継古墳）は石室および墳丘規模ともに縮小している。その結果、前者は出雲西部地域で特に規模が大きい最上位の石室となる。また、同時期の山陰地方の中では最長の石室である。

隣接する築山1～3・5号墳の玄室は残っていないため規模が不明確である。しかし、墳丘や石材の抜き取り痕の位置などから、小形から中形の玄室であったとの推定が可能である。

第3節 石棺

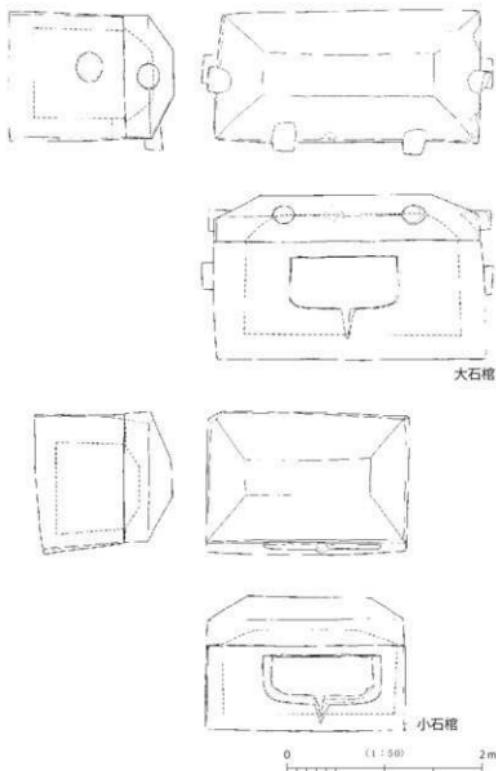
1 大石棺

(第9図、図版3・4)

玄室の中央、左壁沿いにあるのが大石棺である（第9図）。凝灰角礫岩を削り抜いて造られ、長さ2.80 m、幅1.45 m、高さ1.74 mを測る刳抜式家形石棺である。蓋の高さ0.47 m、身の高さ1.27 mを測る。奥壁側の幅が広く、玄門部側はやや狭い。このことから、奥壁の方に頭を置き埋葬したと考える。

蓋石は寄棟家形、内面は分銅形に加工されている。蓋の軒部には、円柱状の繩掛突起が片方の平側に2個、両方の妻側に各1個の計4個ある。石室の側壁に向く平側には繩掛突起がない。

直方体状の身は平側に横口があり、両方の妻側には各1個の繩掛突起が造り出している。棺の内部は、長さ2.30 m、幅0.95 m、深さ0.95 mの規模で、横口は長さ1.14 m、高さ0.55 mの大きさで、その下辺はU字状に削り込まれている。身の横口の下にある大きなV字状の溝は、石室開口後に排水用として切り込まれたと考えられている（渡辺2000）。



第9図 石棺実測図

2 小石棺（第9図、図版4）

玄室の奥壁に接し、右壁側に寄せて置かれた小石棺は、凝灰角礫岩を例り抜いて造られた、長さ2.10m、幅1.42m、高さ1.37mを測る刎抜式家形石棺である。大石棺と規模を比較すると幅はほぼ同じであるが、長さと高さの比率は約3/4である。左壁側の幅がやや広く右側壁側が狭い。このことから、左壁側の方に頭を置き埋葬したと考える。

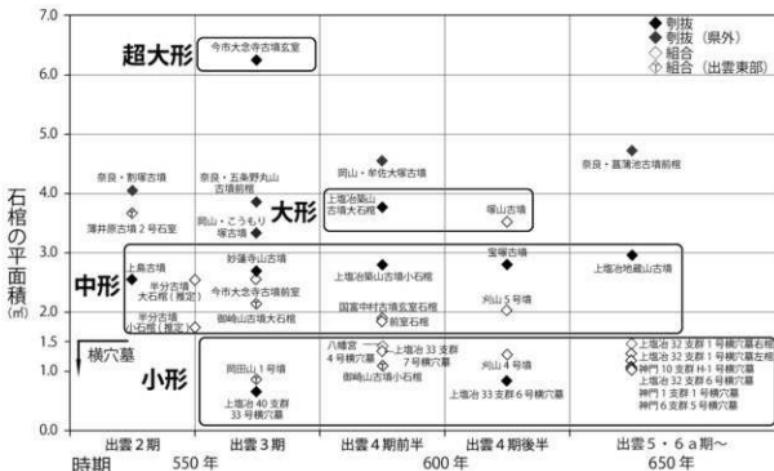
蓋石は大石棺と同じ棟家形、内面も分銅形に加工されている。直方体状の身は平側に横口があく。棺の内部は長さ1.76m、幅0.92m、深さ0.70mの規模で、横口は長さ1.02m、高さ0.40mの大きさで右に寄っている。その下辺は2段のU字状に例り込まれている。同様の横口は、宝塚古墳と上塙治地藏山古墳の石棺にもある。繩掛突起は蓋、身ともない。

身の横口の下にある大きなV字状の溝は、大石棺と同じく排水用として切り込まれたと考えられている（渡辺2000）。

3 石棺の規模比較（第10図）

出雲西部における石棺面積の比較を行い、時期別の比較を試みた。第10図には出雲の石棺の特徴を示すため、出雲東部の横穴式石室に伴う石棺と県外の大形石棺も掲載した。

出雲西部の石棺は、超大形・大形・中形・小形に分類できる。須恵器編年出雲3期の今市大念寺古墳（超大形）は、出雲最大、かつ全国最大の規模をもつ。出雲4期前半は、大形・中形・小形の3層の階層構造がある。上塙治築山古墳の大石棺は大形で、小石棺は中形となる。したがって、上塙治築



第10図 出雲西部における石棺規模

山古墳の大石棺は、当該期の出雲西部地域の最上位といえる。また、同時期の山陰地方においてもこれを超えるものはない⁽²⁾。

出雲西部の小形の石棺は、石室墳の刈山4号墳を除くと、いずれも横穴墓の石棺である。つまり、横穴墓に伴う石棺は全て小形⁽³⁾で、中形以上の規模をもつものはないと言える⁽⁴⁾。

第4節 小結

上塩治築山古墳は直径約46mの円墳で、墳丘・石室・大石棺は、いずれも出雲4期前半の出雲西部では最大の規模をもつ。それは、山陰地方に範囲を広げても変わらない。よって、これらの属性から上塩治築山古墳の大石棺の被葬者は出雲西部を領域とした豪族で、山陰地方においても突出した勢力を持っていたと推測する。そして、それに次ぐ人物が小石棺に埋葬されたと推定できよう。

(坂本豊治)

註

- (1) 前方後円墳と円墳の規模比較が単純にはできないことから、主墳丘部を比較した。主墳丘部とは前方後円墳の場合は後円部、前方後方墳の場合は後方部となる。
- (2) 家形石棺集成表(日本考古学協会2010)を参照した。
- (3) 小形には、面積が1m²未満の上塩治横穴墓群第33支群6号穴と第40支群33号穴、出雲東部の岡田山1号墳がある。これらは、成人が埋葬されるサイズではなく超小形に分類することができる。
- (4) 出雲東部の安来市宮内Ⅱ区1号横穴墓、白コクリS-2号横穴墓などには中形の石棺が伴う。

参考文献

- 坂本豊治編 2012『中村1号墳』出雲市の文化財報告 15 出雲市教育委員会
- 須賀照隆編 2006『上塩治築山古墳の調査』『出雲市埋蔵文化財発掘調査報告書』第16集 出雲市教育委員会
1~8頁
- 日本考古学協会 2010年度兵庫大会実行委員会 2010『日本考古学協会 2010年度兵庫大会研究発表資料集』
- 原俊二・高橋誠二編 2009『築山遺跡IV』県道今市古志線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 出雲市の文化財報告6 出雲市教育委員会
- 三原一将編 2015『平成26年度 出雲市文化財調査報告書 築山遺跡 上塩治築山古墳』出雲市教育委員会
- 桃崎祐輔 2017『額田部の馬具—心葉形十字文透馬具と虎頭鉢・多角形鉢をめぐって』出雲弥生の森博物館 弥生の森研究会 第66回例会資料
- 山本清ほか 1963『島根の文化財』第3集 島根県教育委員会
- 渡辺貞幸 2000「東京国立博物館所蔵『出雲国塩治村古墳石棺』について—正投影法で描かれた日本人による最古の石室図面—」『MUSEUM』東京国立博物館研究誌 568号 49~64頁

第4章 出土品の現況と副葬状況

第1節 出土品の収蔵状況

上塙治築山古墳の石室内出土品は、土地所有者から 1887(明治 20)年に東京国立博物館、1898(明治 31)年に東京大学、1917(大正 6)年に京都大学へ各 6 点寄贈されている。また、1906(明治 39)

第2表 石室内出土品一覧

現在把握されている 石室内出土品	数量	出雲市	東京国立 博物館	東京大学総合 研究博物館	京都大学 総合博物館	大社高校
金属製品	金銅冠残欠	1	1			
	金装銀耳環	2	2			
	金銀装円頭大刀	1	1			
	金銀装振環頭大刀	1	1		(破片 1)	
	鉄刀残欠	6	5			1
	鉄矛身・石突	10	10			
	鉄矛身残欠	11	11			
	鉄鏃	16	15		1 *	
	鉄鏃残欠	6	6			
	鞍金具残欠	1 点分	1 点分			
	金銀装鏡板付轡	1	1			
	轡残欠	3	3			
	金銀装鞍金具	1 点分	1 点分	(覆輪 1)		
	鞍金具残欠	2	2			
	障泥吊金具	1			1	
	鎧金具残欠	4	4			
	金銀装・銀装雲珠	2	2			
	金銀装・銀装辻金具	15	12		1	2
	金銅装・銀装杏葉	8	7		1	
	釦具	2	2			
	釦具残欠	4	4			
	銅鈴	6	4	1	1 *	
	大形刀子	1	1			
	鹿角装刀子残欠	7	7			
	鉄斧	1				1
	鉤状鉄製品	4	4			
	鉤状鉄製品残欠	2	2			
	不明金銅板残欠	2	2			
	不明鉄製品残欠	1	1			
玉	水晶勾玉	4	2	1	1	
	水晶算盤玉	1	1			
	水晶丸玉	1	1			
	瑪瑙勾玉	3	1 *			2 *
	瑪瑙璫玉	1	1			
	ガラス管玉	1	1			
	ガラス小玉(緑色透明)	4	3	1		
	ガラス小玉(紺色透明)	77	75	1	1	
須恵器	杯蓋	1		1		
	合計	215	197	5 (+1)	6	5 (+1)
						2

*は現在所在不明

年には、瑪瑙勾玉 2 点を島根県立大社高校が購入した（機関名は現在）。主要な出土品は土地所有者が長らく所蔵していたが、1959（昭和 34）年に出雲市指定文化財となった翌年、出雲市がこれらを一括購入し、1961（昭和 36）年にはそれらが島根県指定文化財となった。さらに、1984（昭和 59）年には、土地所有者が所蔵していた振環頭大刀が出雲市に寄贈された。2016（平成 28）年にはこの大刀と京都大学総合博物館の所蔵品が接合することを確認した。

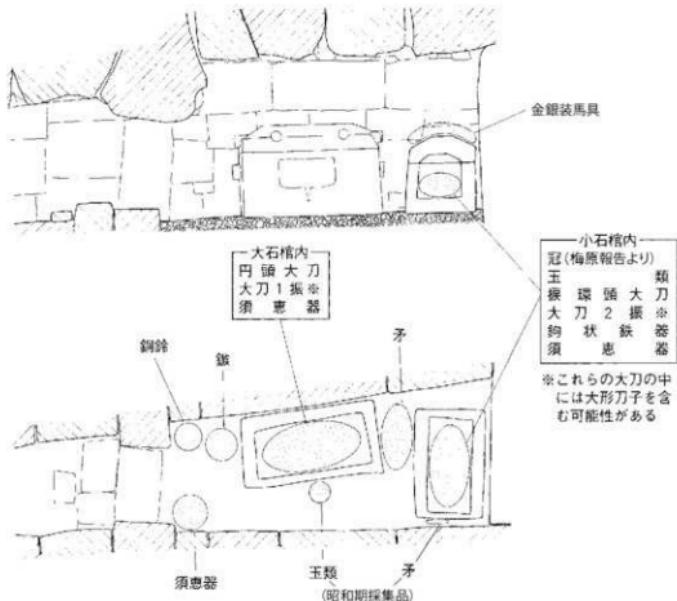
石室内からはその後も、1970 年代に石室実測中などに鉄矛、鉄鎌、玉類が採集され、これらも出雲市に寄贈されている。また、2015（平成 27）年には金銅冠の破片 1 点の寄贈を受けた。

1985（昭和 60）年から始まった墳丘のトレンチ調査で出土した須恵器の甕や子持壺、円筒埴輪なども出雲市が所蔵している。

以上のように、現在、上塙治築山古墳の出土品は、県内外の 5 施設で所有されている。これらのうち、石室内出土品を所蔵機関別にまとめたのが第 2 表である。総数 215 点のうち、197 点を出雲市が所蔵し、出雲弥生の森博物館で収蔵保管している。

第2節 石室内の出土品副葬状況

1887（明治 20）年に出土した遺物の品目と出土位置については、『県報告』で詳細な検討がなされた結果、「石室内副葬品の出土位置と復元図」が掲載された（第 11 図）。



第 11 図 石室内副葬品の出土位置と復元図（『県報告』第 25 図を一部改定）

大石棺内・・・・金銀装円頭大刀、大刀（1振）^(*)A)、須恵器
 小石棺内・・・・金銀装振環頭大刀、大刀（2振）^(*)B)、勾玉、玉類、金銅冠、鉤状鉄製品、須恵器
 小石棺の蓋石上・・・・金銀装馬具⁽¹⁾（轡、鞍金具、雲珠、辻金具、杏葉）

大石棺と小石棺の間・・・鉄矛
 玄室右袖・・・・須恵器

玄室左袖・・・・銅鈴、鉄鐵

* A・Bのいずれかに大形刀子を含む可能性がある

以上の出土位置は聞き取りによるものであるが概ね正しいと理解したい。ただし、銀装馬具の出土位置が不明なのが残念である。小石棺に金銀装馬具が伴うならば、銀装馬具は大石棺に伴う副葬品と推察できる。

以上をまとめると、大石棺には金銀装円頭大刀のほかに銀装馬具が伴った可能性がある。小石棺には金銅冠・金銀装振環頭大刀・金銀装馬具・鉤状鉄製品・玉類⁽²⁾が伴うと推定する。副葬品をみると小石棺に伴うものの方が豪華かつ豊富である。

銅鈴は、玄室の左袖石付近から出土している。『県報告』では金銀装馬具と離れて出土している銅鈴を、確実ではないがその馬装の一部と評価する。しかし、馬装以外での使用方法も推定できるため、本書では馬具とは断定せず、別に扱う。

（坂本豊治）

註

（1）『県報告』の復元図では、小石棺の蓋石上に「馬具類」とのみ記載があった。これでは、金銀装馬具なのか銀装馬具なのか、あるいは両者なのかわからない。しかし、『県報告』本文（40頁）には「小石棺上にあったのは鉄地金銅装馬具のセットであったことがわかる。銀装馬具のセットの出土位置は不明」との記述があるので、小石棺上に置かれていた馬具は金銀装馬具に特定できる。よって、本書の第11図では金銀装馬具と明記した。

（2）玉類は大石棺前から、昭和期にも6点採集されている。『県報告』では、これらの玉類は小石棺で発見後、持ち出す際に散らばったとものと推定する。本書でも同じ理解をした。

第5章 出土品の詳細

本章では、上塩冶築山古墳の石室および墳丘から出土した出土品について、金属製品、玉、土製品の順で報告する。なお、出雲市所蔵品の法量、遺存率等は目録（本章第6節）に記載している。

第1節 金属製品

1 金銅冠（第12図、図版7）

第12図通番1は、金銅製の帶金に立飾をつけ、表面に歩搖を取り付けた冠である。上に破片実測図、下に復元案に基づく破片配置図を示した。破片（1）～（3）は立飾の幹部、（4）・（5）は立飾の枝部、（6）～（8）は帶金、（9）～（15）は歩搖を含む未接合の破片である。『県報告』後、破片（3）～（5）の3点が発見された。これらは保存処理後、別置きされて所在不明になっていたものである。また、立飾破片（1）の先端右側⁽¹⁾の破片（未処理）が寄贈され接合した。

本稿では、金銅冠の概要を示した後、個別の破片の特徴を記す。

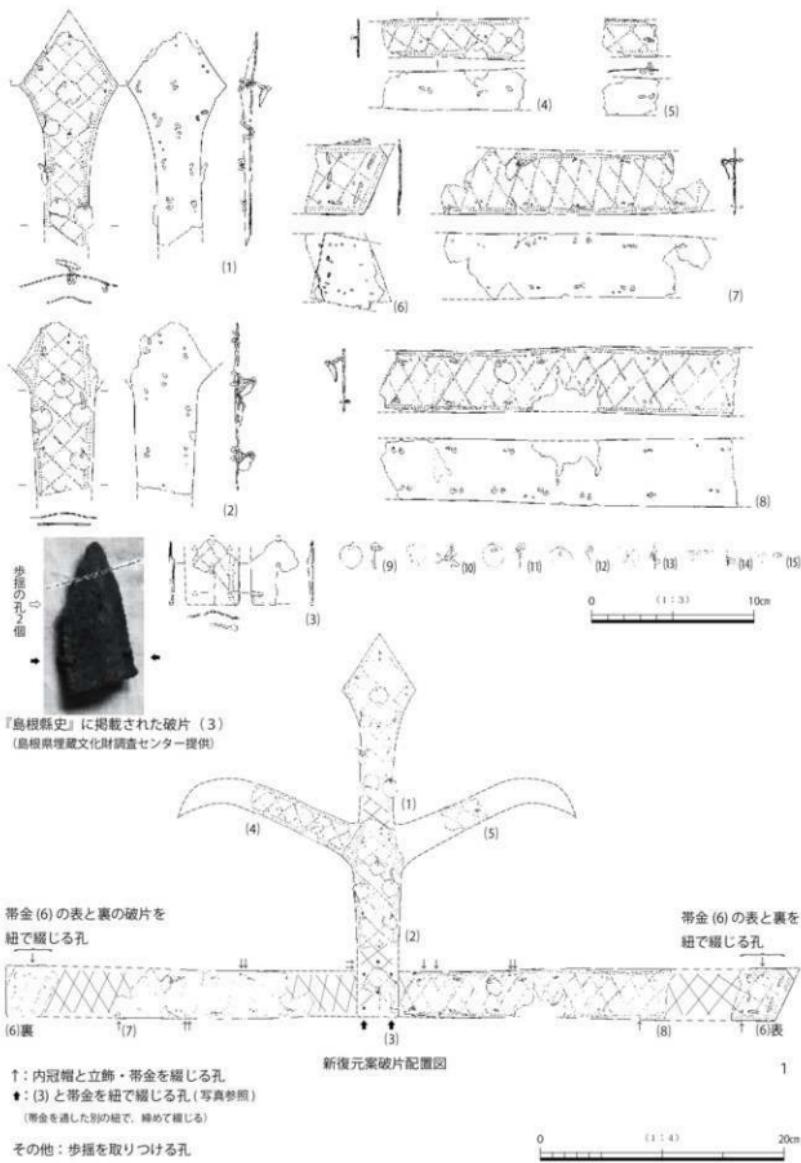
（1）概要

金銅冠は別々に作られた立飾と帶金を紐で縫じつけたもので、立飾には幹部と枝部がある。立飾と帶金の金銅板は表裏とも鍍金されており、縁には直径1mmの列点文が2列、内部には列点文が格子状に施される。列点文はすべて表側から打ち込まれている。おもて面には歩搖が取り付けられ、11個が残る。歩搖は円形に近い心葉形で、直径1.4cmほどである。凹面形をしており、凹面が表側を向くのが基本である。歩搖も表裏とも鍍金された金銅製である。

（2）立飾

破片（1）は立飾幹部の上部破片で現存長13.2cm。上部は劍菱形をなすが、上端は欠損している。下端周辺に『県報告』にはなかった格子列点文があることを確認し、図面に追加した。歩搖は5個残り、脱落したものを含めると元は11個ついていたようだ。破片（2）は立飾幹部の中間部分で現存長10.6cm。左右に枝部がつくが、枝部は付け根から欠損する。歩搖は4個残り、そのうち1個は裏返る。脱落したものを含めると9個がつく。破片（1）・（2）の歩搖は縁に沿って2.5～3.0cm間隔でほぼ左右対称に取りつけられ、さらに幅の広い部分では中央にもつく。

破片（3）は立飾の下端で現存長4cm。下縁を飾る横方向の列点文は緑青で見えないか、省略されている。破片の右側隅に孔があり、太さ約2mmの紐が確認できる。この紐は破片の表裏を一周する。また、中軸線上には現状2つの孔があり、上の孔は上端を欠く。1925（大正14）年刊行の『島根縣史』に掲載された写真には、破損する前の状態が写っており、現存する紐と対称の位置にも紐が見える（第12図写真）。また、写真には中軸線に2つの孔が写っている。これらは現存破片の上端にある孔ではなく、下の孔に対応すると推定する。つまり、下の孔と対となる孔が欠損部分にはあり、破片（3）の中軸線上に孔が3つあっていたと推定できる。



第12図 金銅冠実測図

立飾幹部の幅は枝部より下位が広く（最大幅約4.0cm），枝部より上位はやや細くなり（幅2.7cm），剣菱形の先端へ向かって緩やかに広がる。剣菱部の最大幅は6.1cm。立飾の横断面は，剣菱部では大きく「へ」の字形にカーブしているが，枝部より下位の破片（2）は平坦に近く，（3）では「へ」の字形にカーブする。破片（1）～（3）の断面の厚さは0.6～0.65mmである。

破片（4）・（5）は幅や厚みが近似しており，立飾幹部の分岐部から左右に伸びる枝部の破片と考えた。いずれも両端を欠く。破片（4）は現存長8.7cm，幅は2.3～2.6cmと片方がやや細くなり，わずかにカーブする。破片（5）は現存長3.6cm，幅2.3cm。これも破片（4）と同じく片方が細くなる。破片（4）に2つ，（5）には1つの歩搖がつくが，いずれも脱落している。歩搖は破片の中軸線上に3.6cm間隔で付けられたのである。破片（4）・（5）は扁平で，厚さは0.4～0.5mm。立飾幹部・帶金よりやや薄い。

（3）帶金

破片（6）～（8）は幅4cm前後の帶金片である。断面の厚さは，0.6～0.65mmを測り，立飾幹部と同じである。破片（7）・（8）は帶金の本体，（6）は帶金端部である。

破片（7）は現存長16.5cm，幅は3.8～4.0cmで図の右側がやや細い。歩搖は1個しか残存しないが脱落した痕跡がほかに9箇所ある。破片（8）は現存長22.2cm，幅は3.7～4.2cmで図の左側が細い。歩搖は1個しか残存しないが，脱落した痕跡がほかに11箇所にある。破片（7）・（8）につく歩搖は，いずれも上下の2条列点文の内部に3～4cm間隔で，上下が対となるよう取りつけられている。

帶金片の縁には，歩搖を取りつける孔とは別に，2条列点文の付近に孔があくが，これらは位置的に歩搖を取りつける孔ではない（孔の位置を第12図下の新復元案破片配置図に↑で示した）。孔は2つ並ぶものと単独のものがあり，（7）の単独の孔には紐が残る。

破片（6）は2枚の金銅板がややすれて重なり，幅約2mmの紐で綴じてある。表面の破片は3辺が本来の端部を残している。幅4.3cmの逆台形で，現存長5.1cm。裏面の破片も3辺が本来の端部を残している⁽²⁾。幅4.2cmで方形をなし，現存長4.3cm。端面付近は，2条の列点文が省略されている。表裏の金銅板は5箇所で綴じていた状況が確認できる。また，それぞれの金銅板には綴じつけに使っていない孔があるものの，そこに歩搖を下げた痕跡はないので，歩搖はなかったと判断できる。帶金を綴じ直したため，使わない孔ができた可能性がある。

（4）技法

列点文 破片の縁には2条の列点文が巡り，その中を列点格子文で埋めている。格子は（1）・（2）・（4）～（6）表のようほぼ正方形になるものと，（6）裏～（8）のような菱形のもの，かなりいびつな形の（3）のようなものがある。菱形といつても（7）と（8）では菱形の大きさや中心軸の傾きが異なる。斜格子を打つに先立って割り付け線が引かれているが，破片（6）表には割り付け線と大きくずれて格子列点文が打たれている（『県報告』46頁）。

歩搖 心葉形の歩搖は上部の直径1mmの孔に太さ1mmの金銅製の針金が通され，歩搖の裏側で時計回りに2度ねじってある。歩搖が取り付けられる立飾と帶金には2つの孔をあけ，歩搖をつけた針金を，立飾や帶金の裏側で折り曲げて歩搖を固定している。取りつけの2つの孔は，立飾では縦に，帶

金では横に並ぶ。

心葉形の歩搖は奈良県藤ノ木古墳の金銅冠や金銅製履 B、金銅製筒形品などにあるが、類例は多くない。

今回、破片が増えたことだったので、新たな金銅冠の復元を試みた。そのなかで、破片にある孔の用途等について検討を加えている。詳細は、第7章第1節で述べる。

(坂本豊治)

2 金装銀耳環 (第13図、図版8)

中空の耳環2点である。今回の調査で実施した蛍光X線分析で、表面に金が検出され、銀芯に鍍金したものであることが判明した(第6章第1節)。通番2は完形、通番3は端部をわずかに欠く程度で残存状態は良好である。

3 大刀

大刀には、金銀装円頭大刀(大刀1)、金銀装環頭大刀(大刀2)と、鉄刀の破片6点(大刀3・4)がある。大刀4は京都大学総合博物館に所蔵されている(第47図1)。

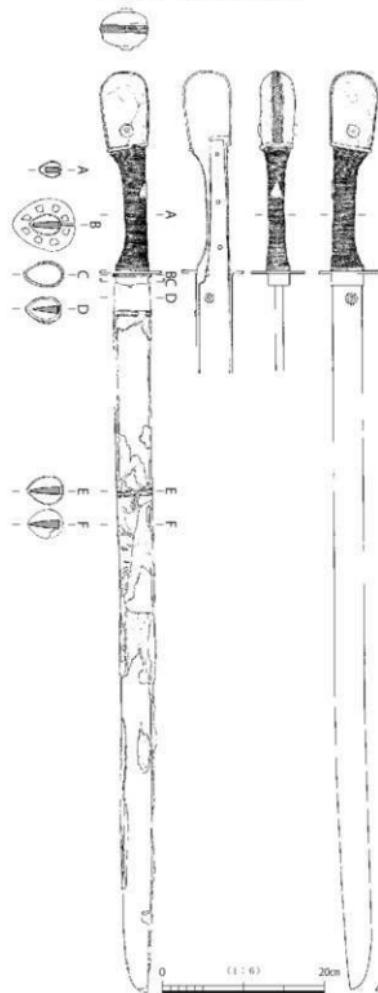
(1) 金銀装円頭大刀

(第14図4、図版8~10)

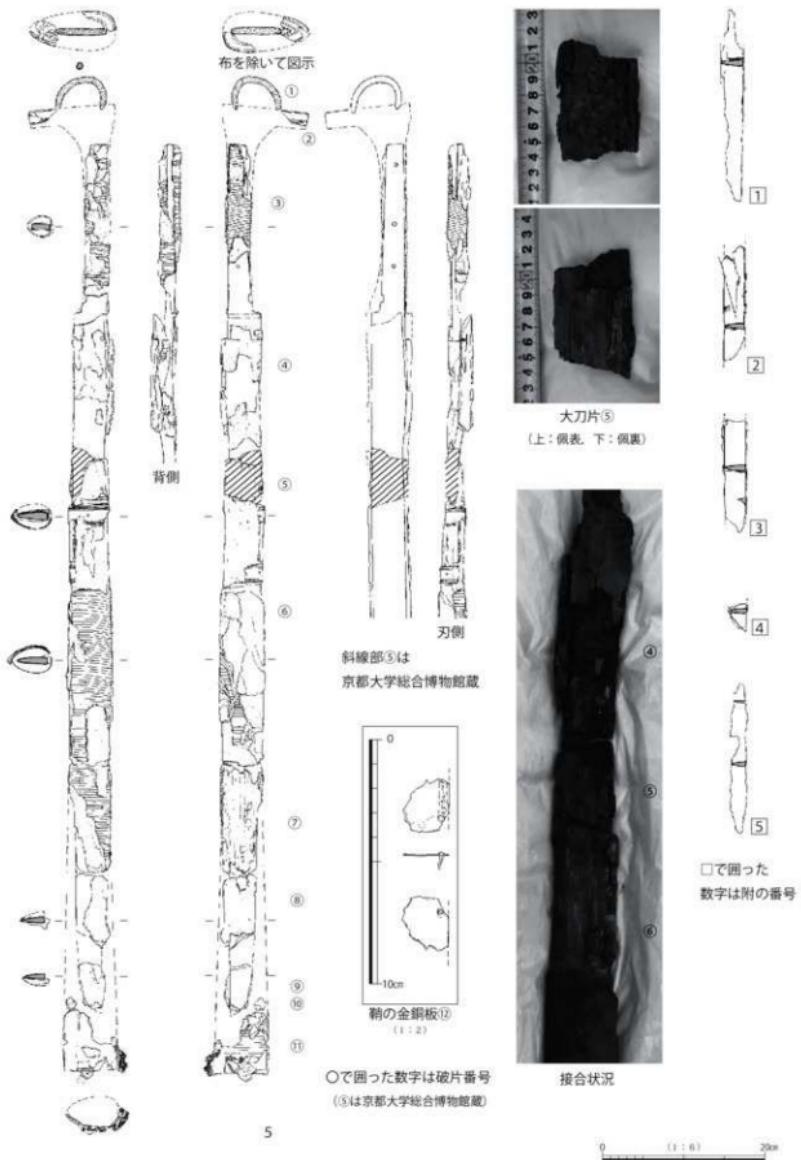
通番4は柄部および刀身部に金銀の金具が付く残存長114cmの円頭大刀である。柄頭は、打ち出しにより匙面を作った厚さ0.8mmの銀板で両側から挟み、その合わせ部を銀製の綾杉文入り細帯で留めている。柄間は刃側が大きく凹み、全体を銀線で葛縫きにする。锷は大形の八窓锷。鞘木の残りはよく、鞘口と鞘間に銀板が巻かれ、鞘の表面全体には黒漆が塗られている。現状は鞘口付近で折れて、金銅製責金具が遊離する。刀身は全体に内反りし、切先はフクラ切先である。関は片関で、茎には目釘孔が3つあけられている。刀身の関付近の表裏に、連弧輪状文⁽³⁾が象嵌されて



第13図 金装銀耳環実測図



第14図 金装銀円頭大刀実測図



第15図 金銀装擬環頭大刀及び鉄刀実測図

いる。刀身は茎落とし込み技法によって柄に取り付けられている。

今回は、刀身部に象嵌されている連弧輪状文のデジタル X 線透過撮影を実施した（図版 8）。類似の拵えをもつ大刀は、奈良県烏土塚古墳、千葉県金鈴塚古墳（大刀 14）にあり、上塙治築山古墳の円墳大刀は陶邑 TK43 型式期末に倭国内で作られたと考えられている（大谷 1999）。

（2）金銀装振環頭大刀（第 15 図 5、図版 8～10）

通番 5 は柄部および刀身部に金銀の金具が付く全長 115cm の大ぶりの振環頭大刀である。大刀は欠損が著しく、合計 12 点の破片にわかれる。また大半の破片が未処理である。今回、出雲市所蔵の破片④と⑥が京都大学総合博物館所蔵の破片⑤と接合することを確認した。また、新たに鞘尻の破片⑩と鞘の金銅板の破片⑫を図化した。

柄頭は振り環を取りつけた楔形と推測する。振り環は鉄棒を約 38 回振り、これを U 字形に曲げ、それに銀板を巻きつけたものである。刀身は全体に内反りし、切先はフクラ切先である。闇は片闇で、茎には目釘孔が 3 つあけられている。刀身は茎落とし込み技法によって柄に取りつけられ、柄間全体を紐状のもので巻いている。鞘の所々には波状列点文で飾った金銅板が鎖で取りつけてある。

類似の拵えをもつ大刀は、奈良県藤ノ木古墳（大刀 3）、千葉県金鈴塚古墳（大刀 12）にある。これらの類例から、上塙治築山古墳の振環頭大刀は TK43～TK209 型式期に作られたと考えられている（大谷 1999）。

（3）鉄刀（第 15 図附 1～5、図版 10）

附 1～3 は刀身部片、附 4 は切先片である。これらは、幅や棟の厚さがほぼ一致することから同一個体の可能性が大きい（大刀 3）。附 1 は両闇と報告されたが、検討した結果、闇部は残存していないと判断し図化した。大刀 3 は、『県報告』で銀装吊金具を作り、銀装主頭大刀と推定された。しかし、その後、この銀装吊金具は、出雲市上塙治横穴墓群第 32 支群（出雲工業高校裏横穴墓群）から出土した大刀に伴う可能性が大きいことが指摘されている（大谷 2014）。よって、この大刀 3 の拵えは不明で、銀装吊金具については、これを重要考古資料目録から外した。附 5 は、刀身部から剥離した破片であり、『県報告』で大刀歎片⁽⁴⁾と報告された 1 片である。

4 鉄矛身・石突

鉄矛身 20 点、石突 1 点の計 21 点が出土している。

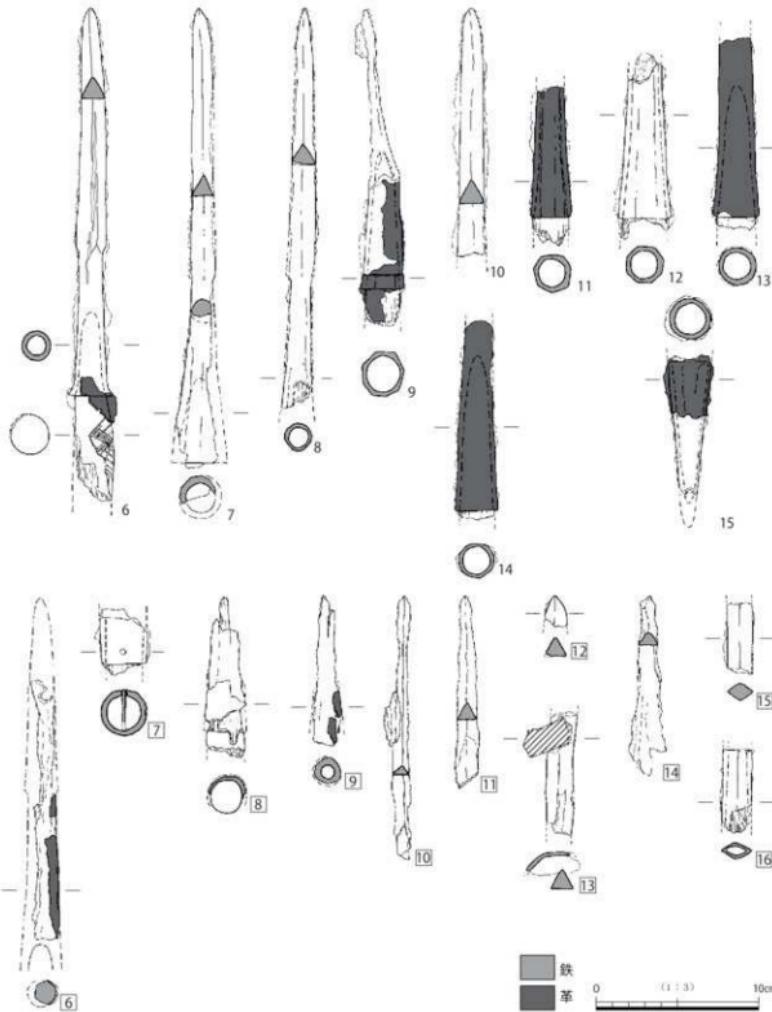
（1）鉄矛身（第 16 図、図版 10・11）

矛身 20 点は、身部から袋部まで残存するものが 6 点（通番 6～9・附 14・附 16）、身部のみのものが 7 点（通番 10・附 6・附 10～13・附 15）、袋部のみのものが 7 点（通番 11～14・附 7～9）である。

身部の断面形で分類すると、三角形の三角穂造 7～10 本（通番 6～10・附 10～14）と、菱形をした鎧造 2 本（附 15・附 16）に分かれる。袋部は、断面円形の円筒袋式 6 点（通番 6・13・14・附 7・附 8・附 14）、断面多角形の多角形袋式 4 点（通番 7・9・11・12）があり、端部は全て切り込みがない直基式である。

これらのうち、通番 6 は切先から袋部端部まである完形品である。全長 23.5cm を測り、明瞭な闇

をもつ。身部は断面三角形、袋部は円形で端部は広がる。袋の例りの深さは5cmを測り、柄木の表面には糸状の繊維を格子状に巻きつけ、その上には黒漆が塗られている。袋部の端から柄にかけて革状の膜が付着しており、革製の袋鞘の痕跡と思われる。通番9の袋部の端には八角形に面取りされた幅8mmの突帯がめぐる。附7は袋端部の破片で、唯一、直径約4mmの目釘を通す。



第16図 鉄矛身・石突実測図

(2) 石突 (第16図、図版10・11)

石突と推定できるものは1点(通番15)のみである。断面は円形で、下端を欠損する。

以上が、鉄矛身と石突である。鉄矛は、三角穂造7本以上、鎌造2本のあわせて9本以上が出土しており、両形式が共伴する事例は珍しい。柄木が残存していることから、柄に装着された状態で副葬されたと推定する。出土位置で側壁に立て掛けた場合、矛の全長は3m以下と推測できる。

鎌造の鉄矛は古墳時代前期から見られるが、三角穂造の鉄矛は古墳時代後期(6世紀)になって国内で製作された後國産で、「中央」が「地方」の有力者達に普及させたと想定されている(高田1998)。ただし、中国四国地方で三角穂造鉄矛が複数出土した古墳は、岡山県王墓山古墳(4本出土)・定東塚古墳(5本出土)、広島県二子塚古墳(4本出土)で、いずれも山陽地域に所在しており、これらの地域との関連から入手した可能性も推測できよう。

倭国内では群馬県綿貫觀音山古墳の7本が最も多く(群馬県立歴史博物館1990)、上塙治築山古墳とほぼ同じ数である。鎌造鉄矛を含めて9本以上という上塙治築山古墳の鉄矛の数は、古墳時代後期では全国で最も多い。

5 鐵鎌

鉄鎌には、鎌身部が大きく幅の広い平根系鎌と、鎌身部が小さく幅の狭い尖根系鎌がある。これに類例の少ない反刃鎌を加えた、計34本以上が確認できる。このうち、長三角形鎌1本は東京大学に所蔵されたという(第48図1)。

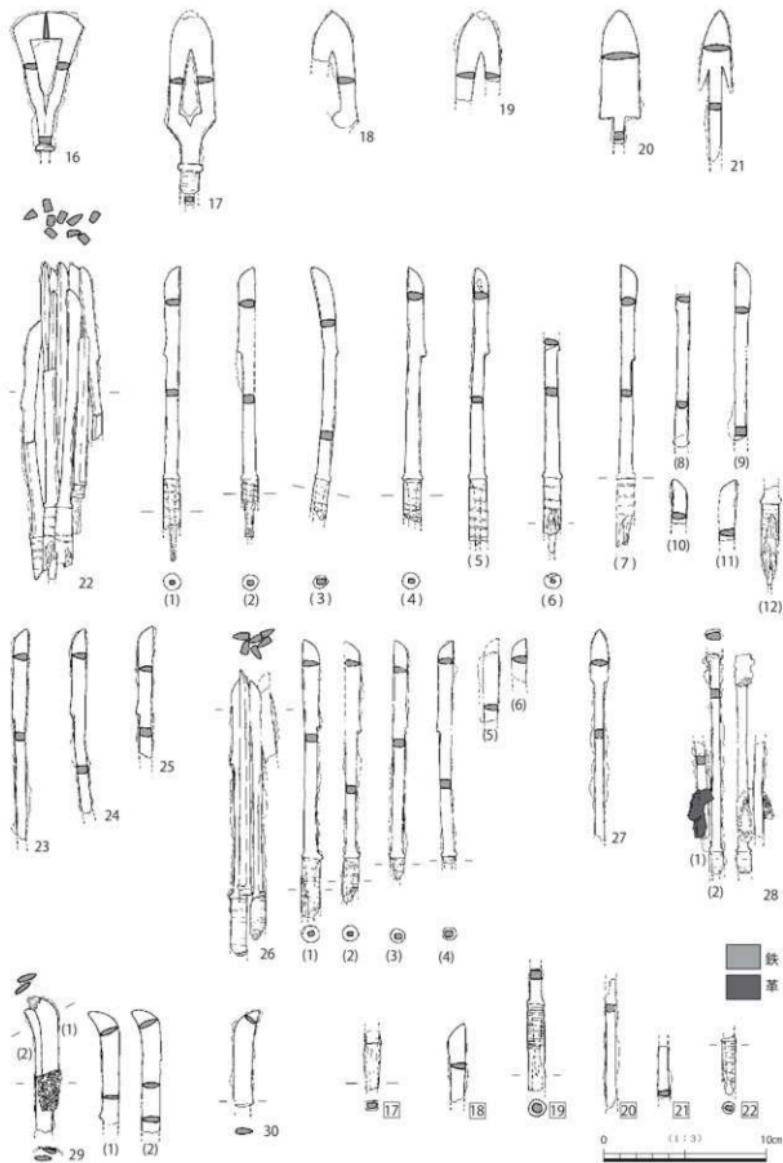
(1) 平根系鎌 (第17図、図版12・13)

平根系は、鎌身部の形態により4種に分類でき、計7本以上ある。

通番16是有窓方頭式鎌。玄室内の採集品で今回が初の報告となる。切先は丸く、鎌身間までは直線的にすぼまり、頸部はカーブを描いて括れ斜行頸部に近い形態をとる。鎌身には大きな逆三角形の透かしが入り、鎌身間近くまで達する。関部には突帯状の高まりが見られる。有窓方頭式鎌は、岡山県を中心に近畿・瀬戸内・九州北部に分布し、40例弱の出土例がある。ここ出雲でも4例の出土があり、本例の他、出雲市上塙治横穴墓群第3支群5号横穴墓、同6支群、松江市古天神古墳から出土している。土屋隆史は、「短頸方頭形透鎌」を地域特有形式として、畿内地域以外での生産を推定している(土屋2016)。本例は山陽地域から入手した可能性も推測されるが、さらなる検討が必要である。逆三角形の鎌身部に、その半分程度の長さの窓がつくものが多く、本例のような窓の形と大きさは特殊である。

通番17～19是有窓三角形鎌で、3本ある。これらは鎌身部の形態が似ている。全形がわかるのは通番17で、切先から鎌身間まで直線的のび、頸部より下は通番16とほぼ同じ形態である。鎌身には外形と相似形の透かしが入る。通番17の関部に見られる突帯状の高まりは通番16と共に通する。

通番20は透かしを持たない長三角形鎌、通番21は脇挟三角形鎌である。このほか、平根系鎌と考えられる莖部片(附17)がある。



第17図 鉄劍実測図

(2) 尖根系鐵 (第17図、図版12・13)

尖根系鐵は、鐵身部の形態により2種に分類でき、計24本以上ある。

通番22～26、附18は長頸片刃鐵で、19本以上ある。通番22は12本、通番26は6本が銹着して束になっている。いずれも鐵身間は直角、間は棘状間である。通番22の茎部には樹皮に塗布された赤色顔料が遺存しており、分析の結果、水銀朱であることが判明した(第6章第1節)。

通番27・28は長頸三角形鐵で、3本ある。これらのうち通番28は2本が銹着している。鐵身間はいずれも直角で、通番28-(2)の間は棘状間である。

(3) 反刃鐵 (第17図、図版12・13)

通番29・30は反刃鐵で3本ある。鐵身部は両刃である。類例は、広島県二子塚古墳、三重県井田川茶臼山古墳、大阪府富木車塚古墳、埼玉県埼玉將軍山古墳、静岡県宇洞ヶ谷横穴墓にあるが、遺跡数も出土数も少ない。

6 鞍金具 (第18図、図版12・13・35)

鉄製の鞍底板金具で3片が出土している。破片(1)は短辺の残欠、接合する破片(2)・(3)は隕部の破片である。『県報告』では鐵板の上下に打たれた鉢を銀装鐵鉢と報告している。今回、鉢頭の蛍光X線分析を行った結果、銀装ではなく錫装であることが明らかとなった(第6章第1節)。また、CT撮影を実施し、鐵板の内側に遺存する布等の重なりについて『県報告』の通りであることを確認した(図版35)。また、今回の調査成果をもとに『県報告』で示された復元図を一部改変した(第18図下)。

(坂本・景山)

7 馬具

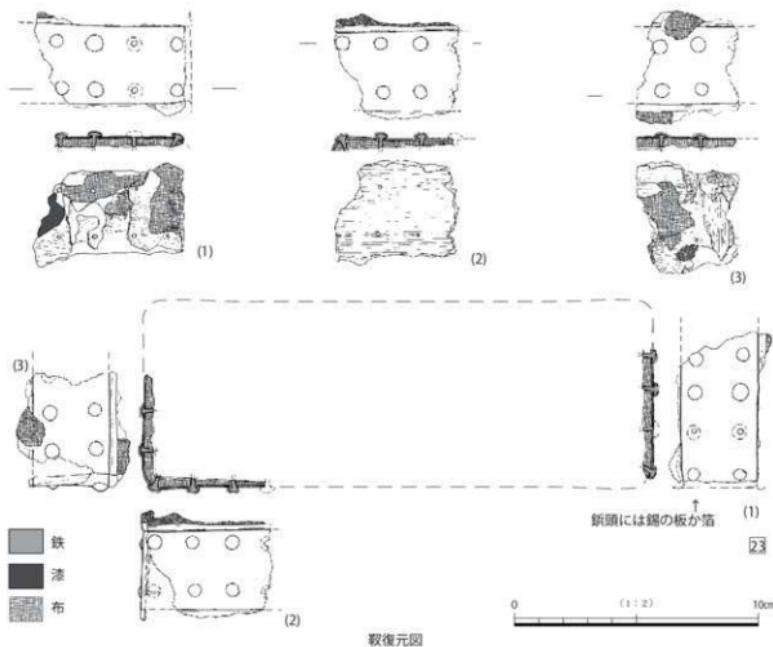
『県報告』でも指摘されているように、上塙治築山古墳には2組の馬具がある。今回は、既報告に従い、金銀装の1組を「Aセット」、銀装の1組を「Bセット」として記述する。また、一部の馬具部品は、東京国立博物館、東京大学総合研究博物館そして京都大学総合博物館に所蔵されている。それらは第47～49図に掲げた。各々の説明は種別ごとに記す。

(1) 褐 (第19・20図)

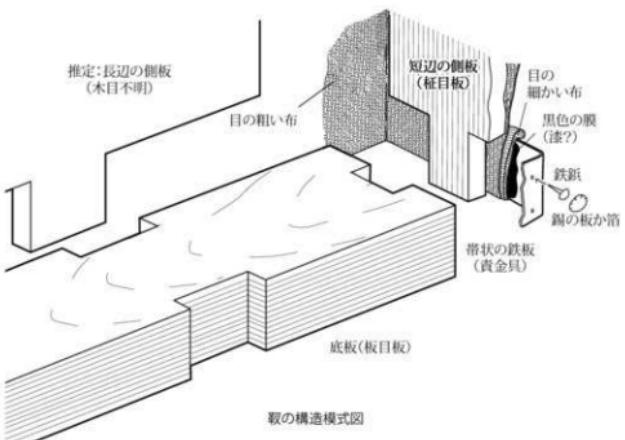
A 金銀装鏡板付轡 (Aセット、第19図、図版14・15)

通番31は鉄地金銀装の透十字文心葉形鏡板付轡である。左右の鏡板⁽⁵⁾と二連式衡、そして左右の引手棒が連結状態で遺存しており、これと接合しない引手壺1点が残る。衡の喰環と引手棒は銹び付くことなく、可動状態を保っている。

鏡板 心葉形で中に十字文を透かし表現した鏡板。中央には長方形の衡留め覆い部分があり、その部分は半球形(径2.4cm、高1.2cm)にふくらむ。文様板は、縁金も十字文も断面台形をしている。衡留め部は、別の部品を重ねるのではなく、文様板自体を叩き出して半球形のふくらみを作っている。左右幅10cm、高さは11cm。鉄製地板(厚2mm)と、金銅板をかぶせた鉄製文様板(厚4mm)とを重ね、縁金部分で4箇所、衡留め部分でも4箇所に、頭部銀装の円頭鉢を打って銀留めしている。縁金部

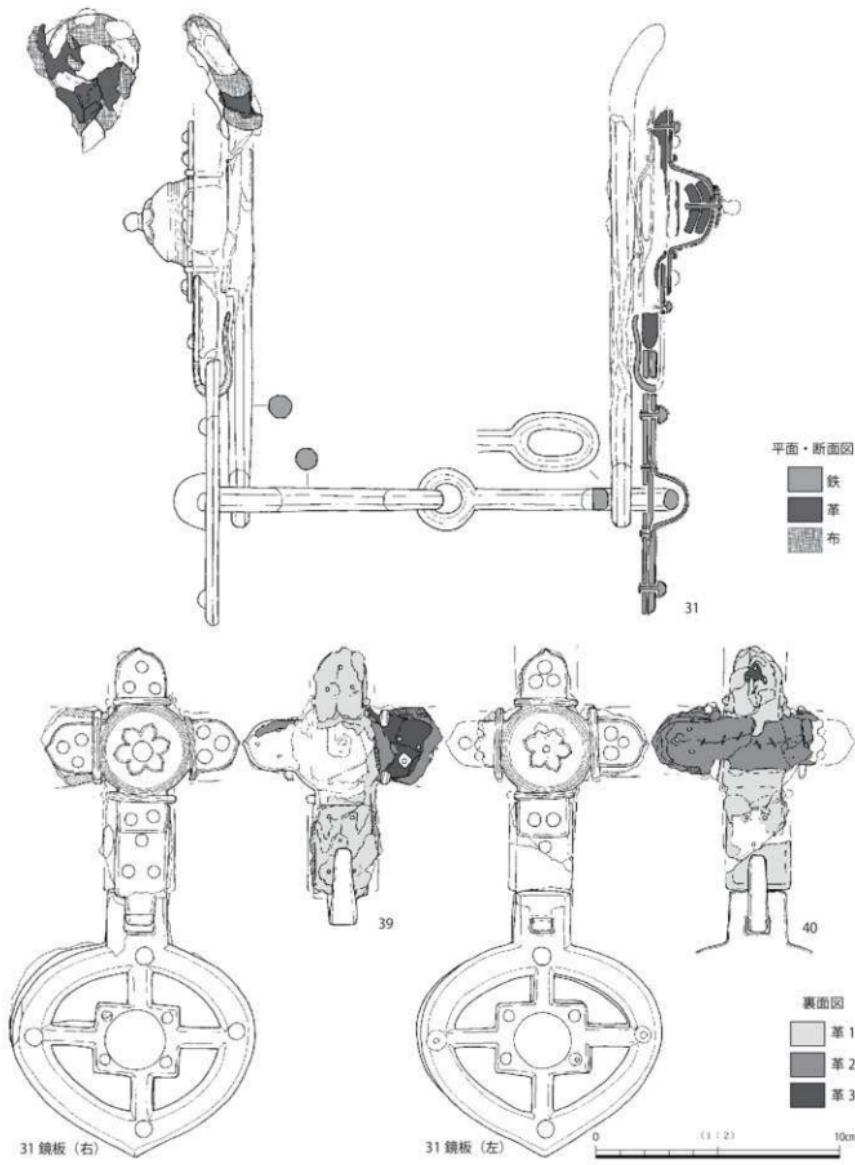


鞍復元図



鞍の構造模式図

第18図 鞍金具実測図



第19図 金銀装鏡板付具・辻金具実測図

の鉢は頭部径8mmあるが、銜留め部の鉢は径4mmと小さい。地板と文様板とは、その輪郭が完全には一致していないが、これは錆や破損による変形であろう。

右側の鏡板は立間の一端を欠損するが、立間孔に吊金具の鉤部分が遺存しており、これが鉄地金銅装四脚辻金具（通番39）に連結された鉄地金銅装長方形吊金具と接合する。吊金具は、辻金具の脚のうち方形脚と連結されている。両者を連結するのは2本の円頭鉢だが、鉢脚は吊金具の裏で潰されておらず、吊金具に打たれた3鉢とともに繋を貫いている。繋は、『県報告』でも指摘されたように革帯の側邊に組紐を綴じ付けた「縁飾付繋」（片山2016）である。

左側の鏡板の立間にも鉤部分が残っており、これにも繋が遺存する。直接には接合しないが、鉄地金銅装の吊金具と四脚辻金具（通番40）と組み合う。

なお、左側鏡板の表面の広い範囲には、柾目状の木質が錆び付いている。

銜 二連式の銜。喰の環は円形、銜先の環は梢円形をし、銜枝は断面八角形である。左側の銜枝は、喰と銜先の環が互いに直交するが、軸に振りはない。

梢円形をした銜先の環は、鏡板地板の中央にあけられた孔にさし込まれ、孔に渡された長さ3.4cmの小鉄板（連結軸）で地板に連結される。連結軸は両端を無頭鉢で留めてある⁽⁶⁾。

引手 復元長約21cmの棒状の引手で、端部の環を屈折させて引手壺とする。軸部は断面が八角形である。ただし、引手壺は遊離した右側（推定）の部分しか残っていない⁽⁷⁾。この引手壺には、手綱の痕跡が遺存しており、屈折部にかけた手綱を壺に2度巻き付けた状況が観察できる。手綱は皮革を芯にして布でくるんだものだった可能性がある。

B 嘉残片（推定Bセット、第20図、図版15）

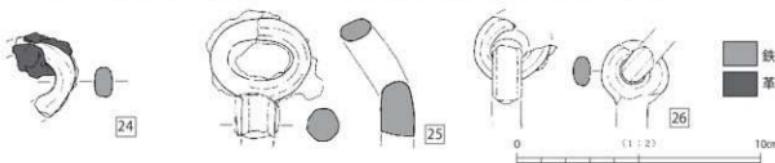
引手壺の断片2点（附24・25）と、銜先の環と引手との連結部分の断片1点（附26）の計3点がある。

引手壺片はともに、環部の断面形が長円形をしており、皮革製手綱が一部遺存する。銜と引手の連結部分の断片は、銜先の環が梢円形をしている。この時期の素環鏡板付轡であれば、銜先の環は正円形大形のものなので、この断片は板状鏡板の轡にともなうと推定してよいだろう。確たる証左はないが、Bセットと推定しておく。

（2）鞍（第21～23図、図版15～18）

A 金銅装鞍金具（Aセット、第21・22図）

前輪の磯・洲浜金具（通番32-(1)）および、後輪の磯・洲浜金具と覆輪（通番32-(2)）の一組がある。この他、前輪の覆輪（第49図1）が東京国立博物館に所蔵され、障泥吊金具（第47図4）1

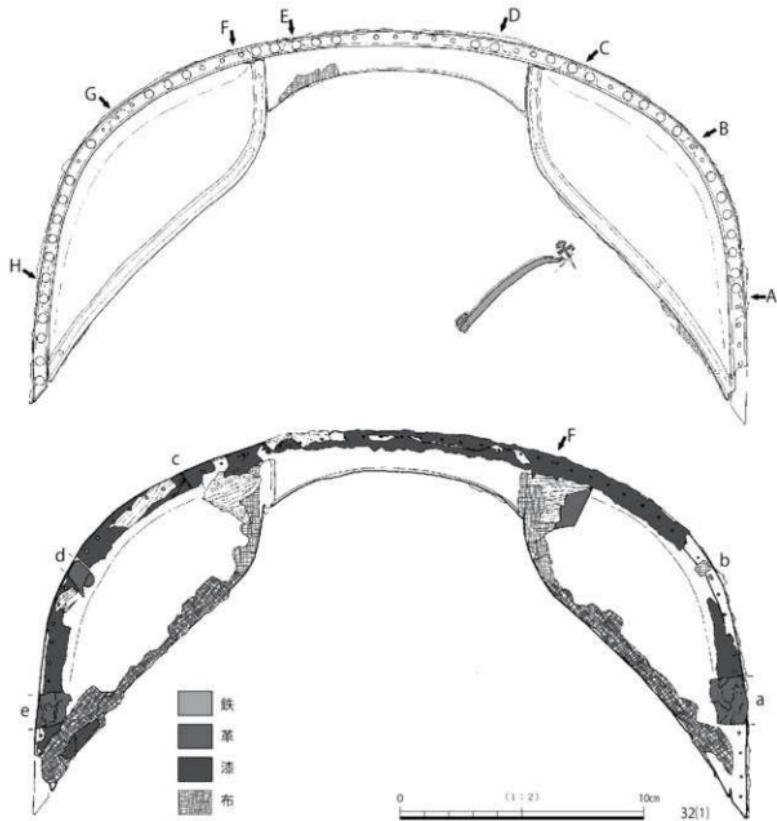


第20図 嘉残片実測図

点が京都大学総合博物館に所蔵される。

前輪鞍金具 鉄地金銅装の礪金具および洲浜金具を、鉄地金銅装の縁金具と頭部銀装の鉄鋲で鞍本体に固定したものである。爪先の左右幅は29.5cm、高さは15.5cm。

礪金具下辺には鉄縁金具が鉄留めされ⁽⁸⁾、これをくるむように金銅板が被せられている。縁金具は片方の爪先部を欠損しており、銀装鋲は58本が現存する（復元推定60本）。礪・洲浜金具の上辺にある金銅装縁金具は、礪金具に3箇所、洲浜金具に左右2箇所もうけられた突起（第21図A～H）に銀装鋲を貫通させる⁽⁹⁾。図のFの突起部分の裏面では、折り曲げられた鋲脚が漆膜に覆われた状況が観察できるので、突起を貫通した鋲脚はそこで折り曲げられていて、鞍本体には届いていない。突起部分以外の銀装鋲は礪・洲浜金具の外周に沿って鞍本体に打ち込まれている。

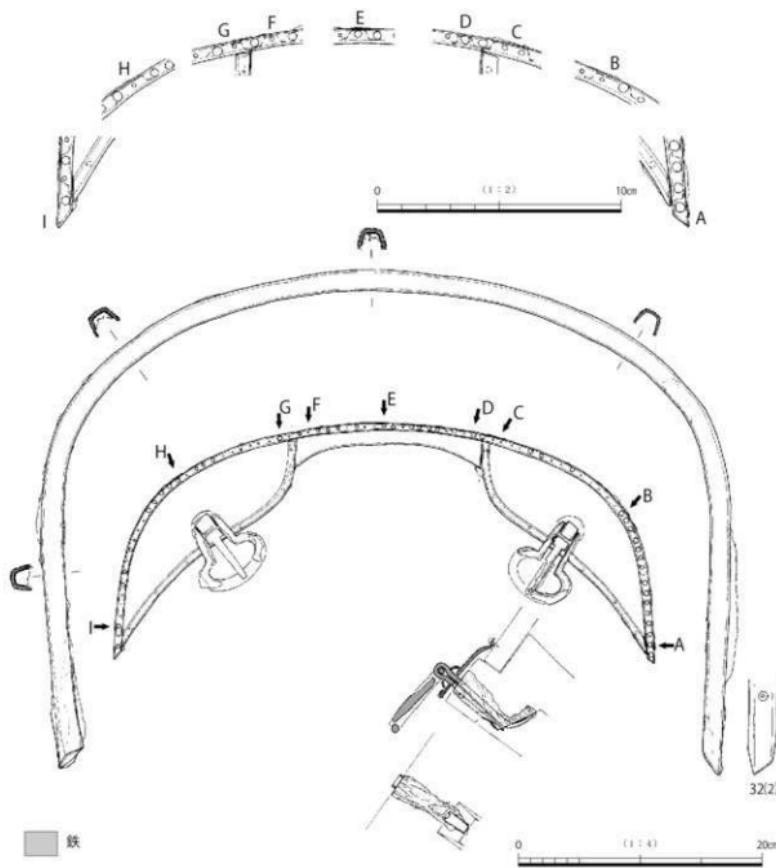


第21図 金銀装鞍金具前輪実測図

礪金具裏面上辺には、金具と密着する漆膜が全体に残り⁽¹⁰⁾、その膜面に木質が残存する。また、礪金具裏面の洲浜に近い辺りには皮革や布を間にして木質が付着するほか、爪先に近い下辺には組紐のような繊維製品が残っている⁽¹¹⁾。

後輪鞍金具 磳・洲浜金具は前輪より全体に大きく、爪先幅 44.2cm、高さ 19.4cm ある。礪金具中央に、鞍と金銅装円形座金具を装着する。礪金具の下辺に鉄縁金具を留めた鉢の数は、左右とも 6 本である。また、金銅装縁金具に打たれた銀装鉢は 81 本を数え、そのうち、礪金具の A～C、G～I の 6箇所の各 2本と、洲浜金具 D～F の 3箇所の各 1本は、突起を貫通する。

鞍は、凸字形の輪金に T 字形刺金を挟み込む型式である。右側の鞍の脚部があり、礪金具裏面か



第 22 図 金銀装鞍金具後輪実測図

ら5cmほどのところで2本の脚の片方を上向きに折り曲げて、その先端を居木に食い込ませた状況が残る。脚部の下辺側には皮革が付着するが、その方向は脚部とは斜行するようだ⁽¹²⁾。

金銅装の覆輪は、爪先の端面が斜めに仕上げられており、端部からやや離れた位置に銀装鉄鉢が打たれている。端部の側面は前輪側に覆輪の断面はやや開いたコ字形で、内部に鞍橋の木質が残る。前輪覆輪のように左右2枚の鞍橋を緊縛した孔の痕跡(『県報告』第57・60図、本文98・99頁参照)は明瞭でないが、頂部辺りには左右の鞍橋板材を重ね合わせた痕跡が観察できる(図版18)。

B 銀装鞍金具(推定)(Bセット、第23図、図版18)

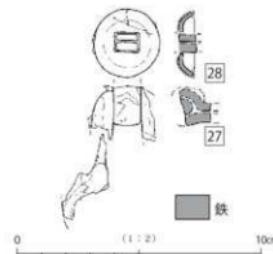
円形の銀装座金具をともなう鞍が1点ある。鉄製で凸字形の輪金をともなう。Bセットの馬具であろう。

(3) 鐙(第24図、図版18)

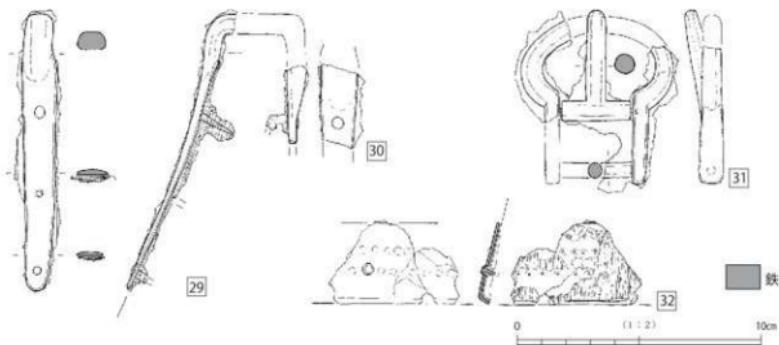
鉄製の吊金具片2点(附29・30)と木製壺の裾に取り付けた側板断片1点(附32),そして鎧軸の鎧具断片1点(附31)がある。

吊金具のうち、3本の鉄釘が残る断片(附29)は金具裏面に残存する木質と金具との間に黒漆膜がある。この漆膜は金具側辺から2mmないし3mmのところで金具側辺と平行する稜線をもって屈折する。木製壺の前側(正面)に幅3cm弱の平らな面があり、そこにこの金具が止めてあったことがわかる⁽¹³⁾。

木製壺の踏込側面と壺部周囲に取り付けてあった帶状鉄板の断片がある(附32)。幅3.2cmの鉄板の下辺は短く折り曲げてあり、側面には裏面からたたき出してつくられた円文が上下2段に並ぶ。金具を固定した鉄釘が1本残っている。金具の幅は、奈良県牧野古墳出土例と比較すると、ほぼ2/3である。



第23図 銀装鞍金具実測図



第24図 鎧金具実測図

附31は、鎧鉢の鉢具。T字形の刺金を凸字形の輪金で挟み込む型式である⁽¹⁴⁾。

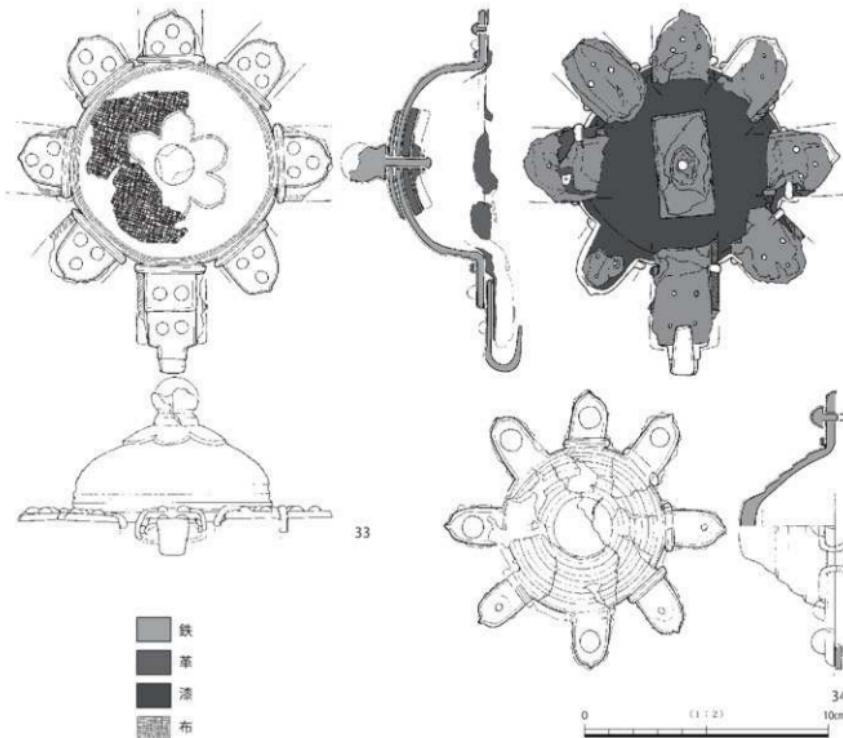
(4) 雲珠（第25図、図版19・20・33）

半球形八脚の金銀装雲珠1点と、円錐台形で棘花弁形八脚の銀装雲珠1点がある。

A 金銀装雲珠（Aセット）

通番33は大型の鉢部半球形八脚雲珠である。鉢部の側面には3条の沈線がめぐる。1つある方形脚以外は棘花弁形で、方形脚には心葉形透かし杏葉（通番50、第29図）が吊金具を介して垂下されている。鉢部径8.6cm、脚部を含めた差し渡し径は13cm。脚部を含めた本体と頂部の宝珠形飾りは金銅装⁽¹⁵⁾、6花弁花形座金具と貴金具（上半のみ）そして鉢頭が銀装である。宝珠形飾りは内面向って長さ2cmの脚が伸び、ここに約4×2cmの皮革片を2枚通したのち鉄ワッシャーをはめて留める⁽¹⁶⁾。鉢部内面は黒色の光沢をもっているので、黒漆塗りであろう。

雲珠脚部の裏面には、側面に組紐を縫じ付けた繫（緑飾付繫）が残る⁽¹⁷⁾。また、一部の繫（裏面図



第25図 金銀装・銀装雲珠実測図

の3・4時方向と9時方向)には、交差部全体に重ねた8花形と推定される革部品の断片が残る。責金具はこの革部品ごと戻繋の革帯を締め付けており、鉢脚もこの革部品まで貫通しワッシャーをはめて漬してある。唯一の方形脚に打たれた2鉢の鉢脚も革の縁飾付繋を貫通しており、吊金具を鉢留めするものではなかったことがわかる⁽¹⁸⁾。なお、鉢部には布が錆び付いている。

B 銀装雲珠 (B セット)

通番34は円錐台形を5段重ねた形の径6.5cmの鉢部をもった八脚の雲珠。棘花弁形の脚部は幅が1.5cm前後で細長い。脚部を含めた差し渡し径は11.5cmである。脚には銀装の責金具と円頭鉢を付すが、欠損もある。脚部裏面に繋の皮革質が残る。

(5) 吊金具 (第26~28図、図版20・21・33・34)

2種類の雲珠に対応した銀装と銀装の吊金具があり、金銀装吊金具には六脚と四脚の2者がある。

A 金銅装六脚吊金具 (A セット、第26図)

通番35~38の銀装六脚吊金具は、小形の半球形鉢部に棘花弁形脚5つと方形脚1つをもつ吊金具である。方形脚には杏葉吊金具が付く。4点ありすべて出雲市所蔵である。

基本的なつくりは、銀装雲珠(通番33)と同じであり、鉄製の鉢部・脚部が金銅装、鉢頂部の宝珠形飾金具と6花弁花形座金具そして責金具・鉢頭が鉄製銀装である。脚のひとつだけが方形という特徴も雲珠と同じで、やはりここに吊金具を取り付けて杏葉を下げている(通番37、杏葉は通番51)。鉢部径3.7cm、差し渡し径7.7cm。

X線CT画像(図版33・34)によると、鉢頂部の宝珠形飾りの脚(長さ約1.5cm)は、鉢内部で長方形の革部品を留めているだけで、繋の交差部とは関係しない。通番38のみは、脚を曲げて革部品を留めているが、ほかはワッシャーをはめて脚先端を漬して留めている。

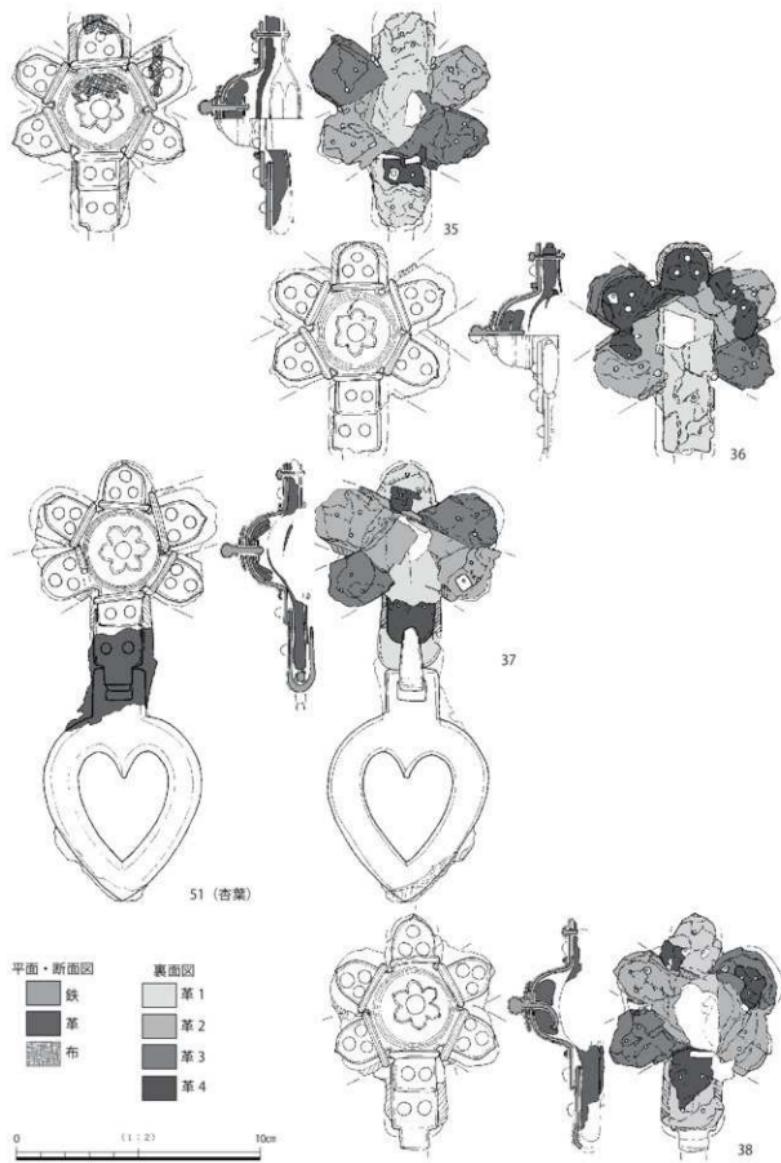
六脚吊金具は3条の繋が交差する部分に付けられるわけだが、方形脚につながる革帯は、対面する脚の端部で終わっており(通番36、ほかもその可能性が高い)、他の馬具部品と連結する機能をもない。繋の構造については後述するが、責金具や革帯の重複状況によると、繋3条のうち方形脚に留められた繋(図で0~6時方向)が常にもっとも上に重なることが共通する。

また、方形脚に打たれた銀装鉢の脚は吊金具裏面で叩き漬されるのではなく、繋と繋の交差部⁽¹⁹⁾に重なる6花形革部品を貫通し、小形方形のワッシャーを挟んで留められる(通番35・37)⁽²⁰⁾。通番36には、6花形革部品が良好に残存しており、通番36・38では責金具がこの革部品を締めつける状況がわかる。

B 銀装四脚吊金具 (A セット、第19・27図)

鏡板付轡に連結される2点(通番39・40)のほかに3点(通番41~43)の計5点がある。出雲市以外に、東京大学総合研究博物館に1点(第48図2)、京都大学総合博物館に2点(第47図2・3)が所蔵される。京都大学総合博物館所蔵の1点は脚が斜交した面繋用の吊金具である。

鏡板付轡に連結された銀装四脚吊金具(通番39・40)は、3鉢留めの吊金具が方形脚に繋がり、他の3脚が棘花弁形である。方形脚に打たれた銀装鉢が、方形脚と吊金具との留め付けだけではなく、繋の固定にも機能する点は、ほかの雲珠・吊金具と同じである。面繋の革帯交差部に重ねた十字形革



第26図 金銀装辻金具実測図(1)

部品の断片が残る。通番 40 は、頂部の宝珠形飾りを欠損する。鉢部径 4cm、左右径は 8cm（通番 39）で、六脚のものよりわずかに大きい。

通番 41 は、面繋の四脚辻金具と同形だが、方形脚から脱落した吊金具は金銅装心葉形透杏葉（通番 52）のものとみてよい。

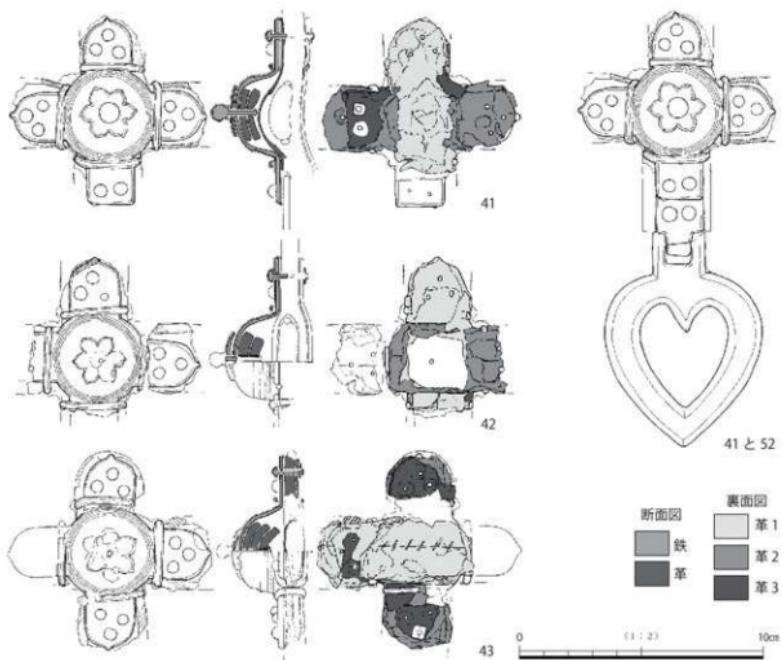
通番 42 は 2 脚を欠損し、接合された 1 脚には接点がない。宝珠形飾りを欠損する。

通番 43 は 1 脚を欠損する。残った脚のひとつは、その端部で革帶が終わっているのがわかるが、それと対抗する脚は棘花弁形であって方形でない⁽²¹⁾。したがって、脚すべては同形だった可能性がある。

C 銀装四脚辻金具 (B セット, 第 28 図)

通番 44 ~ 46 は銀装雲珠と同形の円錐台 4 段を重ねた階段状鉢部の辻金具である。脚すべてが棘花弁形の 1 点、1 脚のみ方形の 1 点、いずれか不明の 1 点の計 3 点がある。すべて出雲市所蔵である。

4 脚すべて棘花弁形の 1 点（通番 45）は、銀装鉢や銀装貴金具がよく残っており、裏面の革帶の残りも良好である。脚裏面には、綾杉状の「組緒繫」（片山 2016）の痕跡が残り、繩の厚みは 1.2cm くらいあったようだ。鉢部径 4cm、差し渡し径 8.7cm。



第 27 図 金銀装辻金具実測図 (2)

脚のひとつだけが方形脚となる1点(通番46)は、方形脚の裏面に吊金具の断片が残る。棘花弁形の脚のひとつには鉄脚が完全に残っており、鉄の全長は1.95cmである。この個体の方形脚上部に銀装杏葉(通番53)の吊金具が鋲びつく。

(6) 杏葉 (第29図、図版21・22)

Aセットの金銅装透心葉形杏葉と、Bセットの銀装心葉形杏葉がある。

A 金銅装透心葉形杏葉 (Aセット)

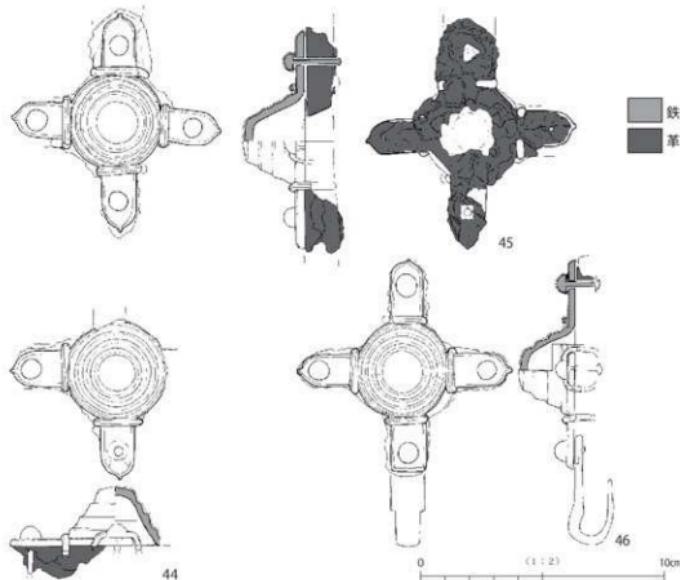
通番47～52は金銅装の透心葉形杏葉。出雲市所蔵品以外に、東京大学総合研究博物館に1点(第48図3)が所蔵される。出雲市所蔵の6点は、吊金具を残す4点と、金銅装八脚雲珠および六脚辻金具と連結された状態のもの各1点がある。通番47の長さ(高さ)9.2cm、幅6.6cm。

6点とも立間に金銀装吊金具が附属する。杏葉本体は中央を心葉形に透かした鐵地板の表に金銅板をあてたものである。裏面には金銅板の折り返しがあるほか、ほぼ全面に黒漆状の付着物があり、それに密着する皮革質も一部に残る⁽²²⁾。金属製品と同形の黒漆塗り革部品を重ねていた可能性が高い。ならば、金色の外周と光沢のある漆黒色のコントラストが美しかったであろう。

なお、通番52は銀装四脚辻金具(通番41)に接続するとみてよい(第27図)。

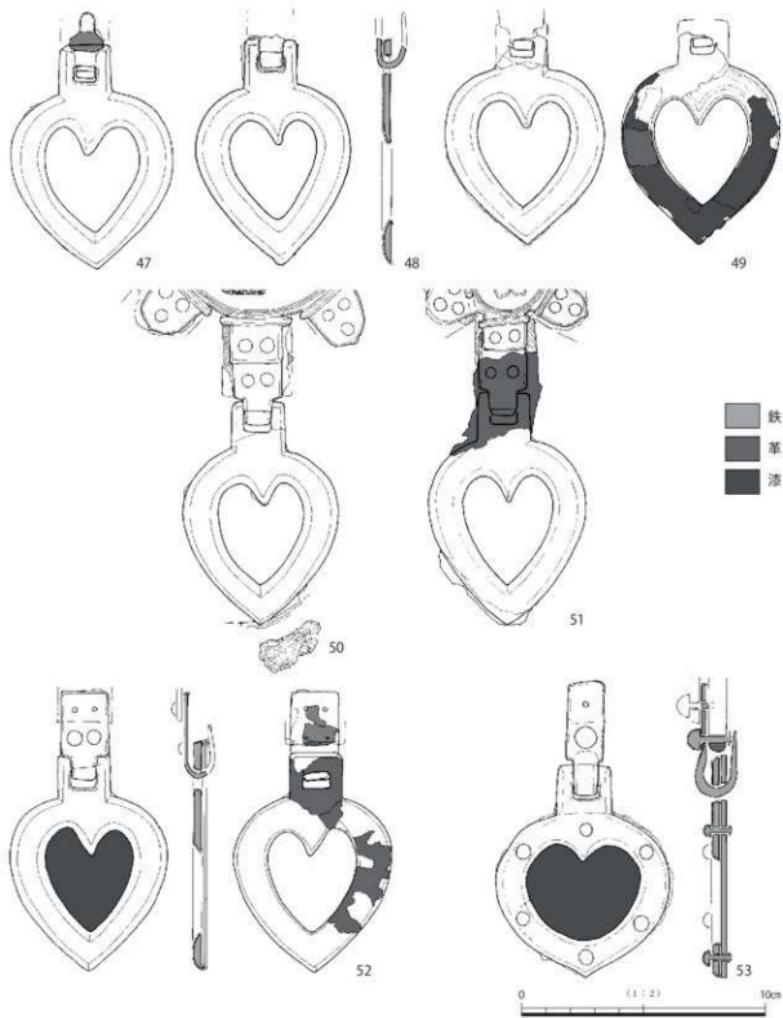
B 銀装心葉形杏葉 (Bセット)

金銅装杏葉よりも左右に張った形の心葉形杏葉が1点(通番53)ある⁽²³⁾。文様板は中央が同形のハ

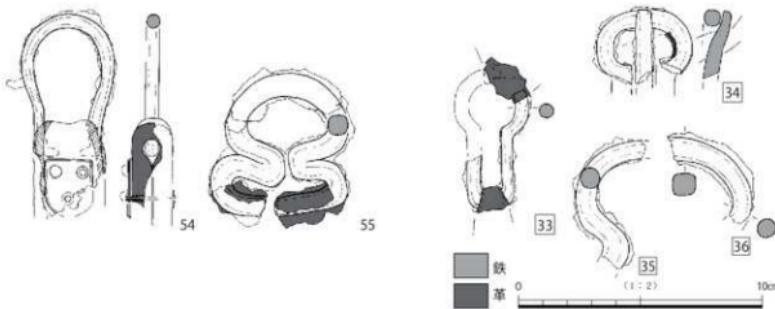


第28図 銀装辻金具実測図

ト形の透かしとなっていて、漆塗りの鉄地板がのぞく。縁には頭部径 6.5mm の銀装紙が 6 個並ぶ。やはり銀装紙をともなった銀装の吊金具が附属する。杏葉の長さ（高さ）8.7cm、幅 7.2cm。吊金具は全長 4.8cm、幅 1.5cm で、銀装込金具の方形脚に繋がっていた痕跡がある。



第29図 金銅装・銀装杏葉実測図



第30図 鉄具実測図

(7) 鉄具 (第30図、図版22)

金銅装留金具に銀装鉢を打って革帶の折り返しを固定し、そこに取り付けられた長楕円形の鉄具(通番54)、8字形の大形鉄具(通番55)のほか、鉄具断片が4点ある(附33~36)。

金銀装金具が付く鉄具(通番54)は、縁飾付繋を留めているので金銀装馬具のAセットの面繋にともなうとみてよからう。そのほかは、セット関係を推測することは困難である⁽²⁴⁾。

8 銅鈴 (第31図、図版23)

青銅製の鋳造銅鈴が4点ある。このほかに、東京国立博物館に1点が所蔵され(第49図2)、また、東京大学へも1点が寄贈されたという(第48図4)。

横断面が八角形をし、胴部に2条の突帯がめぐる「八角稜鈴」である。下半には鈴口があき、その周囲は一段厚くなっている。頂部の鉤は、方形のもの(通番56・59)と、丸みのあるもの(通番58)とがある。鉤の長辺と鈴口とは直交する。体部の上半に2個の型持孔があるが、通番58の片方はほとんど潰れている。また、通番59の鉤の根元には、す孔があく⁽²⁵⁾。鉄の丸はすべて説びついでおり、鳴らない。地金がのぞく部分には研磨痕跡が顕著で、その方向は規則的である。(花谷 浩)

9 刀子

刀子には、木装の大形刀子1点と鹿角装刀子7点がある。

(1) 大形刀子 (第32図、図版24)

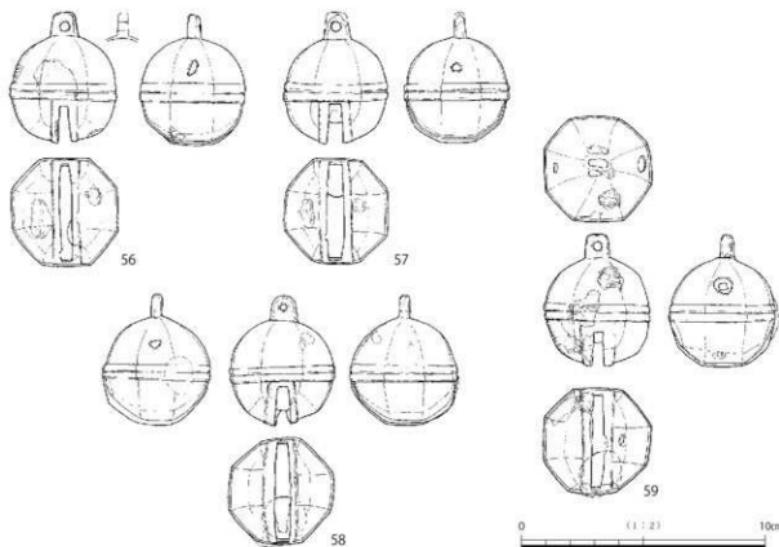
通番60は、今回の資料整理で刃部と木製鞘の破片が新たに接合し、現存長は36.7cmとなった。

木製の柄は、断面杏仁形で、端部が上方に反り、柄の中央付近には1箇所目釘が打たれている。柄口付近、柄中央、端部付近の3箇所に段が作出されるのが特徴である。

管見では、同形態の柄は奈良県丹切38号墳(5世紀後半)や宮崎県島内地下式横穴墓ST-46、ST-115(6世紀)出土品にみられるが、いずれも鹿角製であり、木製の柄は当資料に限られる。

(2) 鹿角装刀子 (第33図、図版24)

通番61・62と附37~41は鹿角装刀子で、遺存状態が良好とはいえず、身部や茎尻、柄を欠く



第31図 銅鈴実測図

第3表 銅鈴法量一覧

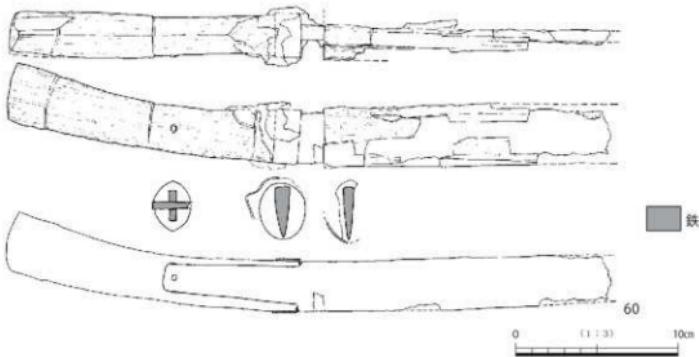
	56	57	58	59	東京国立博物館所蔵品
全体高	53.35	52.35	53.15	53.4	54.6
鈴体高	43.75	42.4	43.15	43.5	43.7
正面幅	43.4	42.7	43.2	43.5	43.6
側面幅	43.85	43.2	43.7	43.3	44.0
鉦 高	9.6	(9.95)	10.0	9.9	10.9
鉦 幅	11.7	10.7	11.3	11.0	11.0
鉦 厚	4.0 - 4.9	3.6 - 5.1	4.05 - 4.4	3.8 - 4.7	4.2
鉦孔径	3.4 - 3.9	3.2 - 3.5	3.8 - 3.9	3.4 - 3.5	2.4 - 2.8
型持孔径	3.1 - 6.5	3.6 - 4.0	0.2, 3.7 - 4.7	4.25 - 7.3	6.8
鈴口長	41.75	41.55	42.1	43.85	—
鈴口幅	5.0	6.7	6.1	6.4	5.4
重 量	72.17	(68.64)	78.46	73.33	—

* 単位は、重量がg、そのほかはmm。東京国立博物館所蔵品は『県報告』による。

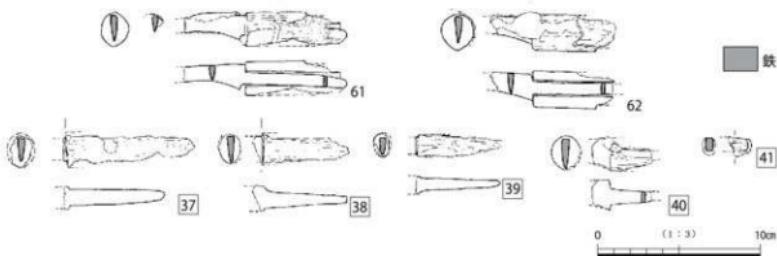
ものが多い。このうち、比較的良好に遺存する2点(通番61・62)は、柄に段が作出されていることが明らかとなった。通番61は棟側の柄口から3.8cmの位置、通番62は刃側の柄口から3.9cmの位置に1mm程度の段が観察できる。これは、上記の大形刀子とも共通する特徴である。

10 不明金属製品

用途不明の金属製品として、鉤状鉄製品6点、不明金銅板2点、不明鐵製品1点がある。



第32図 大形刀子実測図



第33図 鹿角装刀子実測図

(1) 鉤状鉄製品 (第34図、図版25)

通番63は、4点の鉤状金具が鋲着して1点となっている。主頭形の先端には4個の孔があき、紐で金銅板を綴じつける。反対側の先端には布が付着する。通番64は3点の鉤状金具が鋲着する。これらは残存する主頭形の先端に4個の孔があき、紐で金銅板を綴じつける。金銅板には7個の孔があき、綴じつけ直された可能性がある。通番65・66も先端の破片で、このうち通番65には円形の金銅板が良く残る。類例及び用途は不明である。

(2) 不明金銅板 (第35図、図版26)

未報告の資料である。

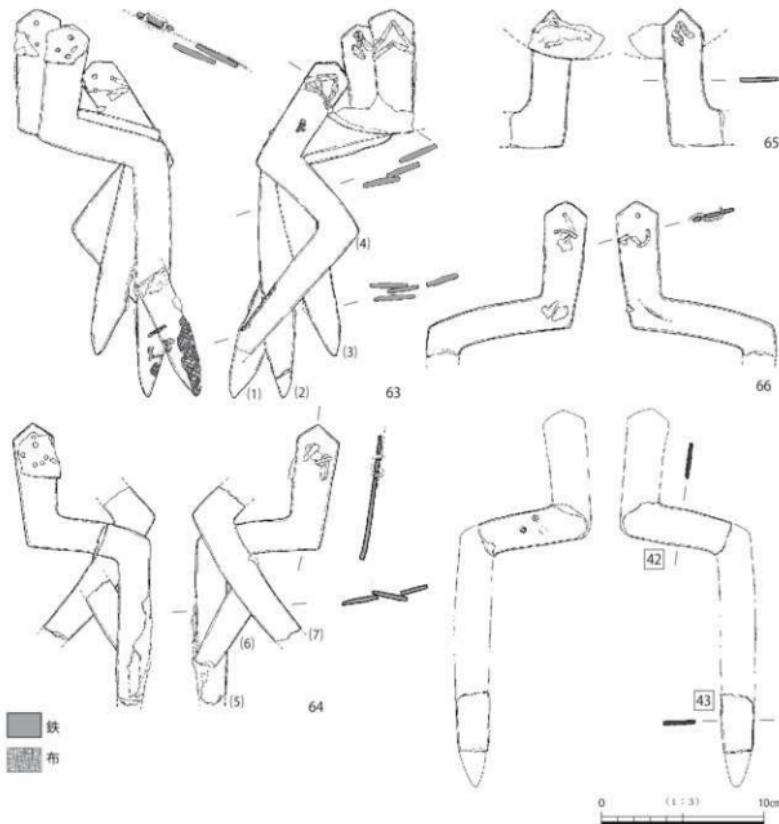
第35図附44は、1辺のみ残存するが、その他の端部は折損している。附45は端部を全て欠く。いずれも板の厚さは1mm程度、直径2mmの孔が3個あき、両面が鍍金される。この不明金銅板は、両面に鍍金される点や直径2mm程度の孔があく点が鉤状鉄製品に綴じつけられた金銅板と類似する。ただし、表裏とも紐状の残留物ではなく、金銅板が剥落した鉤状鉄製品の先端とも接合しないため、明確に伴うものか判然としない。

(3) 不明鉄製品 (第36図、図版26)

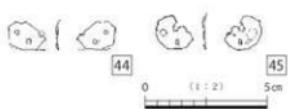
附46は厚さ5mmの方形の鉄板を加工したものだが、2辺が欠損し長さ3cmの小片となっている。

一辺には方形の突起がつくる。その先端は折れしており、その周辺には木質が残る。突起の下には幅7mm、深さ6mmの例り込みがある。もう一辺にも幅4mm、深さ4mmの小さな例り込みがあり、この辺には革状の付着物が付着している。

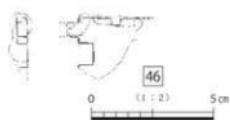
(坂本・景山)



第34図 鋸状鉄製品実測図



第35図 不明金銅板実測図



第36図 不明鉄製品実測図

第2節 玉

1 石製玉類

石製玉類には、水晶勾玉2点、水晶丸玉6点、水晶算盤玉1点と瑪瑙棗玉1点がある。

(1) 水晶勾玉 (第37図、図版6・26)

通番67・68は水晶勾玉である。いずれも完形で透明度の高い水晶を素材とする。通番67は丸みを帯びた凹字形で、頭部のやや下寄りに片面から穿孔する。断面は円形に近く、丁寧に研磨される。通番68は通番67に対してやや大型の角張った凹字形を呈し、頭部の上寄りに片面から穿孔する。

このほかにも、水晶勾玉が東京大学総合研究博物館(第48図5)と東京国立博物館(第49図3)に各1点所蔵されている。さらに、所在不明品の中に瑪瑙製勾玉の存在が知られ(第50図)、勾玉は少なくとも水晶製4点、瑪瑙製3点の計7点が存在したことになる。

(2) 水晶算盤玉 (第37図、図版6・26)

算盤玉は通番69の1点のみ採集されている。非常に透明度が高く、丁寧な研磨により稜線も明瞭に砥ぎ出される。孔は片面穿孔。上面の穴が中心からややすれる。

(3) 水晶丸玉 (第37図、図版6・26)

通番70は6点あり、うち1点は小振りである。使用された水晶には汚れやクラックが見られ、勾玉に比べると透明度が低い。表面は丁寧な研磨が施され丸く仕上げられるが、片面から穿孔された孔

は斜めになるなど中軸からずれるものが多い。

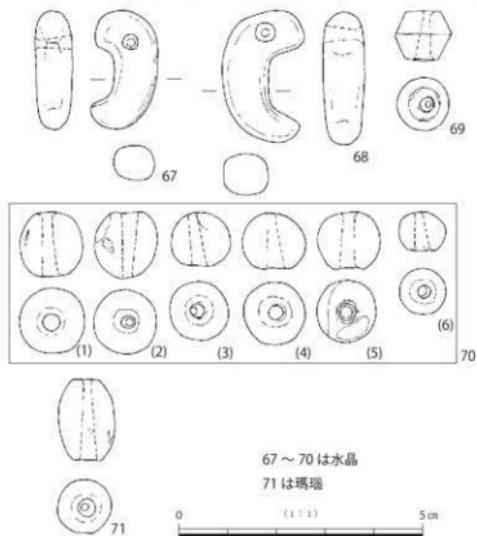
(4) 瑪瑙棗玉

(第37図、図版6・26)

瑪瑙製の玉類のうち、現在残るのは通番71の1点のみである。透明な赤橙色を呈し、片面から穿孔される。表面を一部欠くが、非常に丁寧な研磨で仕上げられている。

2 ガラス玉

ガラス玉には、管玉1点、小玉78点がある。『県報告』では、小玉のうち17点が「粟玉」として報告されていたが、本書では小玉として扱うこととした。また、今回実施した自然科学分析により、出雲市所蔵



第37図 水晶・瑪瑙玉類実測図

品については、ガラスの材質および製作技法が明らかとなった（第6章第2節）。

（1）ガラス管玉（第38図、図版6・26）

通番72は淡青色不透明のカリガラス製管玉である。端部をわずかに欠くが、ほぼ完形である。完全な円柱形ではなく、片方の端部がわずかに細い。表面には気泡が表出し、微細な凹凸が見られる。また、孔内部に付着する白色の粒子は離型剤とみられ、鋳型製作の可能性がある。

（2）ガラス小玉（第38図、図版6・26）

通番73の3点は、ソーダ石灰ガラス製（植物灰タイプ、高アルミナタイプ）・包み巻き法による製作と推定される。包み巻き法は、大形のガラス玉に見られる製作技法で、熱した素材の中心に芯棒を立て、両側から包むように成形する。片側の端部には成形に伴う皺が残る。通番73は直径1.1cmと出土したガラス玉の中では比較的大形で、（1）の端部には皺も観察できる。

また、東京国立博物館所蔵品に同種の小玉1点がある（第49図4）。

通番74の8点はソーダ石灰ガラス製（植物灰タイプ、高アルミナタイプ）・連珠法による製作である。紺色透明の7点はコバルト着色、淡青色不透明の1点は銅着色である。連珠法は、管状に成形したガラスに可塑性があるうちにくびれを入れ、分割する技法である。紺色の一群は表面にらせん状の気泡が残り、巻き付け方により製作したガラス管を使用したことがわかる。また、分割前の未成品（2）が残るほか、製品でも分割前のくびれの形状を留めるものが多く、分割後に再加熱して端部を整形する処理は行われていないようである。

なお、同種と考えられる扁平な小玉1点（第48図6）が東京大学総合研究博物館に所蔵される。

通番75の33点は、ソーダ石灰ガラス製（植物灰タイプ、高アルミナタイプ、ナトロン主体タイプ）・引き伸ばし法による製作である。大部分はコバルト着色の紺色透明の色調だが、色ムラが大きい。銅とマンガンで複合的に着色された濃青色透明のものも1点ある（27）。表面には、引き伸ばし法の特徴である孔に沿って伸びた気泡が良好に観察できる。なお、引き伸ばし法（管切り法）により製作された小玉は、分割後の再加熱により端部が丸みを帯びる。ところが、当資料は端部が直線的になっており、使用に伴う研磨によるものと想定されている。

通番76の9点はソーダ石灰ガラス製（高アルミナタイプ）・変則的な引き伸ばし法による製作である。通番75と同じ引き伸ばし法で製作されるが、片側の端部のみ平坦になるなどの特徴から、差異が認められるとする。着色はコバルトによるもので、紺色透明を呈する。

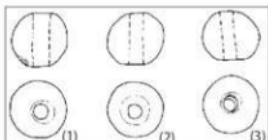
通番77の8点はカリガラス製・引き伸ばし法による製作である。全てコバルトにより紺色透明に着色される。

通番78は『県報告』で「粟玉」として報告された、直径5mm以下の小形の小玉17点である。ソーダ石灰ガラス製（植物灰タイプ）15点とカリガラス製2点があり、いずれも引き伸ばし法による製作である。コバルト着色により紺色透明を呈する。

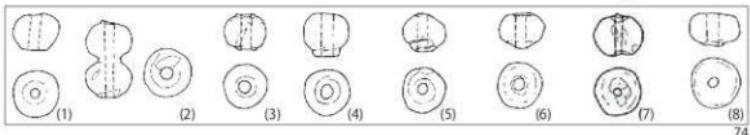
また、やや大形の小玉1点（第38図z）は、自然科学分析によりカリ鉛ガラス製・巻き付け法による製作であることが判明した。日本列島におけるカリ鉛ガラス製の玉の流通は、12世紀以降と考えられており、年代に大きな齟齬が生じる。従って、この小玉1点は混入品として扱うこととした。



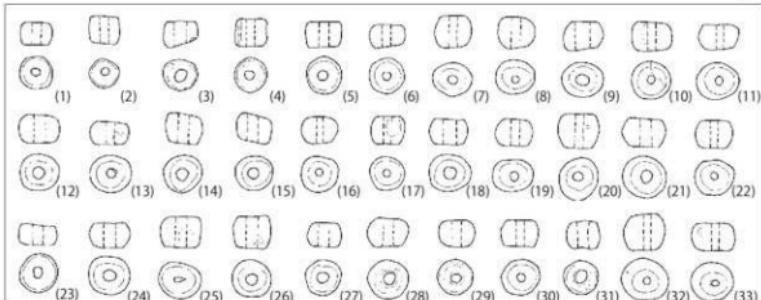
72



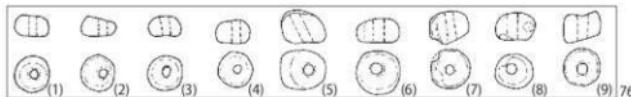
73



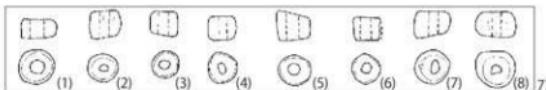
74



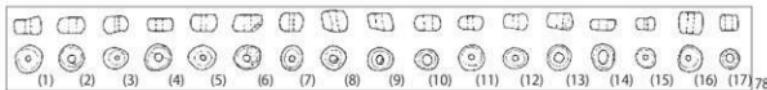
75



76



77



78

72 ガラス管玉（カリガラス）

73～78 ガラス小玉

73（ソーダ石灰ガラス・包み巻き法）

74（ソーダ石灰ガラス・連珠法）

75（ソーダ石灰ガラス・引き伸ばし法）

76（ソーダ石灰ガラス・変則的な引き伸ばし法）

77（カリガラス・引き伸ばし法）

78（1～15）（ソーダ石灰ガラス・引き伸ばし法）

78（16・17）（カリガラス・引き伸ばし法）



79 ガラス小玉（カリ船ガラス・巻き付け法）



第38図 ガラス玉実測図

このほかに、材質や着色剤などは不明だが、東京国立博物館所蔵の小玉1点がある（第49図5）。『県報告』には藍色・やや不透明と記載され、通番75の一郎と共に通する色調をもつ。 （景山このみ）

第3節 土製品

土製品には須恵器の甕と子持壺、円筒埴輪がある。第39～46図⁽²⁶⁾に掲載する資料のうち、重要考古資料に該当しないものについては、資料番号をカタカナ表記（ア～メ）として区別した。

1 須恵器

上塩治築山古墳は須恵器の出土が極めて少ない。発見時の様子を記した『古墳発見之序次』には、石室内から金属製品や玉類とともに3点以上の「皿」が出土したと記録されているが、確実な資料は東京国立博物館所蔵の杯蓋1点（第49図6）のみである。この杯蓋は大谷編年（大谷1999）のA3a類に分類され、須恵器編年出雲3期～4期初頭（陶邑TK43型式期）に位置付けられている。

また墳丘周辺のトレチ調査では、古墳の時期決定の一助となる杯などの小形品は小片ばかりで、大半を占めるのは甕や子持壺である。本項では、墳丘周辺から出土した甕と子持壺について報告する。

（1）甕（第39・40図、図版28）

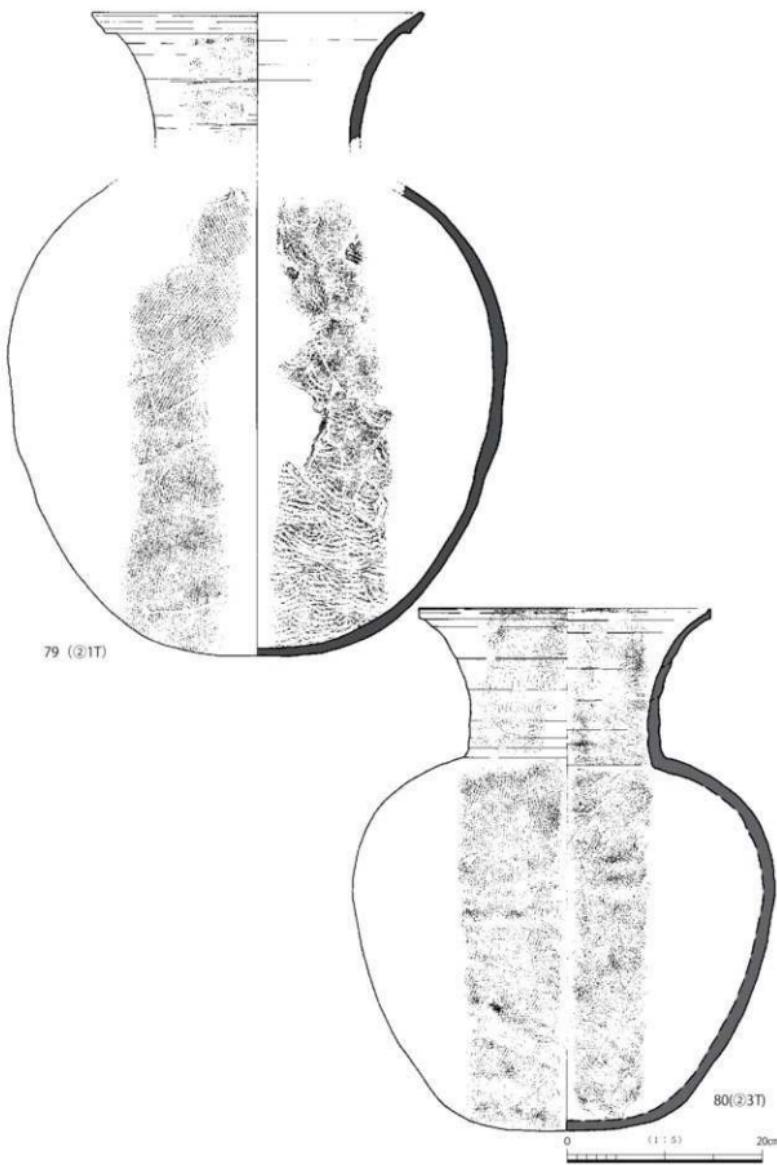
甕は墳丘南側のトレチ（2次1T・3T・4T・5T・7T）から出土した。数量は少ないが第39図の2点や第40図のように、ほぼ全形を復元できるほど破片がまとまりをもって出土したものもある。図化できた資料は6点である。このうち通番79・80はタタキを施した球形の胴部に外反して立ち上がる長い口縁がつく。肩部の張りや口縁端部の作りに差異が認められ、特に口縁部は、端部外面が肥厚するもの（通番79）と、端部を上方に立ち上げるもの（通番80）がある。また頸部は、縦方向のカキメを施すもの（通番79）、波状文2段、刺突文1段を施すもの（通番80、第40図ア）がある。

口縁部が短いものには第40図ウがある。また、口縁部、胴部の形状は不明であるが、頸部に突帶状の高まりが巡る同図イのような資料も見られる。

（2）子持壺（第41・42図、図版28・29）

子持壺は、ほぼ全形が復元できた4点に加え、50点弱の破片が出土している。墳丘南西側（つまり石室開口方向）に設けたトレチ（2次3T・6T・7T）からの出土が多く、墳丘北側（2次8T、3次2T）からもわずかに出土する。第3章第1節でも触れたように、円頭埴輪と子持壺は墳丘のあらゆる方位から出土が確認されており、墳丘を囲む配置が想定される。なお、破片の形状や胎土、焼成具合等から、少なくとも25～30個体の子持壺があったと推測する。以下、比較的良好に遺存する20点について図化し、特徴を把握していく。

全形のわかる個体（第41図）ないし親壺～脚部接合部が残る個体（第42図ス、セ）は、底部のない親壺に長い脚部が付く柳浦分類の有脚IV類（柳浦1993）に該当する。このタイプは出雲西部を中心に山陰地方に展開する「出雲型子持壺」と称されている。ここでは、子持壺を構成する諸要素の様相を把握するため、部位ごとの特徴を整理する。

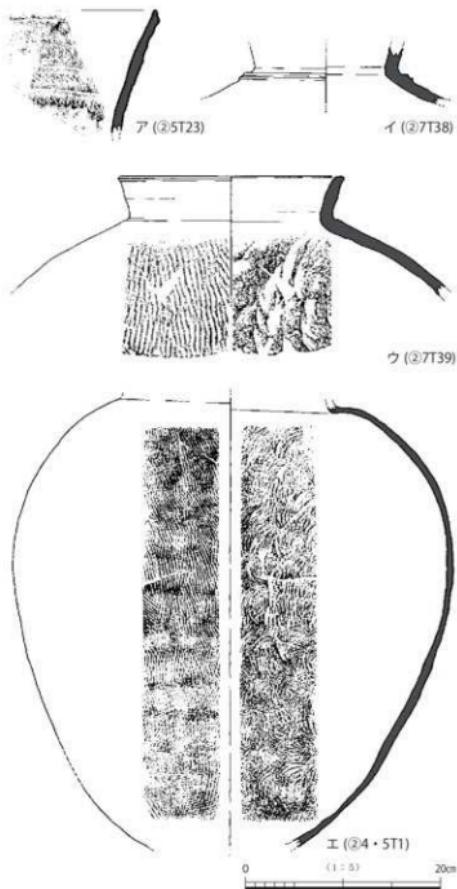


第39図 瓦実測図(1)

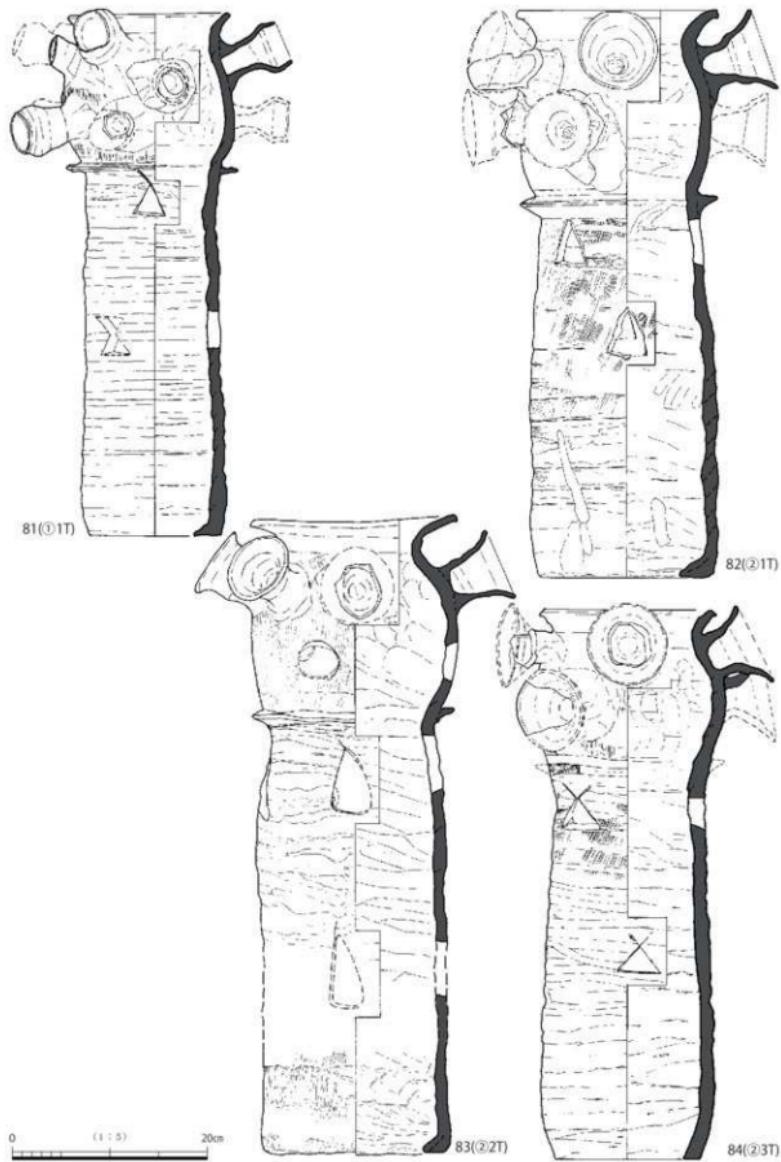
まず、共通してみられる特徴として、親壺の口縁部が短く外反する点と、脚部との接合部に鉗状の突帯を巡らせる点がある。胸部は、最大径が上段（肩部付近）、中段（半ば）、下段（底部付近）にくるものに分けられる。上段は2点（第42図カ・シ）、下段1点（第41図通番81）に対し、中段は6点があり（第41図通番82～84、第42図オ・ス・セ）、球形に近い胸部形態をもつ個体が多いことがわかる。胸部に透孔を穿つのは第41図通番83と第42図シのみで、いずれも円形に復元される。また胸部調整は外面にタタキ、タテハケ、ヨコナデが混在し、内面は無文の當て具痕を残すものや、オサエや粗いヨコナデで調整するものがある。

次に子壺は、親壺の上下段につくものの（第41図通番81・82・84）と上段のみにつくもの（第41図通番83、第42図オ・カ・シ）があり、特に前者は、山陰地方でも他に例のない配置である。子壺の接合については、親壺に底部のない子壺を貼り付け、底部を穿孔しない柳浦分類d手法が主体である。加えて、第42図オ・シのように、底部のある子壺を貼りつけ穿孔しない柳浦分類c手法もわずかに存在する。子壺の口縁部形態は、無文でラッパ状に開き、屈折部の稜線が不明瞭なものがほとんどだが、1個体のみ、口縁部がすぼむ特殊な形狀のものがある（第41図通番81）。

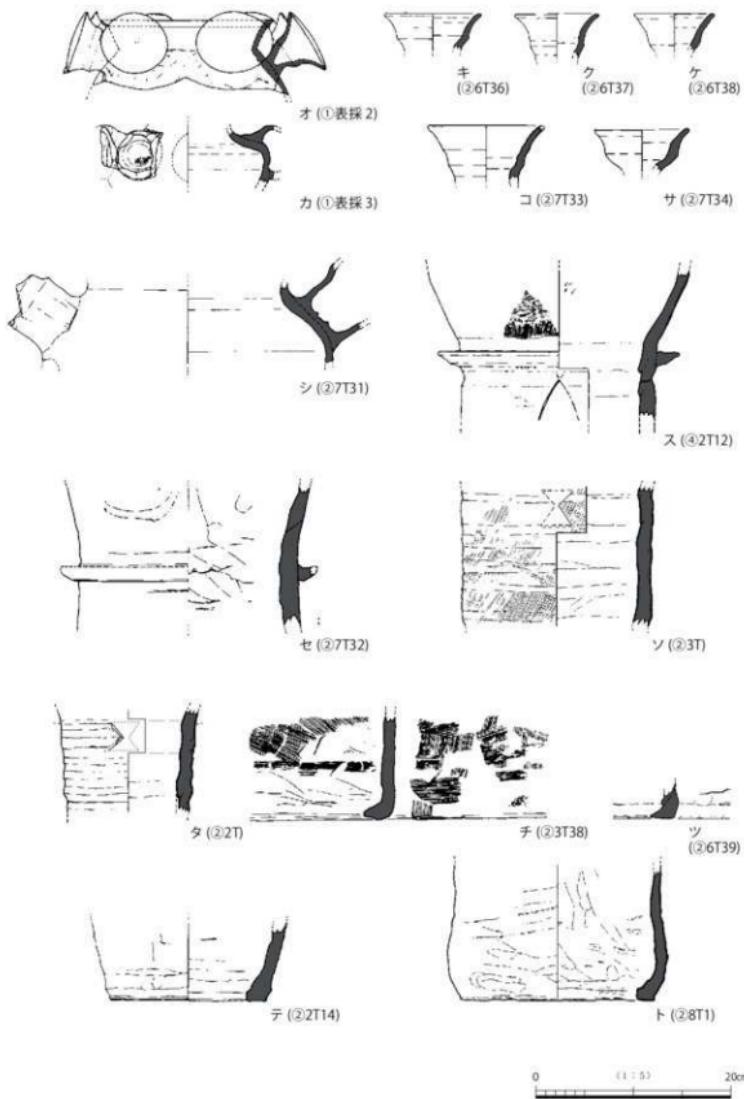
脚部は膨らみの少ない円筒形で、上・中段に三角形を基調とした透孔があく。また、脚端部はすぼまり、内側に肥厚するのが特徴で、外面にケズリ調整を加えるもの（第41図通番81・82・83、第42図チ・ツ）と、内外面にケズリ調整を施すもの（第41図通番84、第42図テ・ト）がある。脚部の調整は、主に上半にナナメ方向のハケメと粗いヨコナデを施し、下半に粗いヨコナデを密に施している。



第40図 壺実測図(2)



第41図 子持壺実測図(1)



第42図 子持壺実測図(2)

以上の特徴は、池淵分類のC1型⁽²⁷⁾と共に多くのものが、池淵も上塩治築山古墳の一部の資料をC1型として捉えている(池淵2004)。しかし、親壺に胴部の透孔が必ずしも伴わない点や、子壺数、子壺接合手法など、C1型には見られない特徴もあり、山陰全域を見ても類例のない子壺の取り付け方や脚端部の様相については包括的に検討する必要がある。第7章第3節では、出雲西部の子持壺の様相を整理し、上塩治築山古墳の子持壺について検討を加えた。

(景山このみ)

2 円筒埴輪ほか

(1) 円筒埴輪(第43~46図、図版28・30~32)

円筒埴輪はこれまでの5次にわたるトレンチ調査で出土したものがほとんどだが、わずかに採集品もある(第44図附48)。第43~46図には、口縁高や胴部高、基底部高がわかるものと特殊なものとを抽出し24点掲載した。

段数

第43図通番85と86は2条3段、第43図87・附47、第44図88・附48~50、第46図51は3条4段で、これ以上の段数をもつものは確認されない。前者をI類、後者をII類と呼ぶ⁽²⁸⁾。上塩治築山古墳の円筒埴輪はこれら2種で構成される。I類の通番85は器高47.7cm、口径27.9cm、通番86は器高41.6cm、口径26.9cmを測る。II類の通番87は器高54.2cm、口径30.3cm、通番88は器高52.0cm、口径32.4cmを測り、これら4個体がほぼ完形に近い。胴部径が30cmを超える附51~へ(第46図)などもある。これまで報告されていた円筒埴輪の諸属性の特徴をそれぞれ第5~7表に示した。それらをまとめたのが第4表である。

未掲載を含めた3,172片(総重量274kg)のうち、確認できたI類は4点、II類は27点(可能性の

第4表 上塩治築山古墳の円筒埴輪の特徴と分類

項目		分類	
①突帯と段の数	I (4)・・・2条3段。	II (27)・・・3条4段	2次調整あり (61)
②胴部の外面調整	A (12)・・・ヨコハケ (工具幅は突帯間の幅)	B (3)・・・ヨコヘナナメハケ (工具幅は狭い)	C (45)・・・ナナメハケ (工具幅は狭い)
③基底部のハケメ調整 (タタキの後の調整)	D (1)・・・指によるヨコナデ	E・・・1次調整の	タテハケメ (15)
確認できた種類	ほぼ完形 (7種類確認)	a (6)・・・ある。	β (58)・・・なし
	基底部がないもの	IA β (1), IC β (2), II A β (1), II B β (1), II C α (1),	II C β (5), II E β (1)
④口縁部の外面調整		IA (1), IC (2), II A (4), II B (1), II C (15), II E (6)	2次調整ナナメハケ (51)
⑤口縁端部の調整			ハケメ後、内外面および上部をヨコナデするものが多い
⑥突帯の突出方向	上 (40), 下 (20)。	B・C・E それぞれに上下どちらも存在する。	Aは下のみ確認。
⑦基底部のカット調整	上はC (28), 下はA (10) が主体。	なし	
⑧透孔の形と配置		円形・2方向	

○の数字は確認点数、太字は主体をなす特徴

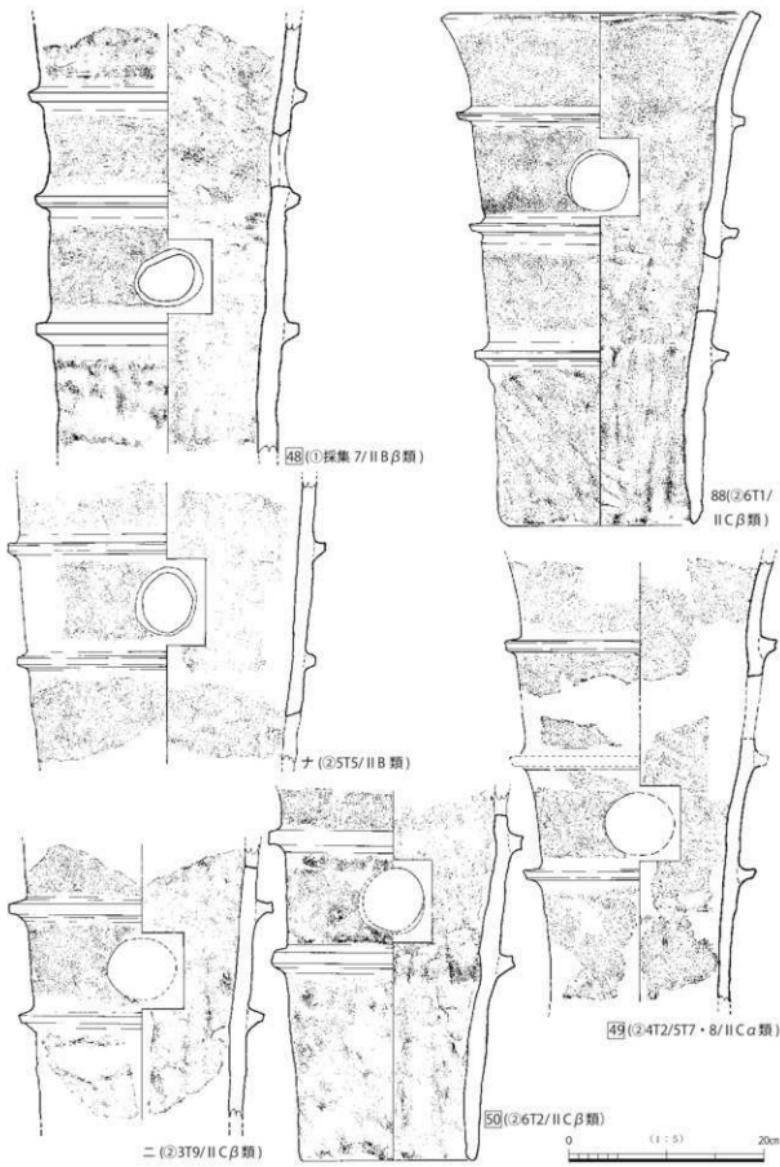
あるもの4点を含む)であり、約87%を占めて主体をなすのはⅡ類である。

法量

各部位の高さを示しておく⁽²⁹⁾。Ⅰ類の口縁部高は12.7~13.8cm、胴部高(突帯間隔高)は13.8~14.2cm、基底部高は15.1~19.8cmを測り、口縁部高<胴部高<基底部高となる。Ⅱ類の口縁部



第43図 円筒埴輪実測図(1)



第44図 円筒埴輪実測図(2)

高は 10.8 ~ 13.3cm、胴部高は上が 10.0 ~ 11.7cm、下が 11.6 ~ 16.6cm と下が高い。基底部高は 16.8 ~ 22.6cm を測る。II類は口縁部高 > 胴部上高 > 胴部下高 < 基底部高となる。全体の基底部高は、15.1 ~ 25.2cm の範囲にあり、そのうち 15 ~ 20cm のものが約 83% を占めて主体をなす。基底部高が 20cm を超えるものは大形品と推定でき、それは段数の多い II類であろう。

口縁部外面調整

器面には部位ごとに異なる調整が施されている。口縁部には、ナナメハケの 2 次調整が施され（通番 85 ~ 88、附 47・48、ナ・ヒ・フ）、その後、口縁端部をヨコナデするものが多い。

胴部外面調整

胴部には、ヨコハケ（通番 85・87、附 47）、ヨコハケやナナメハケ（附 48、ナ）、ナナメハケ（通番 86・88、附 49・50、ニ～フ）、指によるヨコナデ（ミ）の 2 次調整が施されるものと、1 次調整のタテハケメがみえて、2 次調整が施されないもの（附 51・ヘ・ホ）がある。ヨコハケを A 類、ヨコハケやナナメハケを B 類、ナナメハケを C 類、ヨコナデを D 類、2 次調整を施されず 1 次調整のタテハケメが確認できるものを E 類と呼ぶ。A ~ C の 2 次調整が施されるものが 61 点・約 81% を占め主体をなす。これらのうち、C 類が約 59% を占める。

基底部調整の分類

基底部は円柱状工具によりタタキが施され、その後の調整は施されない β 類が主体をなす。タタキ調整の後ナナメハケが施される α 類が少しある（附 49・52）。端部をカットしたものはない。

突帯

突帯の断面形は M 字形や台形をなし、指ナデにより上端が突出するものと、下端が突出するものがある。前者は本体を正位で、後者は逆位（倒立させた状態）で突帯が貼り付けられたことを示す。また、突帯は高さ 1.0 ~ 2.1cm と高く、約 78% が 1.5cm 以上もある。また、高い突帯の中には、突帯の下面が 2 段となるものがある（ニ・ヌ）。これは、「段状突帯」と呼ばれ、出雲や伯耆西部の円筒埴輪の一つの特徴とされる（田中 2017）。なお、通番 85 には突帯の剥離面に割り付け時の沈線が残る。

透孔

胴部には円形の透孔があり、I 類には 2 個、II 類には 2 段の胴部にそれぞれ 2 個ある。中には面取りされたものもある（附 51・ナ・ホ）。

その他

色調は、赤橙色がほとんどで、わずかに赤褐色のもの（通番 88）がある。また、黒色物質が付着しているものがある（附 51）が、どのように付着したかは不明である。

円筒埴輪の分類

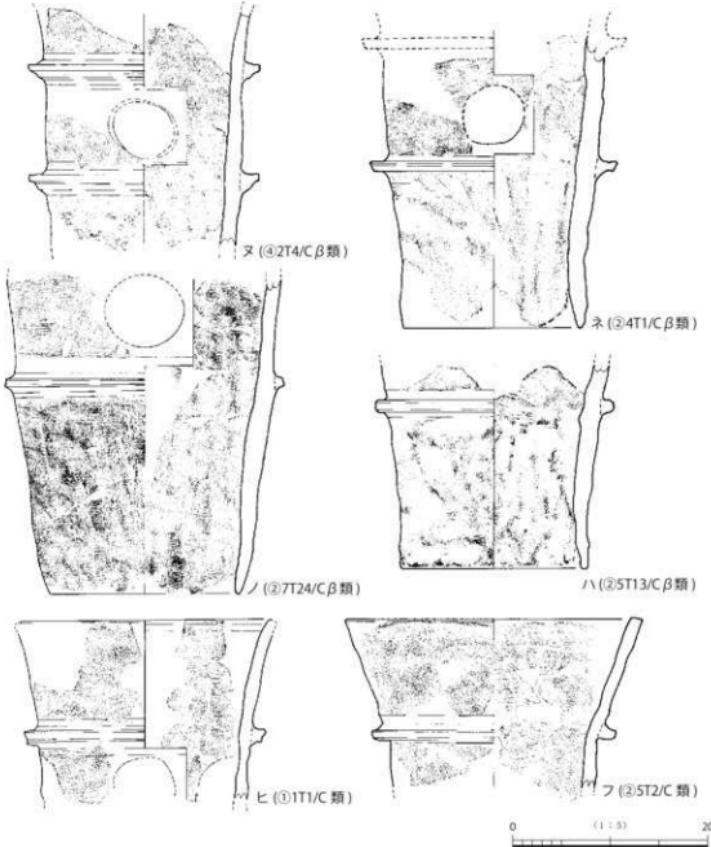
以上の円筒埴輪は、突帯の条数と胴部・基底部調整から次の 7 種類に分類できる。
 ① I A β 類（1 点）：通番 85、
 ② I C β 類（2 点）：通番 86、
 ③ II A β 類（1 点）：通番 87、
 ④ II B β 類（1 点）：附 48、
 ⑤ II C α 類（1 点）：附 49、
 ⑥ II C β 類（5 点）：通番 88・ニ・附 50、
 ⑦ II E β 類（1 点）：附 51、である。基底部が欠損した資料の中では II C 類が 15 点と最も多い。これらのことから、上塙治築山古墳の円筒埴輪は、赤橙色をした II C β 類（3 条 4 段で胴部 2 次調整ナナメハケ、基底部調整なし）

が主体をなすと推定できる。

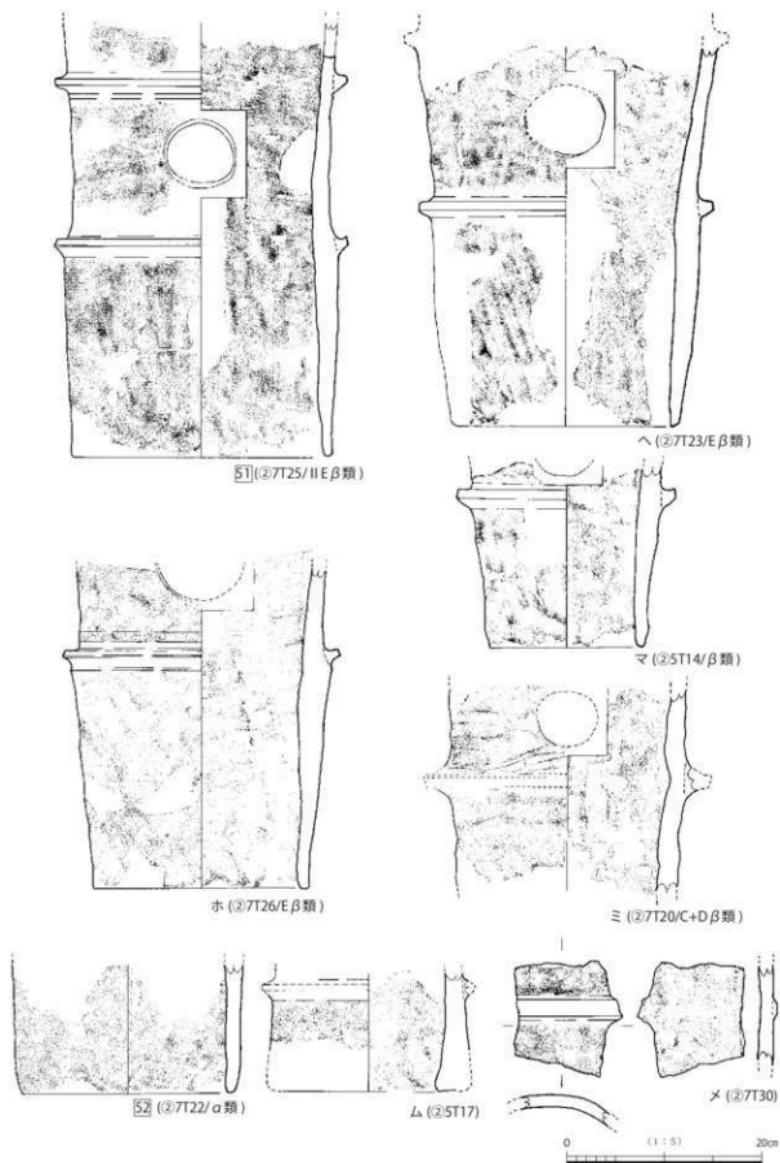
出雲平野では、上塙治築山古墳の他に今市大念寺古墳、天神山古墳、妙蓮寺山古墳でもまとまって円筒埴輪が出土している。当古墳の円筒埴輪の特徴と時期については、第7章第4節で詳述する。

(2) 形象埴輪(第46図)

ムとメは形象埴輪の可能性がある破片である。ムは基底部片で、タタキが施されず、かつ器壁が厚い。また、突帯のめぐる位置が下端から11cmと低い。上塙治築山古墳の基底部の高さは、15～25cmのものばかりで、これよりも低くなるものは他はない。メは高さ0.4cmの低い突帯が巡る。上塙治築山古墳の突帯の高さは1.0～2.1cmと高く、このように低く扁平なものはない。また、胴部の横断面形は梢円形をしている。これら2点は小片であるが、形象埴輪の可能性が大きい。



第45図 円筒埴輪実測図(3)



第46図 円筒埴輪実測図 (4)

第5表 上塙治築山古墳の円筒埴輪の属性(1)

出土位置 報告書番号	部位	段	胸部 調整	基底部 調整	透孔の 面取	突出 突	突孔の二 重ナデ	口縁 部高	单位(cm)				本書掲載 番号
									胸部 (上)	胸部高 (下)	胸部高 基底部	突孔 高	
①1T1	口・?		C			上		11.4				1.6	二
①1T2	口					上						1.5	
①1T3	口・?		E			上						1.7	
①1T4	口・2	I				上		13.8				1.9	
①2T5	3・2	II	C			上	○					1.8	
①1T6			C			上	○					1.8	
①表探7	口・3・2・ 基	II	B	β					10.8	13.2		1.3~ 1.6	附48
①1T8	基			β									
①1T9	基			β									
①1T10	基			β									
②1T1	口・3・2・ 基	II	A	β		下		13.3	10	13.8	16.8	1.5~ 2.0	通番87
②1T2	口・2・基	I	A	β		下		12.7	14.2			1.5~ 2.0	通番85
②1T3	口												
②2T1	口												
②2T2	口												
②2T3	口												
②2T4	口												
②2T5	口												
②2T6	口												
②2T7	口												
②2T8	3・2?	II?										1.3	
②2T9			A			下						1.8	
②2T10	基			β									
②2T11	基			β									
②2T12	基			β									
②2T13	基			β									
②3T1	口・2・基	I	C	β		上		13.8	13.4			1.5~ 1.7	通番86
②3T2	口												
②3T3	口												
②3T4	口												
②3T5	口												
②3T6	口												
②3T7	口												
②3T8	口												
②3T9	3・2・基	II	C	β		上				11.6		1.7~1.9	二
②3T10	3・2	II	C			上						2.1	
②3T11	3・2	II	C			上	○					1.8	
②3T12	3・2	II	C			上	○					1.7	
②3T13	口・?		A			下						1.5	
②3T14			C			上	○					2.0	
②3T15	口・?		A			下						1.7	
②3T16	口・?		C			上	○					1.6	
②3T17												1.8	
②3T18	3・2	II	E									1.6	
②3T19	3・2	II	A			下	○					1.9	
②3T20			C			上	○					1.7	
②3T21	2・基		C	β								1.3	
②3T22			C										
②3T23			A									1.5	
②3T24	口・?		C			上	○					2.1	
②3T25	2・基		C	β		上	○					1.8	
②3T26	2・基		C	β								1.2	
②3T27	2・基		C	β		上	○					1.8	

※報告書番号は註(26)参照。部位欄の略号は「基」基底部、「2」胸部2段目、「3」胸部3段目、「口」口縁部を示す。

第6表 上塙冶築山古墳の円筒埴輪の属性（2）

単位(cm)

出土位置 報告書番号	部位	段	胴部 調整	基底部 調整	透孔の 面取	突帯の 突出	突帯の二 重ナギ	口縁 部高	胴部 高 (上)	胴部高 (下)	基底部 高	突帯高	本書記載 番号
②3 T 2 8		A				下						1.9	
②3 T 2 9	基			β									
②3 T 3 0	基			β									
②3 T 3 1	基			β									
②3 T 3 2	基			β									
②3 T 3 3	基			β									
②3 T 3 4	基			β									
②3 T 3 5	基			β									
②3 T 3 6	基			α									
②4 T 1	2・基	C	β			上	○				17.2	2.0	
②4 T 2	3・2・基	II	C	β		上	○			11.8	1.9	附49	
②4 T 3	口												
②4 T 4	口												
②4 T 5	口												
②4 T 6	口												
②4 T 7	口												
②4 T 8	口												
②4 T 9	3・2	II	A			下					1.4		
②4 T 1 0	基			α									
②4 T 1 1	基			β									
②5 T 1	口・3・2	II	A			下		12.9	10.2		2.0	附47	
②5 T 2	口・?		C			上		10.6			1.5	フ	
②5 T 3	口												
②5 T 4	口												
②5 T 5	口・3・2	II	C		○	上			11.7		1.1~1.2	ナ	
②5 T 6	3・2	II	E			上	○				1.5		
②5 T 7	基・2	II?	C	a		上	○				1.5		
②5 T 8	口・?	II?	C			上	○				1.6	附49	
②5 T 9・11	口・?		B		○	上	○				1.4~1.5		
②5 T 1 0	口・?		C			下					1.6		
②5 T 1 2							○				1.3		
②5 T 1 3	2・基		E?	β			○				17.4	1.2	ハ
②5 T 1 4	2・基		E?	β		下					16.5	1.4	
②5 T 1 5	基			β									
②5 T 1 6	基			β									
②5 T 1 7	基										(11)	ム	
②6 T 1	口・3・2・基	II	C	β		上		10.8	11.6	12.6	17.7	1.4~1.8	通番88
②6 T 2	3・2・基	II	C	β						12.4	19.8	1.5~1.7	附50
②6 T 3	口												
②6 T 4	口												
②6 T 5	口												
②6 T 6	口												
②6 T 7・8	口												
②6 T 9	口												
②6 T 1 0	口												
②6 T 1 1	口												
②6 T 1 2	口												
②6 T 1 3	口												
②6 T 1 4	口・?		B			下					1.9		
②6 T 1 5	口・?					上	○				1.8		
②6 T 1 6	3・2	II	C			上	○				1.6		
②6 T 1 7			C			上	○				1.7		
②6 T 1 8													
②6 T 1 9	2・3	II	E								1.4		
②6 T 2 0	2・基		E	β							1.5		
②6 T 2 1	2・基		E?	β		上	○				1.8		
②6 T 2 2						上	○				2.0		
②6 T 2 3	2・基			β							1.8		
②6 T 2 4	口・?		C			下					1.8		

第7表 上塗冶築山古墳の円筒埴輪の属性(3)

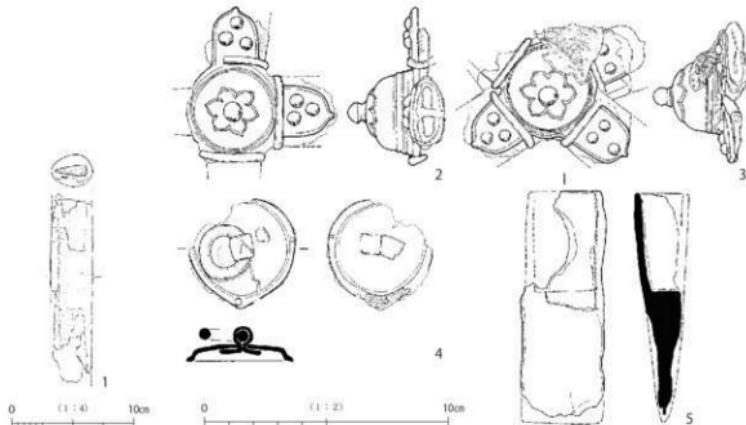
出土位置 報告書番号	部位	段	胴部 調整	基底部 調整	透孔の 面取	突帶の 突出	突帶の 帯ナギ	口縁 部高	軸部高 (上)	軸部高 (下)	基底部 高	単位(cm) 参考値 番号	
												1.5	
②6T25	口・?		C		○	上	○						
②6T26			C										
②6T27													
②6T28					○								
②6T29・30	2・基		C	β		上	○					1.8	
②6T31	基			β									
②6T32	基			β									
②6T33	基			β									
②6T34	基			β									
②6T35	基			α									
②7T1	口												
②7T2	口												
②7T3	口												
②7T4	口												
②7T5	口												
②7T6	口												
②7T7	3・2	II	C			下			(12.4)		1.5		
②7T8	口												
②7T9				A							1.8		
②7T10				E							1.6		
②7T11		II?	E										
②7T12			E?		○						1.3		
②7T13	3・2	II	C		○	下					1.6		
②7T14			E		○						1.3		
②7T15	2・基			α		上					1.5		
②7T16			C			上					1.2		
②7T17			C								1.5		
②7T18	2・基		C	β							1.2		
②7T19			C		○	上					1.9		
②7T20	2・基		C+D	β			○					三	
②7T21	2・基		C	β							1.8		
②7T22	基			α		上						附52	
②7T23	2・基		C	β		下			(17.3)	23.3	1.5	ヘ	
②7T24	2・基		C	β		下				22.2	1.0		
②7T25	3・2・基	II	E	β	○	上・下			16.6	22.6	1.3~1.4	附51	
②7T26	2・基		C	β	○	下				25.2	1.4	ホ	
②7T27	基			β									
②7T28	基			β									
②7T29	基			β									
②7T30			E								0.4	メ	
④2T1	口												
④2T2	口												
④2T3	口												
④2T4	口・2・基	I	C	β		上		14			1.7~1.9	ヌ	
④2T5	3・2	II	E			下					1.7		
④2T6	口・?		AかB			上					1.8		
④2T7	3・2	II	C			上					2.1		
④2T8	2・基			β		下					1.9		
④2T9	基			β									
④2T10	基			β									
④2T11	基			β									

*報告書番号は註(26)参照。部位欄の略号は「基」基底部、「2」胴部2段目、「3」胴部3段目、「口」口縁部を示す。

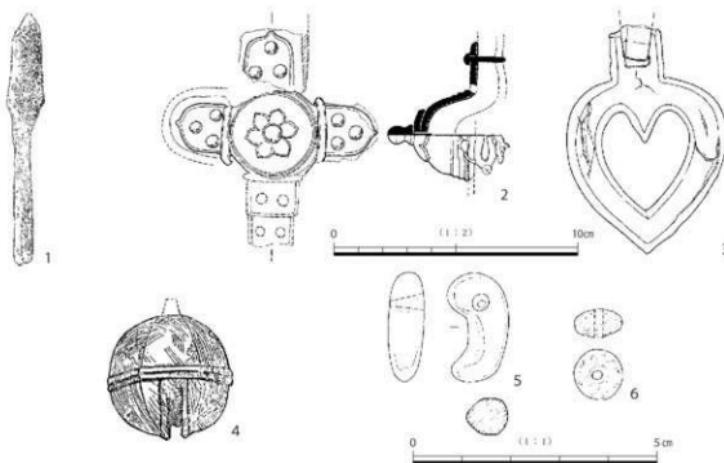
第4節 その他の出土品

出雲市以外の他機関所蔵品については、今回検討することができなかつたが、出土品の評価において欠かせないことはいうまでもない。第47～50図は、『県報告』の掲載された他機関所蔵品の図面を転載した。また、第50図3は出雲市旧蔵の瑪瑙勾玉である。これは『県報告』刊行後、貸し出し中に行方不明となった資料である。今後、このようなことが起きないことを願う。

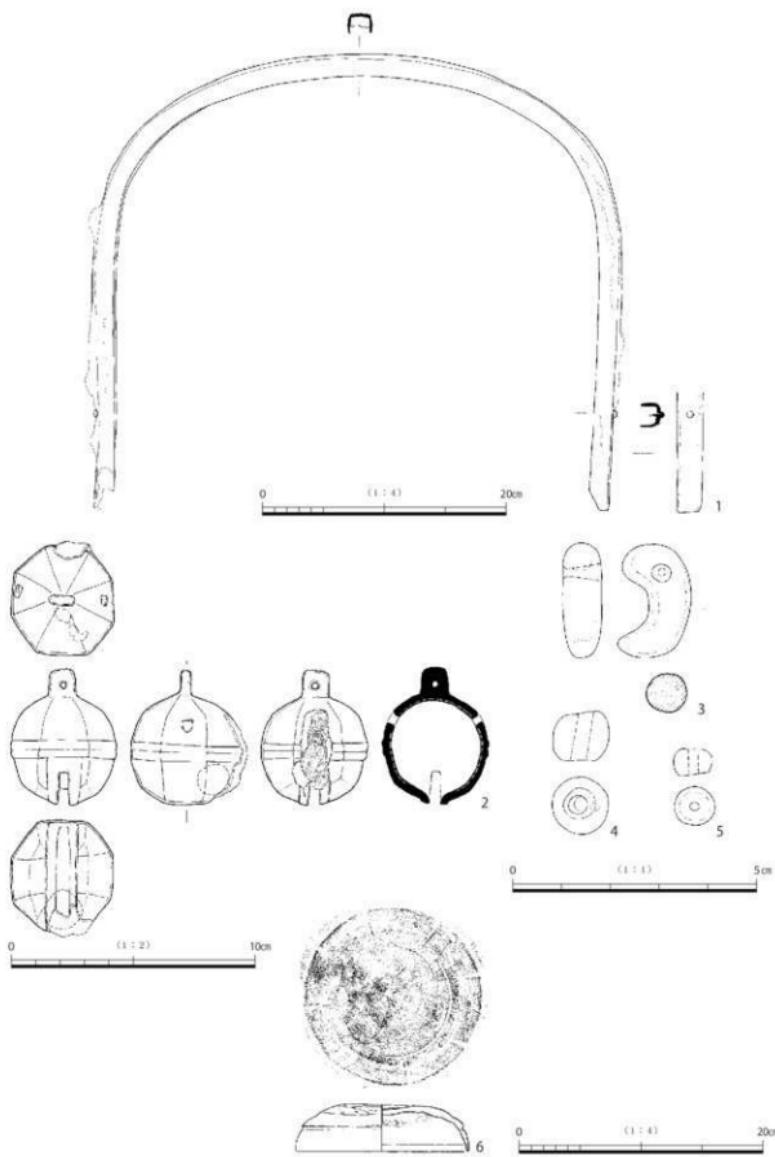
(坂本豊治)



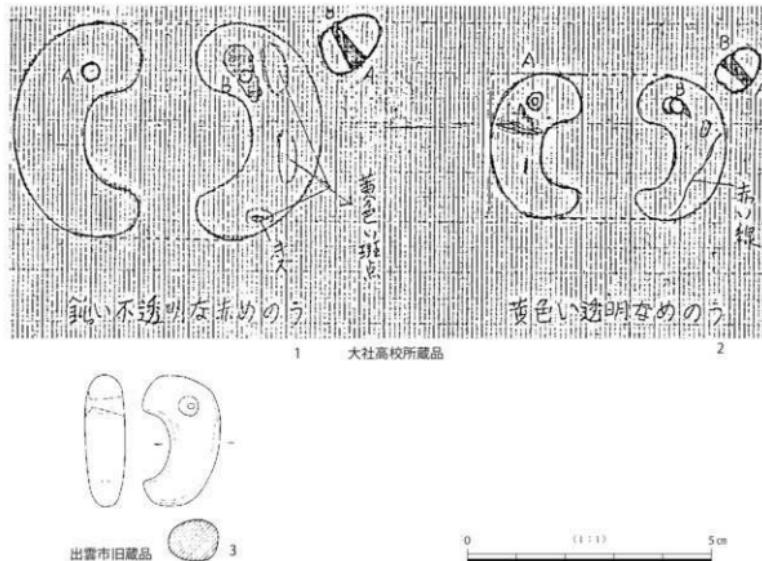
第47図 京都大学総合博物館所蔵品実測図



第48図 東京大学総合研究博物館所蔵品実測図



第49図 東京国立博物館所蔵品実測図



第50図 所在不明勾玉実測図

註

- (1) 金銅冠の「左右」を区別する場合、着装した人の左右をいう。
- (2) 破片(6)裏の左端と推定する辺は、端面がやや荒れており残っていると断定することは難しい。ただ、端面にそって緑青が確認でき、これは早くからそこに端面があったため生じたと推測し、端面が残っていると判断した。
- (3) 似た象嵌文様は島根県奥山遺跡B-II号横穴墓、香川県王墓山古墳、静岡県字洞ヶ谷横穴墓、奈良県土塙古墳・新沢327号墳などの6世紀前半～末の大刀にみられる（西山2003）。
- (4)『県報告』で掲載された大刀残片のうち3片は、今回の整理で大形刀子（第32回通番60）の一部であることがわかった。うち2片は本体に接合した。
- (5) 馬具の部品について「左右」を区別するときは、着装状況での馬体の左右をいう。よって、図の配置とは逆になることがある。
- (6)『県報告』では、小鉄板が重なる部分の地板が薄くなつて厚みを相殺するような理解で作図されている（81頁第44図）。だが、これだと強度が不足し破損の恐れがある。衝先を覆うキャップを別部品として銅留める鏡板（F字形や楕円形など）の場合、キャップ裏面の小鉄板と重なる部分をくぼませる例が確認できるので、上塙治策山古墳のこの轡も、同様の手法で鉄板の厚みを処理していると推測し作図した。
- (7)『県報告』では、左側の引手にも引手壺を描いているが（第44回2），環の断面形が右側とした断片とは違い、轡残片とした引手壺と近似するので、別の轡にともなうものと考えた（第20回附24）。
- (8) 鉄緑金具を留めた鉄は、X線透過写真で左右で3本ないし4本を確認できるが、後輪と比較しておそらくは5

- 本か 6 本と推測される。
- (9) A・C・F・H の突起には 2 本、ほかは 1 本の鎖である。
- (10) この漆膜に密着して、第 21 図の a・d・e の 3箇所に革紐状痕跡が、b の部分には布の痕跡がある。また、c の部分には上辺と直交する方向に漆膜の段差がある。これらは、鞍の居木と鞍橋とを緊縛した紐とそれを通す孔の痕跡であろう。
- (11) 磲金具裏面の木質は居木端面のもので、金具との間にあら皮革や布は居木端面を覆ったものであろう。縢金具裏面の木質の木目はこれと方向が違うので、こちらは鞍橋に由来する可能性が高い。
- (12) 『県報告』第 59 図では、脚部を下方に屈折させているが、鞍の鉸具部分との接合状況から、逆に上方に折り曲げたと判断した。
また『県報告』では、増田精一の論文(増田 1965)を参考にして「鞍が居木の垂下部分に打ち込まれた」(98 頁)とするが、「垂下部分」は誤解を招きやすい表現である。福岡市元岡・桑原遺跡群の第 18 次調査では、中央谷部 SX100 (上流部黒色土、7 世紀後半期から第 3 四半期) から黒漆塗りの居木 1 点 (左側部分) が出土した。居木は、長さ 40cm、幅 15cm、厚さ 4 ~ 5cm ほどの「ハ」字のような形の板材で、両端の上面に鞍橋を受ける段差と緊縛用の孔が並ぶ。この段差の裏側には、長方形 (8 × 6cm) の彫り込みがあり、後輪側には居木端面から水平に穿たれた鞍用の孔があく。したがって、鞍が打ち込まれるのは、居木端面とこの方形の彫り込みとの間である。ほぼ滑らかに平坦な居木の裏面と、この彫り込みの側面とがなす角度は、直角ないし鈍角である。なお、『島根縣史』掲載写真からは、左側の後輪鉸具に鞍の脚部が残っていたことがわかる。だが、折り曲げ部が認められないので、現在は失われてしまった脚部と考えられる。
- (13) 兵庫鎖をともなわない三角錐形木製壺鎖の吊金具が、本体の前後に留め付けられることは、奈良県牧野古墳の木製黒漆塗り鉄装壺鎖(河上編 1987 第 61・62 図)に明瞭である(花谷 1991)。
- (14) 『県報告』では、鉸具をもう 1 点掲載しているが(第 63 図 4)、輪金の断面形が異なるのでセットとしなかった。
- (15) 『県報告』では宝珠飾りを銀装と報告したが(84 ~ 86 頁)、今回、蛍光 X 線分析と CCD カメラによる観察により、金銅装と判断した。詳細は第 6 章第 1 節参照。
- (16) 『県報告』では脚に通されている部品を「長方形の鉄板」(86 頁)とするが皮革である。また、宝珠飾り脚部は、尻繋の繋(革帶)の交差部までは延びていない。
- (17) 繋の重ね順は、脚基部での繋の湾曲やあいなどから判断して、方形脚に繋がる繋(裏面図の 0 ~ 6 時方向)がいちばん上にあり、横方向(3 ~ 9 時方向)が 3 番目、裏面図 2 ~ 8 時方向がいちばん下、だったと推定できる。
- (18) 脚と吊金具の鉸孔径が、断面矩形の鉸脚の径(対角線長)よりわずかに小さければ、摩擦で両者を仮留めすることは可能である。
- (19) 通番 35・36 では、3 条の繋が折り重なる状況がわかる。
- (20) ワッシャーの材質は鉄と推定されるが、革の可能性もある。
- (21) この状況は東京大学総合研究博物館に所蔵される四脚辻金具(第 48 図 2)と同じである。
- (22) 東京大学総合研究博物館所蔵資料にも裏面全面に漆膜が残ることが報告されている(『県報告』83 頁)。
- (23) 先述したように銀装四脚辻金具(通番 46)には、別の吊金具が残っているので、銀装心葉形杏葉は複数あった

とみてよいだろう。

(24) 小形の鉸具(附34)は、刺金に革帯が通されていることがわかる。この鉸具の特徴は、輪金と刺金とのすき間がごく狭いことである。輪金は欠損したところで屈折することがあきらかであり、刺金がT字形となる可能性は低く、また、輪金下半が矩形になってそこに絡めてあるとすると、革帯を取り付ける余地がほとんどない。となると、可能性のひとつとして考えられるのは、素環鏡板付轡の一種である。鉸具造り立間鏡板の一部ではないか、ということである。その場合、上塙治築山古墳に副葬された馬具は、3セットあることになり、鉸具とみた断片(通番附36)は鏡板の一部ともみなせるが、確証がないので可能性の指摘にとどめる。

出雲平野だけでなく島根鳥取両県で、3セットの馬具を出土した古墳は、出雲市国富中村古墳(国史跡)のみである(坂本編2012)。

(25) 上塙治築山古墳例では銚のため観察できないが、同形の大坂府野間中古墳群出土例をみると、鉸の裏側には多数のす孔が認められる。よって、鉸の部分から溶銅を流し込んだものであろう。野間中古墳群の馬具調査にあたっては、能勢町教育委員会重金誠課長のお世話になった。

(26) 第39~46図の()内には、トレーナー番号と既報告書の掲載番号を示した。第5~7表はそれらを左列に示した。①は『県報告』、②は(三原・高橋編2004)、④は(須賀編2006)を示す。

(27) 池淵分類C1型の特徴は、①親壺口縁部は段状または直口口縁、②親壺が比較的大きい、胴部の透孔、脚部接合部の外面に突帯があるが不均一、④脚部は無文で1~2区分、上・中段に透孔あり、⑤子壺は明瞭なハソウ形、⑥子壺数は5~6個、⑦子壺の接合はb手法。

類例として、松江市团原古墳・東淵寺古墳・島田池6区15号横穴墓などがある(池淵2004)。

(28) 円筒埴輪の分類は花谷浩の分類を基に行い、若干修正した(花谷2015)。

(29) 部位別の高さは、円筒埴輪の規格を考える上で有効と元鳥根県古代文化センターの田中大氏に御教示をえた。口縁部高は口縁上端から突帯上端、胴部高は突帯上端から突帯上端の間、基底部から突帯上端を測定した。これは、突帯を貼り付ける前の割り付け線が突帯上端のあたりに付けられていたことによる。

参考文献

- 池淵俊一 2004「出雲型子持壺の変遷とその背景」『考古論集—河瀬正利先生退官記念論文集—』河瀬正利先生退官記念事業会 498~516頁
- 池淵俊一 2014「出雲の子持壺集成」『松江市歴史叢書』5 松江市教育委員会 59~73頁
- 大谷晃二 1994「出雲地域の須恵器の編年と特色」『島根考古学会誌』第11集 島根考古学会 39~82頁
- 大谷晃二 1999「上塙治築山古墳出土大刀の時期と系譜」『上塙治築山古墳の研究』島根県古代文化センター 134~148頁
- 大谷晃二 2014「上塙治横穴墓群32支群出土の銀装大刀」『出雲弥生の森博物館研究紀要』第4集 出雲弥生の森博物館 1~10頁
- 片山健太郎 2016「古墳時代馬具における繋の基礎的研究」『史林』第99卷第6号 京都大学史学会 36~74頁
- 片山健太郎 2017「古墳時代馬具における繋の変化とその背景」『考古学研究』第64卷第3号 考古学研究会

85 ~ 105 頁

河上邦彦編 1987『史跡 牧野古墳』広陵町文化財調査報告第1冊 広陵町教育委員会

群馬県立歴史博物館 1990『藤ノ木古墳と東国の大古墳文化』第35回企画・特別展

坂本豊治編 2012『中村1号墳』出雲市の文化財報告15 出雲市教育委員会

島根大学法文学部山陰研究センター・島根考古学会 2016『シンポジウム出雲型石棺式石室の出現を考える』島根県松江市古天神古墳出土品再調査の中間報告

須賀照隆 2006『上塙治築山古墳の調査』『出雲市埋蔵文化財発掘調査報告書』第16集 出雲市教育委員会 1 ~ 8 頁

菅谷文則編 1975『宇陀・丹沢古墳群』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第30冊 奈良県教育委員会

高田貫太 1998『古墳副葬鉄錘の性格』『考古学研究』第45巻第1号 考古学研究会 49 ~ 70 頁

田中 大 2012『山陰地方における古墳時代後期円筒埴輪の様相』『後期埴輪の特質とその地域的展開』中国四国前方後円墳研究会 第15回研究集会

伊達宗泰・岡幸二郎編 1972『島土塚古墳』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第27冊 奈良県教育委員会

土屋隆史 2016『鉄錘』『シンポジウム 出雲型石棺式石室の出現を考える』島根大学法文学部山陰研究センター・島根考古学会 22 ~ 29 頁

中野和浩・竹中正己編 2009『島内地下式横穴墓群Ⅲ 岡元遺跡』えびの市埋蔵文化財調査報告書第50集 えびの市教育委員会

西山要一 2003『象嵌—古墳時代の金工技術(2)ー』『考古資料大観』第7巻 小学館 359 ~ 363 頁

花谷 浩 1991『鎧瓦考』『研究紀要』IX 奈良国立文化財研究所学報第49冊 奈良国立文化財研究所

花谷 浩 2015『6世後半の出雲西部の古墳』『第26回 出雲古代史研究会発表資料』出雲古代史研究会

増田精一 1965『古墳時代鞍の構造』『考古学雑誌』第50巻第4号 日本考古学会 12 ~ 20 頁

三宅博士 1986『山陰地方出土刀子に関する覚書き』『山陰考古学の諸問題』山本清先生喜寿記念論集刊行会 167 ~ 189 頁

三宅博士編 1988『島根女子短期大学移転予定地内奥山遺跡発掘調査報告書』島根県教育委員会

三原一将・高橋智也編 2004『上塙治築山古墳』出雲市教育委員会

柳浦俊一 1993『島根・鳥取県出土子持壺集成』『島根考古学会誌』第10集 島根考古学会 13 ~ 37 頁

李 恩碩 2016『繋の復元による製作技法の考察』『日韓文化財論集Ⅲ』奈良文化財研究所学報第95冊 独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所・大韓民国国立文化財研究所 129 ~ 144 頁

第5節 小結

今回の整理事業において、再検討した内容を第1～3節に詳細にまとめた。本節は『県報告』からの変更点を列記することで本章の小結とする。

金銅冠（第12図） 立飾と考えられる3片の破片が再発見された。歩搖などの破片7点も合わせて新たな図を提示した。詳細は第7章第1節参照。

金装銀耳環（第13図） 銀環と報告されていたが、今回実施した蛍光X線分析により表面で金が検出されたため、中空銀芯に鍍金したものとわかった。詳細は第6章第1節参照。

金銀装振環頭大刀（第15図） 出雲市所蔵の金銀装振環頭大刀片と京都大学総合博物館所蔵の大刀片の接合を確認した。新たに鞘尻と鞘金具の破片を図化した。

鉄鎌（第17図） 有窓方頭式鉄鎌が寄贈されたため、それを図化し掲載した。

鞍金具（第18図） 鉄板の上下に打たれた鉢の蛍光X線分析を行った結果、錫装だとわかった。

馬具（第19～30図） X線CT撮影により辻金具の鉢内部の状況がわかり、それを図化した。また、蛍光X線分析により装具の材質が科学的にも確定した。詳細は第6章第1節参照。

銅鈴（第31図） 出土位置が馬具と離れているので、馬装とは別の使用方法も想定される。馬具とは分けて報告した。

大形刀子（第32図） 大刀残片とされていたものが、大形刀子片とわかり、現存長が大きくなった。

不明金銅板（第35図） 新たに図化した。

ガラス玉（第38図） 自然科学分析の結果、ガラスの材質と製作技法から9種類に分けることができる。これらのうち、第38図zは時期が新しいことから混入品と判断した。詳細は第6章第2節参照。

土製品（第39～46図） 掲載した資料のほとんどが、『県報告』後に出土したものである。今回、再実測、採拓作業を行い図化した。その結果、上塩治築山古墳の円筒埴輪のもつ特徴が明瞭となり、出雲西部の他の古墳との比較検討が可能になった。

以上が、今回の整理事業の成果である。上塩治築山古墳の出土品の中で、特に冠や馬具類、武器・武具類などの金属製品は、遺存状態が良好で古墳時代後期後半における金工品の実態と種類を良く示すとともに、その製作技術や生産体制を考えるうえでも重要である。

この他、玉や耳環などの装身具類、須恵器子持壺や円筒埴輪などの埴丘設備は金属製品と合わせて古墳時代後期後半の葬具組成を良く示す。

上塩治築山古墳のように豊富な葬具が明らかになった古墳時代後期後半の大形古墳は、中四国地方では他に例がない。これらの事実報告をもとに、第7章で金銅冠、馬具、子持壺、円筒埴輪について詳細に検討している。

（坂本豊治）

第6節 重要考古資料目録

(平成30年3月9日 文化審議会による重要文化財指定の答申)

島根県上塩冶築山古墳出土品	(出雲市所蔵 出雲弥生の森博物館保管)
1, 金属製品	66点
1, 玉	12点
附 金属製品残欠	46点
	(以上石室出土)
1, 須恵器残欠	6点
1, 円筒埴輪	4点
附 円筒埴輪残欠	6点
	(以上墳丘出土)

(内 訳)

1, 金属製品	66点
金銅冠残欠	1点
金装銀耳環	2点
金銀装円頭大刀	1点
金銀装捩環頭大刀	1点
鉄矛身・石突	10点
鉄鏹	15点
金銀装鏡板付轡	1点
金銀装鞍金具	1点分
金銀装・銀装雲珠	2点
金銀装・銀装辻金具	12点
金銅装・銀装杏葉	7点
鉸具	2点
銅鈴	4点
大形刀子	1点
鹿角装刀子残欠	2点
鉤状鉄製品	4点
1, 玉	12点
水晶勾玉	2点
水晶算盤玉	1点
水晶丸玉	1点
瑪瑙棗玉	1点
ガラス管玉	1点
ガラス小玉	6点

附 金属製品残欠	46点
鉄刀残欠	5点
鉄矛身残欠	11点
鉄鎌残欠	6点
鞍金具残欠	1点分
轡残欠	3点
鞍金具残欠	2点
鎧金具残欠	4点
鉄具残欠	4点
鹿角装刀子残欠	5点
鉤状鉄製品残欠	2点
不明金銅板残欠	2点
不明鉄製品残欠	1点
	(以上石室出土)
1, 須恵器残欠	6点
甕残欠	2点
子持壺残欠	4点
1, 円筒埴輪	4点
附 円筒埴輪残欠	6点
	(以上墳丘出土)
	(計88点, 附52点)

1. 金属製品

66点

金銅冠残欠

1点

番号	高	幅	厚	遺存率	品質形状	出土位置	報告書番号	通番
1	[31.7] (立脚り) 6.1		0.1	80	帶状の金銅板に立脚りが付き。表に歩搖が11点残る。歩搖を含む未接合の破片7点別置き。 金銅板は8片に分割し、接点なし。未接合。 金銅板の縁に2列の列点文、その内部に列点文を格子状に施す。一部に織じ紐が残る。	小石棺内	①第26図 ③第12図	1

金装銀耳環

2点

番号	高	幅	厚	遺存率	品質形状	出土位置	報告書番号	通番
1	3.3	3.9	0.9	100	2片が接合。中空銀芯鍍金(銀光X線分析)。	玄室内	①第28図1 ③第13図	2
2	3.4	3.8	0.9	95	端部わずかに欠損。中空銀芯鍍金(銀光X線分析)。	玄室内	①第28図2 ③第13図	3

金銀装円頭大刀

1点

番号	長	幅	厚	遺存率	品質形状	出土位置	報告書番号	通番
1	114.0	7.5	6.8	100	柄から柄頭部と刀身部に分割。接点あり。未接合。その他、鞘口の貴金属1点が遊離。未接合。円頭部は銀装で、金銅製の鷹日金具が付く。柄は銀線巻き。刀身部には鞘の木質および貴金属2箇所、銀装の鞘口金具、金銅製の鋪、金銅製の八窓跨が残存。刀身部は4片を接合。刀身部柄付け附近に逆弧輪伏文の銀象嵌を施す(X線透過撮影)。	大石棺内	①第32-1図 ③第14図	4

金銀装振環頭大刀

1点

番号	長	幅	厚	遺存率	品質形状	出土位置	報告書番号	通番
1	[123.0]	8.0	5.0	90	鞘の木質が良好に残存。銀装の振環頭は残存するが、柄頭および刀身部の一部が欠損。茎から刀身部は6片に分割。未接合。刀身部には波状列点文を施した金銅製の金具、それを留めた鉤の一部が残存。その他、鞘尻部の木質2片、振環頭および柄頭の一部各1片、金銅板1点別置き。保存処理未了。亀裂あり。シリコン製の仮台に安置。なお、刀身部小片1点は京都大学総合博物館所蔵。	小石棺内	①第33図 ③第15図	5

鉄矛身・石突

10点

番号	長	幅	厚	遺存率	品質形状	出土位置	報告書番号	通番
1	(30.0)	2.7	3.1	100	矛身(袋部共)。2片接合。柄木が残存。身部断面三角形(三角椎体)。有闊。袋部断面円形。膜状の付着物あり。柄木は6.4cm残存する。昭和期採集。	玄室内	①第37図1 ③第16図	6

2	(27.5)	2.3	2.5	90	矛身（袋部共）。袋部内に柄木が残存。身部断面三角形（三角槌造）。有闊。袋部断面多角形か。袋部の一部欠損。	玄室内	①第37図2 ③第16図	7
3	(24.2)	(1.7)	1.8	90	矛身（袋部共）。袋部内に柄木が残存。身部断面三角形（三角槌造）。有闊。袋部端部が欠損。	玄室内	①第37図3 ③第16図	8
4	(19.2)	(2.5)	3.0	75	矛身（袋部共）。2片接合。袋部内に柄木が残存。身部断面三角形（三角槌造）。有闊。袋部断面多角形。袋部端に突帯が巡る。身部の剥離欠損が著しい。腰状の付着物あり。	玄室内	①第37図4 ③第16図	9
5	(15.1)	(2.0)	1.8	50	矛身。身部断面三角形（三角槌造）。袋部欠損。	玄室内	①第37図13 ③第16図	10
6	(9.7)	2.5	2.4	35	袋部欠損。柄木が残存。袋部断面多角形か。身部欠損。腰状の付着物あり。	玄室内	①第37図7 ③第16図	11
7	(11.5)	3.3	3.3	35	袋部欠損。柄木が残存。袋部断面多角形。身部欠損。	玄室内	①第37図8 ③第16図	12
8	(11.6)	2.9	2.9	40	袋部欠損。柄木が残存。袋部断面円形か。身部欠損。腰状の付着物あり。	玄室内	①第37図9 ③第16図	13
9	(12.2)	2.6	2.6	40	袋部欠損。柄木が残存。袋部断面円形か。身部欠損。腰状の付着物あり。	玄室内	①第37図10 ③第16図	14
10	(8.3)	2.7	2.9	80	石突。柄木が残存。袋部断面円形。先端欠損。腰状の付着物あり。	玄室内	①第38図21 ③第16図	15

鉄鎌

15点

番号	長	幅	厚	遺存率	品質形状	出土位置	報告書番号	通番
1	(8.7)	4.1	1.1	80	平根系有窓方頭式鎌。茎部欠損。圓部に突帯状の高まりあり。保存処理未了。昭和期採集。	玄室内	③第17図	16
2	(11.2)	2.8	1.2	90	平根系有窓三角形鎌。5片接合。切先と茎端部が欠損。圓部に突帯状の高まりあり。茎部断面は方形。樹皮巻きと矢柄の一部が残存。	玄室内	①第39図1 ③第17図	17
3	(7.0)	(2.4)	0.8	50	平根系有窓三角形鎌。鎌身の一部と茎部欠損。	玄室内	①第39図2 ③第17図	18
4	(5.4)	(3.0)	0.7	40	平根系有窓三角形鎌。4片接合。鎌身の一部と茎部欠損。	玄室内	①第39図3 ③第17図	19
5	(8.0)	2.5	1.1	80	平根系長三角形鎌。直角闊。茎部断面は方形。茎端部を欠損。	玄室内	①第39図5 ③第17図	20
6	(9.1)	(2.3)	0.8	90	平根系脚快三角形鎌。3片接合。両側とも逆刺端部を欠損。頭部断面は方形。	玄室内	①第39図6 ③第17図	21
7	19.5	4.4	3.2	100	尖根系長頸片刃鎌。12点が銛着して束になっている。鎌身闊は直角。闊および茎部欠損。	玄室内	①第40図1 1～12 ③第17図	22
8	(12.9)	1.2	0.9	75	尖根系長頸片刃鎌。鎌身闊は直角。闊および茎部欠損。	玄室内	①第40図13 ③第17図	23
9	(11.3)	1.2	0.8	70	尖根系長頸片刃鎌。鎌身闊は直角。闊および茎部欠損。	玄室内	①第40図14 ③第17図	24
10	(8.2)	1.2	0.8	50	尖根系長頸片刃鎌。鎌身闊は直角。下半欠損。	玄室内	①第40図15 ③第17図	25
11	17.2	2.7	2.0	100	尖根系長頸片刃鎌。3片接合。6点が銛着して束になっている。鎌身闊は直角。闊は棘状闊。樹皮巻きと矢柄が一部残存。	玄室内	①第40図18～23 ③第17図	26

12	(12.5)	1.2	0.8	80	尖根系長頭長三角形鐵。鐵身間は直角。間から茎部欠損。	玄室内	①第40図24 ③第17図	27
13	(13.3)	2.3	1.2	80	尖根系長頭長三角形鐵。5片接合。2点が銛着する。鐵身間は直角。身部・茎部欠損。間は棘状闊。膜状の付着物あり。	玄室内	①第40図 25・26 ③第17図	28
14	(8.2)	2.0	1.4	50	両刃反刃鐵。2片接合。鐵身部2点が銛着する。刃部に粗い布が付着。切先に木質が付着。鐵身間は片闊。下半欠損。	玄室内	①第41図 1・2 ③第17図	29
15	(5.3)	1.5	0.7	40	両刃反刃鐵。鐵身間は片闊。下半欠損。	玄室内	①第41図3 ③第17図	30

金銀装鏡板付轡

1点

番号	長	幅	厚	遺存率	品質形状	出土位置	報告書番号	通番	
1	[22.0]	23.3	9.9	90	鉄地金銀装の透十字文心葉形鏡板付轡。本体と接点のない片側の引手轡に分かれる。左側の鏡板(③第19図31左)は数片を接合。右側の鏡板(③第19図31右)は一部を接合。引手轡には革と布からなる手綱の痕跡がある。衝は二連。立開孔は方形。両方に吊金具が残る。鏡板の周辺に径7mmの銀装鏡。覆い部周辺に径4mmの銀装鏡を打つ。左側の鏡板表面に木質と革、両用金具表面に革帶が付着。右側の鏡板は辻金具(通番39)と接合し。左側の鏡板は辻金具(通番40)と組み合う。	小石棺蓋上	①第44図 1・3～5 ③第19図		31

金銀装鞍金具

1点分

番号	長	幅	厚	遺存率	品質形状	出土位置	報告書番号	通番
前輪	15.5	29.5	2.0	100	前輪の左右の礎金具と州浜金具。2片に分割。未接合。鉄鏡1片を接合。径4mmの銀装鏡を密に打つ。外面に布付着。内面に木質、漆膜、布、革が付着。なお、覆輪は東京国立博物館所蔵。	小石棺蓋上	①第56・57図 ③第21図	32
	42.0	55.0	5.5	100	後輪。左右の礎金具と州浜金具。覆輪からなる。覆輪は2片接合。両側の礎金具と州浜金具は接合。両側の靴も接合。礎金具には左右とも靴が残り、右側の靴と接合する脚部1片別離き。右側の靴は輪金の一部を欠損。左側の靴は刺金と輪金の一部を欠損。径4mmの銀装鏡を密に打つ。礎金具内面と覆輪内面に木質付着。覆輪の左右端部近くに鉛留め用の孔があく。		①第58・59図 ③第22図	

金銀装・銀装雲珠

2点

番号	高	幅	厚	遺存率	品質形状	出土位置	報告書番号	通番
1	(6.0)	12.7	0.2	95	金銀装雲珠。鉄地金剛装の鉢部に8つの脚が付く。頂部には銀装の6花弁花形座金具、その上に金剛装の宝珠飾りが付く。鉢部は側面に3条の沈線が巡り、外面には布が付着。宝珠先端部は銘化により欠損。脚は方形脚が1箇所、他の7脚は棘花弁形。頭は頭部銀装。方形脚には2箇、棘花弁形脚には各3箇を打つ。方形脚には吊金具が留められ、吊金具には杏葉の立聞が残る。この立聞は杏葉(通番50)と接合する(未接合)。責金具は鉄地銀装で、裏側は欠損している。各脚部内面に繋の革帶が良好に遺存。繋は側面に組紐を付けたもの。鉢部内面には長方形に裁断した革帶が遺存。内面全面に黒色付着物あり(塗りか)。	小石棺蓋上	①第50図 ③第25図	33
2	4.6	11.4	0.8	95	銀装雲珠。鉄地銀装の鉢部に8脚が付く。鉢部は5段の段階状、一部を欠損。脚は棘花弁形で各1箇が打たれる。頭部および責金具も鉄地銀装。頭部は5箇遺存。責金具は欠損しているものが多い。脚5箇所を接合、鉢部は数片を接合。	玄室内	①第55図1 ③第25図	34

金銀装・銀装辻金具

12点

番号	高	幅	厚	遺存率	品質形状	出土位置	報告書番号	通番
1	3.3	7.0	0.2	100	金銀装辻金具。鉄地金剛装の鉢部に6脚が付く。鉢の頂部には銀装の6花弁花形座金具、その上に銀装の宝珠飾りが付き、側面に3条の沈線が巡る。脚は方形脚が1箇所、他の5脚は棘花弁形。頭は鉄地で、頭部銀装。方形脚には2箇、棘花弁形脚には各3箇を打つ。方形脚には吊金具が留められる。吊金具は吊手部分を欠損する。責金具も鉄地銀装。脚部表面には布が顯著に残る。内面に繋の革帶が良好に遺存。繋は側面に組紐を付けたもの。	小石棺蓋上	①第52図1 ③第26図	35
2	3.4	7.5	0.2	100	銀装辻金具。鉄地金剛装の鉢部に6脚が付く。鉢の頂部には銀装の6花弁花形座金具、その上に銀装の宝珠飾りが付き、側面に3条の沈線が巡る。脚は方形脚が1箇所、他の5脚は棘花弁形。頭は鉄地で、頭部銀装。方形脚には2箇、棘花弁形脚には各3箇を打つ。方形脚には吊金具が留められる。吊金具は吊手部分を欠損する。責金具も鉄地銀装。内面に繋の革帶が良好に遺存。繋は側面に組紐を付けたもの。	小石棺蓋上	①第52図2 ③第26図	36

3	3.3	7.4	0.2	100	金銀装込金具。鉄地金剛装の鉢部に6脚が付く。鉢の頂部には銀装の6花弁花形座金具、その上に銀装の宝珠飾りが付き、側面に3条の沈線が巡る。脚は方形脚が1箇所、他の5脚は棘花弁形。鉢は鉄地で、鉢頭銀装。方形脚には2新、棘花弁形脚には各3新を打つ。方形脚には吊金具が留められる。吊金具は杏葉(通番51)と接続する(鍛着)。吊金具に接続する方形脚の基部で折損、接合。接続部分には皮革状の膜が付着し、その内部には麻状の布が遺存する。責金具も鉄地銀装。1箇所のみ一部欠損。内面に繋の革帶が良好に遺存。繋は側面に組紐を付けたもの。	小石棺蓋上	①第52図3 ③第26図	37
4	3.4	6.6	0.2	100	金銀装込金具。鉄地金剛装の鉢部に6脚が付く。鉢の頂部には銀装の6花弁花形座金具、その上に銀装の宝珠飾りが付き、側面に3条の沈線が巡る。脚は方形脚が1箇所、他の5脚は棘花弁形。鉢は鉄地で、鉢頭銀装。方形脚には2新、棘花弁形脚には各3新を打つ。方形脚には吊金具が留められる。吊金具は吊手部分を欠損する。責金具も鉄地銀装。内面に繋の革帶が良好に遺存。繋は側面に組紐を付けたもの。	小石棺蓋上	①第52図4 ③第26図	38
5	3.4	7.9	0.2	100	金銀装込金具。鉄地金剛装の鉢部に4脚が付く。鉢の頂部には銀装の6花弁花形座金具、その上に銀装の宝珠飾りが付き、側面に3条の沈線が巡る。脚は方形脚が1箇所、他の3脚は棘花弁形。棘花弁形脚の1箇所を接合。鉢は鉄地で、鉢頭銀装。方形脚には2新、棘花弁形脚には各3新を打つ。方形脚には吊金具が留められる。吊金具は吊手部分を欠損するが、樽の鏡板(通番31、③第19図31右)と接合する。責金具も鉄地銀装。内面に繋の革帶が良好に遺存。繋は側面に組紐を付けたもの。	小石棺蓋上	①第44図4 ③第19図	39
6	(2.6)	(7.0)	0.2	85	金銀装込金具。鉄地金剛装の鉢部に4脚が付く。鉢の頂部には銀装の6花弁花形座金具、その上に宝珠飾りが付き、側面に3条の沈線が巡る。宝珠飾りは欠損。脚は方形脚が1箇所、他の3脚は棘花弁形。棘花弁形脚の1箇所を欠き、1箇所を接合。鉢は鉄地で、鉢頭銀装。方形脚には2新、棘花弁形脚には各3新を打つ。方形脚には吊金具が留められ、吊金具下半を欠損する。樽の鏡板(通番31、③第19図31左)と組み合う(接点なし)。責金具も鉄地銀装。内面に繋の革帶が良好に遺存。	小石棺蓋上	①第44図5 ③第19図	40

7	3.2	7.9	0.2	100	金鉄装辻金具。鉄地金銅装の鉢部に4脚が付く。鉢の頂部には銀装の6花弁花形座金具、その上に銀装の宝珠飾りが付き、側面に3条の沈線が巡る。脚は方形脚が1箇所、他の3脚は棘花弁形。頭は鉄地で、頭頭銀装。方形脚には2鉤、棘花弁形脚には各3鉤を打つ。方形脚には吊金具が留められる。吊金具は杏葉(通番52)と接合する(未接合)。資金具も鉄地銀装。内面には繋の革帯が良好に遺存。繋は側面に組紐を付けたもの。	小石棺蓋上	①第53図6 ③第27図	41
8	(2.3)	(7.1)	0.2	75	金鉄装辻金具。鉄地金銅装の鉢部に4脚が付く。鉢の頂部には銀装の6花弁花形座金具、その上に宝珠飾りが付くが、宝珠飾りは欠損。方形脚・棘花弁形脚各1箇所が欠損。残存する2脚は棘花弁形。頭は鉄地で、頭頭銀装。棘花弁形脚には各3鉤を打つ。資金具も鉄地銀装。内面に繋の革帯が良好に遺存。繋は側面に組紐を付けたもの。脚1箇所接合。明瞭な接点なし。	小石棺蓋上	①第53図7 ③第27図	42
9	(2.3)	7.9	0.2	85	金鉄装辻金具。鉄地金銅装の鉢部に4脚が付く。鉢の頂部には銀装の6花弁花形座金具、その上に宝珠飾りが付くが、宝珠飾りは欠損。脚1箇所が欠損。残存する3脚は棘花弁形。頭は鉄地で、頭頭銀装。棘花弁形脚には各3鉤を打つ。資金具も鉄地銀装。内面には繋の革帯が良好に遺存。繋は側面に組紐を付けたもの。棘花弁形脚の2箇所接合。	小石棺蓋上	①第53図9 ③第27図	43
10	2.8	(6.3)	0.4	75	銀装辻金具。鉄地銀装の鉢部に4脚が付く。鉢部は4段の階段状。2脚が欠損。残存する2脚は棘花弁形で各1鉤を打つ。頭は鉄地で、頭頭は銀装。1箇所残存。資金具も鉄地銀装。内面に革帶が付着する。	玄室内	①第55図2 ③第28図	44
11	2.8	8.4	0.4	100	銀装辻金具。鉄地銀装の鉢部に4脚が付く。鉢部は4段の階段状。脚は棘花弁形で各1鉤を打つ。頭は鉄地で、頭頭は銀装。資金具も鉄地銀装。内面に繋の革帯の痕跡が残る。脚2箇所接合。	玄室内	①第55図3 ③第28図	45
12	2.3	8.7	0.4	100	銀装辻金具。鉄地銀装の鉢部に4脚が付く。鉢部は4段の階段状。脚は方形脚が1箇所、他の3脚は棘花弁形で、各1鉤を打つ。頭は鉄地で、頭頭は銀装。方形脚には銀留めされていた吊金具の一部が残り、鉢部には別個体の吊金具が接着する。後者の吊金具には杏葉の立間が残り、杏葉(通番53)と接合する(未接合)。	玄室内	①第55図4 ③第28図	46

金銅装・銀装杏葉 7点

番号	長	幅	厚	遺存率	品質形状	出土位置	報告書番号	通番
1	10.0	6.5	0.4	100	鉄地金銅装の透心葉形杏葉。立間に吊金具の吊手部が残る。裏面に漆膜状の付着物あり。	小石棺蓋上	①第47図2 ③第29図	47
2	9.3	6.3	0.4	100	鉄地金銅装の透心葉形杏葉。立間に吊金具の吊手部が残る。裏面に漆膜状の付着物あり。	小石棺蓋上	①第47図3 ③第29図	48
3	(8.5)	6.5	0.4	95	鉄地金銅装の透心葉形杏葉。立間の一部が欠損。裏面に漆膜状の付着物あり。	小石棺蓋上	①第47図4 ③第29図	49
4	(8.2)	6.3	0.4	100	鉄地金銅装の透心葉形杏葉。立間から折損し、一部は雲珠(通番33)に残る。裏面に漆膜状の付着物あり。先端に木質が鍛着する。	小石棺蓋上	①第47図5 ③第29図	50
5	9.5	6.5	0.4	100	鉄地金銅装の透心葉形杏葉。辻金具(通番37)に新留めされた吊金具に接続する(鉄轡)。裏面に漆膜状の付着物あり。接続部分には皮革状の腰が付着し、その内部には麻状の布が遺存する。先端に木質が鍛着する。	小石棺蓋上	①第47図6 ③第29図	51
6	11.2	6.5	0.4	100	鉄地金銅装の透心葉形杏葉。吊金具が付く。吊金具は長方形で、鉄地金銅装。吊手部を欠損する。頭頭銀装の鉄轡が4箇所ある。吊金具内面には革が付着。辻金具(通番41)と接続する(未接合)。吊金具は2片接合。杏葉本体の長8.9cm。裏面に漆膜状の付着物あり。	小石棺蓋上	①第47図7 ③第29図	52
7	(6.8)	7.0	0.9 (重合) 1.6	100	鉄地銀装心葉形杏葉。立間から折損。立間は辻金具(通番46)に残存(未接合)。鉄製の地金に銀装の枠金を重ね。頭頭銀装の鉄轡を6箇所に打つ。中央の地金上に漆塗りの痕跡がある。	玄室内	①第49図 ③第29図	53

鉸具 2点

番号	長	幅	厚	遺存率	品質形状	出土位置	報告書番号	通番
1	(8.0)	3.8	0.6	100	鉄製の輪金。5片接合。基部に革帶および3箇の帯先金具が残る。鉸具本体の長5.7cm。帯先金具は鉄地金銅装、頭は鉄地銀装。帯先金具は先端が欠損。	小石棺蓋上	①第68図1 ③第30図	54
2	6.3	5.6	1.0	100	鉄棒を8字状に折り曲げた金具。2片接合、一部細片を接合。一部に革が付着。	小石棺蓋上	①第68図2 ③第30図	55

銅鈴 4点

番号	高	幅	厚	遺存率	品質形状	出土位置	報告書番号	通番
1	5.2	4.4	0.2	100	青銅八角鍔鈴。鋳造品。胴部に2条の突帶、上半に2箇所の型持孔がある。鍔は長方形で円形の孔があく。丸は鉄製で内面に鍛着する。一部に研磨痕が見える。	大石棺前面	①第65図1 ③第31図	56
2	(5.3)	4.3	0.2	95	青銅八角鍔鈴。鋳造品。胴部に2条の突帶、上半に2箇所の型持孔がある。鍔は長方形だが上端を欠く。丸は鉄製で内面に鍛着する。一部に研磨痕が見える。	大石棺前面	①第65図2 ③第31図	57

3	5.3	4.3	0.2	100	青銅製八角稚鉈。鋲造品。胴部に2条の突帯、上半に1箇所の型持孔。対面の型持孔は鋲頭で覆られており、わずかにあく。鉈は角が丸い長方形で円形の孔があく。丸は鉄製で内面に鍛着する。稜線が不明瞭。一部に研磨痕が見える。	大石棺前面	①第65図3 ③第31図	58
4	5.4	4.4	0.2	100	青銅製八角稚鉈。鋲造品。胴部に2条の突帯、上半に2箇所の型持孔。鉈は長方形で円形の孔があく。基部に縦による孔がある。丸は鉄製で内面に鍛着する。一部に研磨痕が見える。	大石棺前面	①第65図4 ③第31図	59

大形刀子**1点**

番号	長	幅	厚	遺存率	品質形状	出土位置	報告書番号	通番
1	(36.7)	4.0	2.8	90	木製の大形刀子。6片接合。金属部分は長さ27.5cmが遺存(X線透過撮影)。柄は断面杏仁形で、上方に反り、3箇所の段を作出する。鉄製の柄環金具が付く。柄環金具の上に革状の付着物あり。茎尻に目釘孔1箇所があり、目釘が残る。刀身部に鞘の木質が一部残存。その他に鞘の木質片5点があり、別置きとする。切先を欠く。	玄室内	①第71図1 ③第32図	60

鹿角装刀子残欠**2点**

番号	長	幅	厚	遺存率	品質形状	出土位置	報告書番号	通番
1	(10.0)	2.1	1.7	80	2片接合。切先が欠損。鹿角製の柄は柄口付近がよく残り、1箇所の段を作出する。漆状の膜が付着。	玄室内	①第71図2 ③第33図	61
2	(7.7)	2.3	2.0	65	刃部の上半と茎尻を欠損。鹿角製の柄は柄口付近がよく残り、1箇所の段を作出する。漆状の膜が付着。	玄室内	①第71図3 ③第33図	62

鉤状鉄製品**4点**

番号	長	幅	厚	遺存率	品質形状	出土位置	報告書番号	通番
1	24.0	11.0	0.3	100	4点の鉤状金具が鍛着する。7片接合(現状2分割)。このうち3点の上端部に円形の金剛板が縫じ付けられている。それぞれに縫じ孔が4箇所あき、縫じ紐が残る。鉤状金具の先端に織維が付着する。	玄室内	①第74図1～4 ③第34図	63
2	(17.5)	(8.0)	0.3	90	3点の鉤状金具が鍛着する。3片接合。うち1点の上端部に縫じつけられた金剛板が残る。縫じ孔が4箇所あき、縫じ紐が残る。金剛板には孔が7箇所あく。一部に、織維と帶状の膜が付着する。	玄室内	①第74図5～7 ③第34図	64
3	(8.0)	2.3	0.3	35	鉤状金具端部の残欠。5片接合。円形の金剛板が縫じ付けられている。縫じ孔は4箇所あき、縫じ紐が残る。	玄室内	①第74図8 ③第34図	65
4	(9.1)	2.5	0.3	50	鉤状金具端部の残欠。4片接合。金剛板を縫じ付けた革紐の痕跡が残る。縫じ孔は4箇所あき、縫じ紐が残る。	玄室内	①第74図9 ③第34図	66

1. 玉

水晶勾玉

12点

2点

番号	高	幅	厚	遺存率	品質形状	出土位置	報告書番号	通番
1	2.3	1.4	0.7	100	完形。四字形に近い。片面穿孔。通番 68 ~ 71 と一連。	小石棺内	①第 29 図 4 ③第 37 図	67
2	2.6	1.7	0.9	100	完形。四字形に近い。通番 67 よりやや大きい。片面穿孔。通番 67, 69 ~ 71 と一連。	小石棺内	①第 29 図 5 ③第 37 図	68

水晶算盤玉

1点

番号	径	幅	厚	遺存率	品質形状	出土位置	報告書番号	通番
1	1.1	—	0.9	100	完形。片面穿孔。通番 67, 68, 70, 71 と一連。昭和期採集。	小石棺内か	①第 29 図 8 ③第 37 図	69

水晶丸玉

1点

番号	径	幅	厚	遺存率	品質形状	出土位置	報告書番号	通番
1	最大 1.3	—	最大 1.3	100	完形。6点一連。径 0.9 ~ 1.3cm, 厚 0.8 ~ 1.3cm。片面穿孔。通番 67 ~ 69, 71 と一連。内 1 点は昭和期採集 (③第 37 図 70 - (5))。	小石棺内	①第 29 図 9 ~ 14 ③第 37 図	70

瑪瑙聚玉

1点

番号	径	幅	厚	遺存率	品質形状	出土位置	報告書番号	通番
1	1.1	—	1.6	100	完形。赤橙色。側面に一部原礫面残存。片面穿孔。通番 67 ~ 70 と一連。	小石棺内	①第 29 図 6 ③第 37 図	71

ガラス管玉

1点

番号	径	幅	厚	遺存率	品質形状	出土位置	報告書番号	通番
1	0.9	—	1.3	98	ほぼ完形 (片端微欠)。カリガラス。淡青色不透明。鋳型製作の可能性がある。孔中に白色付着物あり。	小石棺内	①第 29 図 7 ③第 38 図	72

ガラス小玉

6点

番号	径	幅	厚	遺存率	品質形状	出土位置	報告書番号	通番
1	1.1	—	1.0	100	完形。3点一連。ほぼ同寸。緑色透明。ソーダ石灰ガラス、包み巻き法による製作の可能性が高い。	小石棺内	①第 29 図 18 ~ 20 ③第 38 図	73
2	最大 1.0	—	最大 1.5	100	8点一連。径 0.9 ~ 1.0cm, 厚 0.7 ~ 1.5cm。緑色透明 7 点、淡青色不透明 1 点。ソーダ石灰ガラス、連珠法による製作。内 1 点は未成品で、2 点が連結 (③第 38 図 74 - (2))。内 1 点は表面および端部の一部がわずかに欠損 (③第 38 図 74 - (7))。	小石棺内	①第 29 図 15, 38 ~ 40.42 ~ 45 ③第 38 図	74
3	最大 0.8	—	最大 0.8	100	完形。33点一連。径 0.6 ~ 0.8cm, 厚 0.4 ~ 0.8cm。緑色透明。ソーダ石灰ガラス、引き伸ばし法による製作。内 2 点は昭和期採集 (③第 38 図 75 - (34), (33))。	小石棺内	①第 29 図 57, 58, 60, 64, 66 ~ 92, 94, 95 ③第 38 図	75

4	最大 0.9	—	最大 0.6	100	9点一連。径 0.7 ~ 0.9cm, 厚 0.4 ~ 0.6cm。 紺色透明。ソーダ石灰ガラス。変則的引き伸ばし法による製作。内1点は表面に亀裂があり、一部欠損(③第38図76~(7))。	小石棺内	①第29図 46~54 ③第38図	76
5	最大 0.8	—	最大 0.6	100	8点一連。径 0.6 ~ 0.8cm, 厚 0.4 ~ 0.6cm。 紺色透明。カリガラス。引き伸ばし法による製作。内1点は2片が接合し、一部欠損(③第38図77~(8))。内1点は昭和期採集(③第38図77~(8))。	小石棺内	①第29図 55, 56, 59, 61 ~ 63, 65, 96 ③第38図	77
6	最大 0.5	—	最大 0.3	100	報告書①では「粟玉」。17点一連。径 0.3 ~ 0.5cm, 厚 0.2 ~ 0.3cm。紺色透明。ソーダ石灰ガラス 15点。カリガラス 2点。引き伸ばし法による製作。内1点は端部の一部が欠損(③第38図78~(6))。内1点は昭和期採集(③第38図78~(15))。	小石棺内	①第29図 21~37 ③第38図	78

附 金属製品残欠

46点

鉄刀残欠

5点

番号	長	幅	厚	遺存率	品質形状	出土位置	報告書番号	通番
1	(24.1)	2.9	1.2	—	刀身部残欠。通番附2~4と同一個体の可能性あり。	小石棺内	①第35図1 ③第15図	附1
2	(14.0)	2.8	1.0	—	刀身部残欠。2片接合。鞘の木質が一部残存。通番附1・3・4と同一個体の可能性あり。	小石棺内	①第35図2 ③第15図	附2
3	(13.8)	3.2	0.8	—	刀身部残欠。鞘の木質が一部残存。通番附1・2・4と同一個体の可能性あり。	小石棺内	①第35図3 ③第15図	附3
4	(3.0)	2.1	0.8	—	切先残欠。先端部は欠損。通番附1~3と同一個体の可能性あり。	小石棺内	①第35図4 ③第15図	附4
5	(18.2)	(2.0)	(0.6)	—	刀身部残欠。	小石棺内	①第35図7 ③第15図	附5

鉄矛身残欠

11点

番号	長	幅	厚	遺存率	品質形状	出土位置	報告書番号	通番
1	(16.1)	(1.6)	1.5	20	身部残欠。腰状の付着物あり。断面は多角形。	玄室内	①第37図5 ③第16図	附6
2	(3.9)	2.8	2.9	10	袋部残欠。断面は円形で目釘が残る。袋内部に柄木が残存。	玄室内	①第37図6 ③第16図	附7
3	(9.2)	2.3	(2.2)	10	袋部残欠(長 5.8cm)。身部欠損。半分以上剥離欠損し、内部の柄木が露出。袋部断面円形か。腰状の付着物あり。	玄室内	①第37図11 ③第16図	附8
4	(9.1)	(1.7)	(1.7)	20	袋部残欠。3片接合。腰状の付着物あり。	玄室内	①第37図12 ③第16図	附9
5	(15.8)	(1.4)	(0.6)	20	身部残欠。身部断面三角形(三角槌造)。大部分が剥離し欠損。	玄室内	①第37図14 ③第16図	附10
6	(11.7)	(1.1)	(1.1)	20	身部残欠。身部断面三角形(三角槌造)。切先が残存。	玄室内	①第37図15 ③第16図	附11
7	(2.0)	(1.4)	(1.2)	5	切先残欠。身部断面三角形(三角槌造)。	玄室内	①第37図16 ③第16図	附12
8	(7.0)	1.9 (付着物)	2.5	10	身部残欠(厚1.4cm)。身部断面三角形(三角槌造)。性格不明の帶状付着物あり。	玄室内	①第37図17 ③第16図	附13
9	(10.7)	(2.2)	(0.8)	20	身部残欠(袋部)。身部断面三角形(三角槌造)。袋部断面円形か。	玄室内	①第37図18 ③第16図	附14

10	(4.4)	1.7	(0.8)	10	身部残欠。身部断面菱形（鍛造）。	玄室内	①第38図19 ③第16図	附15
11	(4.9)	1.7	1.0	10	袋部残欠。身部断面菱形（鍛造）。内部の下半に柄木が残存。	玄室内	①第38図20 ③第16図	附16

鉄鎌残欠 6点

番号	長	幅	厚	遺存率	品質形状	出土位置	報告書番号	通番
1	(3.6)	1.1	0.8	20	平根系鎌の関～茎部残欠。断面長方形。矢柄の一部が残存。	玄室内	①第39図4 ③第17図	附17
2	(5.0)	1.1	0.7	20	尖根系長頭片刃鎌の鎌身部残欠。鎌身関は欠損。	玄室内	①第40図16 ③第17図	附18
3	(7.8)	1.0	1.0	30	尖根系長頭鎌の頭部～茎部残欠。頭部断面は長方形、関は棘状關。矢柄と樹皮巻きの一部が残存。	玄室内	①第40図17 ③第17図	附19
4	(8.0)	0.9	1.2	30	尖根系長頭鎌の頭部残欠。断面は長方形。	玄室内	①第40図27 ③第17図	附20
5	(3.1)	0.8	0.8	10	尖根系長頭鎌の頭部残欠。断面は長台形。	玄室内	①第40図28 ③第17図	附21
6	(3.6)	1.0	0.7	10	尖根系長頭鎌の茎部残欠。茎部断面は台形。矢柄と樹皮巻きの一部が残存。	玄室内	①第40図29 ③第17図	附22

鞍金具残欠 1点分

番号	長	幅	厚	遺存率	品質形状	出土位置	報告書番号	通番
1	(6.0) (5.1) (4.3)	3.8 4.0 4.1	0.6 0.6 0.7	20	鞍金具の残欠3片。③第18図附23-(1)は短辺の残欠で、他の残欠と接点なし。同図附23-(2)・(3)は隅部の残欠で、接点あり、未接合の状態。いずれも裏面に木質が付着する。金具との間に目の粗いものと密なものの2種類の布が付着し、鉄板の長辺に沿って布が覗く。また、布と鉄板の間に塗装の痕跡あり。錫装鉄釘の頭が計15箇所に遺存。	玄室内	①第42図 1～3 ③第18図	附23

轡残欠 3点

番号	長	幅	厚	遺存率	品質形状	出土位置	報告書番号	通番
1	(3.2)	(2.5)	0.7	5	鉄製の引手轡半欠。革が付着。断面楕円形。通番附25と一組か。	玄室内	①第44図2 ③第20図	附24
2	(5.7)	5.1	2.0	10	鉄製の引手轡。環体が接続する部分は屈曲する。断面楕円形。通番附24と一組か。	玄室内	①第46図1 ③第20図	附25
3	(3.4)	(3.5)	2.6	5	鉄製。衝先と引手の連結部分残欠。	玄室内	①第46図2 ③第20図	附26

鞍金具残欠 2点

番号	長	幅	厚	遺存率	品質形状	出土位置	報告書番号	通番
1	(5.8)	(3.8)	1.4	30	鉄製の鞍金具残欠。2片接合。輪金の大半と脚部を欠く。通番附28と同一個体の可能性が大きい。	玄室内	①第62図1 ③第23図	附27
2	2.7	2.7	0.9	30	鉄地頭装鞍座金具（完形）。鞍脚部の一部が残存。通番附27と同一個体の可能性が大きい。	玄室内	①第62図2 ③第23図	附28

鎧金具残欠

4点

番号	長	幅	厚	遺存率	品質形状	出土位置	報告書番号	通番
1	12.3	1.8	0.5	50	鉄製鎧金具残欠。2片接合。鉄紙3点(内2点残存)。最下段の鉄紙の先端を欠く。内面に漆膜と木質付着。	玄室内	①第63図1 ③第24図	附29
2	(3.5)	1.8	0.6	10	鉄製鎧金具残欠。鉄紙1点が残存するが、先端を欠く。内面に木質付着。	玄室内	①第63図2 ③第24図	附30
3	(7.0)	6.5	1.0	65	鉄製鎧金具残欠。刺金あり。輪金の一部を欠く。2片未接合、接点あり。革が付着。	玄室内	①第63図3 ③第24図	附31
4	(3.4)	5.3	0.5	5	木製鎧金の外面裏にあった側板残欠か。3片接合。鉄1点残存。裏から尖った工具で打ち出した列文2列あり。内面に木質付着。	玄室内	①第63図4 ③第24図	附32

鎔具残欠

4点

番号	長	幅	厚	遺存率	品質形状	出土位置	報告書番号	通番
1	5.5	[2.8]	0.6	65	鉄製鎔具残欠。2片接合、完形に復元。刺金は持たない。革が付着。	玄室内	①第68図3 ③第30図	附33
2	(3.0)	3.9	0.7	50	鉄製鎔具の上半残欠。2片接合。刺金が残存。革が残存。	玄室内	①第68図4 ③第30図	附34
3	(5.4)	(2.8)	0.7	15	鉄製鎔具。輪金の残欠。断面円形。	玄室内	①第63図4左 ③第30図	附35
4	(3.8)	(3.6)	0.7	10	鉄製鎔具。輪金の残欠。断面円形。	玄室内	①第63図4右 ③第30図	附36

鹿角装刀子残欠

5点

番号	長	幅	厚	遺存率	品質形状	出土位置	報告書番号	通番
1	(8.2)	(2.0)	(1.4)	30	柄部残欠。4片接合。刃部を欠損。茎は全て残存。金属部分は長6.2cm残存(X線透過撮影)。	玄室内	①第71図4 ③第33図	附37
2	(5.9)	(1.8)	(1.3)	30	柄部残欠。刃部を欠損。茎は全て残存。金属部分は長5.8cm残存(X線透过撮影)。	玄室内	①第71図5 ③第33図	附38
3	(5.3)	1.5	(1.9)	30	柄部残欠。2片接合。刃部を欠損。茎は全て残存。金属部分は長5.2cm残存(X線透过撮影)。	玄室内	①第71図6 ③第33図	附39
4	(3.6)	2.1	(1.8)	20	柄部残欠。刃部と茎先端を欠く。	玄室内	①第71図7 ③第33図	附40
5	(1.4)	(1.2)	(0.8)	5	茎の先端残欠。茎は長1.2cm残存(X線透过撮影)。	玄室内	①第71図8 ③第33図	附41

鉤状鉄製品残欠

2点

番号	長	幅	厚	遺存率	品質形状	出土位置	報告書番号	通番
1	(3.0)	(6.5)	0.3	20	鉤状金具の残欠。縫じ孔はない。	玄室内	①第74図10 ③第34図	附42
2	(3.5)	(1.9)	0.3	10	鉤状金具の残欠。	玄室内	①第74図11 ③第34図	附43

不明金銅板残欠

2点

番号	長	幅	厚	遺存率	品質形状	出土位置	報告書番号	通番
1	(2.1)	(2.2)	0.3	—	金銅板残欠。4片接合。孔が3箇所にあく。 鉤状鉄製品に伴う可能性がある。	玄室内	③第35図	附44
2	(1.7)	(2.3)	0.2	—	金銅板残欠。3片接合。孔が3箇所にあく。 鉤状鉄製品に伴う可能性がある。	玄室内	③第35図	附45

不明鉄製品残欠 1点

番号	長	幅	厚	遺存率	品質形状	出土位置	報告書番号	通番
1	(2.5)	(3.1)	0.8	—	木質・革が付着。一端に突起、2箇所に大小の長方形の切り込みがある(X線透過撮影)。突起の基部に木質が残る。小さな切り込み付辺には革状の付着物がある。	玄室内	①第 77 図 ③第 36 図	附 46

(以上石室出土)

1. 須恵器残欠 甕残欠 6点

番号	高	口径	厚	遺存率	品質形状	出土位置	報告書番号	通番
1	[66.5]	34.0	1.4	65	底部欠損。口縁端部外面に幅約2.5cmの段が作出される。肩部は肩部よりやや下に最大径がある。焼成はやや不良。色調灰褐色。口縁部から頸部と肩部以下に2分割、接点なし。この他、破片多数を1袋に別置き。	埴丘	①第 22 図 5 ③第 39 図	79
2	53.6	29.8	1.2	65	口縁部から底部まで残る。口縁端部外面に幅約1cmの段が作出される。頸部外面の上・中段に波状文、下段に縱方向の刺突文を施す。肩部がやや張り、肩部上半に最大径がある。焼成は良好で、内外面に自然釉が付着。色調灰色～黒色。底部に焼成時の破裂痕がある。その他、破片多数を3袋に別置き、完形に復元。	埴丘	③第 39 図	80

子持壺残欠 4点

番号	高	口径	厚	遺存率	品質形状	出土位置	報告書番号	通番
1	54.7	親口径 [19.0] 最大幅 [30.0]	1.3	70	出雲型子持壺。親壺は、口縁部が短く外反し、肩部に透孔はない。脚部との接合部に薄い鈎状の突帯を貼り付ける。子壺は計16個。口縁部が窄まる形状で、文様はない。脚部は無文で、三角形の透孔が上段に4個、下段に3個ある。色調灰黒色。この他、破片多数を1袋に別置き。完形に復元。	埴丘	①第 23 図 ③第 41 図	81
2	[57.7]	親口径 20.5 最大幅 [34.5]	1.6	40	出雲型子持壺。親壺は口縁部が短く外反し、端部が面取りされる。肩部に透孔はない。脚部との接合部に薄い鈎状の突帯を貼り付ける。子壺は8個残存し、内1個はほぼ完存。子壺は外反する単純口縁で、文様はない。脚部は無文の円筒形で、三角形の透孔が上・中段に各4個あり、千鳥状に配される。色調灰白色。この他、破片多数を1袋に別置き。	埴丘	②第 21 図 4 ③第 41 図	82

3	[65.5]	親口径 [21.5] 最大幅 [33.0]	1.2	35	出雲型子持壺。親壺は、口縁部が短く外反し、端部が面取りされる。胸部は上半に子壺、下半に円形の透孔がある。脚部との接合部に薄い跨状の突帯を貼り付ける。子壺は4個残存し、内2個はほぼ完存。子壺は外反する単純口縁を持ち、文様はない。円形の透孔は2個残存する。脚部はわずかに膨らむ無文の円筒形で、涙滴形の透孔が上段に4個、中段に1個残存する。色調灰黒色。この他、破片多数を1袋に別置き。	埴丘	②第25図14 ③第41図	83
4	55.9	親口径 [17.4] 最大幅 [29.0]	1.7	60	出雲型子持壺。親壺は、口縁部が短く外反し、面取りされる。胸部の透孔はない。脚部との接合部に突帯の剥離痕がわずかに残る。子壺は上・下段に千鳥状に配され、各段4個、計8個が残存。子壺は、外反する単純口縁を持ち、文様はない。脚部は無文の円筒形で、上・中段各4箇所に三角形の透孔が千鳥状に配される。色調灰色。	埴丘	②第30図37 ③第41図	84

1. 円筒埴輪

4点

番号	高	口径	厚	遺存率	品質形状	出土位置	報告書番号	通番
1	47.7	27.9	1.5	80	2条3段。口縁部から基底部まで残る。胸部にはヨコハケの2次調整が施され、基底部には棒状工具によりタタキが施される。胸部に円形の透孔が2個ある。突帯の剥離面に割り付け時の沈線が残る。色調赤褐色。	埴丘	②第20図2 ③第43図	85
2	41.6	26.9	1.8	65	2条3段。口縁部から基底部まで残る。胸部にはナナメハケの2次調整が、基底部には棒状工具によりタタキが施される。胸部に円形の透孔が2個ある。色調赤褐色。	埴丘	②第26図1 ③第43図	86
3	54.2	30.3	2.0	90	3条4段。口縁部から基底部まで残る。胸部にはヨコハケの2次調整が施され、基底部には棒状工具によりタタキが施される。2段の胸部には、円形の透孔がそれぞれ2個ある。色調赤褐色。	埴丘	②第20図1 ③第43図	87
4	52.0	32.4	1.8	90	3条4段。口縁部から基底部まで残る。胸部にはナナメハケの2次調整が施され、基底部には棒状工具によりタタキが施される。2段の胸部には、円形の透孔がそれぞれ2個ある。色調赤褐色。この他、破片多数を1袋に別置き。	埴丘	②第37図1 ③第44図	88

附 円筒埴輪残欠

6点

番号	高	口径	厚	遺存率	品質形状	出土位置	報告書番号	通番
1	[53.5]	32.5	1.7	50	3条4段。基底部を欠く。胸部にはヨコハケの2次調整が施される。2段の胸部には、円形の透孔がそれぞれ2個ある。色調赤褐色。	埴丘	②第34図1 ③第43図	附47

2	(48.5)	(25.9)	2.3	70	3条4段に復元される。口縁部と基底部をともに欠く。胴部にはヨコハケやナナメハケの2次調整が施され、基底部には棒状工具によりタタキが施される。2段の胴部には、円形の透孔がそれぞれ2個ある。色調赤灰色。採集の時期不明。	埴丘	①第22図7 ③第44図	附48
3	[45.0]	[29.0]	1.6	10	3条4段に復元される。口縁部と基底部をともに欠く。3分割未接合、接点なし。胴部にはナナメハケの2次調整が、基底部にはナナメハケが施される。2段の胴部には、それぞれ円形の透孔があり、3個残存する。色調赤黒色。	埴丘	②第32図2、 第34図7、8 ③第44図	附49
4	(38.5)	(22.4)	2.0	50	3条4段に復元される。口縁部と胴部上段の一部を欠く。胴部には1次調整のハケメが確認され、2次調整は施されていない。基底部には棒状工具によりタタキが施される。2段の胴部には、円形の透孔がそれぞれ2個ある。色調赤褐色。	埴丘	②第37図2 ③第44図	附50
5	(45.0)	(32.0)	2.5	—	大形品。3条4段か。口縁部及び胴部の大半を欠く。胴部には1次調整のハケメが確認され、2次調整は施されていない。基底部には棒状工具によりタタキが施される。2段の胴部には、それぞれ円形の透孔があり、2箇所残存する。外面に黒色物付着。色調赤褐色。	埴丘	②第44図25 ③第46図	附51
6	(13.0)	(17.1)	1.5	—	段数不明。基底部残欠。ナナメハケが施される。	埴丘	②第43図22 ③第46図	附52

(以上埴丘出土)

註

(1) 法量については、〔 〕は復元値、()は現存値を表す。単位はcm。

(2) 石室内の出土位置は、聞き書きをもとにした報告書①の記述による。

参考文献

①松本岩雄編 1999『上塙治築山古墳の研究』－島根県古代文化センター調査研究報告4－ 島根県古代文化センター

ンター

②三原一将・高橋智也編 2004『上塙治築山古墳』出雲市教育委員会

③本書

第6章 自然科学分析

第1節 金属製品の蛍光X線分析

1 はじめに

上塩冶築山古墳の主要な出土品の材質を明らかにするため、蛍光X線分析を行った。分析は、耳環2点（第13図）、振環頭大刀装具破片1点（第15図5@）、鞍金具3点（第18図）、轡金具1点（第19図31の鏡板（右））、雲珠1点（第25図33）、辻金具7点（第19図39・40、第26図35～38、第27図41、第28図45）、杏葉2点（第29図48・53）、鉢金具1点（第30図54）、銅鈴2点（第31図56・59）の金属成分と、鉄鐵2点（第17図22－（3）・（5））の矢柄部分に付着した赤色顔料を対象とした。

分析は、平成28年～平成29年の期間に4回に分けて実施した。本稿はその調査結果の報告である。

2 分析方法

分析方法は、蛍光X線分析による元素定性分析（非破壊）である。使用機器は、島根県古代文化センター所有・島根県埋蔵文化財調査センター設置「エスアイアイ・ナノテクノロジー社（現：株式会社日立ハイテクサイエンス）製SEA1200VX 卓上型ケイ光X線分析計（エネルギー分散型）」である。

測定条件は以下のとおりである。

管電圧；50kV、管電流；管電圧の設定による自動設定（64～1000 μ A）、測定時間；100～200秒（うち、測定可能な有効時間は63～173秒）、試料室雰囲気；大気／真空、コリメータ（測定範囲）；直径8.0mm、X線管球；Rh（ロジウム）、検出器；マルチカソードSi半導体検出器、一次フィルタ；Pb・Cdフィルタ（Chempex社製マイラーカバーを使用）

3 結果

分析を行った試料とその結果を、以下の第8・9表と蛍光X線スペクトルデータ（第51～56図）に示す。

概ね、肉眼観察による『県報告』の記述のとおりであるが、以下に、『県報告』の記載と異なる分析結果を示したものを記す。なお、資料名横のカッコ内の符号は、本書記載の挿図番号である。

（1）耳環（第13図）

『県報告』では「中空式の銀製品」とされており、蛍光X線分析でもAgの高いスペクトルピーク（以下、ピーク）を検出した。2点の試料を蛍光X線分析装置に附属のCCDカメラで観察し、金色を呈している箇所を測定したところ、HgとAuのピークを検出した。また、Cuのピークも検出されたため、銅を含む銀を芯材（管材）、あるいは銅を芯として銀を貼った芯材（管材）を用いた上に、表装材として鍍金を施したとみられる。なお、第13図2については、黄褐色を呈する盛り上がった箇所では

Ca（カルシウム）を検出したが、この耳環に由来するものではなく、二次的に付着した物質であるとみられる。

（2）鉄鑑（第17図22-3・5）

『県報告』では「矢柄には赤色顔料の塗布が認められる」とある。今回の蛍光X線分析で、Hg（水銀）とFe（鉄）を検出した。古墳時代以前に使われていた赤色顔料としてHgを検出するものとしては、水銀朱（硫化第二水銀：HgS）、Feを検出するものとしてはベンガラ（酸化第二鉄：Fe₂O₃）が挙げられる。したがって、Hgを高く検出したことから、赤色顔料として水銀朱が使用されていたことは確実であろう。一方、Feのピークについては、測定箇所表面が銹に覆われていたことなどから、ベンガラに由来するものとは考えにくい。しかし、今回の分析手法ではこのFeがベンガラに由来しているか否かについては断定できない。

（3）鞍金具（第18図）

『県報告』では「この底板責金具は（中略）平坦な帶状の鉄板を隅丸長方形に折り曲げ、上下2列に鋲留したものである。（中略）頭には銀板をかぶせている。」とする。今回の蛍光X線分析では、帶状の鉄板からはFe（鉄）の高いピークを検出し、頭と頭の打ちつけた痕跡の残る鉄板からはSn（錫）のピークを検出した。頭の先端部分からはFeのピークを検出しており、Snは検出しなかった。したがって、帶状の鉄板の材質は鉄であり、頭本体は鉄、頭は錫の板か箔を被せているとみられる。

（4）轡金具（第19図31）

鏡板（頭） 『県報告』では「鉄地銀装」であるが、Cu、Fe、Au（金）、Hg（水銀）のピークを検出した。Agのピークも検出しているが、ごくわずかであり、銀装の頭であるとは断言できない。Cu、Fe、Au、Hgのピークは鏡板本体の「鉄地金銅装」を検出している可能性もあるが、恐らく「鉄地金銅装（鍍金）」の頭であるとみられる。

（5）雲珠（第25図33）

宝珠 『県報告』では「鉄地銀装」であるが、蛍光X線分析装置に附属のCCDカメラでの観察の結果、金色を呈していることが観察され、また、定性分析においてもCuの高いピークを示し、Au、Hgを検出したことから、鉄地金銅装（鍍金）であるとみられる。

責金具 『県報告』では「鉄地銀装」であるが、蛍光X線分析ではFeとCuを検出し、表装材に関する元素は検出されなかった。よって、蛍光X線分析の結果では表装材の材質は不明である。

（上山晶子）

【参考文献】

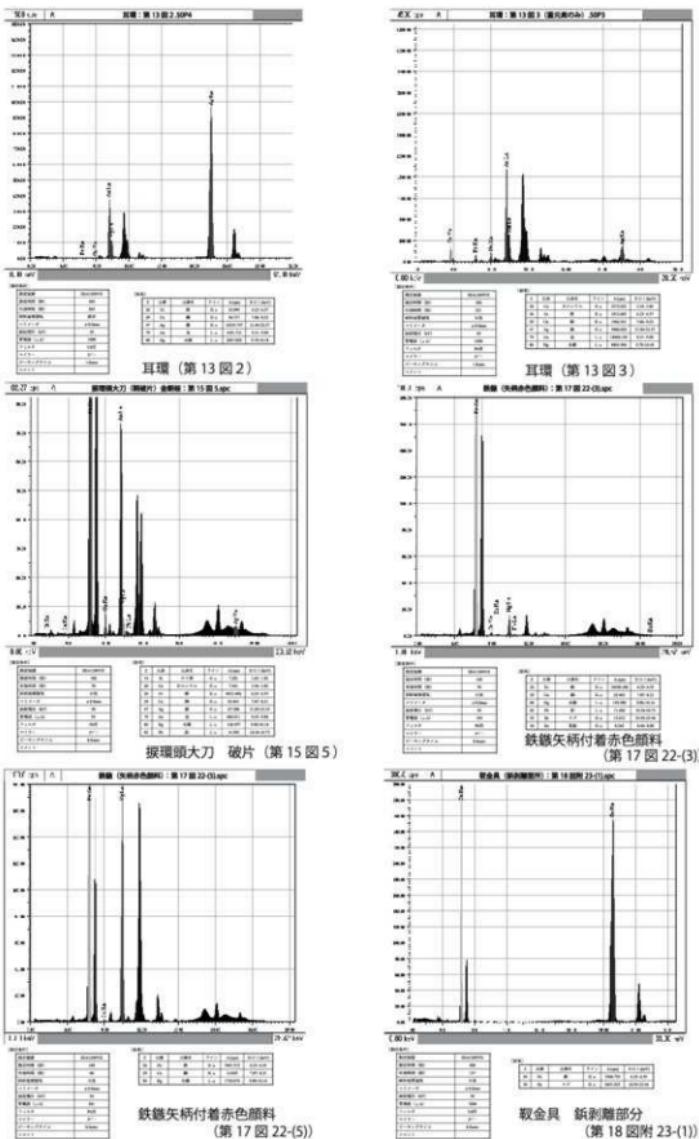
- 松本岩雄編 1999『上塩治築山古墳の研究』—島根県古代文化センター調査研究報告書4— 島根県古代文化センター
- 辻村純代 1997「耳環考」「古文化談叢」第39集 201～218頁
- 比佐陽一郎 2004「錫、鉛製耳環に関する基礎的検討—福岡市内の出土例を中心として—」『古文化談叢』第50集 83～102頁

第8表 上塩冶築山古墳出土品の蛍光X線分析結果一覧(1)

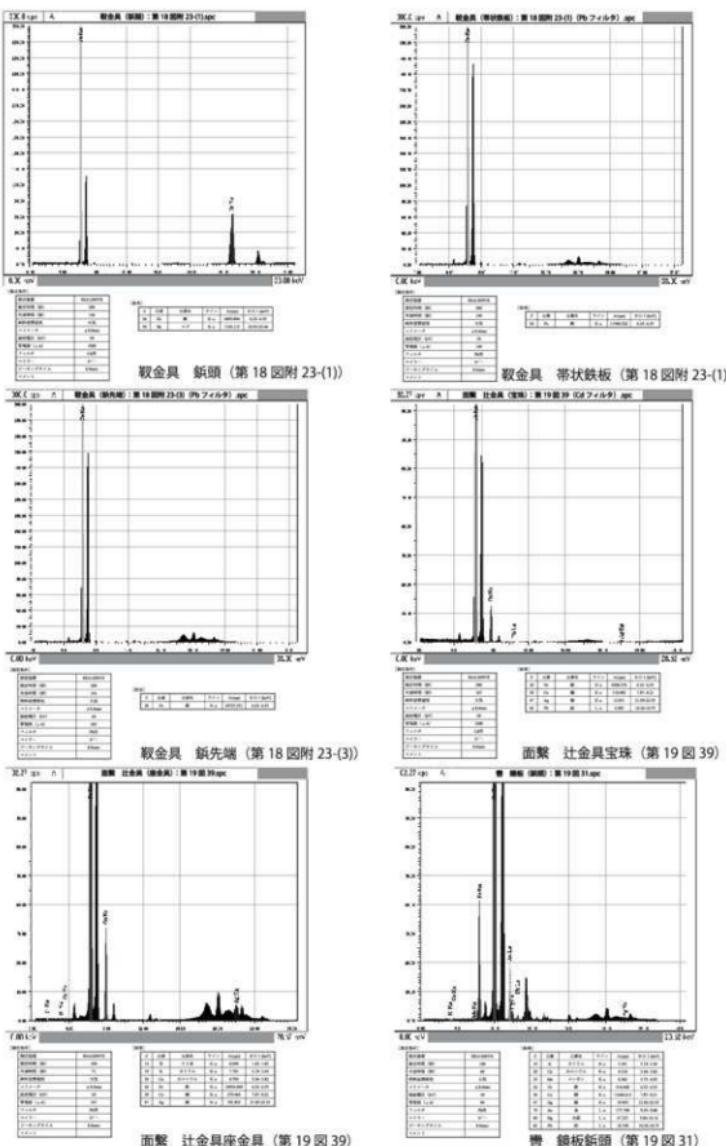
資料名	報告書 通番	『県報告』の記述	蛍光X線分析の結果		備考
			検出ピーク	想定される装飾	
耳環	第13図 2	銀製品	Au,Ag, Hg,Cu	銅を含む銀を芯材(管材)、あるいは銀を芯として銀を貼った芯材(管材)を用いた上に、表面材として鍍金を施したとみられる	黄褐色状の付着物からCaのピークを検出しているが、耳環に二次的に付着した物質とみられる
	第13図 3		Ca,Au,Ag, Hg,Cu		
振環頭大刀 (破片)	第15図 5	金板または金鋼板の 装飾の破片	Fe,Au,Hg, Cu,Ag	鉄地金鋼装(鍍金)	
鉄錆の矢柄に 付着した 赤色顔料	第17図 22-(3)-(5)	矢柄には赤色顔料の 塗布が認められる	Fe,Hg	塗布された赤色顔料は 水銀朱の可能性が高い	試料形状により、真空雰囲気での測定 ができなかったため、真空雰囲気で検出可能な鍍金の検出はしていない。Feはベンガラの可能性も想定されるが、CCDカメラでの観察結果から鉄錆本体の成分であるとみられる。いずれにせよ、水銀朱は確実に使われていたといえる。
鞍金具 (真金具)	第18図	鉢	鉢頭には 銀板を 被せている	Sn,Fe	鉢頭にスズの板か溶を 被せている
		帯状鉄板	帯状の鉄板	Fe	鉄板
面繫	社金具	鉢部	鉄地金鋼装	-	
		宝珠	Fe,Cu,Ag	鉄地銀装(銀貼)か?	Cuのピークは鉢部の材質とみられる。
		花形座金具	Fe,Ag	鉄地銀装(銀貼)	
		貴金属	-	-	
		鉢	-	-	
	樽鏡板	本体	鉄地金鋼装	-	
		鉢	Fe,Cu,Ag	鉄地銀装(銀貼)	
		鉢部	鉄地金鋼装	-	
		宝珠	-	-	
		花形座金具	Fe,Ag	鉄地銀装(銀貼)	ほかに、Cu,Au,Hgのピークを検出。鉢部の材質とみられる
	社金具	貴金属	-	-	
		鉢	-	-	
		鉢部	Fe,Cu,Ag	鉄地銀装(銀貼)	
		宝珠	-	-	
		花形座金具	Fe,Cu,Ag	鉄地銀装(銀貼)	
雲珠	第25図 33	鉢部	Fe,Cu,Au, Hg,Ag	鉄地金鋼装(鍍金)か	CCDカメラ画像の観察結果からは金色の箇所が見られることから、鉄地金鋼装(鍍金)の可能性が高い。
		脚部	Fe,Cu,Ag	鉄地銀装(銀貼)	
		宝珠	Fe,Cu	不明	Cuは雲珠の鉢部や脚部の材質を示しているとみられる。蛍光X線分析では、表面の装飾材とみられる金属は検出されなかった。
		花形座金具	Fe,Cu,Ag	鉄地銀装(銀貼)	
		貴金属	-	-	
		鉢(脚部)	-	-	

第9表 上塩冶築山古墳出土品の蛍光X線分析結果一覧（2）

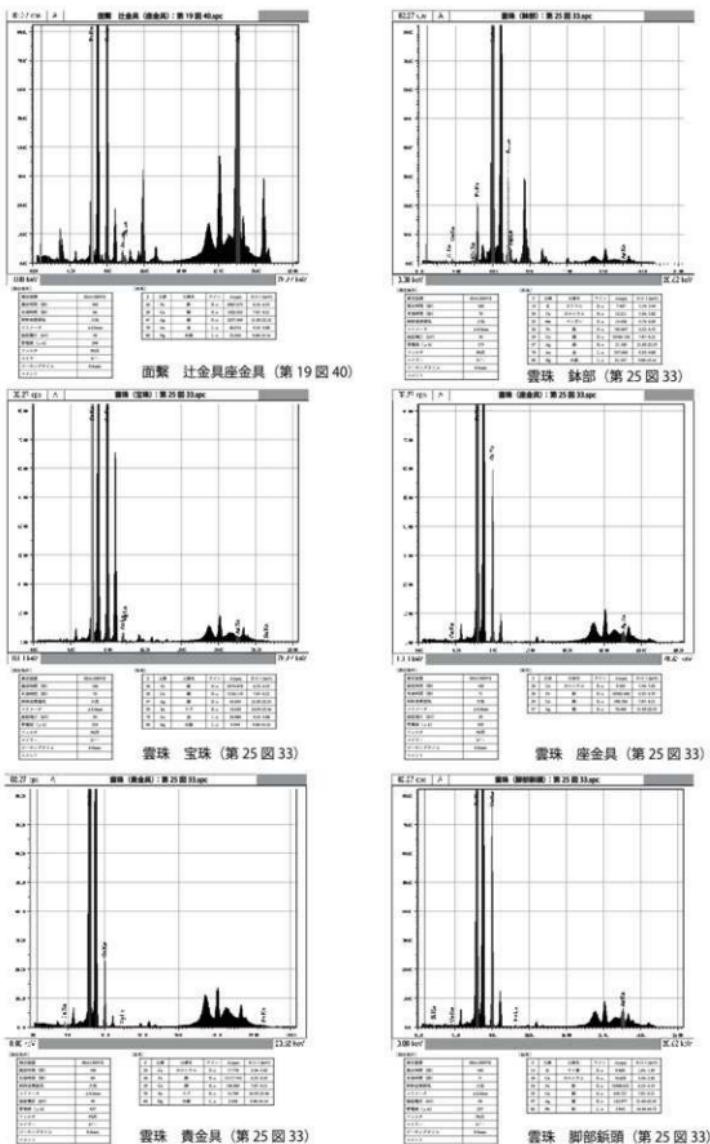
資料名	報告書 通番	『県報告』の記述	蛍光X線分析の結果		備考
			検出ピーク	想定される装飾	
付金具	第26図 35	鉢部			
		脚部	鉄地金鋼装	-	
		宝珠			
		花形座金具	Fe,Cu,Ag	鉄地銀装（銀貼）か？	Cuのピークは鉢部の材質とみられる。 ほかにCuAu,Hgのピークをわずかに検出しているが、鉢部の金鋼装のものとみられる
		資金貝 鏡（脚部）	Fe,Cu,Ag	鉄地銀装（銀貼）	
	第26図 36	鉢部			
		脚部	鉄地金鋼装	-	
		宝珠			
		花形座金具	Fe,Cu,Ag	鉄地銀装（銀貼）か？	Cuのピークは鉢部の材質とみられる。
		資金貝 鏡（脚部）			
	第26図 38	鉢部			
		脚部	鉄地金鋼装	-	
		宝珠			
		花形座金具	Fe,Cu,Ag	鉄地銀装（銀貼）か？	Cuのピークは鉢部の材質とみられる。
		資金貝 鏡（脚部）			
	第27図 41	鉢部			
		脚部	鉄地金鋼装	-	
		宝珠			
		花形座金具	Fe,Cu,Ag	鉄地銀装（銀貼）か？	Cuのピークは鉢部の材質とみられる。
		資金貝 鏡（脚部）	Fe,Cu,Ag	鉄地銀装（銀貼）	Cuのピークは鉢部の材質とみられる
杏葉	第28図 45	鉢部	鉄地銀装	Fe,Ag	鉄地銀装（銀貼）
		鏡（脚部）	鉄地銀装	Fe,Ag	鉄地銀装（銀貼）
					ほかに、Cu,Auのピークを検出。 ほかに、Cu,Au,Hgのピークを検出。
銛具	第29図 48	鉄地金鋼装		Cu,Fe, Au,Hg	鉄地金鋼装（鍍金）
	第29図 53	鏡	鉄地銀装	Ag,Fe	鉄地銀装（鏡頭銀貼）
		上板	鉄地銀装	Ag,Fe	鉄地銀装
銛	第30図 54	地板	鉄製	Fe,Ag	鉄地
		帶先金具	鉄地金鋼装	Fe,CuAu, Hg,Ag	鉄地金鋼装（鍍金）か？ Agは鏡のピークとみられる
		鏡	鉄地銀装	Fe,Cu,Au,Ag	鉄地銀装（銀貼）
銅鏡	第31図 56	青銅製		Cu,Fe,Pb,As	青銅製
	第31図 59	青銅製		Cu,Fe,Pb,As	青銅製



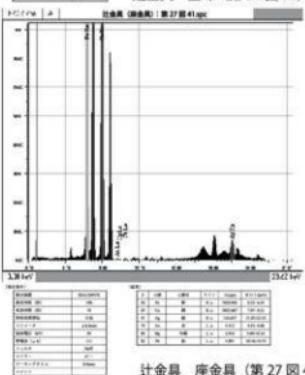
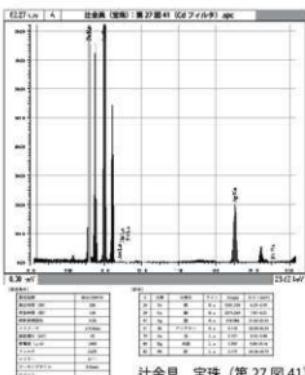
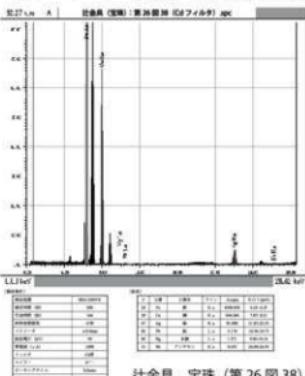
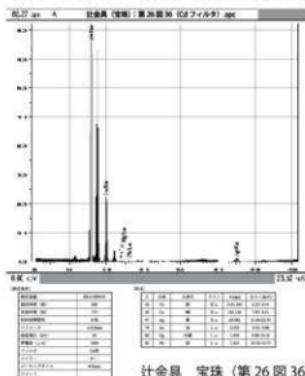
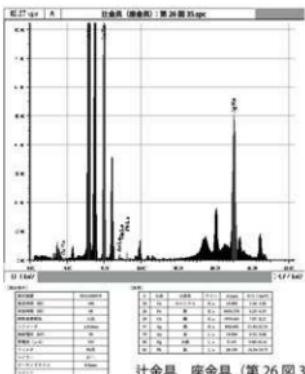
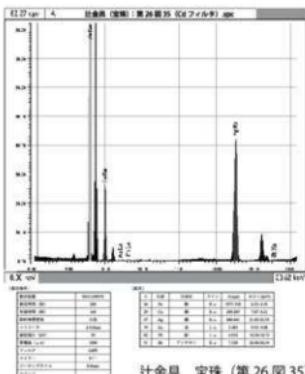
第51図 蛍光X線分析スペクトル (1)



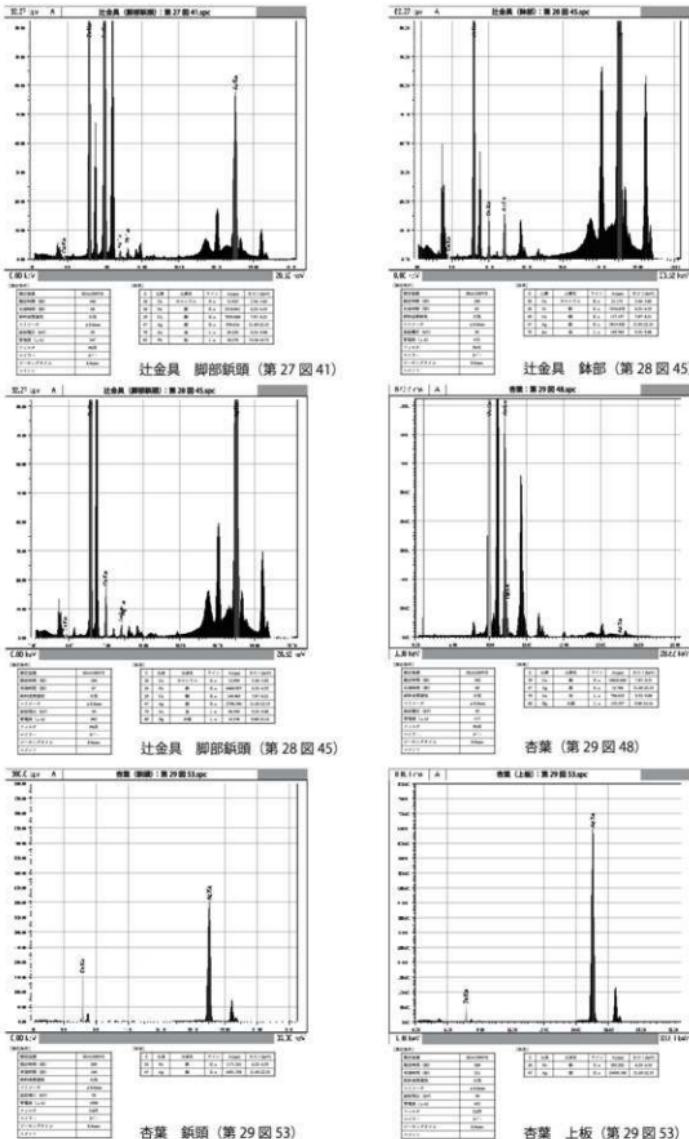
第 52 図 蛍光X線分析スペクトル (2)



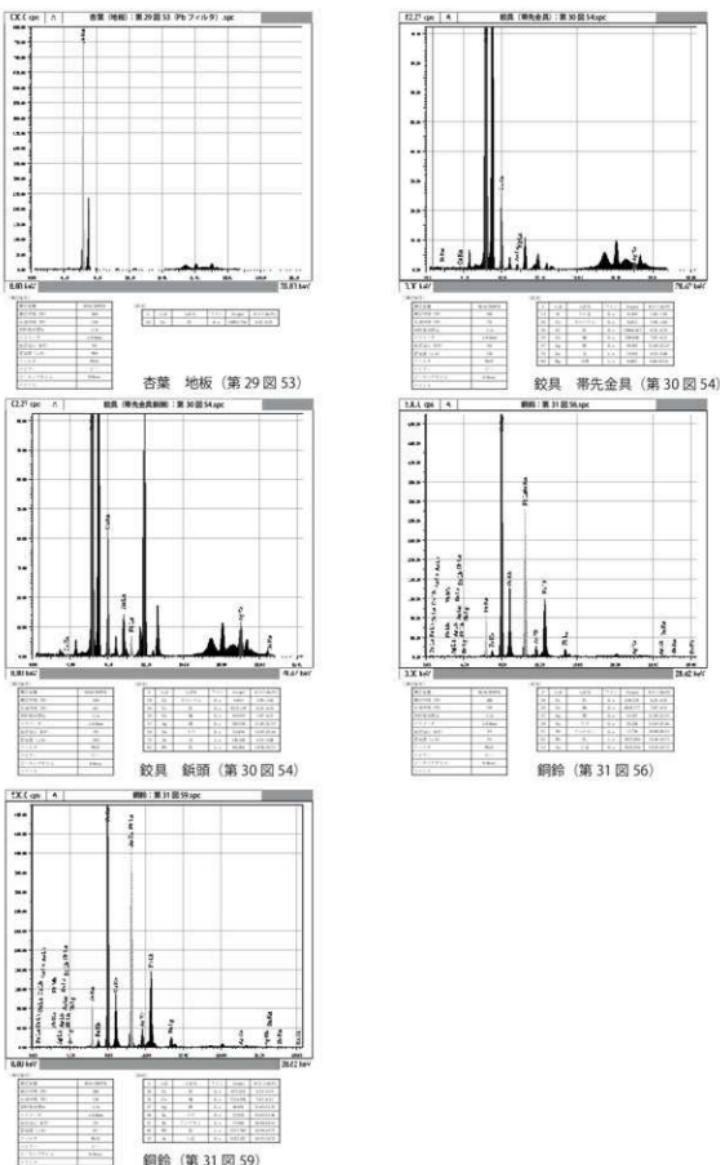
第53図 蛍光X線分析スペクトル (3)



第54図 蛍光X線分析スペクトル (4)



第55図 蛍光X線分析スペクトル(5)



第56図 蛍光X線分析スペクトル（6）

第2節 ガラス玉の考古科学的検討

1 はじめに

上塩治築山古墳からは多くの副葬品が出土している。本稿では、これらの副葬品のうち、ガラス玉について各種の自然科学的な調査を実施した結果について報告する。日本列島出土のガラス製遺物については、製作技法や化学組成による分類が進み、種類ごとの時期的な変遷や地域性が明らかとなってきた（大賀2002、肥塚ほか2010、Oga and Tamura2013など）。本調査では、各種の自然科学的手法を用いて、上塩治築山古墳出土のガラス玉の製作技法を推定するとともに、化学組成の分析から基礎ガラスの種類および着色剤の特徴を把握した。さらに、出雲市に所在する近接する時期の複数の古墳から出土したガラス玉と比較し、上塩治築山古墳出土のガラス玉の特徴について考察する。

2 資料の概要

調査対象とした資料は、上塩治築山古墳出土のガラス管玉1点（分析番号No.7）、ガラス小玉79点（No.15, 16, 18～41, 43～92, 94, 95）である。ただし、ガラス小玉のうち、No.38は二連の連珠である。色調は、紺色透明を呈するものが80点のうち73点含まれ最も多い。その他に、淡青色透明～半透明を呈するものが3点（管玉1点（No.7）と小玉2点（No.15, 16））、青緑色透明の小玉が3点（No.18～20）、および濃青色透明の小玉が1点（No.88）含まれている。遺存状態は、いずれも比較的良好で、表面にガラス光沢が残存する。ただし、No.63は一部が欠損している。欠損部の一部は別置保管されていたため、アクリル樹脂（パロイドB72）により接着した。

3 調査の方法

（1）顕微鏡観察

製作技法を推定するため、ガラス小玉に含まれる気泡の並びや形状、ガラス小玉表面および孔壁面の状態や孔の形状などに着目して、落射光および透過光下での実体顕微鏡観察をおこなった。使用した顕微鏡はライカ製MZ16で、必要に応じて付属のデジタルカメラ（Nikon DXM1200F）で撮影した。

（2）コンピューテッドラジオグラフィ法（CR法）

顕微鏡では把握しきれなかった孔の形状や含まれる気泡の配列などの内部観察と、鉛ケイ酸塩ガラスの識別を目的として、X線透過撮影法の一種であるコンピューテッドラジオグラフィ（Computed Radiography: CR法）を実施した。アルカリケイ酸塩ガラスと鉛ケイ酸塩ガラスの密度を比較すると、後者の密度がはるかに高く、X線の吸収が大きいため、X線透過画像から両者を容易に識別できる。CR法は、従来のフィルムのかわりにイメージングプレート（Imaging Plate: IP）を検出系に用いる方法である。撮影に用いた装置は、マイクロフォーカスX線拡大撮像システム（富士フィルム社製μFX-1000）とイメージングアナライザー（富士フィルム社製BAS-5000）である。IPにはBAS-SR2025を使用した。撮影条件は、管電圧60-80 kV、管電流60-80 μA、露光時間60-100秒の範囲内であった。

(3) オートラジオグラフィ法 (AR 法)

酸化カリウム (K_2O) を多く含むガラスの判別を目的としてオートラジオグラフィ法 (Auto Radiography : AR 法) を実施した。AR 法は、物質から放射される放射線をフィルムや IP に記録して画像を得る方法であり、放射線の蓄積線量により画像の濃淡が異なる。 K_2O を多く含むガラスは、 ^{40}K 由来する放射線を放射している。したがって、ガラスを IP 上に同じ時間だけ暴露した場合、 K_2O の含有量が多いほど濃い画像が得られることになる。AR 法の手順は以下のとおりである。まず、資料を直接 IP の上に置き、外部からの放射線を遮断するため、鉛製の遮蔽箱内に設置する。さらに、遮蔽箱の鉛に由来する放射線を遮蔽するため、IP の周辺を銅板で囲った。使用した IP は BAS-SR2025 であり、暴露時間は 168 時間とした。また、比較のための標準試料として、日本岩石標準試料 JB-1a と JG-1a の粉体圧縮ピース、および BCR126A (IRMM (Institute for Reference Material and Measurement) 標準物質) を同時に暴露した。これらの K_2O の含有量は、それぞれ 1.4%、4.0% および 10.0% である。

(4) 蛍光 X 線分析法

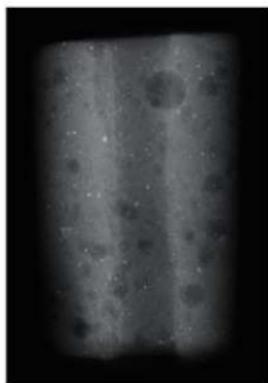
ガラスの主要な構成成分とその含有量を知るために蛍光 X 線分析を実施した。測定にあたっては、顕微鏡下で新鮮な破断面など風化の影響が少ない場所を選択し、測定範囲の表層を超音波およびエチルアルコールで洗浄した。測定結果は、測定資料と近似する濃度既知のガラス標準試料を用いて補正した理論補正法 (Fundamental Parameter Method : FP 法) により、検出した元素の酸化物の合計が 100% になるように規格化した。測定に用いた装置は、エネルギー分散型蛍光 X 線分析装置 (エダックス社製 EAGLE III) である。励起用 X 線源はモリブデン (Mo) 管球、管電圧は 20 kV、管電流は 100 μ A、X 線照射径は 112 μ m、計数時間は 300 秒とし、真空中で測定した。

4 結果と考察 (第 57 ~ 63 図、図版 27)

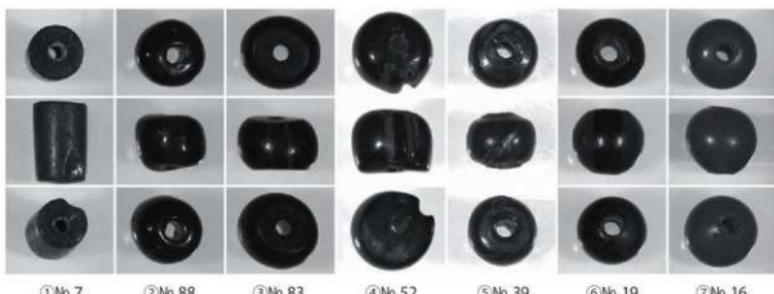
(1) 製作技法

管玉 (No. 7) は CR 画像によると大小の球形の気泡が散在していることから、鋳型法の可能性が高いと考えられる (第 57 図)。さらに、孔内壁に白色粘土状物質が付着しており、離型剤の可能性もある (第 58 図①)。

小玉については、引き伸ばし法で製作されたものが最も多く 58 点、変則的な引き伸ばし法によるものが 9 点 (No.46 ~ 54)、連珠法によるものが 8 点 (No.15, 38 ~ 40, 42 ~ 45)、包み巻き法によると考えられるものが 3 点 (No.18 ~ 20)、および巻き付け法によるものが 1 点 (No.16) 認められた。引き伸ばし法とは、軟化したガラスを引き伸ばして製作したガラス管を分割して小玉を得る方法で、孔内が比較的平滑で気泡が孔と平行方向に並ぶのが特徴である。ガラス管の分割は基本的に



第 57 図 管玉の CR 画像



第58図 跳微鏡写真(倍率不同)

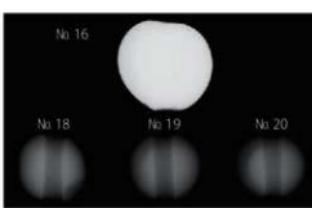
冷却状態で行い、分割後に再加熱することで、表面張力により端面が丸みを帯びる(第58図②)。当遺跡出土品は、大多数が両端面に平坦部をもつが、これは使用過程での研磨によると考えられる(第58図③)。

変則的な引き伸ばし法は、気泡が孔と並行方向に並ぶことから引き伸ばし法の一形と考えられるものの、以下の点から通常の引き伸ばし法とは異なると考えている。すなわち、片側の端面の丸みが強く両端面の形状が非対称となる特殊な形態の特徴を有し、丸みの強い端面の開孔部周辺において表面に開口した微細な気泡が集中する。さらに、孔内壁が平滑ではなく微細な凹凸が多いことから、芯棒が用いられた可能性も考えられる(第58図④)。

連珠法は、ガラス管を加熱した状態で括れをいた上で分割する。No.38のみ二連の連珠であるが、他はすべて単珠である。丸みの強い玉葱形を呈し、開孔部周辺に標状の突起が認められる。括れ部分を分割した痕跡と考えられる。孔と斜交方向に伸びるレンズ状の気泡が含まれるのが特徴的である(第58図⑤)。No.15に関しては、端面が磨かれており、不明瞭ではあるものの、開孔部周辺に括れ部の痕跡がわずかに認められる。

包み巻き法は、軟化したガラスに芯棒を刺しこみ、芯棒を包むように巻いて丸玉に整形したと推定している。典型的な場合は、片方の開孔部が広いことや、片側の開孔部に2箇所の皺状の溝があるなどの特徴がみられるが、本資料(No.19)は明確ではない。しかしながら、丸みの強い形態の特徴に加え、大きな気泡が少ないと、気泡が伸びる方向や配列に一貫性がないなどの特徴から、現状では包み巻き法の可能性が高いと判断した(第58図⑥)。

巻き付け法は、芯棒に軟化したガラスを複数回巻き付けて小玉を製作する方法である。孔と直交方向に伸びる気泡や気泡列が観察されるのが特徴である(第58図⑦)。本資料(No.16)では孔内壁に孔と直交方向の筋も認められる。なお、本資料は、CR画像で極めてX線の吸収が大きく(第59図)、比重も3.4と大きいことから、鉛の含有量が多いガラスの可能性が示唆された。



第59図 No.16, No.18~20のCR画像

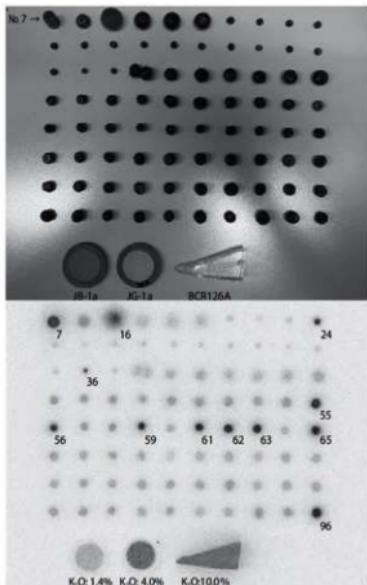
(2) 基礎ガラスの種類と着色剤

蛍光X線分析によって得られた化学組成から、上塩治築山古墳出土のガラス小玉の基礎ガラスの種類と着色剤について検討する。蛍光X線分析の結果は第10・11表に示した。

管玉(No.7)は、 K_2O を13.7%含有することから、カリウムを融剤とするカリガラスであった。AR法でも ^{40}K に由来すると考えられる多量の放射線が検出されており、整合的である(第60図)。着色に関与する成分としては、酸化銅(CuO)の含有量が多く(1.68%)、銅イオンが主要な着色要因である。さらに微量の酸化錫(SnO_2)および酸化鉛(PbO)を含む。これらの成分は、着色剤として利用された銅原料の特徴を示唆するものであり、これまでにも着色剤として青銅が用いられた可能性が指摘されている(肥塚1995)。日本列島で流通した淡青色のカリガラスに適用される典型的な着色剤の特徴を有する。

筆者らは、日本列島で出土するカリガラスを CaO と Al_2O_3 の含有量から二種類(Group P I, Group P II)に分類している(Oga and Tamura 2013)。本資料は Al_2O_3 含有量が多く CaO 含有量が少ない、高アルミナタイプのカリガラス(Group P II)に相当する(第61図)。既往研究は引き伸ばし法による小玉を中心とした分類ではあるものの、Group P Iはコバルト着色の紺色カリガラスに、Group P IIは銅着色の淡青色カリガラスに対応することが明らかとなっている。なお、本資料は鋳型で製作された可能性があり、化学組成の取り扱いには注意を要するが、複数箇所で分析を実施した結果に有意な差異は認められなかったことから、異なる種類のガラスが混合されている可能性は低い。

ガラス小玉については、カリガラス、ソーダガラス、カリ鉛ガラス製のものが存在することが分った。このうち、カリ鉛ガラス製の小玉は巻き付け法で製作された1点(No.16)のみで、融剤として鉛(PbO : 32.02%)に加えてカリウム(K_2O : 10.6%)を含むガラスである。カリ鉛ガラスは、北宋時代の中国で初めて生産されたと考えられているガラスである(Brill, et al. 1979)。日本列島におけるカリ鉛ガラスの初現は、中国からの舶載品で、985年に製作された京都府清涼寺の木造釈迦如来立像の像内に納められていたガラス瓶である(山崎1987、由水1966)。12世紀になると玉類としての流通が増加する事が明らかとなっている。すなわち、本資料は、古墳時代の遺構に伴う資料ではないと判断される。そこで、以下では、カリガラスおよびソーダガラスについて詳述する。

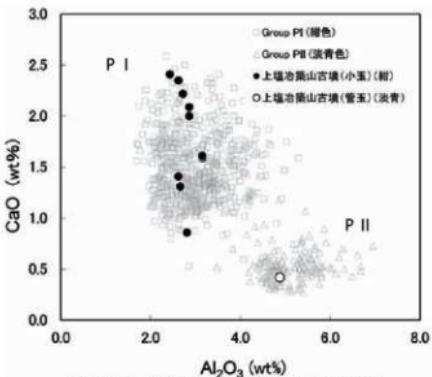


第60図 AR画像(上は配置写真)

カリガラス 本資料中に10点確認した(No.24, 36, 55, 56, 59, 61, 62, 63, 65, 96)。いずれも引き伸ばし法で製作された紺色透明を呈するガラス小玉である。このうち、No.63は一部が欠損しており、表面の風化がやや進んでいる。このため、 K_2O の含有量が4.5%とカリガラスとしては少ない値を示したが、風化により表面のカリウムが溶脱したためと考えられる。AR法では比較資料のBCR126A(K_2O :10.4%)よりも濃い画像が得られており、本来の K_2O 含有量は他のカリガラス小玉と同様に高いと推定される(第60図)。これらは、カリガラスのなかでも、 Al_2O_3 含有量が相対的に少なく、 CaO 含有量が多いタイプのカリガラス(Group P I)に相当する(第61図)。着色に関与する成分としては、酸化コバルト(CoO)を0.06-0.11%含有しており、コバルトイオンが主要な着色成分である。さらに、コバルト原料の不純物と考えられる MnO を1.76-2.52%含有する一方で、 CuO および PbO の含有量がきわめて少ない(0.1%未満)という、これまでに知られているGroup P Iのカリガラスの典型的な着色剤の特徴を有する。

ソーダガラス ソーダガラスはナトリウムを融剤とするガラスで、本資料の中で最も多く、69点が該当する。ソーダガラスは MgO , K_2O , CaO , Al_2O_3 の含有量から、5種類に細分される(Group S I～S V)(Oga and Tamura 2013)。上塩冶築山古墳出土品について、これらの既存グループへの帰属を検討した結果、高アルミナタイプのソーダガラス(Group S II), 植物灰タイプのソーダガラス(以下、植物灰ガラス)(Group S III), ナトロン主体タイプのソーダガラス(以下、ナトロン主体ガラス)(Group S IV)が存在することが明らかとなった(第62図)。

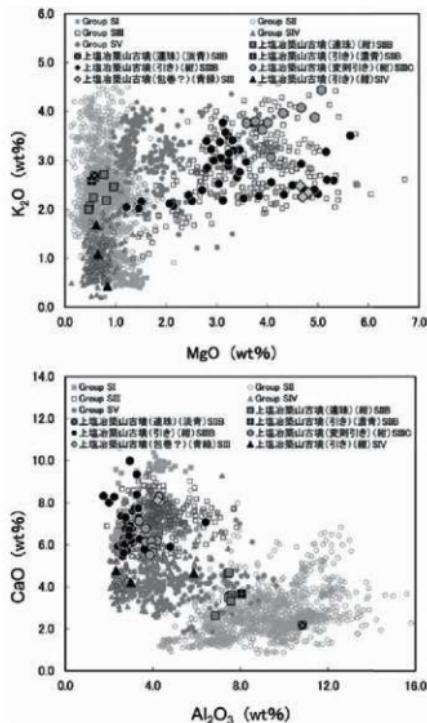
高アルミナタイプのソーダガラス(Group S II)は Al_2O_3 含有量が多く、 CaO 含有量が少ないソーダガラスである。8点確認された。内訳は、連珠法による紺色透明のもの6点(No.38, 38, 42, 43, 44, 45)、連珠法による淡青色半透明(淡青色半透明)のもの1点(No.15)および引き伸ばし法による濃青色透明のガラス小玉1点(No.88)である。高アルミナタイプのソーダガラス(Group S II)は、日本列島での流通時期と着色剤からGroup S II AとGroup S II Bに細分される。本資料は、着色剤の特徴などから古墳時代前期後半以降に出現する引き伸ばし法による多彩な色調のガラス小玉から構成されるGroup S II Bに相当する。ただし、日本列島で出土するGroup S II Bは、圧倒的多数が引き伸ばし法によるガラス小玉であるのに対し、本資料では8点中7点(No.15, 38, 38, 42, 43, 44, 45)が連珠法で製作されたガラス小玉であり、引き伸ばし法によるものは1点のみであった(No.88)。また、本資料の多くが紺色透明を呈するが、Group S II Bにおいて紺色の出現頻度は高くない。すなわち、本資料のなかでNo.88のみ典型的なGroup S II Bであるが、それ以外は製作技法または着色



第61図 化学組成によるカリガラスの分類

剤の特徴において、Group S II B の中ではやや特殊な種類であるといえる。

着色に関与する成分については、紺色透明のガラス小玉は CoO を 0.06-0.11% 含有していることから、コバルトイオンが主要な着色成分である。ただし、コバルト原料の不純物と考えられる成分については、MnO 含有量が少ない (0.09-0.12%) 点で同色のカリガラス (Group P I) とは異なる特徴をもつ。MnO が少ないというコバルト原料の特徴は、次に述べる植物灰ガラス (Group S III) に適用されるコバルト原料の特徴と一致する。ただし、植物灰ガラス (Group S III) に適用されるコバルト原料に関しては、CuO および PbO を 0.1-0.2% 程度含有するのが一般的であるのに対し、これらの高アルミナタイプのソーダガラス (Group S II B) はいずれの成分もカリガラス (Group P I) より多いものの、植物灰ガラス (Group S III) よりはやや少ない。ただし、この差が有意なものであるかどうかを判断するには、さらなるデータの蓄積が必要である。淡青色半透明のガラ



第62図 化学組成によるソーダガラスの分類

(上： K_2O vs. MgO 、下： CaO vs. Al_2O_3)

ス小玉 (No.15) は、着色成分として CuO を 0.95% 含有しており、銅イオンによる着色である。鉛および錫をわずかに含む。濃青色透明のガラス小玉 (No.88) は、CuO を 0.47% 含有しており、銅イオンが主要な着色成分である。これ以外に MnO を 0.24% 含有しており、やや暗めの色調に寄与していると考えられる。すなわち、銅とマンガンによって複合的に濃青色の色調を得ていると考えられる。

植物灰ガラス (Group S III) は、低 Al_2O_3 高 CaO のソーダガラスのうち、 MgO と K_2O の含有量が 1.5% よりも多いもので、ソーダ原料に植物灰を利用したと考えられているガラスである。日本列島で流通した Group S III のガラス小玉については、製作技法と化学組成および流通時期から Group S III A, S III B, S III C に細分される。上塩治築山古墳出土品については、引き伸ばし法で製作された 44 点が Group S III B、変則的な引き伸ばし法で製作された 9 点が Group S III C に相当する。これらはいずれも紺色透明を呈する。また、既存の細分 Group S III A ~ Group S III C には当てはまらないが、連珠法で製作された紺色透明のもの 1 点 (No.40) と、包み巻き法で製作されたと推定される青緑色

透明の比較的大型のもの3点(No.18, 19, 20)についても植物灰ガラスであった。

植物灰ガラスのうちGroup S III Bは、MgOやK₂Oの含有量の変異が大きく、両者の含有量は少ないものでは1.5%程度の範囲まで連続的に分散するのが特徴である。すなわち、MgOやK₂Oの含有量が少ない種類のガラスとの混合が推定される。現時点では、Al₂O₃やCaOの含有量などが比較的類似するナトロンガラスとの混合の可能性が最も高いと判断している。着色に関与する成分としては、CoOが0.05-0.15%含まれており、コバルトイオンが主要な着色要因である。コバルト原料の不純物と考えられる微量のCuOとPbOが検出される。一方で、MnOはGroup P Iなどに比べて少ないと、MnOの含有量のばらつきは比較的大きく、0.06~0.71%の範囲である。このような特徴をもつコバルト原料は、これまでに知られているGroup S III Bのガラス小玉に共通して用いられている。

一方、Group S III Cは、変則的な引き伸ばし法で製作された植物灰ガラス小玉である。Group S III CはGroup S III Bとは異なり、MgOおよびK₂Oの含有量が3.0%を下回ることはほとんどない。上塗治築山古墳出土資料でもその傾向は確認された。Group S III Cには様々な色調のものが知られるが、紺色透明のものが圧倒的に多い。本資料の色調もすべてコバルト着色の紺色透明であった(CoO:0.04-0.07%)。MnOが少なく、CuOおよびPbOをわずかに含む点で上述のGroup S III Bと類似するが、PbOの含有量がわずかに多い(PbO:0.13-0.35%)点はこれまでに知られているGroup S III Cの特徴と一致している。

上記以外の植物灰ガラスのうち、連珠法で製作された1点(No.40)については、引き伸ばし法で製作されたGroup S III Bのガラス小玉と基礎ガラスの化学組成および着色剤の特徴において有意な差異は認められることから、同種のガラスの可能性が高いと考えている。

一方、青緑色透明を呈するガラス小玉(No.18, 19, 20)については、MgOの含有量が多く、明確にMgO>K₂Oの傾向を示す。さらに、CaOの含有量が多い点などにおいて他のどの植物灰ガラスとも類似しない。着色に関与する成分はFe₂O₃のみであり、鉄イオンによる着色である。

最後にナトロン主体ガラス(Group S IV)製の小玉について述べる。本資料中には3点確認された(No.57, 58, 60)。Group S IVは、主成分の化学組成はナトロンガラスと類似するものの、典型的なナトロンガラスと比較すると微量元素や製作技法の点でいくつかの重要な相違があるため、筆者らが「ナトロン主体ガラス」として典型的なナトロンガラスからは除外しているグループである(Oga and Tamura 2013, 大賀・田村 2015)。すなわち、典型的なナトロンガラス(Group S I)と比較するとCaO含有量が少なく、K₂O含有量がナトロンガラスの基準値である1.5%を超えるものが一定量存在し、かつMnOを多量に含むコバルト原料の特徴は、典型的なナトロンガラス(Group S I)ではなく、インド～東南アジアのガラスであるカリガラス(Group P I)と共に通する。さらに、引き伸ばし法による典型的なインド・パシフィックビーズであることからも、インド～東南アジアにかけての地域で生産されたガラスである可能性が高いと考えている。さらに筆者らの最近の調査で、ストロンチウム同位体比分析によってもGroup S IVのガラス小玉は、地中海世界で製作されたナトロンガラスとは異なる値をもつことが示された(田村・申 2017)。本遺跡出土品も上記の特徴を有しており、典型的なGroup S IVであるといえる。

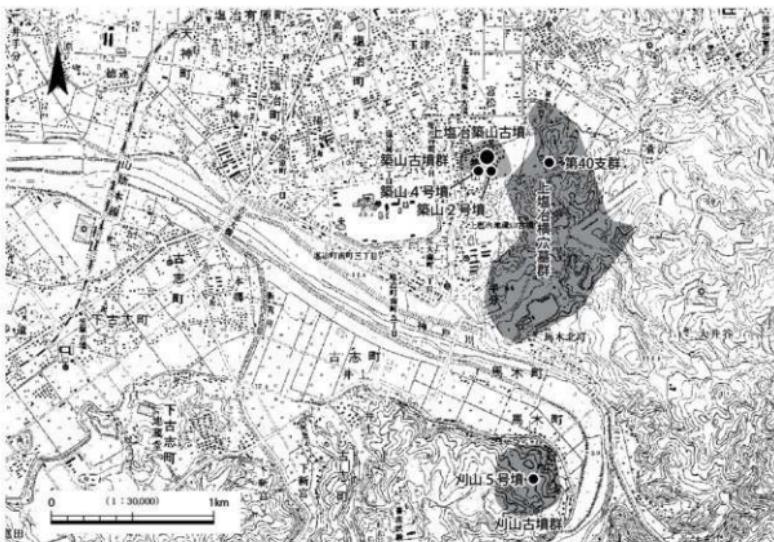
(3) 上塩治築山古墳のガラス玉の構成

本調査で、上塩治築山古墳のガラス玉の製作技法および材質的特徴が明らかとなった。ここでは、上塩治築山古墳出土のガラス玉の主要な種類について日本列島での流通時期を概観し、時期比定にかかる重要な特徴を挙げておきたい。まず、上塩治築山古墳出土品に含まれるGroup P IやGroup S IVのガラス小玉は弥生時代から流通する。ただし、本資料のような直径が6 mmを超えるような大型で端面が顕著に磨かれて臼状を呈するものは、古墳時代中期前半の特徴であることが指摘されている(石橋ほか2016)。一方、本資料の中でも最も多いGroup S III Bのガラス小玉は、古墳時代中期後半に出現し、後期後半にかけて流入する代表的な種類である。分析事例は少ないものの、連珠法によるGroup S II Bのガラス小玉もGroup S III Bのガラス小玉とほぼ同時期に流通していると考えられる。

上塩治築山古墳出土品の中でも時期比定にかかる重要な要素としては、変則的な引き伸ばし法で製作されたGroup S III Cのガラス小玉と包み巻き法によると推定した青緑色透明の植物灰ガラス製小玉が挙げられる。とくに、変則的な引き伸ばし法で製作されたガラス小玉については、流入の画期を象徴する事例として、奈良県牧野古墳および飛鳥寺塔心礎出土例が挙げられ、古墳時代後期末の陶邑TK209型式期に出現したと考えられている(大賀2010、田村・大賀2015)。青緑色透明の植物灰ガラス製の丸玉についても、Group S III Cと相前後して古墳時代後期末頃に新たに流入する(大賀・田村2017)。現在のところ、分析事例は少ないものの、福岡県大池北1号墳(2点)、福岡県相原2号墳(1点)、佐賀県東福寺14号墳(1点)から同種のガラス小玉が出土している。また、福岡県稻元久保Ⅲ-4号横穴墓(15点)、福岡県相原2号墳(2点)、山口県大浦8号墳(1点)からも、色調がやや淡い緑色を呈するものの、形態や化学組成の特徴が類似するガラス小玉が出土している。

さらに、出雲市所在の近接する時期の複数の古墳から出土したガラス玉と比較し、上塩治築山古墳のガラス玉の構成について検討する。比較対象とするのは、上塩治横穴墓群第40支群25号横穴墓、同27号横穴墓、築山2号墳、同4号墳、および刈山5号墳(第63図)から出土したガラス玉である。このうち、上塩治横穴墓群第40支群出土品の材質分析結果については、既に報告済みである(須賀編2016)。築山2号墳、同4号墳および刈山5号墳出土品の材質分析は本調査による。結果は第12~19表に記載した。各遺跡出土品の概要を下記に述べる。

築山2号墳からは、上塩治築山古墳と同様に変則的な引き伸ばし法によるGroup S III Cのガラス小玉が11点((21)-48~58)出土している点が注目される。さらに、青緑色透明の小玉も1点((21)-10)出土しており、上塩治築山古墳出土品と色調、大きさ、形状などの点で極めて類似する。築山2号墳からは、上記以外に、引き伸ばし法で製作されたガラス小玉として、Group P I(4点)、Group S II B(21点)、Group S III B(2点)、Group S IV(2点)が含まれている。Group S II Bが最も多く、濃青色透明、黄緑色半透明、黄色不透明のものがあるが、人工黄色顔料の錫酸鉛を利用して着色された黄緑色半透明および黄色不透明小玉が多いのが一つの特徴といえる。また、当古墳出土のガラス小玉には、二次的な製作技法によると考えられる大型のガラス小玉の存在が目立つ。いずれも植物灰ガラス(Group S III)を素材としている。端面が研磨されるものと研磨されないものがあり、特に後者は化学組成が一的である。なお、前者の化学組成はGroup S III Bと、後者の化学組成はGroup S III Cに



第63図 上塙冶築山古墳に近接するガラス玉出土古墳

類似しており、素材ガラスと製作時期を考えるうえで注目される。

一方、築山4号墳は、斑点紋のトンボ玉1点と二次的な製作技法による大型のガラス小玉1点を除くとすべて引き伸ばし法で製作されたガラス小玉であった。変則的な引き伸ばし法によるGroup S III Cは含まない。引き伸ばし法で製作されたガラス小玉はすべてGroup S II Bで、濃青色透明、淡青色透明、紺色透明、黄緑色半透明、黄色不透明があり、築山2号墳と同様に人工黄色顔料の錫酸鉛を使用したものが比較的多い。トンボ玉の母玉は複数の植物灰ガラス製の紺色ガラス片を融着して製作しており、斑点部分には引き伸ばし法で製作されたGroup S II Bの黄緑色ガラス小玉の破片を象嵌している。なお、母玉部分の化学組成は場所によって特にMgOの値に差が認められるが、化学組成にばらつきが大きい点も含めてGroup S III Bの特徴と一致しており、素材ガラスにはGroup S III Bが利用された可能性が示唆される。

刈山5号墳は、総数210点のうち、鋳型法による紺色ガラス小玉が101点と最も多のが最大の特徴である。鋳型法によるガラス小玉は、異なる種類のガラスが混合される可能性があるため、分析値の扱いに注意が必要であるが、当古墳出土品については、Group S III Bと材質的変異が重なるため、Group S III Bを主要な素材として製作されていると考えられる。次に多いのが、引き伸ばし法によるGroup S III Bで98点である。その他は、引き伸ばし法によるGroup P Iが1点、Group S II Bが7点（濃青色2点、紺色3点）、連珠法によるGroup S II Bが1点、斑点紋のトンボ玉が2点である。変則的な引き伸ばし法によるGroup S III Cは含まない。斑点紋のトンボ玉は、Group S III Bを素材として融着法で製作されたと考えられる紺色母玉に、引き伸ばし法で製作されたGroup S II Bの黄緑

色ガラス小玉および黄色ガラス小玉の破片を象嵌している。基本的に築山4号墳のものと類似するが、黄色不透明ガラスが象嵌されている点で異なる。

上塩治横穴墓群第40支群25号横穴墓および27号横穴墓については、既報告のため簡潔に記すが、すべて引き伸ばし法によるガラス小玉であり、Group S II B および Group S III B が主要な構成要素である。変則的な引き伸ばし法による Group S III C は含まない。

以上、出雲市内の複数の古墳から出土したガラス玉を概観したが、上塩治築山古墳出土品との比較では、Group S III C の有無が重要な要素となる。すなわち、ガラス玉の構成から判断すると、上塩治築山古墳と築山2号墳は Group S III C を含む点で、築山4号墳、上塩治横穴墓群第40支群25号・27号横穴墓、刈山5号墳よりも新しい様相を有しており、古墳時代後期末のTK209型式期、もしくは6世紀末ないし7世紀初頭に位置づけられると判断される。

5 結語

本調査では、上塩治築山古墳から出土したガラス玉について、全資料の網羅的な分析調査により、製作技法や基礎ガラスの種類、着色剤の特徴について検討を行った。その結果、植物灰ガラス製の変則的な引き伸ばし法によって製作された小玉と包み巻き法による青緑色透明の丸玉の存在に注目し、古墳時代後期末のTK209型式期に位置づけられると判断した。さらに、近接する他の遺跡から出土したガラス玉と比較検討し、遺跡間でのガラス玉の構成の異同を明らかにしたことで、各遺跡の時期を検討する上でも重要なデータを提示できたと考えている。

(田村朋美)

【参考文献】

- 石橋宏・大賀克彦・西川修一 2016 「つくば市免野井古墳群の再検討」『東生』第5号 東日本古墳確立期土器検討会 129～158頁
- 大賀克彦 2002 「日本列島におけるガラス小玉の変遷」『小羽山古墳群』清水町埋蔵文化財発掘調査報告書』V 清水町教育委員会 127～145頁
- 大賀克彦 2010 「群集埴築造の二つの契機」『遠山昭登君追悼考古学論集 遠古登攀』遠古登攀刊行会 289～303頁
- 大賀克彦・田村朋美 2015 「古墳時代前期のナトロンガラス」『古代学』第7号 日本考古学協会 1～11頁
- 大賀克彦・田村朋美 2017 「植物灰ガラスの多様性と生産地に関する考古科学的研究」『日本文化財科学会第34回大会研究発表要旨集』日本文化財科学会 126～127頁
- 肥塚隆保 1995 「古代珪酸塩ガラスの研究」『文化財論叢II』奈良国立文化財研究所創立40周年記念論文集刊行会 929～967頁
- 肥塚隆保・田村朋美・大賀克彦 2010 「材質とその歴史的変遷」『月刊文化財』No.566 第一法規 13～25頁
- 須賀照隆編 2016 『上塩治横穴墓群 第40支群』県道出雲三刀屋線上塩治工区道路改良工事に伴う埋蔵文化財

- 発掘調査報告書 出雲市の文化財報告 32 出雲市教育委員会
- 田村朋美・大賀克彦 2015 「目梨泊遺跡出土ガラス小玉の考古科学的検討」『枝幸研究』第6号 オホーツクミュー
ジアムえさし 19 ~ 33 頁
- 田村朋美・申基澈 2017 「Sr 同位体比による日本出土古代ガラスの産地推定の試み」『日本文化財科学会第34回
大会研究発表要旨集』日本文化財科学会 36 ~ 37 頁
- 山崎一雄 1987 『古文化財の科学』思文閣
- 由水常雄 1966 「清涼寺・积迦如来立像の胎内納人物のガラスについて」『美術史研究』4 早稲田大学美術史學
会 53 ~ 72 頁
- Brill, R.H., Yamasaki, K., Barnes, I. L., Rosman, K. J., Diaz, M. 1979 *Ars Orientalis*, vol.11, p87
- Oga, K., Tamura, T. 2013. Ancient Japan and the Indian Ocean Interaction Sphere: Chemical Compositions,
Chronologies, Provenances and Trade Routes of Imported Glass Beads in Yayoi-Kofun Period (3rd Century
BCE-7th Century CE). *Journal of Indian Ocean Archaeology*, 9, pp.35-65.
- Tamura, T., Oga, K. 2016. Archaeometrical investigation of natron glass excavated in Japan, *Microchemical
Journal*, vol.126, pp.7-17.

第10-1表 上塙治築山古墳ガラス玉分析結果（1）

分析番号	報告書番号	種類	製作技法	材質			着色材	色調	備考
				大別	細別	Group			
No.7	72	菅玉	誘型	カリ	高アルミナ	SHB		淡青色透明	
No.15	74-1	小玉	連珠	ソーダ	高アルミナ	SHB		淡青色半透明	
No.16	z	丸玉	巻き付け	カリ鉛				淡青色透明	比重：3.4，混入
No.18	73-1								
No.19	73-2								
No.20	73-3								
No.21	78-1								
No.22	78-2								
No.23	78-3								
No.24	78-16								
No.25	78-4								
No.26	78-5								
No.27	78-6								
No.28	78-7								
No.29	78-8								
No.30	78-9								
No.31	78-10								
No.32	78-11								
No.33	78-12								
No.34	78-13								
No.35	78-14								
No.36	78-17								
No.37	78-15								
No.38-1		小玉 (二連)							
No.38-2	74-2								
No.39	74-3				高アルミナ	SHB			
No.40	74-4				植物灰	SHB			
No.42	74-5								
No.43	74-6				高アルミナ	SHB			
No.44	74-7								
No.45	74-8								
No.46	76-1								
No.47	76-2								
No.48	76-3								
No.49	76-4								
No.50	76-5								
No.51	76-6								
No.52	76-7								
No.53	76-8								
No.54	76-9								
No.55	77-1								
No.56	77-2								
No.57	75-1								
No.58	75-2								
No.59	77-3								
No.60	75-3								
No.61	77-4								
No.62	77-5								
No.63	77-6								
No.64	75-4								
No.65	77-7								
No.66	75-5								
No.67	75-6								
No.68	75-7								
No.69	75-8								
No.70	75-9								
No.71	75-10								
No.72	75-11								
No.73	75-12								
No.74	75-13								
No.75	75-14								
No.76	75-15								
No.77	75-16								
No.78	75-17								
No.79	75-18								

第11-1表 上塙冶築山古墳ガラス玉分析結果（2）

分析番号	報告書通番	種類	製作技法	材質			着色材	色調	備考
				大別	細別	Group			
No.80	75-19	小玉	引き伸ばし	ソーダ	植物灰	SHIB	コバルト	紺色透明	
No.81	75-20				高アルミナ	SIB	銅・マンガン	濃青色透明	
No.82	75-21				植物灰	SHIB	コバルト	紺色透明	
No.83	75-22								
No.84	75-23								
No.85	75-24			カリ	中アルミナ	PI			
No.86	75-25								
No.87	75-26								
No.88	75-27								
No.89	75-28								
No.90	75-29								
No.91	75-30								
No.92	75-31								
No.93	75-32								
No.95	75-33								
No.96	77-8								

第12-1表 築山2号墳ガラス玉分析結果（1）

分析番号	種類	製作技法	材質			着色材	色調	備考
			大別	細別	Group			
(21)-8	小玉	二次的（融着）	ソーダ	植物灰		コバルト	紺色透明	大型（端面研磨） SHIB を素材か
(21)-9			ソーダ	植物灰		鉄	青緑色透明	大型
(21)-10			ソーダ	植物灰		コバルト		大型（端面研磨） SHIB を素材か
(21)-11			ソーダ	植物灰				大型（端面研磨） SHIB を素材か
(21)-12			ソーダ	植物灰				大型（端面研磨） SHIB を素材か
(21)-13		二次的（巻き付け？）	ソーダ	植物灰		コバルト		大型（端面研磨） SHIB を素材か
(21)-14			ソーダ	植物灰				大型（端面研磨） SHIB を素材か
(21)-15								
(21)-16								
(21)-17								
(21)-18								
(21)-19								
(21)-20								
(21)-21								
(21)-22								
(21)-23								
(21)-24								
(21)-25								
(21)-26								
(21)-27								
(21)-28								
(21)-29								
(21)-30								大型 SHIB を素材か
(21)-31								
(21)-32								
(21)-33								
(21)-34								
(21)-35								
(21)-36								
(21)-37								
(21)-38								
(21)-39								
(21)-40								
(21)-41								
(21)-42								
(21)-43								
(21)-44								

第13-1表 築山2号填ガラス玉分析結果(2)

分析番号	種類	製作技法	材質			着色材	色調	備考
			大別	細別	Group			
(21)-45	小玉	二次的 (巻き付け?)	変形的 引き伸ばし	ソーダ	植物灰	SHIC	コバルト	紺色透明
(21)-46								
(21)-47								
(21)-48								
(21)-49								
(21)-50								
(21)-51								
(21)-52								
(21)-53								
(21)-54								
(21)-55	小玉	二次的 引き伸ばし	ソーダ	植物灰	SHIB	PI	銅 + マンガン	濃青色透明
(21)-56								
(21)-57								
(21)-58								
(21)-59								
(21)-60			ソーダ	ナトロン主体	SIV	PI	銅	淡青色透明
(21)-61								
(21)-62								
(21)-63			カリ	中アルミナ	SHB	銅 + 鋼酸鉛	黄緑色半透明	埋め込み
(21)-64								
(21)-65								
(21)-66								
(22)-1								
(22)-2	小玉	二次的 引き伸ばし	ソーダ	高アルミナ	SHB	銅酸鉛	黄色不透明	大型 SHIC を素材?
(22)-3								
(22)-4								
(22)-5								
(22)-6								
(22)-7								
(22)-8								
(22)-9								
(22)-10								
(22)-11								
(22)-12								
(22)-13								
(22)-14								
(22)-15								
(22)-16								
(22)-17								
(22)-18								
(22)-19								
(22)-20								
(22)-21								

第14-1表 築山4号填ガラス玉分析結果(1)

分析番号	種類	製作技法	材質			着色材	色調	備考
			大別	細別	Group			
(37)-7	トンボ玉	二次的 引き伸ばし?	母玉 1	植物灰	SHB	コバルト	紺色透明	融着 SHIB を素材
			母玉 2					
			斑点紋 1					
			斑点紋 2					
			斑点紋 3					
(37)-8			ソーダ	高アルミナ	SHB	銅 + 鋼酸鉛	黄緑色半透明	埋め込み
(37)-9								
(37)-10								
(37)-11								
(37)-12								
(37)-13								
(37)-14								
(37)-15								
(37)-16								
	小玉	引き伸ばし	ソーダ	植物灰	SHB	コバルト	紺色透明	大型、SHIC を素材?

第15-1表 築山4号墳ガラス玉分析結果（2）

分析番号	種類	製作技法	材質			着色材	色調	備考
			大別	細別	Group			
(37)-17	小玉	引き伸ばし	ソーダ	高アルミナ	SHB	銅+マンガン	濃青色透明	破片
(37)-18						銅+錫酸鉛	黄緑色半透明	
(37)-19						銅酸鉛	黄色不透明	
(37)-20						銅+マンガン	濃青色半透明	
(37)-21								
(37)-22								
(37)-23								
(37)-24								
(37)-25								
(37)-26								
(37)-27								

第16-1表 剣山5号墳ガラス玉分析結果（1）

分析番号	種類	製作技法	材質			着色材	色調	備考
			大別	細別	Group			
1	小玉	引き伸ばし	ソーダ	植物灰	SHB	コバルト	紺色透明	
2				高アルミナ	SHB			
3			ソーダ	植物灰	SHB			
4				カリ	中アルミナ			
5								
6								
7								
8								
9								
10								
11								
12								
13								
14								
15								
16								
17								
18								
19								
20								
21								
22								
23								
24								
25								
26								
27								
28								
29								
30								
31								
32								
33								
34								
35								
36								
37								
38								
39								
40								
41								
42								
43								
44								
45								
46								
47								

第17-1表 剣山5号墳ガラス玉分析結果（2）

分析番号	種類	製作技法	材質			着色材	色調	備考
			大別	細別	Group			
48		鋳型						SHIB を素材
49								
50		引き伸ばし	ソーダ	植物灰	SHIB			
51								
52		鋳型						SHIB を素材
53								
54								
55								
56								
57								
58								
59								
60								
61								
62								
63								
64								
65								
66								
67								
68								
69		引き伸ばし	ソーダ	植物灰	SHIB	コバルト	紺色透明	
70								
71								
72								
73								
74								
75								
76								
77								
78								
79								
80								
81								
82								
83								
84								
85								
86								
87		引き伸ばし	ソーダ	植物灰	SHIB			
88								
89								
90		鋳型						SHIB を素材
91		引き伸ばし	ソーダ	高アルミナ	SHIB	銅+マンガン	濃青色透明	
92				植物灰	SHIB			
93								
94								
95								
96								
97		引き伸ばし	ソーダ	高アルミナ	SHIB	銅+マンガン	濃青色透明	
98								
99		鋳型						SHIB を素材
100		引き伸ばし	ソーダ	植物灰	SHIB			
101								
102								
103								
104								
105								
106								
107								
108								
109								
110								
111								
112		鋳型						SHIB を素材

第18-1表 剣山5号墳ガラス玉分析結果（3）

分析番号	種類	製作技法	材質			着色材	色調	備考
			大別	細別	Group			
113		引き伸ばし	ソーダ	植物灰	SHIB			
114		鋳型						SHIB を素材
115		引き伸ばし	ソーダ	植物灰	SHIB			
116		鋳型						
117		引き伸ばし	ソーダ	植物灰	SHIB			
118		鋳型						SHIB を素材
119		引き伸ばし	ソーダ	植物灰	SHIB			
120		鋳型						
121		引き伸ばし	ソーダ	植物灰	SHIB			
122		鋳型						
123		引き伸ばし	ソーダ	植物灰	SHIB			
124		鋳型						
125		引き伸ばし	ソーダ	植物灰	SHIB			
126		鋳型						
127		引き伸ばし	ソーダ	植物灰	SHIB			
128		鋳型						SHIB を素材
129		引き伸ばし	ソーダ	植物灰	SHIB			
130		鋳型						
131		引き伸ばし	ソーダ	植物灰	SHIB			
132		鋳型						
133		引き伸ばし	ソーダ	植物灰	SHIB			
134		鋳型						
135		引き伸ばし	ソーダ	植物灰	SHIB			
136		鋳型						
137		引き伸ばし	ソーダ	植物灰	SHIB			
138		鋳型						
139		引き伸ばし	ソーダ	植物灰	SHIB			
140		鋳型						
141		引き伸ばし	ソーダ	植物灰	SHIB			
142		鋳型						
143		引き伸ばし	ソーダ	植物灰	SHIB			
144		鋳型						
145		引き伸ばし	ソーダ	植物灰	SHIB			
146		鋳型						
147		引き伸ばし	ソーダ	植物灰	SHIB			
148		鋳型						
149		引き伸ばし	ソーダ	植物灰	SHIB			
150		鋳型						
151		引き伸ばし	ソーダ	植物灰	SHIB			
152		鋳型						
153		引き伸ばし	ソーダ	高アルミナ	SHB			
154		鋳型						
155		引き伸ばし	ソーダ	高アルミナ	SHB			
156		鋳型						
157		引き伸ばし	ソーダ	植物灰	SHIB			
158		鋳型						
159		引き伸ばし	ソーダ	植物灰	SHIB			
160		鋳型						
161		引き伸ばし	ソーダ	植物灰	SHIB			
162		鋳型						
163		引き伸ばし	ソーダ	植物灰	SHIB			
164		鋳型						
165		引き伸ばし	ソーダ	植物灰	SHIB			
166		鋳型						
167		引き伸ばし	ソーダ	植物灰	SHIB			
168		鋳型						
169		引き伸ばし	ソーダ	植物灰	SHIB			
170		鋳型						
171		引き伸ばし	ソーダ	植物灰	SHIB			
172		鋳型						
173		引き伸ばし	ソーダ	植物灰	SHIB			
174		鋳型						
175		引き伸ばし	ソーダ	植物灰	SHIB	銅+マンガン	濃青色透明	
176		鋳型		高アルミナ	SHB	コバルト	紺色透明	SHIB を素材
177		引き伸ばし	ソーダ	植物灰	SHIB			

第19-1表 剣山5号墳ガラス玉分析結果(4)

分析番号	種類	製作技法	材質			着色材	色調	備考
			大別	細別	Group			
178	小玉	連珠	ソーダ	植物灰	SIIIB	コバルト	紺色透明	
179								
180								
181								
182								
183								
184								
185								
186								
187								
188								
189								
190								
191								
192								
193								
194								
195								
196								
197								
198								
199								
200								
201								
202								
203								
204								
205								
206								
207								
208								
トンボ玉1 (み)	トンボ玉	ソーダ	母玉1(上面)	高アルミナ	SIIIB	植物灰	コバルト	紺色透明
			母玉2(中央)					
			母玉3(下面)					
			斑点紋1			銅+銅酸鉛	黄緑色半透明	融着、SIIIBを素材 埋め込み
			斑点紋2			銅酸鉛	黄色不透明	
			斑点紋3					
			斑点紋4					
トンボ玉2 (む)	トンボ玉	ソーダ	母玉1(上面)	高アルミナ	SIIIB	植物灰	コバルト	紺色透明
			母玉2(中央)					
			母玉3(下面)					
			斑点紋1			銅+銅酸鉛	黄緑色半透明	融着、SIIIBを素材 埋め込み
			斑点紋2			銅酸鉛	黄色不透明	
			斑点紋3					
			斑点紋4					

第7章 総括

第1節 金銅冠の検討

1 はじめに

上塩治築山古墳の金銅冠は、毛利光俊彦により鉢巻式帶冠と分類されている（毛利光 1995）。本稿では、鉢巻式の類例を参考に、当古墳の冠の完全復元案を示したい。

上塩治築山古墳冠は『県報告』で復元案が既に提示されている。この案をもとに 1997（平成 9）年に開催された『古代出雲文化展』において「馬上の大首長」実物大復元模型の冠として復元品も作られた（島根県教育委員会・朝日新聞社編 1997）。『県報告』刊行後、3 片の冠破片が再発見された（第 12 図破片（3～5））。出雲弥生の森博物館にこれらが持ち込まれたのは、今回の整理事業が始まった 2015（平成 27）年のことである。そこで、復元案の再検討に着手したが、その途中、『県報告』で金銅冠の報告を担当した大谷晃二が再発見の 3 片を追加した新たな復元案を既に作成したこと、それをもとにした復元品が、島根県立古代出雲歴史博物館（2007 年 3 月開館）で展示されていることを知った⁽¹⁾。

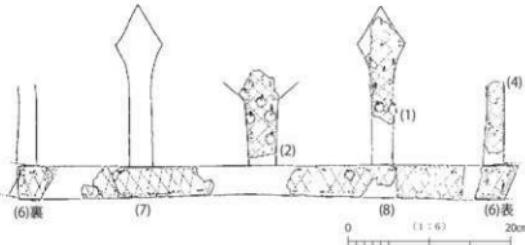
本稿では、『県報告』復元案をもとに新たな案を提示する。前者を旧復元案、後者を新復元案と呼び、本書第 5 章第 1 節では新復元案をもとに各破片の報告をした。まず、過去の復元案の課題点を示し、それを踏まえて新復元案の根拠を示す。最後に上塩治築山古墳冠の特徴に触ることにする。

2 過去の金銅冠復元

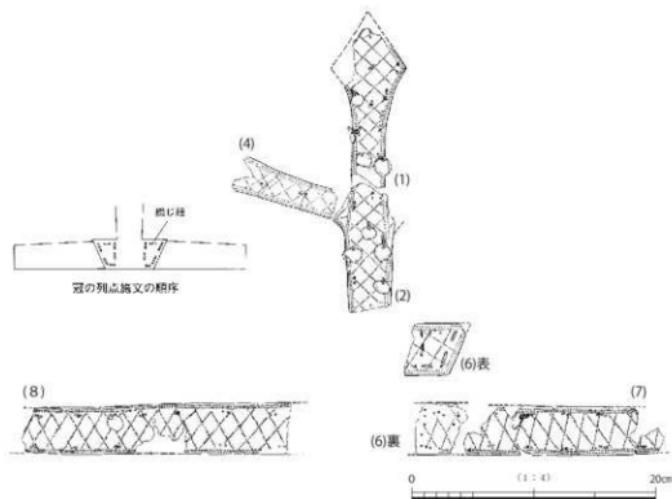
上塩治築山古墳の金銅冠の復元は、梅原未治の実測原図、金銅冠を体系的に研究した毛利光俊彦の復元案（第 64 図、毛利光 1995）、梅原原図をもとに作成された旧復元案 1（第 65 図）、それに再発見された破片を追加して復元された旧復元案 2（第 66 図）⁽²⁾がある。

（1）毛利光復元案

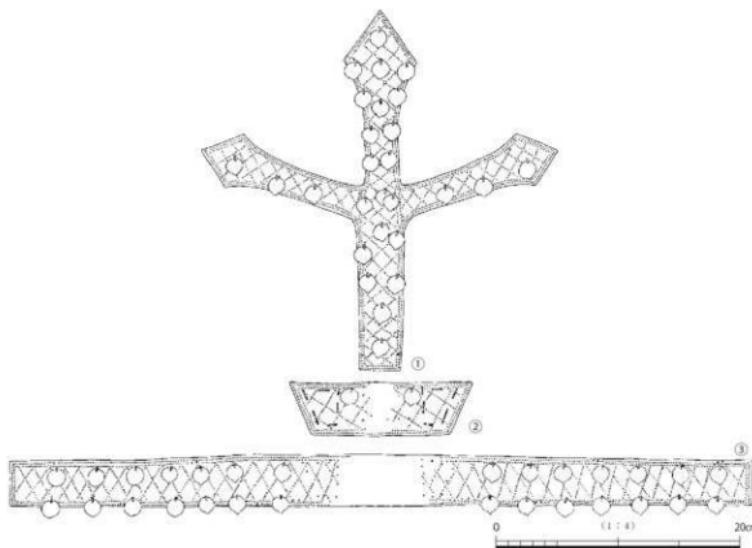
第 64 図は、破片⁽³⁾（3）・（5）がないが、他の破片は現状と同じ保存処理後の形態である。この図の特徴は、複数枚の立飾が帶金に付くこと、破片（6）を帶金の両端としたことである。問題は、破片（7）・（8）には立飾をつけた痕跡がないため、数枚の立飾が付くとは考えにくく、立飾の固定方法に課題が残る。



第 64 図 毛利光復元案



第65図 旧復元案1



第66図 旧復元案2

(2) 旧復元案

第65図の旧復元案1は、破片(3)・(5)がなく、(4)も梅原原図をトレースしたもので、現状とは形が異なる。旧復元案1の特徴は、破片(6)表を立飾基部とし、(6)裏を帶金中央付近の破片としたのが大きな特徴で、それらに残る紐は立飾と帶金の結束用と考えている。この破片を立飾基部と考えた理由は、格子文が同じ正方形だという点にある。立飾基部は破片(6)表の形態から逆台形に復元され、立飾の全形は「土」の字形となる。立飾の枝部先端は、幹部と同じ剣菱形に復元された。帶金の幅は中央が広く、端部は狭い。この帶金の中央表側に「土」の字形の立飾が1枚つく。

この案に3片が追加されたのが第66図の旧復元案2で、立飾①、その台座②、帶金③の3つのパートを紐で綴じけているのが大きな特徴である。パート①には破片(1)～(5)、②には(6)表、③には(6)裏と(7)・(8)が配置されている。基本的には旧復元案1が踏襲されており、変更点は、再発見された破片(3)を立飾の基部としたことにより、(6)表を独立したパートと考えた点にある。帶金③の上に台座②が重なり、最前面に立飾①が付く。破片(3)に残る紐は、立飾と台座を結束するもの、破片(6)に残る紐は台座②と帶金③を固定するもの、と考えられている。

旧復元案から作られた復元品には、帶金の裏面にそれと同じ幅のあて布が取り付けである。

旧復元案の問題は、帶金の両端が現存資料にないとしている復元案であるため、その合わせ目の結束方法が想定できることにある。さらに鉢巻式帶冠に台座の類例がないこと、立飾先端と枝部先端が同じ剣菱形をしているが、そのような類例がないことなどもあげられる。

(3) まとめ

毛利光案と旧復元案は、立飾の枚数と破片(6)の配置に違いがあり、毛利光案には立飾の固定方法、旧復元案には帶金両端の結束方法に課題が残る。

3 新復元案

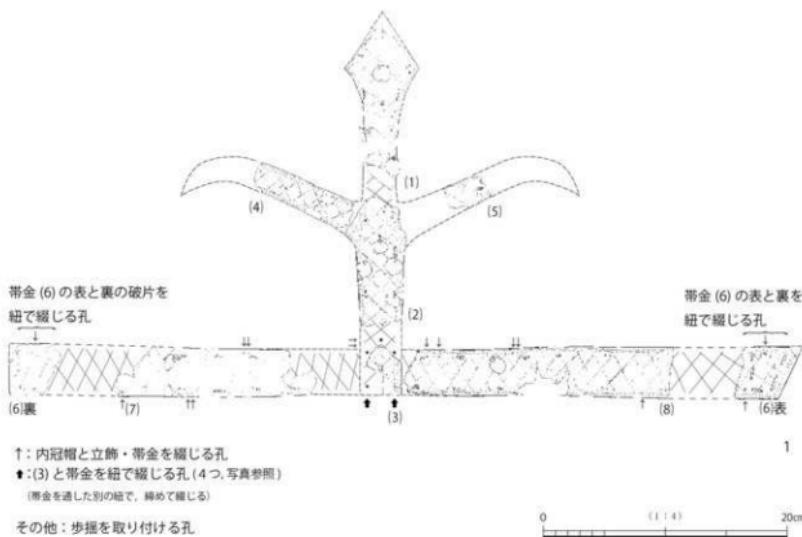
前項の課題を踏まえ作成したのが新復元案である(第67・68図)。新復元案は、立飾1枚、破片(6)を帶金の両端と考えた。では、新復元案の根拠を示していきたい。

(1) 立飾幹部

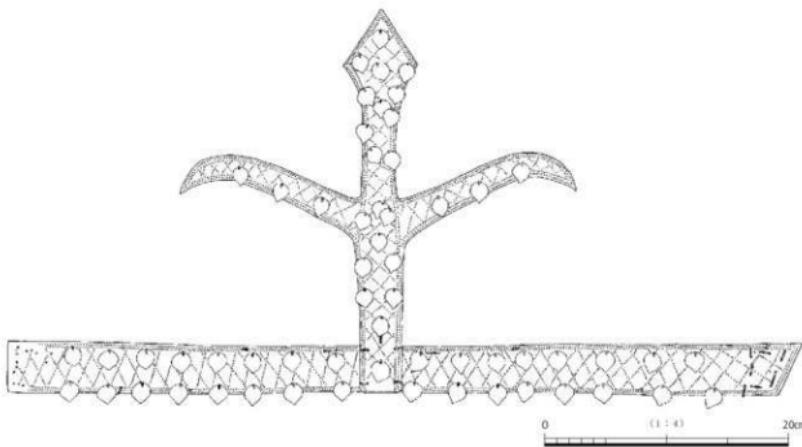
破片(1)の下端周辺に『県報告』には示されなかった格子列点文を確認した。その結果、破片(1)と(2)が、旧復元案1のように近接すると、幅や列点文がうまく合わないことが判明した。菱形の列点格子文を1マスあけて配置すると、矛盾なく復元ラインが引けた。

次は破片(2)と(3)の配置である。破片(2)の下端中央には歩搖を綴じる片方(上)の孔がある。対となる下の孔は欠損した部分にあったと推定する(第67図)。破片(3)上端にも孔があるが、(2)の下端の歩搖孔よりも大きいためこれと対となる孔とは考えにくい。これは内冠帽を綴じ付ける孔(後述)と推定する。以上の点と格子列点文の間隔を踏まえ、破片(2)と(3)は約1.9cm離れていると推定した。

破片(3)の左下には帶金と綴じつけるための孔がある。孔には破片の表裏を一周する有機質の紐が残る。1925年の『島根縣史』に掲載された写真(第12図)から、右下にも同じものがあったよう



第67図 新復元案破片配置図



第68図 新復元案完全図

である（島根縣 1925）。これらを立飾と帶金との綴じ付け痕跡と考えた。左右一対の綴じ付けでは立飾が安定しないから、破片（3）上部の欠損部分にも左右に同じ孔があったと推定する。つまり、立飾と帶金を綴じる孔は4つあったとみられる。また、『島根縣史』の写真から、破片（3）の中央に歩搖があったと推測できる。歩搖取り付け用の針金が裏面に突出するため、破片（3）の横断面形が「へ」の字になっているのであろう。

鉢巻式帶冠は、香川県王墓山古墳冠（陶邑TK10型式期、第70図、笹川編 1992）のように帶金が前、立飾が後ろにあるものが多い。一方、上塙治築山古墳冠は立飾基部の表側に歩搖がつくことから、立飾が前、帶金が後ろになるとみてよい。このような配置は当古墳だけではなく、栃木県桑57号墳の金銅冠にある（第69図）。桑57号墳の立飾は帶金の上に4つの鉢で留められる（第69図1・2）。上塙治築山古墳では、鉢の代わりに4箇所を紐で綴じつけたと推定する。

以上のことから立飾幹部は、復元高約31.4cm以上と推定でき、表面には心葉形の歩搖が21個つくと考えた。

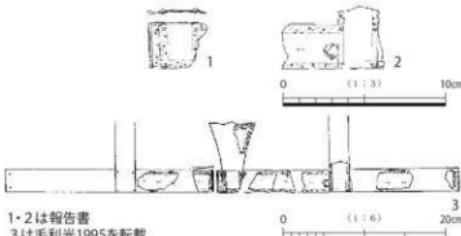
（2）立飾枝部

枝部の破片（4）・（5）は、左右の幅が異なり狭い方に向かって緩やかにカーブしている。この緩やかなカーブは鉢巻式帶冠の外反や内湾する枝部に似る。新復元案は、香川県王墓山古墳金銅冠の立飾先端の枝部（第70図、笹川編 1992）を参考に外反する形を採用し⁽⁴⁾、大きな破片（4）を冠の右に配置した。破片（5）は形と幅、歩搖の位置を破片（4）と対称な位置に配置した。左右の枝部には各3個の歩搖がつくと推定した。

（3）帶金

破片（6）は、2枚の金銅板が重なりあった破片で、立飾と帶金との綴じつけ部分ではなく、帶金を留めつけたその両端と考えた。帶金が完全に残る香川県王墓山古墳冠の頭廻約61cmに合わせて両端の位置を決めた（笹川編 1992）。両端の破片（6）と幅を合わせると左側に破片（6）表と（8）、右側に（6）裏と（7）が配置できる。破片の大きい破片（8）は左右の歩搖間隔が約3～4cmであることから、破片（3）の歩搖から3.5cm離れた位置に（8）がくるように配置した。破片（6）表と（8）の格子列点文をみると、右下がりの列点文の角度が端に向かって緩やかになると考える。破片（8）と（7）には内冠帽を綴じ付ける孔が帶金の縁に複数箇所にあり（第67図↑）、1箇所に2個あるいは1個の孔があく。これらの孔は帶金の上辺および下辺に各6箇所にあり、立飾を中心とする左右対称の規則的な配置をとると考えた。破片（8）の孔と対称な位置に（7）のそれらを合わせ、帶金の破片の配置を確定した。

帶金は、全長約65.1cmを測り、表側には左右に各16個、計32個の歩搖がつくと推定する。



第69図 桑57号墳の金銅冠

(4) 内冠帽

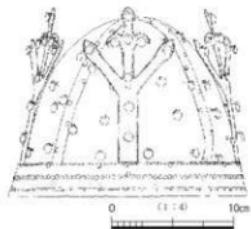
旧復元案では、帶金にある歩摺とは別の孔を、帶金の幅のあて布を縫じつける孔と推定しているが、破片(3)の上端の孔は帶金と重ならない位置にあり、帶金と同じ幅のあて布は考えにくい。新復元案では、これらの孔を布製の内冠帽を縫じつける孔と推測した。布製の内冠帽は韓国で数例確認されている。列島でも千葉県山王山古墳(TK10型式期)の金銅冠に、内冠帽と思われる麻布や木枠が残る(小出1980)。ただ、これでは内冠帽の形状や大きさの復元ができない。ここで参考にしたのは、金銅製内冠帽が鋲留めされている香川県王墓山古墳冠⁽⁵⁾(第70図)である。これは列島の鉢巻式帶冠で唯一、内冠帽の形状がわかる資料である。これを参考に、上塩治築山古墳冠は布製の内冠帽を装着する復元案とした(第71図)。

4 上塩治築山古墳の金銅冠の特徴

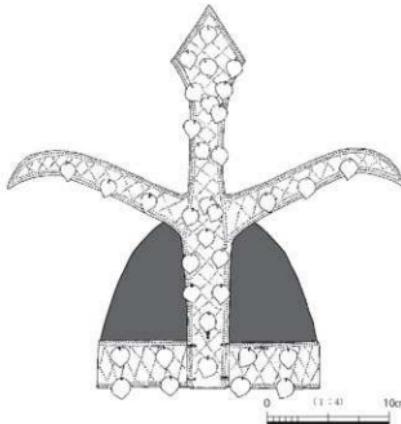
毛利光によれば、鉢巻式帶冠は列島では4～7世紀前半に19点出土しており、8類13種に細分される(毛利光1995)。多くは6世紀のものである。これらには、同じ形状のものは少なく、このことからも、鉢巻式帶冠は限定的な作品だったと推定できる。以上の状況を踏まえて、上塩治築山古墳の金銅冠の特徴を示す。

(1) 立飾

帶冠のシンボルはやはり立飾である。鉢巻式帶冠の立飾は数枚立つものばかりで、上塩治築山古墳冠のように1枚のみのものは特異で他に例がない⁽⁶⁾。立飾先端を剣菱形とするものは、鉢巻式帶冠に類例が多く、別型式の奈良県藤ノ木古墳(陶邑TK43型式期)、千葉県城山1号墳(TK43～TK209型式期)、千葉県稻荷塚古墳(TK43～TK209型式期)、奈良県飛鳥寺塔(TK209型式期)の冠にみられる。これらの剣菱形の立飾をもつ冠の時期はTK43～TK209型式頃と推定できる。ただし、これらの立



第70図 王墓山古墳の金銅冠復元図



第71図 新復元案（内冠帽付）

飾は小形で上塩治築山古墳冠とは大きさや配置がかなり違う。

枝部が外反すると考えたのは、鉢巻式にその例が多いからである。しかし、立飾が1本かつ枝も左右1本ずつしかないような形態は、鉢巻式帶冠の中でもかなり特異である。

立飾の高さは10~20cmのものが多く、約31.4cmもあるのは、鉢巻式帶冠の中では特別に高い。列島内の出土品で30cmを超えるのは、本例と群馬県金冠塚古墳冠(31.0cm)のみである。

(2) 歩搖

列島出土の歩搖付鉢巻式帶冠は9例確認できる。形態不明の2例を除くと6例が円形で最も多い。唯一、上塩治築山古墳冠のものだけが心葉形である。また、他の型式の冠でも心葉形のものは少なく、上塩治築山古墳冠は特異性が強い。

(3) 技法

列点文 立飾および帶金には中央に格子列点文、縁に2列の平行列点文がある。すべて表側から打ち込まれており、「打ち込み列点文」と呼ばれている。このことについて、『県報告』では①~③の特徴を指摘している。

①朝鮮半島および列島の6世紀前半までの冠は、波状列点文が一般的な文様で、6世紀後半に格子列点文が出現することを示し、本例には新しい装飾が施されていること。

②格子列点文を立飾に入れるものは少なく、列島では本例のみであること。

③すべてが「打ち込み列点文」の帶冠は他にはないこと。そして、同時期に「打ち込み列点文」が多用されるのは、双龍環頭大刀や頭椎大刀などの鞘の金銅板であり、これらの工人と上塩治築山古墳冠を製作した工人は同じであったと推定できる、と結論付けた(大谷1999)。列点文からみても上塩治築山古墳冠は特異性が強い。

紐による縫じつけ 立飾と帶金との連結、及び帶金が一周した合せ目の結束方法を紐による縫じつけと理解した。鉢巻式帶冠は鋲留めによる取りつけが一般的で、わずかに金属線による取りつけがある。有機質の紐による縫じつけは極めて珍しい。

5 おわりに

本稿では、上塩治築山古墳の金銅冠を再検討し、新たな復元案を提示した(第67・68・71図)。新復元案は格子状に列点文が施された帶金の中央に、左右一本ずつの枝をもつ剣菱形の立飾りがつくものである。復元高は約31.4cm、帶金の長さ約65.1cm。1枚の板状の立飾と帶金を紐で縫じ合わせて組み立てるのが特徴で、表側には59個の歩搖がつく。そして、冠の内部には内冠帽がつくと推定し、それをつけた状態の正面図も作成した。旧復元案よりも、立飾と帶金、帶金の両端の結束方法、内冠帽を具体的に示すことができたと思う。

この冠の特徴は、まず第一に倭国内の鉢巻式帶冠の中で最も高い立飾をもつことであり、さらに、立飾の形状や格子列点文、打ち込み列点文なども類例のない珍しい特徴である。中国や朝鮮半島の鉢巻式帶冠からかなり変容しており、国産と推定する。

中国四国地方には8点の金銅冠が出土しており、いずれも6世紀のものである。その中で鉢巻式

帶冠は上塩治築山古墳冠と香川県王墓山古墳冠のみである。第70・71図に両者の復元案を示した。同じ鉢巻式帶冠でもかなり形状や素材が異なることがわかる。このように、冠はそれぞれに個性があり、それらの中でも上塩治築山古墳冠は極めて稀な特徴をもっている。

最後になりますが、本稿を作成するに当たり、香川県善通寺市教育委員会の笹川龍一氏には、王墓山古墳金銅冠の復元図の使用でお世話になりました。また、大谷晃二氏、澤田正明氏、松尾充晶氏、桃崎祐輔氏、横須賀倫達氏に指導していただきました。記して感謝します。

(坂本豊治)

註

- (1) 大谷晃二氏から復元案を再考した際の未完原稿と図面を提供いただき、本稿を作成した。
- (2) 大谷氏の復元案をもとに作成された復元品の写真を参考に、坂本が作図した。
- (3) 毛利光復元案と県復元案の破片番号は、本書第5章第12図と同じ。
- (4) 毛利光氏は上塩治築山古墳冠を五角形の立飾の左右に鳥羽形立飾を配した板状・鳥羽形立飾と分類し、鳥系の鉢巻式帶冠と位置付ける。市復元案では、破片を幹部から枝別れするものと理解し、植物系の帶冠と判断した。
- (5) 花谷浩が作成した復元案を掲載した。
- (6) 佐賀県の潮見古墳の立飾が剣菱形となる復元図が『考古資料大観』7に掲載されている(千賀・村上編2003)。所蔵先の武雄市教育委員会に問い合わせたところ、この図の復元についての論考は発表されていないとの回答を得た。毛利光氏の復元案では、立飾の破片の端面は残っておらず、宝珠形に推定復元されている。現状では、鉢巻式帶冠の立飾先端が剣菱形になるものは上塩治築山古墳以外にないと考えている。

参考文献

- 大谷晃二 1999 「上塩治築山古墳出土冠の製作手法と工人」『上塩治築山古墳の研究』島根県古代文化センター
128～133頁
- 大和久瀬平編 1972 『栃木県小山市喜沢小山カントリー俱楽部内桑57号墳発掘調査報告書』小山市教育委員会
- 川上 稔編 1988 『史跡今市大念寺古墳保存修理事業報告書』出雲市教育委員会
- 小出義治編 1980 『上總山王山古墳発掘調査報告書』市原市教育委員会
- 笹川龍一編 1992 『史跡有岡古墳群(王猪山古墳)保存整備事業報告書』善通寺市教育委員会
- 島根縣 1925 『島根縣史』4
- 島根県教育委員会・朝日新聞社編 1997 『古代出雲文化展 神々の国 悠久の遺産』
- 武雄市教育委員会編 1975 『武雄市潮見古墳』
- 千賀久・村上恭通編 2003 『考古資料大観』7 弥生・古墳時代 鉄・金銅製品 小学館
- 奈良国立文化財研究所編 1958 『飛鳥寺発掘調査報告書』奈良国立文化財研究所學報第5冊
- 前蘭実知雄編 1993 『斑鳩藤ノ木古墳 第2・3次調査報告書』奈良県立橿原考古学研究所
- 毛利光俊彦 1995 「日本古代の冠—古墳出土冠の系譜—」『文化財論叢』II 奈良国立文化財研究所創立40周年
記念論文集刊行会 65～129頁

第2節 馬具の検討

上塩治築山古墳から出土した馬具は、全国的にみても傑出した保存状況の良さを保っている。これは、金銀装馬具が横穴式石室奥の小石棺の蓋石上に安置されていたことによるのだろう。金銀装馬具の副葬位置は不明だが、いずれの馬具セットにも繋の革帯が顕著に残っている。

ここでは、まずこれらの馬具に残る繋の詳細を述べる。次に、金銀装馬具の位置づけについて検討を加え、上塩治築山古墳の馬具がもつ意義を考えてみたい。

1 繋の復元

(1) 金銀装馬具の繋

松尾充晶は、金銀装馬具の繋構造について、これが「一枚の幅広の革帯の両縁を袋状に中心に折り返し、合せた両縁を『まつり縫い』のごとく縫い合わせた」袋帯であること、「帯の両側縁にはすべて縁取りのように紐が取り付」き、この紐は「組み紐と見られる」ことを解明した（『県報告』87～89頁）。卓抜な構造復元模式図も添えられることもあって、その後の馬具の繋復元研究に大きな足跡を残す重要な指摘であった。近年、馬具の繋に関しては、李恩碩や片山健太郎が研究を進展させている（李2016、片山2016・2017）。両氏の論考においても、上塩治築山古墳の馬具は重要な位置を占める。そのキーとなる資料は、金銀装雲珠と辻金具である。

金銀装六脚辻金具（通番36～38）や金銀装四脚辻金具（通番43）⁽¹⁾の革帯には、まつり縫いを確認できるが、これらはすべて革帯の裏側にある縫い目である。これらによって、これまで一枚の革を折り返して側辺を突き合せ、それを縫って帯にしたと考えられてきた（『県報告』89頁第54図、（片山2016）の「折返繋」）。たしかにそのような製作方法が一般的なのであろうが、上塩治築山古墳の資料にはそれとは違う革帯も観察できる。

それが、金銀装鏡板付轡の左側の鏡板に連結された金銀装四脚辻金具（第73図1、通番40）である。裏面に残った鏡板立聞方向と直交する革帯（裏面図「革2」）は、帯の表側と裏側とがみえていて、その両者にまつり縫いの糸目が残る。この面繋の「縁飾付繋」は、製品の仕上がり幅と同じ革帯2本を用意し、その中央に組紐を縫い付けたのち、2本をまつり縫いして縫じ合せて袋帯としたもの、と考えられる⁽²⁾。

なお、この金銀装四脚辻金具（通番40）は、鏡板立聞と直交する「縁飾付繋」（第19図の「革2」）の表側と裏側との間に、これと直交する「縁飾付繋」（「革1」）が残っている。「革2」の側面に切込みを入れて、そこに「革1」を通して交差部としたものであろう。

管見では、福井県若狭町十膳の森古墳から出土した馬具に類例がある。十膳の森古墳の辻金具をみると、一方の革帯の側面に切込みを入れてそこに他方の革帯を通すやり方（第73図2）と、繋の交差部で単純に革帯を重ねるやり方（第73図3）の二者があったとわかる⁽³⁾。

以上の検討結果をふまえ、金銀装四脚辻金具の交差部の復元図を示す（第73図4）。

(2) 銀装馬具の繩

銀装四脚辻金具（通番 45、第 73 図 5）に装着された繩が、「幅の細い皮革紐を組緒にした組緒繩」だと指摘したのは片山健太郎である（片山 2016：52・53・65・66 頁、図 15）。銀装辻金具の脚部裏面には、人字形をした細い鈎の突線が並んでいる（第 73 図 5-a・b）。片山は、この痕跡を確認し、またその類例を集成して、これを「二歛組緒繩」と名付けた。細い革紐を杉綾に組み編みしたもの、との指摘は妥当なものであり見事だった。

ただ、銀装四脚辻金具（通番 45）全体を詳細にみるともう少し別の観方もできる。脚裏面に残る組緒（組み紐）の痕跡は「二歛組」のようだが、この個体に残る革帶の厚さは約 1.2cm もある。幅と厚みがほとんど同じで、片山が模式図で示したような、2 本ないし 3 本の革紐を編んだもの（「平打紐」）ではこれほどの厚みにはならない。

また、図に示したように繩の交差部には、辻金具の鉢の輪郭に沿うような形で革帶の側面が残っている（第 73 図 5-c）。一般的な繩の交差部のように、直交する 2 本の革帶を重ねたものならば、側面は矩形の折れ曲がりとして残るはずであり、湾曲した側面とはならない。くわえて、辻金具裏面の中央部には革帶が 2 本重なった状況は認められず、逆に中空状になっている。

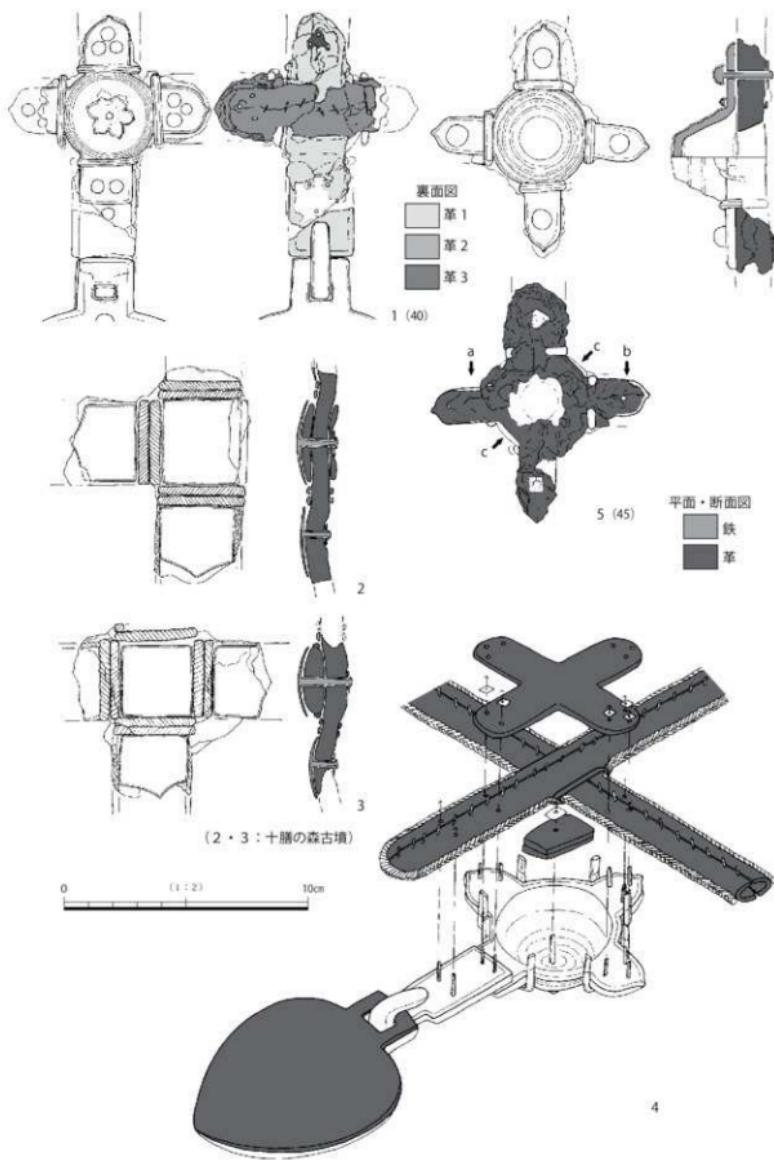
以上のような革帶の残存状況から判断すると、繩の革帶は、片山が指摘したように細い革紐を組み編みした組緒（組み紐）だが、2 本ないし 3 本をもちいる「平打」ではなく、6 本あるいは 8 本を組み編みした「丸打」ないし「角打」だったとみられる。じっさいに復元試作してみると、8 本で組み編みされた組緒は筒状に仕上がり、断面形も四角に近い「角打」となった。これならば 1cm を越える厚みをもった組緒となりうる（第 72 図）。

さらに、この革紐 8 本を組み編みした組緒であれば、2 条の組緒を重ねることなく交差部をつくることができる。まず、革紐 8 本を途中まで組み編みした組緒を 2 組用意し、編んでいない側を突き合せる。そして、それぞれの編まれていない革紐を 4 本ずつに分け、対向する 4 本と 4 本の計 8 本を使って組み編みすれば、すでに仕上がっている部分とは直角方向に組緒（組み紐）ができる。いくつ方向が 90 度切り替わる部分での組緒の側面は、湾曲したカーブを描くし、交差部分の内部は中空となる。これは銀装辻金具（通番 45）に残る組緒の状況とほとんど合致する。

以上のように、当古墳の銀装馬具に使用された繩は、例をみないほど手間のかかった組緒だった。



第 72 図 復元製作した革紐 8 本編みの組緒



第73図 金銀装四脚辻金具と繫復元図、銀装四脚辻金具の繫

(3) 繫の色を想う

上塩治築山古墳の金銀装馬具の繫は、片山のいう「縁飾付繫」である。その色に関する考古学的痕跡や科学的分析成果はない。しかし、それが革本来の色だけ、紡がれたばかりの糸や布の色だったと想像する必要はない、と思う。繫の本体となる革帶が洗革であれば白っぽくみえ、熏革（ふすべがわ）であれば黒かっただろうし、側面に縫いつける組み紐が3色ないし4色の染め糸であれば、色彩的な華やかさはいっそう増しただろう。

奈良時代の組紐の実例は正倉院宝物にある。中倉の小香袋の周囲を飾る角打紐は、紅・紫・黄などの縊繩組の細い組紐で、口を締める紐も外線と同種の紐と、緑・黄・藍の縊繩の組紐を混用する（正倉院事務所編 1988、19・20頁）。

また、銀装馬具にともなう「組緒繫」も、8本の革紐がたとえば4色2本ずつで組み編みされていたとすれば、銀色の杏葉を吊るし、銀色の雲珠と辻金具を並べた尻繫は、じゅうぶんに人目を引くきらびやかなものだったろう。これは単なる想像ではない。

飛鳥時代の馬具工人の一人に鞍作鳥がいた。『日本書紀』によれば、鞍作鳥は、推古13（605）年4月1日（辛酉朔）に「銅（あかがね）・繡（ぬいもの）の丈六の仏像（ほとけのみかた），各一軀（おののおのひととはしら）を造る」ことを命じられ、翌606年の4月8日（乙酉朔壬辰，灌仏会）に造り終えたという。銅・繡の丈六仏像とは、蘇我馬子が発願した飛鳥寺の中金堂に安置された銅造丈六軒迦像と、西金堂に掛けられた丈六繡仏とされる。繡仏はいまに残らないが、天寿国繡帳（中宮寺藏）をみれば、今も色あせない鮮やかな色糸を染める技術が飛鳥時代に確実に存在し、鞍作氏もそれを保持していたことは想像に難くない。鞍作鳥の父・鞍部多須奈の記事は587年にあり（『日本書紀』用明2年4月2日是日条），祖父・鞍部村主司馬達等も584年にみえる（『日本書紀』敏達13年是歲條）から、鞍作氏の諸技術は6世紀後半代に遡るとみてよかろう。

鞍作鳥が丈六像を造った、その飛鳥寺西門の外側10mほどの地下には、飛鳥時代初期に敷設された土管暗渠SX740がある。SX740は瓦製円筒形の土管（長さ50cm前後、筒部径20cm前後）を繋ぎ合わせた施設で、飛鳥寺の西側に100m以上の長さで敷設されている（花谷ほか1997）。この土管内部の堆積土からは大量のベニバナ花粉が検出された。赤色の染料となる花である。土管暗渠上流部にあたる、飛鳥寺南方にベニバナ染め工場があったことはほぼ疑いなかろう。推古11（603）年に定められた官位十二階も、その階位に「当れる色の絛（きぬ）を以て縫へり」とあるよう（『日本書紀』推古11年12月5日条），階位の差が色で表示されていたのも、染色技術の存在が前提となる。

このような技術に裏打ちされた工芸品としての馬具が国際的な檜舞台に立つ時が来た。608年8月3日。この年の4月、遣隋使小野妹子の帰国に随伴した唐使・裴世清は、難波津を経て（6月15日）、この日に飛鳥に入った。唐使を海石榴市（つばきいち、現桜井市）に迎えた飾馬75匹は、金銀の馬具金具だけが光り輝いていたのではない。それをうわまわる、面繫・胸繫・尻繫の三繫の煌びやかな彩りがあればこそその飾馬であったろう。

2 山陰における透十字文心葉形鏡板付轡とその馬具

上塩冶築山古墳の小石棺にともなった透十字紋心葉形鏡板付轡については、『県報告』で松尾が編年的な考察を加え、さらに桃崎祐輔も同種の轡を集成して編年案の改定をおこなうとともに、この馬具のもつ意義に言及している（桃崎 2017）。

松尾と桃崎の研究によれば、山陰地域での透十字紋心葉形鏡板付轡を出土した古墳には、上塩冶築山古墳のほかに次の3古墳がある。

- ①鳥取県松江市大草町岡田山1号墳
- ②鳥取県米子市石州府（せきしょ）5号墳
- ③鳥取県岩美郡岩美町小畑（こばたけ）3号墳

まず、これらの馬具についてその特徴をまとめる。

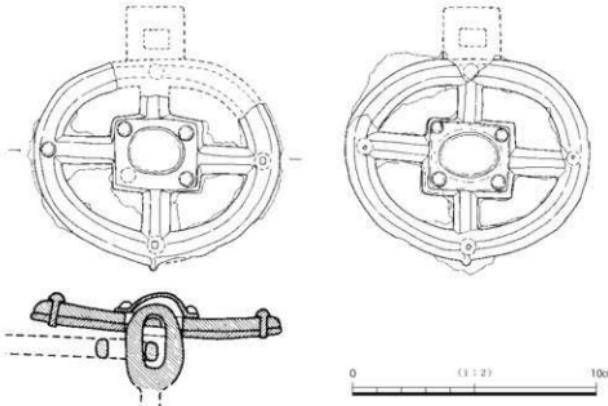
（1）岡田山1号墳の馬具

岡田山1号墳は、出雲国府が設けられた意宇平野の西部にある前方後方墳（全長24m）である。後方部にある横穴式石室から発見された副葬品に、銀象嵌「各田マ」（額田部）銘円頭大刀がある。

馬具は2組分が出土しており、その中に金銅装透十字文心葉形鏡板付轡1組がある（第74図）⁽⁴⁾。ほかに、金銅装鞍金具1組、金銀装雲珠・辻金具2組、馬鈴などがあるが、杏葉はない（松本編1987）。鏡板は、文様板・方形キャップ・鉢頭とも金銅装である。

（2）石州府5号墳の馬具

石州府5号墳は、伯耆西部を流れる日野川右岸、伯耆大山の西麓にある石州府古墳群の円墳（直径32m）である。群内の円墳としては、1号墳（直径40m）に次ぐ規模をもち、横穴式石室から多数の副葬品が発見された。



第74図 岡田山1号墳の轡

石州府5号墳の馬具には、金銀装鞍金具1組（第75図1～6）、円形座金具付鉄製轡1対（7～9）、鉄製鎧金具1組（10～12）、金銅装鏡板付轡（金銅装吊金具付）1組（13～16）、金銅装半球形金具3点（18～20）、金銅装心葉形杏葉1点（第76図1）、金銅装辻金具1点（2）、金銅装飾金具11点（3～13）、鉄製鉗具2点（14・15）、鉄製金具1点（16）がある⁽⁵⁾。ほかに、きわめて端正なつくりの青銅製円形座金具（第75図17）があるが、馬具かどうかも含めて用途は不明である。また、轡と報告された金銅装八花形座金具付吊金具（第76図17～20）は、鉗具が轡としては華奢であり、轡などの武器にともなう金具の可能性が高い。

石州府5号墳の金銅装透十字文心葉形鏡板付轡（第75図13・14）は、上塙治築山古墳例や岡田山1号墳例に比べると、鏡板の縁も十字文も細身のつくりである。鉢頭も金銅装らしい。銜留めのキャップは大半が脱落するが、方形で四方に銜留め用の突起が付く「十字形」であることはわかる⁽⁶⁾。銜と引手の断片はみあたらなかった。細長い舌状の留金具をともなう鉗具（第75図15・16）は、面繫のものであろう。

これにともなう金銅装心葉形杏葉が1点ある（第76図1）⁽⁷⁾。内部はほぼ円形の透である。表面にわずかに緑青がみえ、裏面の縁にも金銅板の折り返しがある。小形方形の立間は、欠損する。

これらの鏡板や杏葉にともなう吊金具は、飾金具に一括したなかの金銅装の2点（第76図8・9）が候補となろうが、断定しがたい。

鞍金具は、鉄地金銅装で、やはり金銅装された縁金具に鉢頭銀装の鉄鉗を並べるものである。前輪礪金具（第75図1・2）と前輪洲浜金具（3）、後輪礪金具（4）と後輪礪金具（5）があり、後輪礪金具には金銅装円形座金具が残る。これに鉄轡（6）がともなうと推定できる。

辻金具は、木製鏡の前後に留めた鉄コ字形金具とそれを下げる鉄吊金具とからなる（第75図10～12）。

辻金具は、半球形鉢部に3条の凹線をめぐらせるもので、本体と鉢頭は金銅装。六花形座金具と宝珠形飾が金銅装なのか銀装なのかは、肉眼では判別できなかった。脚部の鉢頭は、鏡板のものに比べると大きい。

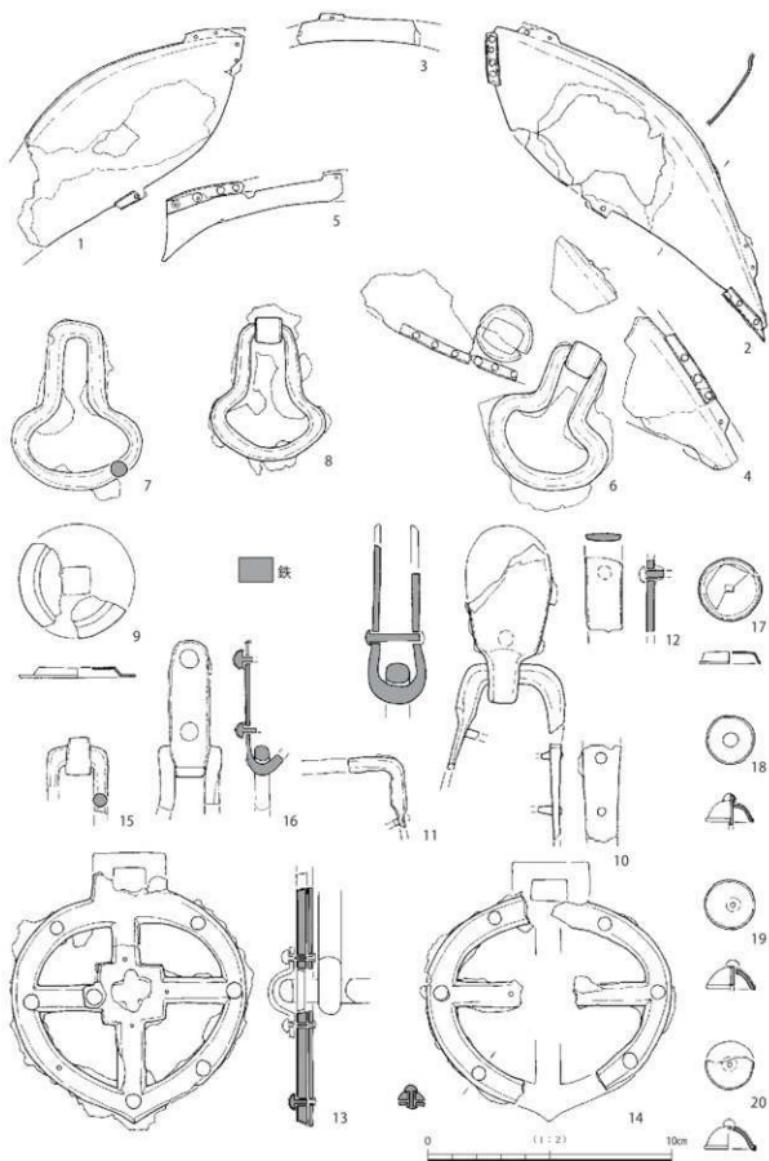
石州府5号墳の透十字文鏡板付轡には、ほぼ同形の心葉形杏葉がともない、金銅装鞍金具などとセットを構成している。

（3）小畠3号墳の馬具

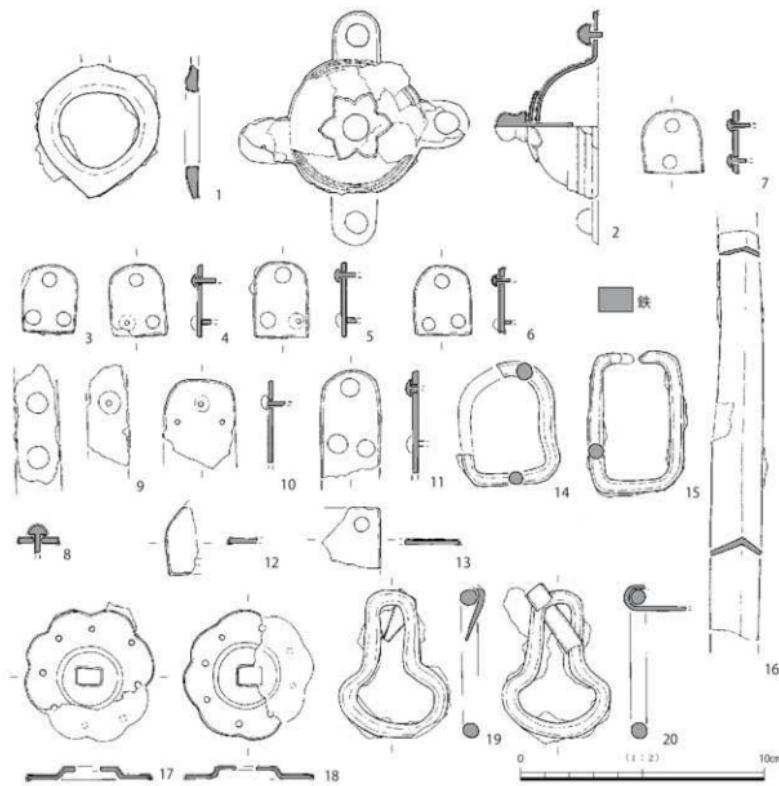
小畠古墳群は、島根県岩美郡岩美町大谷字子平野、岩美町域を貫流する蒲生川の左岸、驃馳山峠（しやまとうげ）の東麓に位置する。穴觀音古墳と通称される大型の横穴式石室墳（1号墳）を含む8基の古墳からなる古墳群である（家塚ほか2002）。発掘調査された5基の古墳（3～7号墳）すべてから馬具が出土し、うち3号墳に鉄製透十字文心葉形鏡板付轡がある（第77図）。

小畠3号墳は、方墳（辺長27m）と推定される中高式横穴式石室をもつ古墳である。

発掘報告書では、鉄製透十字文心葉形鏡板付轡（報告書M1、以下報告書の遺物番号も付す）には立間が復元されていなかったが、障泥吊金具と報告された鉗具断片が鏡板と接合したので、その立間部と判明した（第77図1）。



第75図 石州府5号墳の馬具（1）

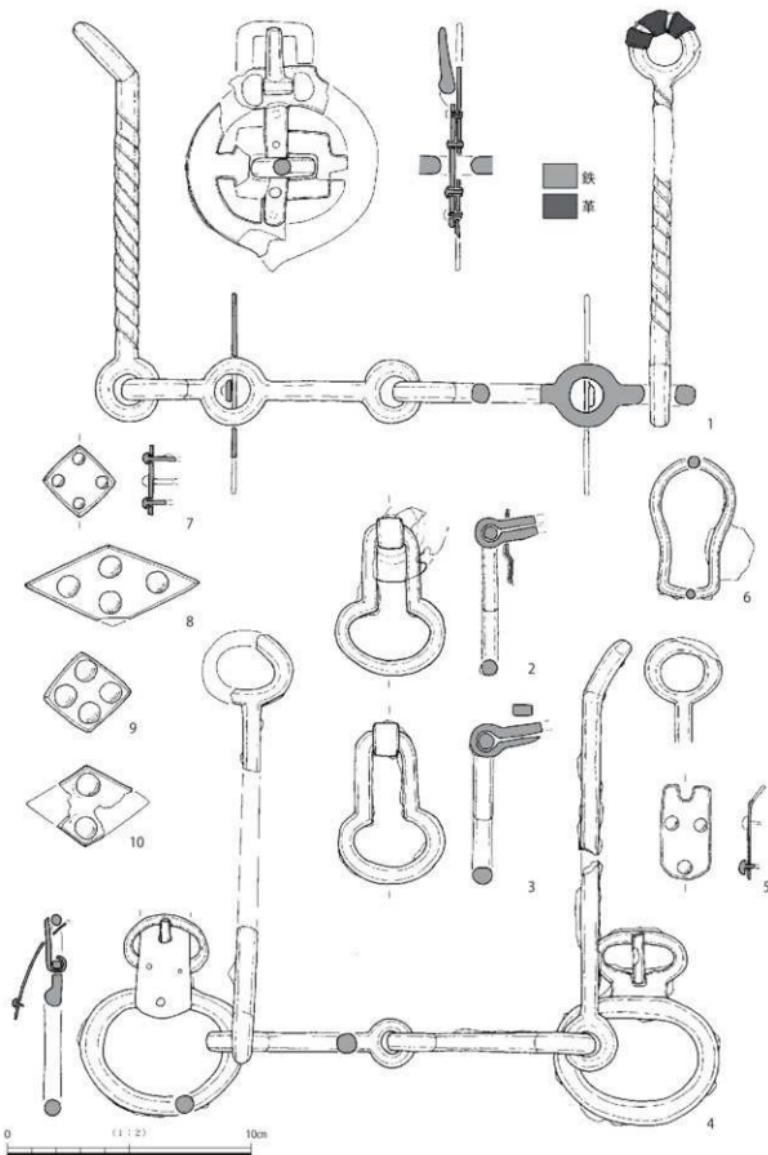


第76図 石州府5号墳の馬具(2)

鉄製心葉形十字紋透鏡板付轡(第77図1)は、鏡板の上部に高さ2cm・幅3cmの立間が付き、鏡板全体は高さ10cm、幅8cmほどの大きさとなる。立間には、T字形刺金がある。銜留めの鉄板は、長さ5cmほどあり、おそらく4鉗留めと思われる。鏡板は二連式銜の端環にからめてある。端環外側には、これと90度の角度で円環が連続しており、ここに軸に振りをいたれた引手が連結されている。引手壺には手綱が錆びついている。

鞍は2点(第77図2・3,M3・M4)。片方に残る座金具は「円形で半球状に造る」とされているが(家塙ほか2002, 102頁)、縁辺に心葉形の切欠きを入れた四葉形の座金具である(第77図2)。座金具に金銅装の痕跡は認められないが、輪金にくらべて表面が黒いので、銀装の可能性がある。あるいはたんに黒墨塗りかもしれない。

小畠3号墳からは、立間を鉢具造りにした素環鏡板付轡(第77図4)があり、鉄爪形金具(5)や小形の鉢具(6)はこれにともなうだろう。菱形金具(7~10)も面繋の金具である⁽⁸⁾。



第77図 小畠3号墳の馬具

3 上塩治築山古墳の馬具が占める位置

最後に、上塩治築山古墳から出土した馬具、とくに A セットとした透十字文心葉形鏡板付轡についてまとめておきたい。

松尾充晶や桃崎祐輔らの研究により、この型式の轡は、第Ⅰ段階から第Ⅴ段階に分類編年されていく（『県報告』、桃崎 2016）。山陰地域で出土した 4 例を段階別にみると次のようになる。

第Ⅰ段階：石州府 5 号墳（心葉形杏葉、伯耆）⇒ 第Ⅱ段階：岡田山 1 号墳（杏葉なし、出雲東部）⇒ 第Ⅲ段階：上塩治築山古墳（心葉形杏葉、出雲西部）⇒ 第Ⅴ段階：小畠 3 号墳（杏葉なし、因幡）

このように、山陰地域では各単位に 1・2 例が存在し、しかもそれらは縦起的にもたらされている状況とみられる。小畠 3 号墳以外は、金銅装鞍金具をともなう。

透十字文心葉形鏡板付轡は、松尾や桃崎らが指摘するように杏葉とのセットとなる例が乏しい。今回、石州府 5 号墳に心葉形杏葉の存在を指摘したが、それでも上塩治築山古墳の杏葉とは形態に違いがあり、杏葉とのセット関係が不安定であるとの評価は十分に首肯できることである。

上塩治築山古墳そのもの、そして出土馬具を考えるうえでは、その周辺にあった築山古墳群の存在が注目される。墳丘をほとんど削り取られて地表にその痕跡をほとんど残さないが、発掘調査によつて 7 基、あるいは 8 基の存在が明らかとなった（原・高橋編 2009）。そのうち、3 基から馬具が出土している。細片化したものが多いため、築山 2 号墳からは金銅装花形鏡板あるいは花形杏葉の断片が発見されている。出土須恵器は須恵器編年出雲 4 期（TK209 型式期）。築山古墳群は、上塩治築山古墳と同一氏族の奥津城と推定できる古墳群である。

小畠古墳群でも、小畠 4 号墳から花形鏡板・杏葉が出土しており、小畠 3 号墳の透十字文心葉形鏡板付轡と呼応するようである。

山陰地域での花形鏡板・杏葉出土例には、ほかに島根県出雲市国富中村古墳例がある（坂本編 2012）。出雲平野の北側、旅伏山東麓にある円墳（径 30m）で、横穴式石室から花形鏡板付轡と花形杏葉のセットが出土した。国富中村古墳には十字紋透心葉形鏡板付轡はないが、これとよく似ていて、かつ型式変化の方向も類似する楕円形斜格子紋鏡板付轡と杏葉のセットがある。出土須恵器は須恵器編年出雲 4 期（TK209 型式期）である。

同一時期に流行した馬具の型式だから、といってしまえばそれまでだが、山陰地域において心葉形十字紋透鏡板付轡と花形鏡板付轡・杏葉とが、小畠古墳群だけでなく、上塩治築山古墳と築山 2 号墳とで「共伴」していることは、国富中村古墳での楕円形斜格子紋馬具との共伴も考慮に入れると、それらの入手経路・入手契機に共通性があったと推測できる。

さらに、上塩治築山古墳の主被葬者が眠る大石棺にともなう馬具が銀装馬具（B セット、『県報告』は新羅地域からの将来品とする）で、透十字文心葉形鏡板付轡など金銀装の馬具（A セット）は石室奥の小石棺の蓋上に副葬されていた。A セットの馬具は出雲西部を支配下に置く「大首長」のものではなかった。これで想起されるのは、岡田山 1 号墳の家形石棺が成人男性を納めるには小さすぎることをとらえ、「おそらく大和に舍人として上番し彼地で客死した人物が」「骨化した状態で納められたと

推測する」桃崎の推測である（桃崎 2017）。

奈良時代のことではあるが、山背國愛宕郡出雲郷には出雲臣姓の住人が多数居住していた（『山背國愛宕郡出雲郷計帳』）。そのうちの一人、出雲臣安麻呂（42歳）は、726（神亀3）年の計帳に吉備内親王の北宮の帳内（トネリ）と記されている。その後が29歳時の年間勤務日数を記した木簡は、吉備内親王の夫である長屋王邸跡から発見された。じつに、10数年にわたって長屋王夫妻のもとで下級官人として勤務していたのである。おそらく山背國出雲郷は、大和の王族や有力氏族に出仕するために出雲國の人々が集住していた地域だったろう。その起源がどこまで遡るか。出雲郷があったところは、現在は京都市街北部、京都御所の北にある相国寺境内とその周辺一帯である。ここからは、7世紀後半の堅穴建物跡が見つかっている。

かつて、岸俊男先生は岡田山1号墳の大刀銘文「額田部臣」に関わって、額田大中彦皇子—出雲臣の祖源宇宿称一倭屯田の間に緊密な関係があり、それは歴史的な事実を踏まえたものだと述べられた（岸 1987）。その緊密な関係の始期については明言されていないが、重要な示唆を含んでいることとして、法隆寺が位置する斑鳩の地との関係、推古天皇の幼名が額田部皇女であることなどが挙がっている。

上塩治築山古墳の南方、上塩治横穴墓群からは「各」（=額）のヘラ書きをもつ7世紀前半の須恵器が出土しており、額田部氏との関係は出雲東部にとどまらない。

また、この地域は、『出雲國風土記』には神門郡日置郷と記され、欽明朝に日置氏との関係が生まれた土地だと伝承をもっている。これら奈良時代の氏族と、古墳時代後期の遺跡・遺物をどこまで関連させ得るかは、方法論的にも課題が多い。だが、上塩治築山古墳が築かれ追葬がおこなわれた6世紀末から7世紀初めという時代は、推古女帝の治世期間を前後する時代であることを思えば、出雲と大和、あるいは畿内地域との関係がどのようなものであったか考えざるを得ない。それを考究するうえで、上塩治築山古墳から出土した馬具は今後とも多角的な検討の対象とされるべき資料であり、そのためにも十全な保存が望まれる。

（花谷 浩）

註

- (1) (片山 2016) 60頁図9-3にも掲載された。
- (2) 李恩碩も、この帶の復元製作をおこなっている。革帶を折り返して袋帯としたのちに縁に麻糸を縫い付けているが、「実際には、まず、両端になる部分に麻糸を縫いつけ、次に革を折り、中央部をかがり縫いでとじる方がはるかに簡単で、丈夫なものになる。」と記している（李 2016、140頁）。
- (3) 1994年、上中町教育委員会（当時）の永江寿夫さん（現・若狭町歴史文化課課長・若狭三方織紋博物館副館長）のお世話で観察実測した。
- (4) 図は、報告書（松本編 1987）の図版12を転載。一部改変した。
- (5) 報告書には、前底部から「馬具（鞍金具、鎧金具ほか）47」とあり、図28に11点、図29に21点、図30に10点、計42点が図示されている（小原・下高ほか 1989）。このうち、図30-5・7-10の5点は調査できなかった。2017年7月7日、佐伯純也さんのお世話になり米子市埋蔵文化財センターにて調査・再実測した。

- (6) 松尾充晶はキャップを菱形に復元しているが（『県報告』第91図5），その痕跡はたどり難かったので，地板の方部分を覆う形状とみてよいと思う。発掘報告書もそのように復元している（小原・下高ほか1989，図29－1）。
- (7) 報告書（小原・下高ほか1989）の図29－9。
- (8) 小畑3号墳からは，他に鎧金具4点や爪形飾金具なども出土しているが図は割愛する。くわしくは『島根考古学会誌』第35集に掲載予定の描稿「鳥取県岩美町小畑古墳群の馬具」を参照されたい。
- (9) 小畑古墳群の馬具調査は，2017年11月15日，鳥取県埋蔵文化財調査センターにておこなった。調査にあたっては，久保種二郎さん，中原齊さん，岩垣命さんのお世話になった。

参考文献

- 家塙英詞ほか 2002『小畑古墳群』一般国道9号線（駒馳山バイパス）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 鳥取県教育文化財団調査報告書第75冊 財団法人鳥取県教育文化財団・鳥取県埋蔵文化財センター
- 片山健太郎 2016「古墳時代馬具における繋の基礎的研究」『史林』第99巻第6号 京都大学史学会 36～74頁
- 片山健太郎 2017「古墳時代馬具における繋の変化とその背景」『考古学研究』第64巻第3号（通巻255号）考古学研究会 85～105頁
- 岸 俊男 1987「日本古代史上における岡田山鉄刀銘文の意義 —「額田部臣」と倭屯田一』『出雲岡田山古墳』島根県教育委員会 118～130頁
- 小原貴樹・下高瑞哉編 1989『鳥取県米子市 石州府古墳群発掘調査報告書』米子市教育委員会・石州府古墳群発掘調査団
- 坂本豊治編 2012『中村1号墳』出雲市の文化財報告15 出雲市教育委員会
- 正倉院事務所編 1988『正倉院宝物 中倉』朝日新聞社
- 花谷浩・西口壽生・島田敏男 1997「飛鳥寺の調査—1996-1・3, 第84次」『奈良国立文化財研究所年報1997-II』 44～56頁
- 原俊二・高橋誠二編 2009『築山遺跡IV』県道今市古志線改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 出雲市の文化財報告6 島根県出雲県土整備事務所・出雲市教育委員会
- 松本岩雄編 1987『出雲岡田山古墳』島根県教育委員会
- 桃崎祐輔 2012「大塚南古墳出土花形鏡板の年代とその歴史的意義」『馬越長火塚古墳群』 豊橋市埋蔵文化財調査報告書第120集 豊橋市教育委員会 281～297頁
- 桃崎祐輔 2016「額田部の馬具 一心葉形十字文透馬具と虎頭鈴・多角形鈴をめぐって」出雲弥生の森博物館弥生の森研究会第66回例会資料
- 李 恩碩 2016「繋の復元による製作技法の考察」『日韓文化財論集III』奈良文化財研究所学報 第95冊 独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所・大韓民国国立文化財研究所 129～144頁

第3節 子持壺の検討

1 はじめに

子持壺は、山陰地方の古墳時代後期を大きく特色づける装飾付須恵器の一種である。上塩治築山古墳からも、多量の円筒埴輪とともに埴丘から須恵器子持壺が出土した。

これまでにも、子持壺の出土状況や形態、編年等に着目した研究が行われてきた。特に、旧出雲国の範囲に濃密に分布するタイプは「出雲型子持壺」と命名され、強い地域性が指摘されている。ところが、子持壺は個々の個体差が激しく、古墳の年代決定という点においては蓋杯等の小形須恵器のように決定的な指標とは言い難い現状もある。なかでも、上塩治築山古墳では蓋杯類の出土がほんなく、わずかに得られた子持壺も「出雲型子持壺」のなかで極めて特異な形態を持つことから、須恵器を年代決定の指標としづらい、という特性がある。

そこで本節では、上塩治築山古墳出土の子持壺の形態的特徴を改めて整理し、これまでに指摘してきた同時期の古墳出土子持壺との比較を行う。さらに、出雲市内出土の子持壺について検討を行い、出雲西部における子持壺の様相を考えたい。

2 子持壺に関する既往の研究

山陰地方における子持壺の研究は、1960年代に山本清が当地の須恵器の地域色をまとめる中で着目したのを契機とする（山本 1960）。1990年代以降、資料数の増加に伴い、形態的特徴に基づいた型式分類、分布、出土状況等の検討が幅広く行われ、当地における子持壺の地域性や変遷が明らかになりつつある。

昌子寛光は、子持壺の出土状況と形態的特徴に着目した検討を行い、山陰地方特有の親壺の底を欠く有脚の一群と、長胴で無脚の一群を「出雲型子持壺」として定義した（昌子 1987）。特に有脚の子持壺については、子壺や脚部の粗雑化を分類基準とし、裾広がりの脚部から円筒形の不安定な脚部への変遷を指摘した。

柳浦俊一は、有脚を4類、無脚を2類に分類し、昌子が提唱した「出雲型子持壺」を「有脚IV類」に位置付け、製作技法に注目して細分した（柳浦 1993）。柳浦が提示した製作技法の類型は、その後の研究の基礎となる重要な要素である。そして、共伴する他の須恵器を基準とし、有脚IV類は陶邑MT15またはTK10～TK209（一部TK217）型式期に存在し、さらに形態や子壺の接合方法等により前後に細分する編年案を提示した。また、分布についても検討し、有脚IV類が出雲東部を中心に旧出雲国の範囲に収まり、強い地域色を持つことを指摘している。

柳浦と同様に、共伴土器に基づく編年を提示した佐古和枝は、脚と親壺～脚部間の突帯の有無を基準に子持壺を3種に区分し、TK209型式期には全種の子持壺が揃い、かつ1古墳あたりの保有量が増加するとした（佐古 1994）。

出雲における須恵器編年の指標となる大谷編年（大谷 1994）と石棺式石室編年に基づき、有脚IV類

を再検討したのが池淵俊一である（池淵 2004）。年代差を反映すると考えられる親壺口縁や子持壺の数などの諸属性とその組成を指標として、A～C の 3 類型に分類した（C 型は 3 区分）。さらに、A・B 型を須恵器編年出雲 2 期末～3 期（TK10～TK43 型式前半期）、C1・C2 型を出雲 4 期（TK43 後半～TK209 型式期）、C3 型を出雲 5 期（TK217 型式期初頭）に位置付けた。同時に、各型式の分布を詳細に検討し、A 型を鳥根型、B 型を能義型、C 型を意宇型として地域性を見出した。

池淵は上塩冶築山古墳の子持壺にも言及し、C1 型の形状を模した在地生産品と評価する。この点については、後ほど改めて触れることとしたい。

最近では、田中大が出土品出西小丸古墳出土の子持壺について再検討を行い、池淵編年における C 型の細分・編年案に再考の余地を指摘した（田中 2017）。そのなかで示された、最も明快な編年指標が子壺数であり、須恵器編年出雲 4 期後半（TK209 型式期）を境に 5 箇所以上から 4 箇所へ集約されたとした。

以上のように、既往の研究では当地における子持壺の独自性、地域性が明確化されてきた。親壺の底を欠く「出雲型子持壺」の提唱は、このことを端的に示している。その変遷についても、子持壺自体の形態的特徴の検討、共伴須恵器や出土する古墳（石室）の編年に沿って検討が加えられ、おおよその変遷の様子が明らかになってきている。

ところが、子持壺は、柳浦や池淵が詳細な分類を行ったように（柳浦 1993、池淵 2004 他）、様々な属性を持ち、それらが複雑に変化しながら一つの個体を形成する。ひとえに「出雲型子持壺」と呼んでも、研究者によって分類基準や着眼点が異なり、田中が出土西小丸古墳出土資料の検討を通して指摘したように（田中 2017）、各分類案に必ずしも沿わない個体も散見される。その最たるもの、上塩冶築山古墳出土の子持壺といえよう。

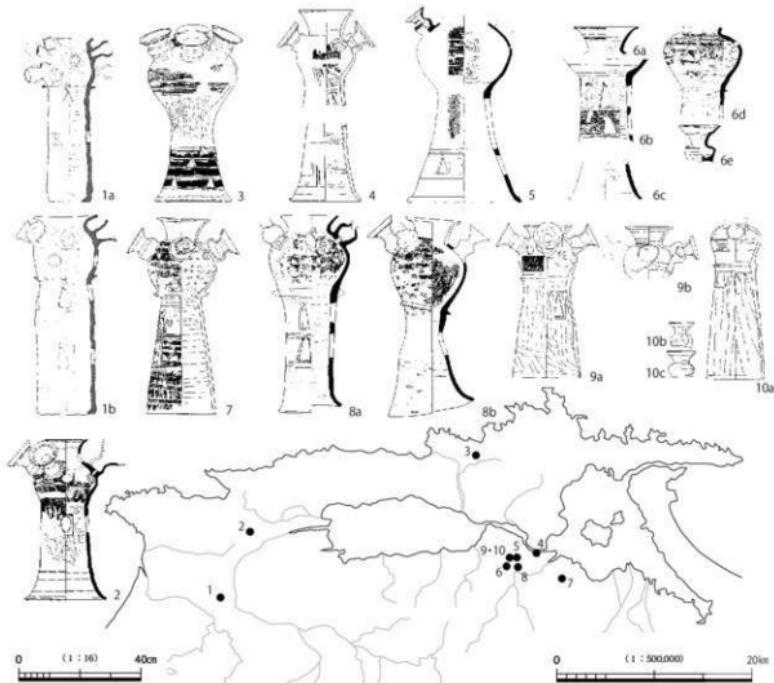
3 上塩冶築山古墳出土子持壺の評価

（1）上塩冶築山古墳出土子持壺の特徴

既往の研究で提示されてきた成果をもとに、上塩冶築山古墳の子持壺について属性ごとに特徴を整理してみたい。ここでは、詳細な属性分析を行った研究（柳浦 1993、池淵 2004）で提示された分類案を基準にした。なお、図面は本節第 78・80 図のほか第 5 章第 3 節第 41・42 図を参照されたい。

親壺 口縁部は全て、短く外反する単純口縁である。胸部は、中位に最大径を持つものが多く、球形を指向しているようだ。ただし、親壺最大径を脚部最小径で割ると、1.25～1.32 の数値が得られ、池淵分類では「円筒形に近く、脚部との区別が不明瞭」な胸部に位置付けられる。透孔は 2 個体にあり、いずれも胸部下半にある円形の透孔である（第 78 図 1b）。胸部下半が残る 8 個体のうち 2 個体に留まることから、透孔を穿つことは主流ではないと考えられる。次に脚部との境目をみると、剥離したものも含めて全てに突帶が巡る。突帶が残るものはいずれも鉗状である。

脚部 脚部は、親壺との接合部付近が最も細く、中央ないし下部に膨らみを持つ形態を基本とする（第 78 図 1、第 80 図 1・2）。完形に復元した個体では脚部最大径／脚部最小径の値が 1.2 を下回っており、ほぼ円筒形と言える。脚端部は、遺存する 8 個体のうち少なくとも 5 個体が内側にすぼまる



第78図 須恵器編年出雲2～4期の主な出雲型子持壺と出土遺跡（遺跡番号は第20表参照）

第20表 須恵器編年出雲2～4期の主な出雲型子持壺の特徴一覧

特徴	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	時期	池源 分類
出土古墳	縹遊形状	親壺 透孔	突帯	脚部 形状	脚部 調整	脚部 透孔	子壺数	子壺の 形状	子壺複合法	c・d	出雲4期 前半	海数タイプ C型類似
1 上塙治築山 古墳	単純口縁	無	有	円筒形	縫カナデ 縦部ケズリ	無	三角形	8～16	無	退化形	（縫通1990）	
2 国富中村 古墳	段状口縁	円形1段	無	ハの字形 縦部外反	縫ナデ 下平横ナデ	無	楕円形 上段	4	圓形	b	出雲4期	C型
3 諏訪山山 古墳	杯身口縁	※1.5	無	ハの字形 縦部外反	縫ナデ 波状文	無	三角形 下平3段	6	圓形	a	出雲2～3期	A型
4 手間古墳	長い口縁	※1.26	無	ハの字形 縦部外反	下平横ナデ	無	無	5	圓形	a	出雲3期	B型
5 山代子塚 古墳	口縁不明	無	無	ハの字形 縦部外反	縫カキメ	西縫	三角形 下段	7	圓形 (有文)	b・c	出雲3期	C型
6 東園寺 古墳	段状口縁	円形・三角形 1段	有／無	ハの字形 縦部外反	上下縫ナデ 下平横カキメ	西縫	三角形 上・中段	5	圓形	b	出雲3期	C型
7 若狭田6区 15号墓穴墓	段状口縁	無	無	ハの字形 縦部外反	縫ナデ	西縫	三角形 上段	5	圓形	b	出雲3～4期	C型
8 猪原古墳	段状口縁	円形・三角形 1段	有／無	ハの字形 縦部外反	上下縫ナデ 下平横ナデ	西縫	三角形 上・中段	5～6	圓形	b	出雲4期	C型
9 向山1号墳	単純口縁	※1.54～1.95	円形1段	ハの字形	縫ナデ	西縫・長方形 上・無	三角形 上段	4	圓形	b・c	出雲4期	C型
10 向山2号墳	口縁不明	※1.26	無	ハの字形	縫ナデ	西縫・無	三角形 上段	4	圓形	b・c	出雲4期～	C型

*印…親壺最大径／脚部最小径の値で、脚部強張：1.7以上、脚部弱張：1.4未満（池澤2004）。また、上塙治築山古墳のアミカケ部分は特に独自性の強い要素を示す。

形状で、端部が内側に折れ、断面L字状となるものが大半である。加えて、端部の外面あるいは外外面にケズリ調整を施すもののが存在する。また、脚部は粘土帶積み上げで成形し、外面にはタタキや縦～斜方向のハケメを施した後、横方向の粗いナデを一面に施すという共通点がある。いずれも文様や区画帯はない。脚部の透孔は突帯の直下と中段にあき、千鳥状あるいは上下に並んで配される。形状は正三角形を基調とし、左右の辺に切り込みを入れたのち、下辺を切るという手法で穿たれる。中には、左右を大きく切り込んだ結果、頂点を挟んで上下に三角形が連結した透孔も一定量見られる（第78図1a）。なお、通番83（第78図1b）のみ、三角形が変化した涙滴形を呈する。

子壺 上塩治築山古墳の子持壺の大きな特徴は子壺にある。子壺は上段だけに配置されるものと、上下段に配置されるものがあり、前者は8箇所前後、後者は上下段とともに5箇所前後の計10～16箇所が付く。取り付く方向は基本的に斜め上方だが、上下段に配するものは下段がほぼ真横に向く（第80図1・2）。また、子壺底部の有無に関わらず、親壺に穿孔しない点は全てに共通する。子壺の形状は、口縁が外反し、稜線が明確でないものが大半である。原型は脛形と考えられるが、その名残を残すものはない。さらに、通番81（第78図1a）には口縁部が内湾する独特な形状の子壺が伴う。

以上の特徴を整理すると、下記のとおりとなる。

- ①親壺の形状…単純口縁で胸部の張りが弱い
- ②親壺の透孔…円形・1段（ただし透孔をもつ個体は少数派）
- ③親壺～脚部の突帯…あり・鶴状
- ④脚部の形状…円筒形で端部がすばり内側に肥厚
- ⑤脚部の調整…横方向の粗いナデ調整で仕上げ、端部にケズリ調整を加える
- ⑥脚部の文様…無文
- ⑦脚部の透孔…透孔は三角形で上・中段にあく
- ⑧子壺の数…8箇所前後、上下2段につくものは10～16箇所
- ⑨子壺の形状…腰形が退化し、稜線が不明瞭になったものが主流
- ⑩子壺接合方法…親壺に穿孔しない柳浦c手法（底部あり）またはd手法（底部なし）

次に、これらの特徴について、上塩治築山古墳とほぼ同時期の古墳から出土した資料のうち、親壺から脚部までの全体形が把握できる9古墳の出土資料と比較した（第20表）。結果として、④脚部の形状、⑤脚部の調整、⑧子壺の数、⑨子壺の形状、⑩子壺接合方法の項目で、上塩治築山古墳出土子持壺は同時期の他資料には見られない形状と特徴を有することがわかる。

（2）上塩治築山古墳出土子持壺の課題

前項の比較検討により、上塩治築山古墳出土子持壺が独自性の高い一群に位置付けられることは明らかである。その独自性についてはかねてより注目されていたが、実は具体的な検討はあまりなされてこなかった。唯一とも言えるのは、C1型の模倣品として評価した池澤の指摘である（池澤2004・2012a・b, 2016）。池澤分類については、第21表にまとめた。

池澤分類C型は、親壺口縁部が段状口縁または直立口縁となる一群で、細かな属性に多くのバリエーションが認められることからC1～C3型に細分される（第78図2・5～10）。このうちC1型は、親

第21表 池淵2004による型式分類・編年の基準

部位	属性	A型	B型	C型		
				C1	C2	C3
肩部	口縁部形状	杯身状口縁（蓋付）	長く外反	段状口縁 直立口縁		
	脚部透孔 突帯	ほぼ無 無	無 無	不均一 不均一	有 有	有
脚部	文様等	上平カキメ 下平波状文	無	無	無	無
	透孔	下平に集中	無		上・中段	
子壺	形状	明晰な瘤状	明晰な瘤状	明晰な瘤状	明晰な瘤状	不明瞭な瘤？状
	数	5～6箇所	5～6箇所	5～6箇所	4箇所	4箇所
接合手法	柳浦a手法	柳浦a手法		柳浦b手法が上流（a手法なし）		
	指標となる個体	調武向山古墳 (松江市)	手間古墳 (松江市)	团原古墳 (松江市)	向山1号墳 (松江市)	山代方墳 (松江市)
時期	出雲2期末～3期	(TK10～TK43型式期前半)	出雲4期古相	出雲4期新相	出雲5期	(TK209型式期)
			(TK43型式期後半)	(TK209型式期)	(TK217型式期)	

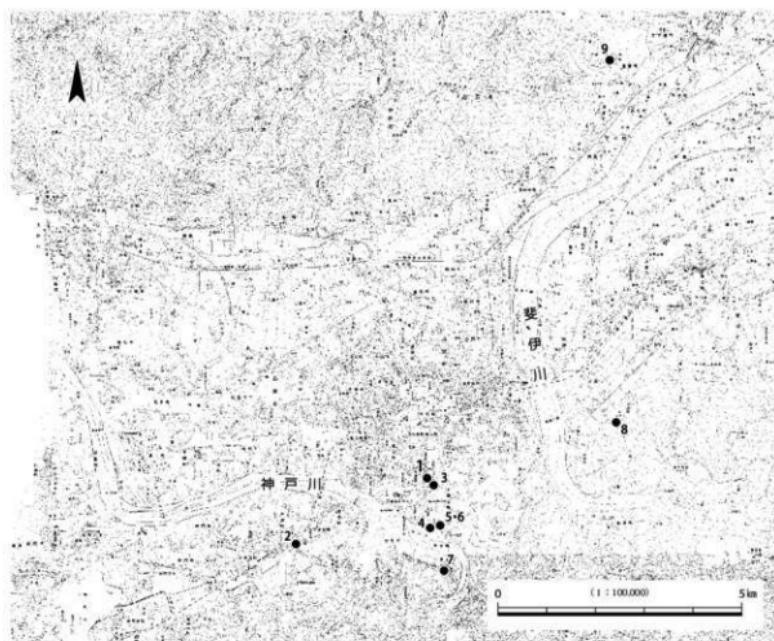
壺透孔と突帯があるものとないものが混在し、子壺を5～6箇所配置するものが該当する。池淵は上塩治築山古墳の子持壺のうち通番83（第78図1b）を例に挙げ、「親壺透孔の存在」、「突帯の存在」、「子壺5個配置」をC1型模倣の根拠とした（池淵2004）¹¹⁾。この指摘に合致するように、第20表に挙げた①～③・⑥・⑦の特徴は、概ねC型の範疇に収まる特徴と理解できる。

一方、模倣の根拠とするのが、上塩治築山古墳出土資料の主流である⑤横方向の粗いナデによる脚部調整、⑨原型を保たない瘤形の子壺、⑩親壺に穿孔しない子壺接合方法という、他のC型には見られない特徴である。①～③・⑥・⑦の特徴は、C型の外見を模倣した結果であり、調整や子壺の形態などの微細な部分や、外からは見えない子壺接合方法といった、「仮器」としての「出雲型子持壺」の本質を理解しないまま、おおよその特徴を模したものと推定する。さらに、通番81（第78図1a）のような特殊な個体については、通番83（第78図1b）の製作者から二次的な情報しか得られなかつた工人が製作した可能性を提示している（池淵2004）。

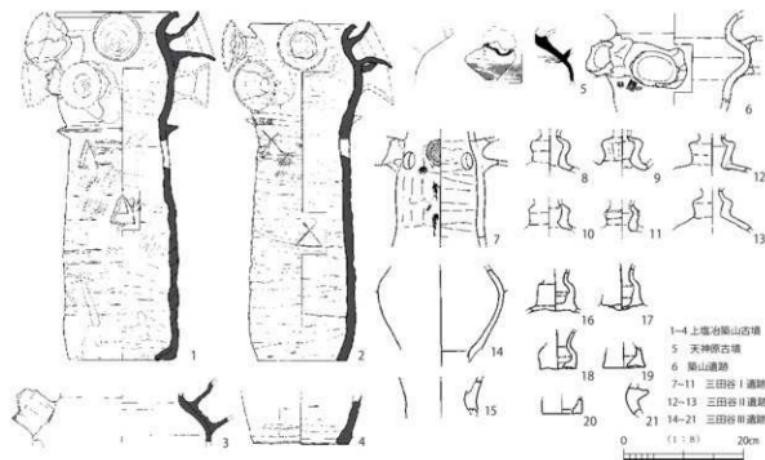
ところが、第20表での比較を通して、最も外見的な要素であるべきはずの④円筒形の脚部形状、⑧子壺数の多さも上塩治築山古墳独自の要素であることが明らかとなった。これらは、他のC型に限らず、「出雲型子持壺」全体を概観しても類似するものが認められない。さらに、親壺脚部の形状に注目すると、池淵が模倣のモデルと想定する松江市山代二子塚古墳や東淵寺古墳出土例（第78図5・6、池淵2016）は、脚部の張りが強い（親壺最大径／脚部最小径=1.8前後）のに対し、上塩治築山古墳は張りが弱く（1.3前後）、プロポーションに差異が認められる。上塩治築山古墳出土例が「出雲東部の子持壺を模倣した」とする池淵の評価は、外見的特徴の共通性と製作技法等の非共通性を捉えたもので、おおよそ妥当であると考えたい。しかし、外見的特徴にも決して看過できない差異が認められることは、再検討の余地があるようと思われる。そこで、出雲西部における子持壺の様相を整理し、当地における上塩治築山古墳の子持壺について考えてみたい。

4 出雲西部の子持壺からみた上塩治築山古墳

（1）出雲西部の子持壺



第79図 出雲西部の子持壺出土遺跡（遺跡番号は第22表参照）



第80図 出雲西部の子持壺（1）



第81図 出雲西部の子持壺(2)

第22表 出雲西部出土子持壺の特徴一覧

No.	出土遺跡	特徴	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	
			時期	親壺形状	親壺透孔	突帶	脚部形状	脚部調整	脚部文様	脚部透孔	子壺数	子壺の形状	子壺接合法
1	上塙治築山古墳	出雲4期		単純口縁 ※1.25～1.32	無	有	円筒形	横ナデ 端部ケズリ	無	三角形 上・中段	8～16	縦 退化形	c・d
2	天神原古墳	出雲3期？		口縁不明 いびつな 脚部	無	無？					4～	縦 退化形？	d
3	築山遺跡			口縁不明 いびつな 脚部	無	無？							
4	三田谷I 遺跡			口縁不明 脚部凹筋形 ※1.02	円形1段	無	円筒形？	縦ナデ	無？	無？	4～	縦形	a・d
5	三田谷II 遺跡											縦形	a
6	三田谷III 遺跡	出雲4期	～5期	口縁不明 ※1.5	無？	無？						縦形	b・d
7	小坂古墳	出雲4期										縦形	b
8	出西小丸1号墳	出雲4期 後半～5期		単純口縁 ※1.4	円形1段	有	ハの字形	縦ナデ 横カキメ	無	柳葉形 上半	4	縦形	b
9	国富中村古墳	出雲4期		単純口縁 ※1.5	円形1段	無	ハの字形 端部外反	縦ナデ 下半横ナデ	無	楕円形 上段	5～6	縦形	b

※印…親壺最大径／脚部最小径の値で、脚部張強：1.7以上、脚部張中：1.4～1.7、脚部張弱：1.4未満（池淵 2004）

出雲西部では、これまでに9箇所の遺跡で子持壺の出土が確認されている（第79～81図、第22表）。確実に出現期の資料として認められるのは須恵器編年出雲4期初頭（TK43型式期）の上塙治築山古墳出土資料である。ただし、天神原古墳は上塙治築山古墳にやや先行する可能性がある⁽²⁾。須恵器編年出雲4期前半（TK209型式期）には国富中村古墳でも出土する。その後、出雲5期までに三田谷III遺跡、出西小丸1号墳でも確認される。分布をみると、出雲平野南部で神戸川を挟んだ密集地帯があり、斐伊川右岸に出西小丸1号墳、平野北部の旅伏山東麓に国富中村古墳がそれぞれ単独で立地する。

次に形態的特徴について整理する。全形を復元できる資料が少ないため、出土した各所の破片からおおよその全形を推測していきたい。第22表は、各古墳出土資料について①親壺の形状から⑩子壺

接合方法までの属性をまとめたものである。

親壺は口縁部まで残る資料が少ないが、短く外反して立ち上がり、端部をまるくおさめる上塙治築山古墳の一群と、やや直立気味に立ち上がり、端部を面取りする国富中村古墳・出西小丸1号墳出土例がある。胴部は、張りが中程度のものと弱いものがある。池淵は、時期が新しいものほど胴部の張りが弱くなると指摘するが（池淵2004）、田中が出西小丸1号墳の検討を通して指摘したように（田中2017）、胴部の張りの強弱は時期的変化ではない可能性が大きい。また、親壺透孔の有無はおよそ1対1の割合である。穿孔のあるものについては、子壺接合箇所に近いものが多い。突堤は、現状で上塙治築山古墳と出西小丸1号墳出土例にのみ確認できる。形状はいずれも鉤状を呈する。

脚部は全形が分かれるのが少ないが、円筒形とハの字形があり、上塙治築山古墳のみ全面を横方向の粗いナデ調整で、その他は縦方向を基調とし、部分的に横方向のナデやカキメを施す。先述したように、端部まで残るものうち、端部がすぼまりケズリ調整を加えるものは上塙治築山古墳の一群に限られている。透孔は上半分に限られ、形状は三角形を基調としながらも、全体として多様なあり方を示している。

最後に子壺について整理する。子壺は、その数の変化が時期差を反映すると指摘される属性である（田中2017）。出雲西部出土の子持壺も、共伴遺物から推定した時期の変化と子壺数の変化はおよそ合致しているといえよう。その中で、上塙治築山古墳出土例の出した多さは、特異な事例として評価される。子壺の形状は、稜線の明瞭な無文の橢形を基本とする。接合方法は全種類存在するが、須恵器編年出雲4期の出雲平野南部では、親壺に穿孔しない柳浦d手法が卓越する点は注目できる。一方、穿孔を伴う柳浦b手法（一部にa手法も存在）は、出雲平野南部の密集地帯の外側や、時期が新しいものに見られる。子壺に注目すると、稜線が不明瞭で、橢形をなさず、かつ親壺の穿孔を伴わない接合方法が採用される上塙治築山古墳・築山遺跡出土の一群には特異性が見出せそうである。

（2）2系統の子持壺

出雲西部における子持壺について整理すると、出雲東部の影響を強く受けたA群と出雲西部独特の様相を呈するB群に分けることができる。

まず、出雲東部の影響を強く受けたA群は、国富中村古墳（第79図9、第81図1）と出西小丸1号墳（第79図8、第81図2～4）が該当し、後述するB群とは分布域を異にする⁽³⁾。特徴としては、中程度の張りを持つ親壺、ハの字形の脚部、親壺穿孔を伴う、明瞭な橢形の子壺（柳浦b手法）がある。これらの特徴は、池淵C1型にも該当する。なお、国富中村古墳の子持壺は、胎土分析により出雲東部の大井窯跡群で生産されたことが明らかとなっており、子持壺自体の型式的特徴と符合することが報告されている（坂本編2012）。出西小丸1号墳は、生産地こそ明らかになっていないが、全体のプロポーションや子壺接合方法に国富中村古墳の子持壺との共通性を見出すことができる。

一方、出雲西部独自の様相を呈するB群は、出雲平野南部の神門川両岸に密集する築山古墳群（第79図1・3、第80図1～4・6）、天神原古墳（第79図2、第80図5）、三田谷遺跡群（第79図4～6、第80図7～21）出土の子持壺である。張りの弱い親壺、円筒形を指向する脚部、親壺穿孔を伴わない子壺（柳浦d手法の卓越）を特徴とする。その中でも、築山古墳群出土の個体は脚部及び脚端部の

調整と子壺の形状、個数において特異性が高いと判断できる。築山古墳群出土の子持壺も胎土分析が行われ、大井窯跡産の国富中村古墳出土子持壺とは一線を画す分析結果が得られたため、出雲西部で生産された可能性を想定している（坂本編 2012）。この想定は、形態的特徴の特異性からも妥当であると考える。

(3) 出雲西部における上塩治築山古墳子持壺の評価と課題

最後に、本節における比較検討を踏まえて上塩治築山古墳の子持壺を再評価してみたい。

上塩治築山古墳出土子持壺は、出雲東部の意宇平野を中心に展開する出雲型子持壺と一線を画す存在であることを改めて確認した。また、出雲西部においては形態差により A 群・B 群に区分でき、それぞれが¹出雲東部、出雲西部の特徴を反映しているとみてよい。上塩治築山古墳を中心とする築山古墳群出土子持壺は B 群に位置づけられ、群内でもとりわけ特殊性の高さが目立つ資料である。

出雲西部における子持壺の確実な出現時期は、須恵器編年出雲 4 期 (TK43 型式期後半) に下り、出雲東部より遅れる。こうした時期差の存在により、出雲西部における子持壺の製作や葬送祭祀への導入は、当該地で独自に創出されたものではなく、出雲東部からの情報伝達によると考えるのが自然であろう。そのなかで、出雲西部では東部からの情報を参考に独自性を持って子持壺が製作されたと評価したい。

この状況は、子持壺の形態的特徴にも表れている。上塩治築山古墳とほぼ同時期の国富中村古墳 (A 群) では、出雲東部で生産された子持壺が出土している。出雲東部と斐伊川東岸に分布する西部 A 群の子持壺は、裾広がりの脚部をもち、埴丘への据え置きを重視した「置く子持壺」と考えられる。少なくとも斐伊川東岸までは出雲東部で生産された須恵器が流入し、それを用いた祭祀が共通して執り行われていたと推測できよう。一方、斐伊川西岸に分布する出雲西部 B 群は、裾の広がらない円筒形の脚部を持ち、円筒埴輪と同じように脚端部を埴丘に埋め込む「埋める子持壺」と評価できそうである。この特徴の違いは単なる形態差ではなく、地域における葬送祭祀の独自性を示す要素にもなると考えられる。なお、小坂古墳 (第 79 図 7) に隣接する刈山古墳群からは石見産の須恵器蓋杯が出土しており、出雲東部からだけではない物資の流入があったことがわかる。

このように、出雲平野で出土する周辺東西地域の須恵器は、当地における小地域間交流の姿を示す重要な要素である。とりわけ地域性の強い子持壺はその鍵となる資料であり、今後も資料が増加すれば、出雲東西地域における物流、情報交流の実像が明らかになるであろう。今後の資料増加に一層期待したい。

(景山このみ)

註

- (1) 本書第 41 図通番 83 の子壺数について、池澤は「5 個配置」とする (池澤 2004)。しかし、その後刊行された報告書②では「6～8 個」、本書でも 8 箇所として報告しており、C1 型に類似する特徴という評価は難しい。
- (2) 本章第 4 節において、天神原古墳が須恵器編年出雲 2～3 期に位置付けられる可能性を示している。同時期の子持壺には、出雲東部の乃木二子塚古墳 (ただし子壺のみのため参考にはしがたい)、山代二子塚古墳、講武向山古墳出土資料等があり (池澤 2004 ほか)、特に山代二子塚古墳・講武向山古墳の 2 例は親壺胴部に丁寧な横方向のカキメを施す点が天神原古墳出土例と共通している。また、親壺内部の当て具痕がナデ消される点も古い要素として捉えられており (勝部・西尾編 1980)、子持壺からみても須恵器編年出雲 2～3 期という年代観

は妥当と考える。

(3) 小坂古墳出土例（第81図5）はB群の密集域内に存在するが、明瞭な扇形の子壺（柳浦b手法による接合）が出土しており、A群に属する可能性がある。しかし、現状では子壺1点のみを根拠に判断することは難しい。

参考文献

池淵俊一 2004「出雲型子持壺の変遷とその背景」『考古論集－河瀬正利先生退官記念論文集－』河瀬正利先生退官記念事業会 498～516頁

池淵俊一 2012a「出雲の子持壺集成」『松江市歴史叢書』5 松江市教育委員会 59～73頁

池淵俊一 2012b「集成 出雲地域の子持壺」『松江市史』史料編2 考古資料 松江市 776～780頁

池淵俊一 2016「出雲東部における魚見塚古墳・東淵寺古墳の歴史的位置」『魚見塚古墳・東淵寺古墳発掘調査報告書－松江市東部における古墳の調査（2）－』風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書23 島根県教育委員会 96～107頁

池淵俊一・岩本真実編 2016『魚見塚古墳・東淵寺古墳発掘調査報告書－松江市東部における古墳の調査（2）－』風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書23 島根県教育委員会

伊藤 智編 2000『三田谷Ⅲ遺跡』島根県教育委員会

勝部 昭・西尾克己編 1980『出雲・上塩治地域を中心とする埋蔵文化財調査報告』島根県教育委員会

岸本雅敏 1975「装飾付須恵器と首長墓」『考古学研究』第22卷第1号 考古学研究会

坂本豊治編 2012『中村1号墳』出雲市の文化財報告15 出雲市教育委員会

佐古和枝 1994「出雲型子持壺について」『同志社大学考古学シリーズIV 考古学と信仰』同志社大学考古学シリーズ刊行会 131～146頁

昌子寛光 1987「出雲の子持壺」『古文化談叢』第18集 九州古文化研究会 103～112頁

瀬古諒子編 1998『向山古墳群発掘調査報告書』松江市教育委員会

田中 大 2017「出雲市出西小丸1号墳出土の出雲型子持壺」『古代文化研究』第25号 島根県古代文化センター 63～69頁

鳥谷芳雄編 1994『三田谷Ⅱ遺跡・上沢Ⅰ遺跡』島根県教育委員会

鳥谷芳雄編 2000『三田谷Ⅰ遺跡』vol.3 島根県教育委員会

西尾克己編 1989『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告VI－团原古墳・下黒田遺跡－』島根県教育委員会

丹羽野裕・鳥谷芳雄編 1992『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告－山代二子塚古墳－』島根県教育委員会

原俊二編 2009『築山遺跡』Ⅲ 出雲市の文化財報告5 出雲市教育委員会

原田敏照編 1997『島田池遺跡・鶴貫遺跡』島根県教育委員会

柳浦俊一 1993「島根・鳥取県出土子持壺集成」『島根考古学会誌』第10集 島根考古学会 13～37頁

山内英樹 2004「円筒埴輪と出雲型子持壺の関係性－製作工程・手法からのアプローチ－」『島根考古学会誌』第20・21集合併号 島根考古学会 357～366頁

山本 清 1960「山陰の須恵器」『島根大学開学10周年記念論文集』島根大学

（再録：山本 清 1971『山陰古墳文化の研究』山本清先生退官記念論文集刊行会 315～340頁）

渡邊貞幸編 2002『松江市手間古墳発掘調査報告・薬師山古墳出土遺物について』島根大学考古学研究室

第4節 円筒埴輪の検討

1 はじめに

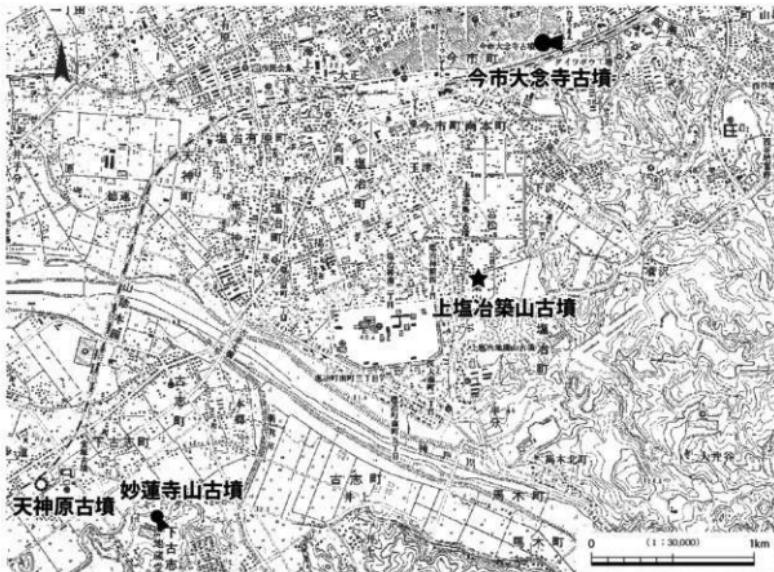
埴輪は墳丘築造後に立て並べるもので、古墳の相対年代決定に有効な遺物である。山陰地方では、出雲東部と伯耆西部地域で円筒埴輪が多く出土し、これらの地域を中心に研究が進められてきた。

出雲西部に位置する上塙治築山古墳からは、当地域で最も多くの円筒埴輪が出土している（第5章第3節）。本稿では、まず周辺にある他の古墳時代後期の円筒埴輪（天神原古墳、今市大念寺古墳、妙蓮寺山古墳）について概要を述べ（第82図），それらと比較することによって、上塙治築山古墳出土の埴輪の特徴を明らかにしたい。

2 研究史と問題の所在

（1）研究史

出雲・伯耆地域の円筒埴輪研究は、川西宏幸の「円筒埴輪総論」から始まる（川西 1978）が、出雲西部の円筒埴輪は扱われていない。1983（昭和58）年には井上寛光が初めて出雲地域の資料を集成した（井上 1983）。その後、1997（平成9）年に出雲地域の円筒埴輪を型式分類しまとめたのが藤永照隆である（藤永 1997）。藤永は、円筒埴輪の外面調整・スカシ・口縁部・底部・タガ・焼成につい



第82図 本節で取り扱う円筒埴輪出土古墳

て検討し、それらの組み合わせから円筒埴輪を大きく6つに分けた。そして、それらと共に伴する土師器と須恵器から5期の円筒埴輪編年を作り上げている。その中で出雲西部の円筒埴輪に触れており、天神原古墳は藤永編年4期（須恵器編年出雲2期、陶邑TK10型式期）、上塩治築山古墳と今市大念寺古墳は藤永編年5期（須恵器編年出雲3～4期、TK43～TK209型式期）とした。

2008（平成20）年には、椿真治が藤永分類と埴丘形態を組み合わせて、出雲東部地域の古墳編年表を提示した（椿2008）。椿は、底部調整・ヨコハケ・スカシ・黒斑を重視した藤永分類を基礎的編年を作成する上で重要とし、高く評価する。

このような編年研究とは別に、古墳時代後期の円筒埴輪に特徴的な基底部調整技法についての議論が進められてきた（熱田1989、大谷2003、山内2003）。特に大谷晃二はタタキの工具が板状から円柱状に変化することを指摘し、そのことを指標に後期を3つに分けた。そして、その3段階（後期後半）に円柱状工具によるタタキ技法が出土から伯耆西部の一部に広がることを明らかにした。この指摘を重視した深澤太郎は出雲東部の意宇地域から出雲全域への埴輪の供給を推測した（深澤2008）。一方、出雲地域の円筒埴輪を規格の面から研究する田中大は、出雲地域内にも小地域性があることを指摘した上で（田中2012）、古墳時代後期後半期の出雲と伯耆西部地域の円筒埴輪を「製作情報の選択性や嗜好性がきわめて近い関係にある」と指摘した（田中2017）。これらを「雲伯系統円筒埴輪群」と呼び、出雲と伯耆西部全域にわたる有力者間の広域的なネットワークの形成があったと推定する（田中2017）。今市大念寺古墳や上塩治築山古墳の円筒埴輪もこの「雲伯系統」に属し、王権の影響を受けない地域内で完結する生産を推定する。

このように円筒埴輪研究が進展していくなかで、2000年代になってようやく出雲西部の上塩治築山古墳から多くの円筒埴輪が出土した（三原・高橋編2004）。これらを円筒埴輪の研究史を踏まえ、評価したのが花谷浩である。花谷は規格と外面調整の手法を分類し、上塩治築山古墳の円筒埴輪の実態を明確にした（花谷2015）。また、池淵俊一は出雲東部の東淵寺古墳と上塩治築山古墳の円筒埴輪の観察から、それらの中にハケメ工具が一致するものを確認し、いくつかの同工品があることを指摘した。そして、上塩治築山古墳の埴輪製作体制について言及している（池淵2017）。

（2）問題の所在

出雲における円筒埴輪の研究は、古墳時代前期から後期にかけての藤永編年と、古墳時代後期の基底部調整の分類による編年があり、これを基礎として、円筒埴輪生産についても議論されてきた。しかし、これらの分類は、外面調整のヨコハケや基底部調整の工具の種類という限定された要素だけが抽出されて編年が行われているため、後後に築造された各古墳の細かい前後関係や地域性の把握ができるない問題を含む。また、出雲西部の円筒埴輪研究は上塩治築山古墳を中心で、他の古墳から出土した円筒埴輪研究が進んでいないことも問題である。これは、出土資料が公表されていないことが原因である。以上のような課題を解決するため、花谷が示した規格・調整分類を踏襲し、上塩治築山古墳の円筒埴輪の特徴を既に本書第5章第3節で示した。本稿では、天神原古墳と今市大念寺古墳の円筒埴輪の実測図（未発表資料を含む）を掲載し、出雲西部の円筒埴輪の概要を示す。そして、これらと比較して上塩治築山古墳の円筒埴輪を位置付ける。

3 分類の方法

分類は、上塙冶築山古墳に適応したのと同じ、段数、胴部外面調整、基底部調整、を指標とする⁽¹⁾
(第5章第3節参照)。

段数 ・・・ I類：2条3段 II類：3条4段

胴部外面調整 ・・・ 2次調整が施されるもの

A類：ヨコハケ B類：ヨコハケ～ナナメハケ

C類：ナナメハケ D類：指によるヨコナデ

2次調整が施されないもの

E類：(1次調整のハケメ)

基底部のハケメ調整 (タタキの後の再調整) ・・・ α : ある β : なし

以上の分類に加えて、法量や突帯形状および高さなどの検討も行う。

4 天神原古墳の円筒埴輪

(1) 古墳の概要

天神原古墳は出雲市下古志町にあり、1972（昭和47）年に実施された神西・神門地区圃場整備事業によって発見された。古墳は盛土の大部分が失われ、わずかに基底部を水田下に留めており、直径約33mの円墳と推定されている。内部主体も失われていた。墳丘の周囲に幅2～3mの溝があり、そこから多数の円筒埴輪片が出土した（勝部・西尾編1980）。

(2) 円筒埴輪の特徴

円筒埴輪片は、これまで8片が報告されている（勝部・西尾編1980）。今回確認したところ166片を数えることができた（第23表）⁽²⁾。これらのうち各部位の大きさがわかる破片を中心に16点を実測し第83図に掲載した。第24表はそれらの観察表である。

段数

段数は2条3段のI類のみ、2点確認できた（第83図2・9）。3条4段のII類は、第83図12にその可能性があるものの確証はない。現状では段数についての資料が少なく、基本的にはI類が主体としておく。

外縁部の外面はハケメが施されている。胴部外面調整は、2次調整が施されるもの25点47%。

第23表 天神原古墳円筒埴輪の破片数とその特徴

出土破片数	口縁部片	胴部	突帯片	脚部片	基底部	備考
166	ハケメ 50 E28	A19 C6	26	調整不明 50	β 24	円形スカシ 13 赤・黒の塗彩なし、黒斑なし
合計	50	53	26	50	24	

2次調整が施されないE類が28点53%でほぼ同じ割合である。2次調整が施されるものは、A類⁽³⁾とC類にわかれ、A類が19点76%で主体をなす。

基底部調整

基底部はタタキが施されている。その後のハケメ調整がないβ類ばかりである（第83図2・4～9・13・14）。タタキは板状工具で施され、外面にはその工具の木目が残るものがある（第83図5～8）。タタキの調整の後、部分的にナデられる。

突帯

指ナデにより上端が突出するものが多い。突帯の高さは0.8～1.3cmで、段状突帯になるものはない。

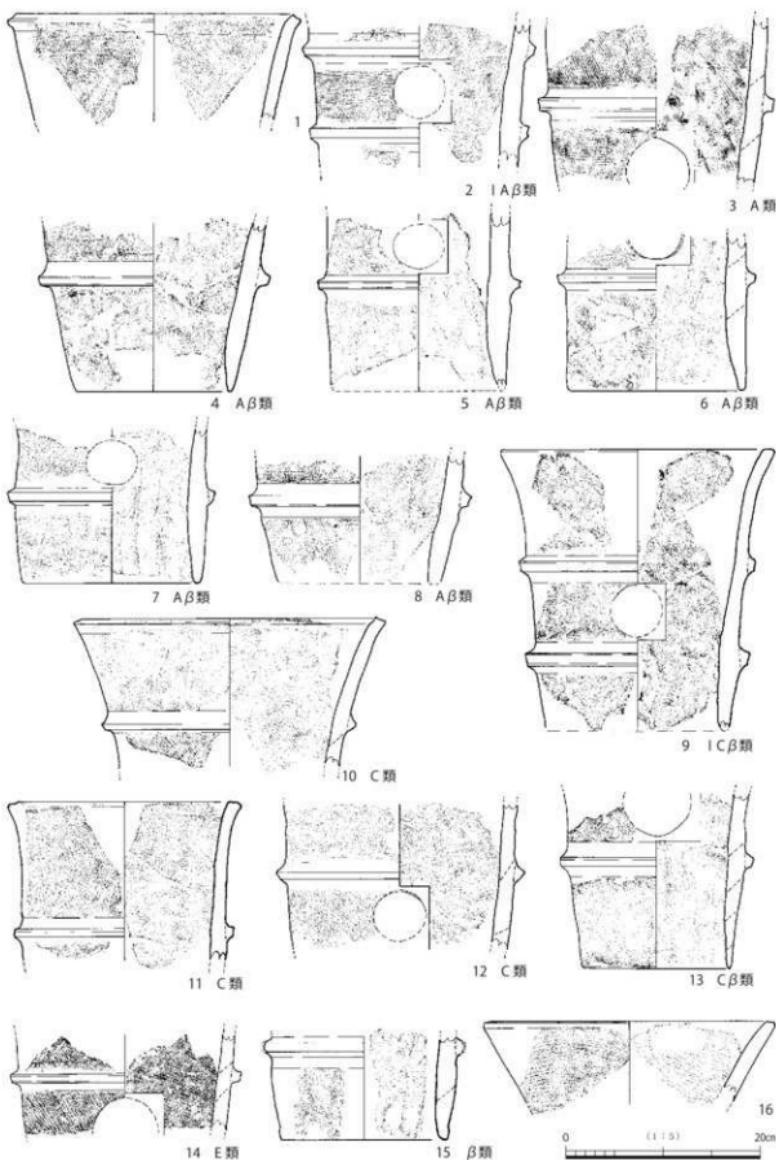
法量

第83図9は基底部の下端を欠くが、ほぼ全体像がわかる。器高29.1cm。この各部位の規格は口縁部高>胸部高>基底部高の関係にある。ただし、全体像がわかる資料はこれのみであり、これを一般化することはできない。

第24表 天神原古墳円筒埴輪観察表（掲載実測図分）

	部位	段	胸部 調整	基底部 調整	突帯の 突出	段状 突帯	突帯高	最大径	口縁部 高	胸部高	基底部高	備考
1	口						30.2					
2	口・2・基	I	A	β	上		0.8～0.9	22.8		8.2		
3	口・2		A		上		1.2	22.8				
4	2・基		A	β	上		1.3	23.0			11.9	
5	2・基		A	β	上		1.0	19.0			(11.4)	
6	2・基		A	β	上		0.9	18.5			12.0	
7	2・基		A	β	上		0.8	19.8			9.5	
8	2・基		A	β	上		1.1	21.4			9.0	
9	口・2・基	I	C	β	上		0.9～1.1	28.4	11.5	9.5	8.1	器高(29.1)
10	口・2		C		上		0.9	32.0	11.0			
11	口・2		C		上		0.9	24.0	13.2			
12	3?・2	IIか	C	β	上		1.1	24.0				
13	2・基		C		上		1.0	19.0			11.5	
14	2		E		上		1.0	22.8				
15	基			β			(1.1)	19.0			10.0	
16	口							30.0				朝顔形埴輪

*部位欄の略号は「基」基底部、「2」胸部2段目、「3」胸部3段目、「口」口縁部を示す。単位はcm



第83図 天神原古墳の円筒埴輪実測図

その他

赤や黒で塗られたものはない。第83図16は口縁部が大きく開く朝顔形円筒埴輪であろう。

(3)まとめ

天神原古墳の円筒埴輪には、IA β 類とIC β 類、IE類⁽⁴⁾の3種類があり、IE類が約半分を占め主体をなす。基底部は、板状工具でタタキが施されている。突帯は1cm前後でそれほど高くなく、段状突帯もない。

4 今市大念寺古墳の円筒埴輪

(1) 古墳の概要

今市大念寺古墳は出雲市今市町にあり、文政9(1826)年に横穴式石室が発見された。墳丘は全長約92mの前方後円墳で、島根県最大の古墳である。墳丘および石室の保存修理事業の際に円筒埴輪が出土したが、出土品についての詳しい報告はない(川上編1988)。

(2) 円筒埴輪の特徴

今回、254片を確認した。第25表にその集計を示す。これらのうち各部位の高さがわかる破片を中心に14点を実測し第84図に掲載した。第26表はそれらの観察表である。

段数

段数がわかるものはなかった。3条4段のII類は第84図5・8にその可能性があるものの確証はない。

外面調整

口縁部の外面はハケメが施されている。胴部外面調整で2次調整が施されるものはA類が1点3%, C類が3点9%, 2次調整が施されないE類が28点88%で、ほぼE類である。

基底部調整

基底部は、タタキを施した後のハケメ調整が施されないβ類ばかりである(第84図5・9~13)。タタキの工具には、板状のもの(第84図10~12)と円柱状(第84図5・13)のものがある。板状工具によるタタキが施されたものにはその工具の木目が残る。これらを施した後、部分的にナデ調整される。

突帯

指ナデにより上端が突出するもの(第84図5・8・10)や下端が突出するもの(第84図3)がある。突帯の高さは0.8~2.2cmで、1cm前後と、1.5cm以上の高いものがあり、高い突帯には段状突帯になるものもある(第84図5・6)。段状突帯とは高い突帯の各面をヨコナデする時に、下面のヨコナデが弱かったため生じたものである(田中2017)。

法量

各部位の高さがわかる資料は少ない。第84図5は胴部高11.5cm、基底部高は第84図10が16.0cm、第84図11が12.7cmである。

その他

外面を赤色顔料で塗ったものがある(第84図3・4・7・10・12)。未掲載であるが黒く塗られたものもある。

第84図14は、内外面にも調整痕がなくタタキも施されないもので、形象埴輪片と考えられる。

第25表 今市大念寺古墳円筒埴輪の破片数とその特徴

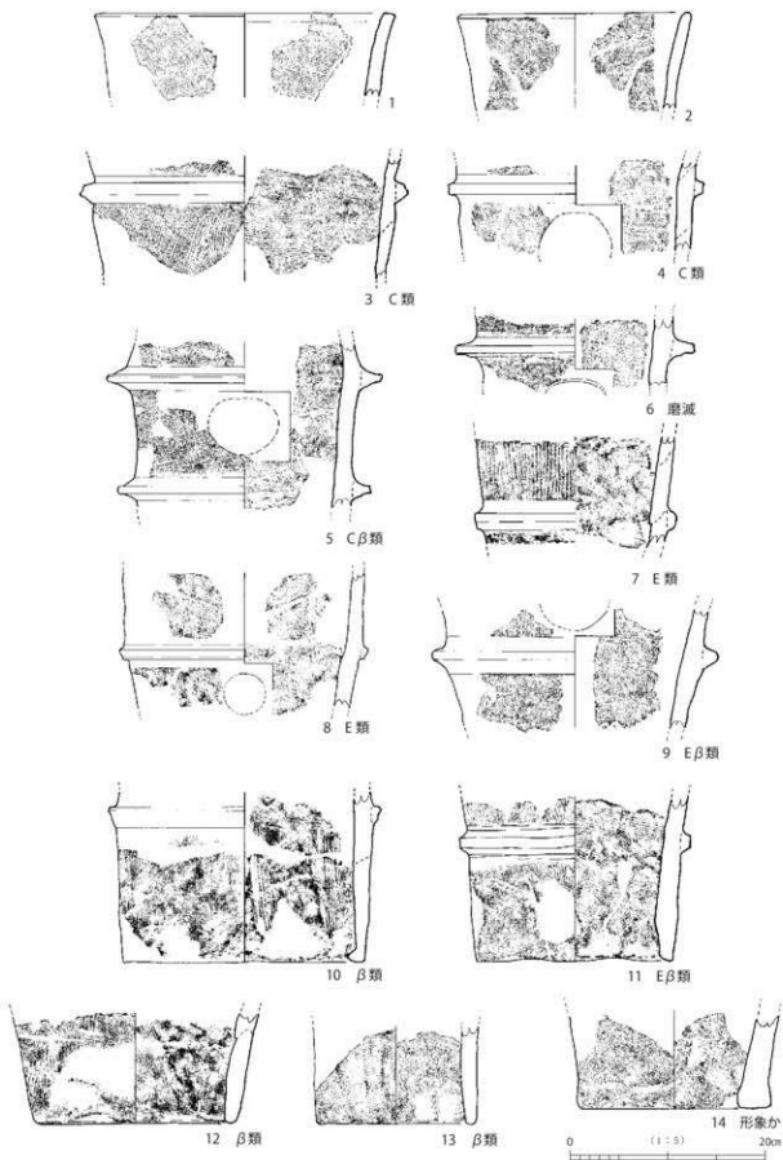
出土位置	出土 破片数	口縁部	胴部	突帯片	胴部片 調整不明	基底部	注記	備考
くびれ部南側面	2	ハケメ1			1		埴丘くびれ部 830829	
くびれ部近くの 後内部南斜面	12		E2		9	β2	南B地点流土 870826～29	基底部にハケメ残る
前方部南斜面	125	ハケメ1	E11	14	91	β6	2T 870603～05	赤色3・黒色2、円形スカシ4、 基底部にハケメ残る
前方部南裾部	1				1		D地点流土	
前方部 南側平坦面	74	ハケメ6	A1 C1 E2	19	43	β3 形象1	トレンチ内 830829	円形スカシ4
前方部南側 平坦面か?	4				4		トレンチ北墳 870829	
後内部南斜面					1		1T 861117	赤色1
埴丘北側	36		C2 E13	4	16	β2	北側崩落断面	赤色18、倒立させたあとに塗装、 円形スカシ2、基底部にハケメ残る
合計	254	8	32	38	165	14		

数字は破片点数

第26表 今市大念寺古墳円筒埴輪観察表(掲載実測図分)

	部位	段	胴部 調整	基底部 調整	突帶 突出	段状 突帶	最大径	口縁部 高	胴部高	基底部 高	突帶高	備考
1	口						30.8					
2	口						24.0					
3	?・2	C			下		32.0				1.3	外面赤色顔料
4	?・2	C					24.8				1.0	外面赤色顔料
5	3?・2・基	IIか	C	β	上	○	22.4		11.5		1.8～2.2	
6	?・2	磨滅				○	20.2				2.4	
7	2・?	E					20.4				1.0	外面赤色顔料
8	3?・2	IIか	E	β	上		28.8				0.9	
9	2・基						27.4				1.5	
10	2・基		β		上		26.4		16.0	0.8		外面赤色顔料
11	2・基		E	β			23.2		12.7	0.8		
12	基			β			25.2					外面赤色顔料
13	基			β			17.0					
14	基			2次調 整なし			21.6					形象埴輪か

*部位欄の略号は「基」基底部、「2」胴部2段目、「3」胴部3段目、「口」口縁部を示す。単位はcm



第84図 今市大念寺古墳の円筒埴輪実測図

(3) まとめ

今市大念寺古墳の円筒埴輪は、E β類が主体をなす。基底部は、板状あるいは円柱状の工具でタタキが施されている。突帶は1cm前後と、1.5cm以上の2種類の高さがあり、高い突帶には段状突帶になるものがある。外面を赤く塗られたものが目立つ。

5 妙蓮寺山古墳の円筒埴輪

妙蓮寺山古墳は出雲市下古志町にあり、大正時代には横穴式石室が確認されていた。1958（昭和33）年に県立出雲高校が、1963（昭和38）年には島根県教育委員会が市内で最初の学術調査を実施し、調査報告書も刊行された（山本編1964）。墳丘は全長約49mの前方後円墳と推定され、この調査の時に墳丘から円筒埴輪が出土した。

発掘調査報告書には、円筒埴輪7片が図化され（島根県教育委員会1964）、現在、島根県立古代出雲歴史博物館で保管されている。掲載資料の他にも円筒埴輪片がある⁽⁵⁾。これらの特徴をまとめたのが第27表である。

破片が小さく段数は不明である。口縁部外面にハケメ調整が施され、胴部外面にはC類とE類がある。確認点数が少なく検討は難しいが、ヨコハケは確認できない。基底部は円柱状工具によるタタキが施された後、ハケメ調整が施されないもの（β類）ばかりである。したがって、C β類およびE β類があると推定できる。突帶は、突帶高は1.3～2.3cmと高く、段状突帶が確認できる。

第27表 妙蓮寺山古墳円筒埴輪の破片数とその特徴

確認破片数	口縁部片	突帶が残る胴部片	胴部片	基底部	備考
25	ハケメ4	17	1	β4	胴部外面調整はCとEがある 突帶高は1.3～2.3cm 段状突帶は3点ある

数字は破片点数

6 上塩治築山古墳の円筒埴輪

上塩治築山古墳の円筒埴輪についてはすでに第5章3節で詳述した（57頁第4表）。ここで簡単にまとめてみたい。

突帶の条数と胴部・基底部調整から7種類の円筒埴輪がある。その中でII C β類（3条4段で胴部2次調整ナナメハケ、基底部調整なし）が主体をなす。胴部調整に限ってみれば、2次調整を施すものが80%で主体をなす。その中でC類が最も多く、基底部のタタキは円柱状工具で施されている。突帶は指ナデにより上端あるいは下端に突出するものがある。突帶高は1.0～2.1cmで、78%が1.5cm以上の高い突帶である。段状突帶もある。

各部位の規格は、2条3段のI類が口縁部高<胴部高<基底部高となり、3条4段のII類は口縁部高<胴部上高<胴部下高<基底部高となる。いずれも口縁部が低く基底部が高い。

外面は赤く塗られるものはないが、黒色物質が付着しているものはある。

7 出雲西部における古墳時代後期の円筒埴輪の変遷

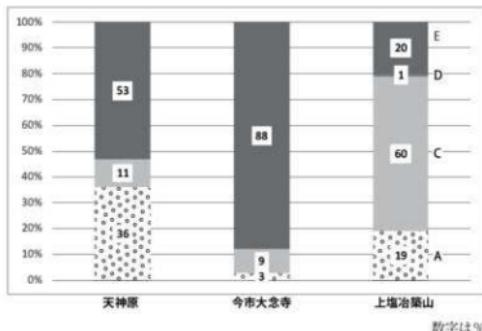
本項では、各古墳から出土した円筒埴輪を比較する。天神原古墳以外は横穴式石室を内部主体とし、その編年から、今市大念寺古墳、妙蓮寺山古墳、上塩治築山古墳と変遷することが分かっている（坂本2012）。天神原古墳は発見時の報告に石室の記載がないので横穴式石室導入前とみて、これらの古墳よりは古いと推測する。最も古いのが天神原古墳（須恵器編年出雲2～3期）、それに継ぐのが今市大念寺古墳（出雲3期）、その後に妙蓮寺山古墳（出雲3期）、最後に上塩治築山古墳（出雲4期）である。この順番で各古墳の円筒埴輪の変遷を見てみることにする。

（1）胴部外面調整

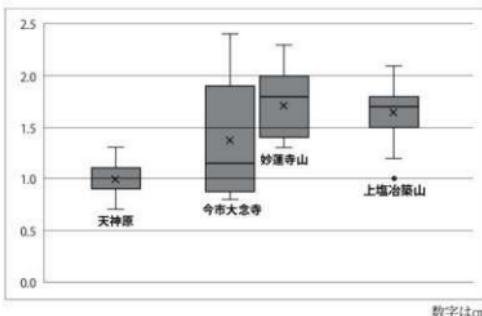
胴部外面調整をみると各古墳とも主体になるものが異なる（第85図）。天神原古墳は、2次調整を施さないE類が主体をなすが、2次調整がヨコハケのA類も約36%含まれている。2次調整がナナメハケのC類は11%と少ない。一方、今市大念寺古墳はE類が88%もあって主体をなし、A類がほとんどない。つまり、2次調整を施すものが少ない。上塩治築山古墳はC類が約60%で主体となり、他の2古墳とは構成が大きく異なる。A類は約20%あり、約80%の円筒埴輪に2次調整が施されている。胴部調整をみると今市大念寺古墳と上塩治築山古墳の違いが大きいことがわかる。以上のことから、胴部調整は各古墳の特徴を示す重要な属性であると言えよう。

（2）基底部調整

基底部にはタタキが施されている。その後にハケメ調整が施されるものは上塩治築山古墳にあるが、数は少ない。天神原古墳や今市大念寺古墳では、タタキ後ナデられるものがある。一方、上塩治築山古墳の基底部は、タタキ後ナデされるものではなく、基底部調整の省略が進んだ段階と理解する。また、円柱状工具は、天神原古墳にはなく、今市大念寺古墳以降に使われたようだ。出雲西部でも板状から円柱状へ工具が変化していることがわかる。



第85図 3古墳の円筒埴輪の胴部調整比較



第86図 4古墳の円筒埴輪の突帯高比較（箱ひげ図）

(3) 突帯高と段状突帯

天神原古墳の突帯の高さは1cm前後、今市大念寺古墳は1cm前後と1.5cm前後の2種類、妙蓮寺山古墳と上塙治築山古墳は1.5cm前後である。今市大念寺古墳に2種類の高さの突帯存在することで、徐々に突帯が高くなっていることがわかる(第86図)。

段状突帯は、天神原古墳ではなく、ほかの3古墳には存在する。この段状突帯は1.5cm前後の高い突帯に限ってみられるようである。

(4) 胸部・基底部高

ここでは各部位の高さを比較したいが、資料が細片のため口縁部は難しく、胸部と基底部を対象とした(第87・88図)。これによると天神原古墳から上塙治築山古墳へかけて胸部および基底部が高くなっていることに気づく。

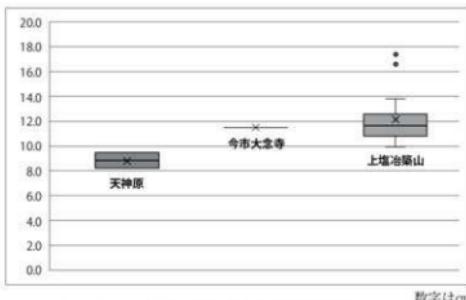
胸部は、天神原古墳が低く、上塙治築山古墳と今市大念寺古墳はほぼ同じ高さである(第87図)。基底部は、天神原古墳が低く、上塙治築山古墳には今市大念寺古墳と同じ15cm前後のものがあり、さらに20cmを超えるものも多くある(第88図)。したがって、上塙治築山古墳には、それ以前にはなかった大形の円筒埴輪が並んでいたことが推定できる。つまり、天神原古墳から上塙治築山古墳にかけて円筒埴輪が徐々に大型化していることが読み取れる。

また、全体の規格をみると天神原古墳は口縁部高>胸部高>基底部高となり、口縁部が最も高い。一方、上塙治築山古墳は口縁部が低く基底部が高い。天神原古墳から上塙治築山古墳までに規格が変化したことがわかる⁽⁶⁾。

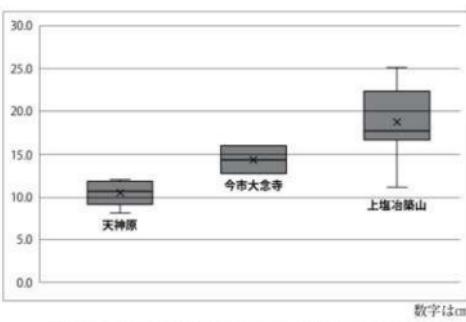
(5) まとめ

以上、出雲西部における古墳時代後期の円筒埴輪の変遷を検討した。基底部調整、突帯高と段状突帯及び規格をみると、石室編年と同じく天神原古墳から上塙治築山古墳へ円筒埴輪が変化していることが明らかになった。特に柱状工具の導入や高さのある突帯、段状突帯の登場、器高の大形化が今市大念寺古墳で起きていることがわかる。ここに大きな画期があったと推定する。

胸部外面調整については、各古墳それぞれに特徴があり、変遷を読み取ることはできなかった。この要因は次項で述べる。



第87図 3古墳の円筒埴輪の胸部高比較(箱ひげ図)

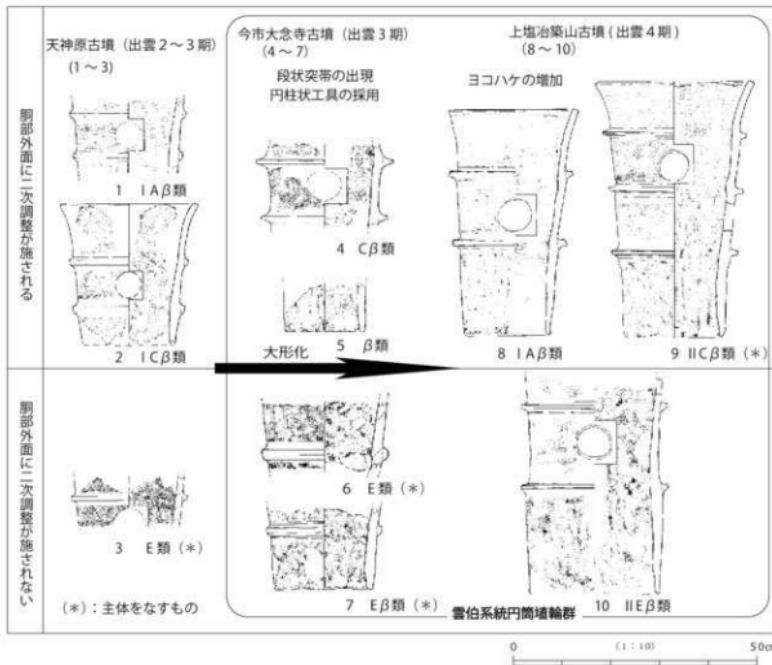


第88図 3古墳の円筒埴輪の基底部高比較(箱ひげ図)

8 上塩治築山古墳の円筒埴輪の特色

前項で出雲西部地域における古墳時代後期の円筒埴輪を検討し、今市大念寺古墳に大きな画期があることを示した。それをまとめたのが第89図である。今市大念寺古墳と上塩治築山古墳は田中大が提唱する「雲伯系統円筒埴輪群」に入るようだ（田中2017）。田中による「雲伯系統円筒埴輪群」の定義は「突帯の突出が極めて高く（突帯突出1.5cm前後以上）、断続ナデ技法をおこなわない。段状突帯を含む。底部調整をおこない、円柱工具によるタタキなど特徴的なものがある。外面調整は二次ヨコハケ〔静止痕をもつB種ヨコハケ・静止痕が確認できずストロークが長いAb（Ca）種ヨコハケ〕を含み、内面調整はハケメとナデをおこなう。無黒斑のみである。出雲から伯耆西部（淀江地域を含む）の全域に分布する」である（田中2017, 90頁）。

この要素で注目されるのは、外面調整の2次ヨコハケという個別の調整名をあげている点で、この調整が特に重要なことを示している。しかし、今市大念寺古墳の円筒埴輪には外面調整に2次ヨコハケを含むものはわずかに1点のみの出土である。この要素に合致することは言い難い。一方、上塩治築山古墳では、2次ヨコハケが約20%に増えており、「含む」という表現に合致する。この状況をみ



第89図 出雲西部における古墳時代後期の円筒埴輪の変遷とその特徴

ると、「雲伯系統円筒埴輪群」は、田中の定義にあがる要素すべてに一致したものが作られたのではなく、突帯の高さが1.5cm前後以上のものや段状突帯を含むことが重要な要素のようだ。既に田中が指摘するように、「雲伯系統円筒埴輪群」の中にも規格の違いがある（田中2012）。また、前項で示した胴部外面調整の特徴が各古墳で異なるのは、出雲西部から伯耆西部地域での円筒埴輪生産に関する情報共有関係の変化に起因すると考える。すなわち、出雲西部が「雲伯系統円筒埴輪群」のネットワークに入ったのは今市大念寺古墳の段階で、これらの地域間に連携（情報の共有）が生まれた。そして、上塩治築山古墳の円筒埴輪にみられるヨコハケの増加からは、その連携の強化を読み取ることができ、地域統合が進展したと推察する⁽⁷⁾。

9 おわりに

上塩治築山古墳は、出雲西部地域において最も多くの円筒埴輪が出土した。保存状態もよくその全形がわかる個体もいくつかある。それ故に、古墳時代後期の円筒埴輪の編年を考える上で重要であり、かつて出雲東部地域との比較が可能な資料である。

本稿では、出雲西部地域の古墳時代後期の円筒埴輪を紹介し、上塩治築山古墳と比較した。これにより、この地域での円筒埴輪の変化の過程が具体的に明らかになった。

また、「雲伯系統円筒埴輪群」の中に、上塩治築山古墳の円筒埴輪を位置付けることができたことも大きな成果であろう。そして、胴部外面の2次調整の特徴から、出雲東部や伯耆西部地域との連携強化が上塩治築山古墳の円筒埴輪から読み取れ、地域統合が進展したことも指摘した。池淵俊一が示した東淵寺古墳と上塩治築山古墳に同工品があることもこれを具体的に示しているのであろう（池淵2017）。ただし、出雲西部地域では、明確な形象埴輪の出土はない。一方、出雲東部地域では石屋古墳や平所遺跡などで形象埴輪がみつかっており、埴輪の組成が大きく異なることも付け加えておく。

今後の課題として、今回発表できなかった資料を図化し、各古墳の実態をより詳細に報告していくたい。また、本稿は出雲西部地域のみを扱ったため、田中大が示した「雲伯系統円筒埴輪群」中の地域性の検討や比較ができなかった。また、池淵俊一が行った同工品研究と本稿の規格や調整についての相関関係を明らかにすることも必要である。これらを検討することにより、「雲伯系統円筒埴輪群」内の生産体制が解明されるであろう。

最後になりますが、田中大氏には多くのご指導を賜りました。記して感謝します。

（坂本豊治）

註

- (1) 分類は花谷浩の分類（花谷2015）を基に行い、一部改訂した。
- (2) 未実測のものも可能な限り分類をし部位ごとにその数字を掲載している。
- (3) 破片が小片でA類とB類の判断が難しい。判断が難しいものはA類に含めた。
- (4) E類は小破片ばかりで、基底部調整が確認できない。IA類及びIC類はβ類ばかりだから、IE類もβ類であったと推定する。

- (5) すべてではないが花谷浩が 25 点図化している。それを基に検討した。
- (6) 規格に関しては田中大の論考がある。6世紀後半の意宇平野周辺域の円筒埴輪（山代二子塚古墳、岡田山1号墳、御崎山古墳）は、口縁部高が最も高い（口縁部口 > 胸部高 > 基底部）に対し、出雲西部（上塩治築山古墳）や安来地域（矢田横穴墓群）では基底部が高い（口縁部高 > 胸部高 > 基底部高）という（田中 2012）。
- (7) これを裏付けるには出雲・伯耆西部地域の円筒埴輪の外面調整などの特徴を抽出し、比較する作業が必要である。これは、今後の課題とする。

参考文献

- 熱田貴保 1989 「埴輪」『古曾志遺跡群発掘調査報告書』島根県教育委員会
- 池淵俊一 2017 「松江市東淵寺古墳の埴輪について（補遺）—出雲市上塩治築山古墳の埴輪との比較を中心に—」『古代文化研究』島根県古代文化センター 17 ~ 45 頁
- 井上寛光 1983 「出雲の円筒埴輪」『松江考古』第 5 号 松江考古談話会 38 ~ 61 頁
- 大谷晃二 2003 「円筒埴輪基底部再調整の技法復元」『宮山古墳群の研究』島根県古代文化センター調査研究報告書 16 島根県古代文化センター・島根県埋蔵文化財調査センター 193 ~ 208 頁
- 川上 稔編 1988 「史跡今市大念寺古墳保存修理事業報告書」出雲市教育委員会
- 川西宏幸 1978 「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第 64 号 第 2 号 日本考古学会 1 ~ 70 頁
- 藤部昭・西尾克己編 1980 「出雲・上塩治地域を中心とする埋蔵文化財調査報告書」島根県教育委員会
- 坂本肥治 2012 「横穴式石室の玄門構造からみた中村 1 号墳」『中村 1 号墳』出雲市の文化財報告 15 233 ~ 256 頁
- 田中 大 2012 「山陰地域における古墳時代後期円筒埴輪の様相」『後期埴輪の特質とその地域的展開』中国四国前方後円墳研究会 第 15 回研究集会 21 ~ 32 頁
- 田中 大 2017 「出雲・伯耆西部における古墳時代後期後半の異系統円筒埴輪の融合」『考古学研究』第 64 卷第 2 号 82 ~ 98 頁
- 椿 真治 2008 「出雲東部地域における埴輪出土古墳・中期後半を中心として」『古代文化』第 59 卷第 4 号 113 ~ 123 頁
- 花谷 浩 2015 「6世後半の出雲西部の古墳」『第 26 回 出雲古代史研究会発表資料』出雲古代史研究会
- 深澤太郎 2008 「出雲「額田部臣」再考—古墳群の動向と地域社会階層の再編成—」『國學院雑誌』第 109 卷第 11 号 國學院大学 38 ~ 53 頁
- 藤永照隆 1997 「出雲の円筒埴輪編年と地域性」『島根考古学会誌』第 14 集 島根考古学会 35 ~ 59 頁
- 三原一将・高橋智也編 2004 「上塩治築山古墳」出雲市教育委員会
- 山内英樹 2003 「円筒埴輪研究の現状と課題～「基底部調整」をめぐる諸問題～」『宮山古墳群の研究』島根県古代文化センター調査研究報告書 16 島根県古代文化センター・島根県埋蔵文化財調査センター 181 ~ 192 頁
- 山本清編 1964 『妙蓮寺山古墳調査報告』島根県教育委員会

第8章 結語

上塩治築山古墳は、島根県出雲市上塩治町に所在し、出雲平野南部ほぼ中央の微高地上に造られた古墳時代後期後半の円墳である。直径は約46mで、山陰地方では最長となる全長14.6mの切石積み横穴式石室を有し、玄室内には大小2つの倒抜式家形石棺が置かれる。

1887(明治20)年、土地の所有者により石室が開けられ、棺の内外から豊富な副葬品が出土した。古墳は1924(大正13)年に国の史跡に指定された。1887年の出土品は一部が現在の東京国立博物館や京都大学などの所有となったが、多くは発見者の下で保管され、1959(昭和34)年に出雲市が一括購入し、出雲市所蔵となった。そして、1961(昭和36)年には「塩治築山古墳出土品一括」として島根県指定文化財となる。

1985(昭和60)～2007(平成19)年にかけて、出雲市教育委員会が墳丘の発掘調査を実施し、多くの須恵器や円筒埴輪が出土した。この間の5次にわたる発掘調査で墳丘規模が確定した。

本書の第3～7章で、墳丘と石室および出土品を詳細に検討し、上塩治築山古墳の位置付けを行った。ここでは、今回の整理事業の主な成果をまとめ、本書の結語とする。

1 墳丘と石室

(1) 墳丘

墳丘は直径約46m、高さ6.2m以上で、周溝を含めれば77m以上の規模をもつ。二重周溝になる可能性もあり、その場合、約100mの規模をもつ。墳丘斜面に葺石はないようだが、円筒埴輪と須恵器壺・子持壺が周囲を取り囲む。若干の形象埴輪が置かれた可能性もある。

西日本の6世紀後半から7世紀初頭(須恵器編年陶邑TK43～TK209型式期)には、40m以上の主墳丘部⁽¹⁾をもつ古墳が30数基程度確認できる。主墳丘部の規模が100mを超えるものは、奈良県五条野丸山古墳(後円部径150m)のみ。それに次ぐ50m以上が8基あり、その他は40m台である。46mの上塩治築山古墳は西日本で15番目前後の規模となり、近似した40m後半の規模をもつものとしては、奈良県藤ノ木古墳(48m)、奈良県赤坂天王山古墳(45m)、長崎県鬼の窟古墳(45m)がある。周溝を含めると、7世紀前半の奈良県石舞台古墳(80m)に近く、二重周溝をもつとすると、約100mという規模は西日本の6世紀後半～7世紀初頭の円墳では最大となる。

(2) 石室

内部主体は、奥行のある玄室と長い羨道からなる横穴式石室である。石室の開口方向は南西である。石室の全長は14.6mあり、山陰では最長。石室の側壁の石材は近傍で産出される凝灰角礫岩や凝灰質砂岩、礫岩で、整美な切石に加工され積まれる。

羨道の平面形は主軸方向に長い長方形で、開口部がやや狭い。発見時の記録によると、石室の羨門部と玄門部の両方に閉塞石があったようで、二重閉塞の石室だったことがわかる。出雲西部での二重閉塞は、須恵器編年出雲3期(陶邑TK43型式期)の今市大念寺古墳と妙蓮寺山古墳で知られる。当地

域における横穴式石室導入期の特色であり、強い閉塞意識がうかがえる。

西日本の6世紀後半～7世紀初頭の横穴式石室で、全長が14mを越えるものは20数基程度ある。上塙治築山古墳の規模に近い古墳は、奈良県赤坂天王山古墳(14.9m)、香川県榎賀塚古墳(14.8m)、奈良県藤ノ木古墳(14.2m)などがある。

(3) 石棺

玄室には大小2つの剖抜式石棺がある。ともに横口のある家形石棺で、凝灰角礫岩製である。玄室の中央、左壁沿いにある大石棺は長さ2.8m、幅1.4m、高さ1.7m。玄室の奥壁に接し、右壁側に寄せて置かれた小石棺は、長さ2.1m、幅1.36m、高さ1.37mを測る。大石棺と比較すると幅はほぼ同じであるが、長さと高さは約3/4である。繩掛突起は大石棺の棺身の妻側側面に各1個あるが、小石棺にはない。両棺とも石室築造時に置かれ、大石棺が初葬、小石棺は追葬と推定する。

横穴式石室や横穴墓に複数の石棺を置く例は、全国で約35基知られる(日本考古学協会2010)。そのうちの19基(54%)が近畿地方で、九州はない。出雲地域には8基あり、全国的にみると多い地域である。2つとも剖抜式石棺を置く例は9基(26%)ある。当古墳と近い時期に剖抜式石棺を2つ置く古墳には、奈良県五条野丸山古墳や奈良県牧野古墳がある。かたや大王陵あるいは蘇我稻目墓、かたや王子墓と目される古墳である。

(3) まとめ

上塙治築山古墳は直径約46mの円墳で、墳丘・石室・大石棺は、いずれも須恵器編年出雲4期前半の出雲西部では隔絶した規模をもつ。それは、山陰地方に比較の範囲を広げても変わらない。よって、上塙治築山古墳の大石棺の被葬者は出雲西部を領域とした⁽²⁾最上位の人物であり、山陰地方において突出した勢力を持っていたと推定できる。墳丘と石室の規模は、奈良県藤ノ木古墳や赤坂天王山古墳とほぼ同じで、王族が埋葬されたと推定される古墳に匹敵する規模である。

2 出土品

石室内出土品は215点あり、その内の197点と墳丘から出土した円筒埴輪・須恵器(約3,300点)が出雲市の所蔵品である。これらの中で特に重要な140点(本指定88点、附52点)を、国の文化審議会による重要文化財指定の答申が文部科学大臣に対しなされた。出土品には金属製品、玉、土製品がある。

(1) 金属製品

特筆すべきは、冠や馬具類、武器・武具類などの種類豊富な金属製品で、その遺存状態の良好さには目を見張るものがある。

冠は金銅製で、格子状に列点文が施された帶金の中央に、左右に一本ずつ枝をもつ剣菱形の立飾がつく。立飾と帶金は紐で縫じつけられる。形や技法も特殊で、国内で製作されたものであろうが、類例のない極めて珍しい一品である。大刀は、金銀装の拵えを伴う円頭大刀と振環頭大刀があり、これらは国産装饰大刀の形態を知る上で貴重である。馬具には、金銀装と銀装の一式で構成される2セットがある。このうち金銀装の一式は、轡や鞍、鎧だけではなく、面繫や胸繫、尻繫を飾る雲珠、辻金具、

杏葉などの飾金具が描い、一部には繩の革帶の痕跡が良好に残る。銀装馬具の辻金具にも同じく繩の革帶が良好に残る。これらは古墳時代の飾馬の実態を具体的に復元しうる貴重な資料である（第7章第2節）。この他、武器・武具類には鉄矛、鉄鎌、鞍金具がある。中でも鉄矛は、約9本以上の出土があり、同時期の列島では傑出した数である。

（2）玉

装身具の玉には石製とガラス製があり、ガラス製の玉には管玉1点と小玉78点がある。今回、ガラス製品の自然科学分析を行った（第6章第2節）。分析を行った田村朋美によると、小玉は材質と製作技法から7種類に分けられる。特に包み巻き法で作られた通番73の3点と変則的引き伸ばし法で作られた通番76の9点は、類例（奈良県牧野古墳、飛鳥寺塔心礎など）から古墳時代後期末の陶邑TK209型式期に位置づけられた。ガラス玉は小石棺から出土しているので、これが追葬に伴うとすると、その時期を陶邑TK209型式期とする根拠となりえるかもしれない。

（3）土製品

墳丘から出土した須恵器子持壺や円筒埴輪は全国的にみても特殊な形態をしており、「出雲型子持壺」や「雲伯系統円筒埴輪群」として王権の影響を受けない生産が指摘されている。特に上塩治築山古墳の子持壺は「出雲型」の中でも特殊で、類例は近くの築山古墳群に限られる（第7章第3節）。出雲東部からの子持壺の導入に加え、円筒埴輪が出雲東部や伯耆西部のものと共通性を高めることから、首長間の連携が強化され、地域統合の動きが進展したと推定した。（第7章第4節）。

（4）まとめ

上塩治築山古墳の主要な出土品は、金銅冠1点、金装銀耳環2点、金銀装大刀2本、鉄刀2本、鉄鎌34本以上、鉄矛9本以上、金銀装・銀装馬具2組、銅鈴6点、大形刀子1本、鹿角装刀子7点、鉄斧1点、鉤状鉄製品6点、須恵器子持壺、円筒埴輪などである。冠や耳環、ガラス装身具のほか、大刀・馬具などは王権との関連性から入手したものであり、鉄矛や鉄鎌の一部は山陽地域、石製玉類・子持壺・円筒埴輪は出雲・伯耆西部地域のネットワークを介して入手したり、情報を得て地域生産されたりしたものがある。

出土品の時期は、須恵器編年出雲4期（陶邑TK43末～TK209型式期）の所産と考える。

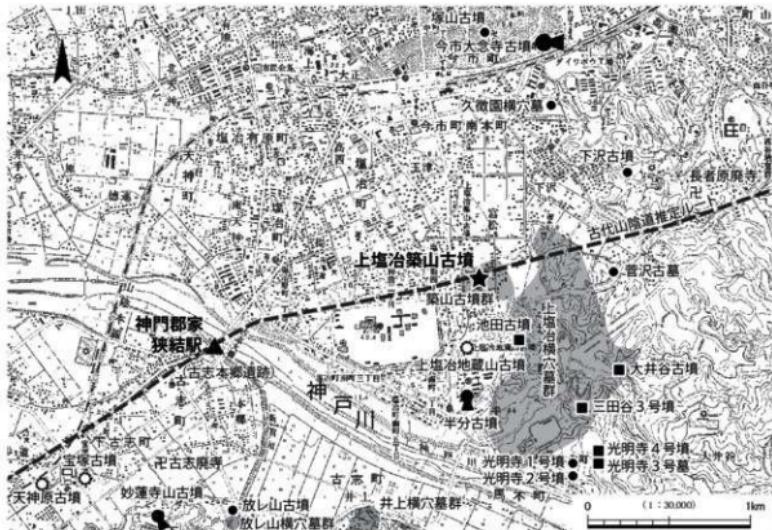
3 副葬品の出土状況と被葬者

（1）副葬品の出土状況

1887（明治20）年に出土した遺物の出土位置については、『県報告』で詳細な検討がなされた。その成果をもとに、大石棺には金銀装円頭大刀・銀装の馬具（Bセット）、小石棺には金銅冠・金銀装環頭大刀・金銀装の馬具（Aセット）・鉤状鉄製品・玉類が伴うと推定した（第4章第2節）。

（2）大石棺の被葬者

大石棺は出雲西部を支配下に置く最上位の人物であるが、伴う副葬品は少ない。しかし、銀装の馬具は新羅製の可能性がある特殊なものである。6点の銅鈴は金銀装の馬具からは離れて、大石棺の近くから出土していることから、大石棺に伴うものとして理解できないであろうか。この点に注意を払つ



第90図 狹結駅と上塙治築山古墳の位置

た桃崎祐輔は、古墳時代の厩舎状遺構や虎頭鉾・多角形鉾の出土状況から、これらの鉾が駅鉾と同じ機能をしていた可能性を指摘する。上塙治築山古墳の銅鉾も駅鉾の可能性を示唆し、出雲国神門郡狭結駅の前身にあたる、推古朝の「プレ駅家の駅長的な首長」であったと推測した（桃崎 2017）。

律令期の出雲平野は、『出雲國風土記』等にも記されるように、かつて西流した斐伊川を境として右岸は出雲郡、左岸は神門郡に属した。上塙治築山古墳は神門郡にあり、のちの神門郡家は西約 1.8 km の古志本郷遺跡にあったと推定されている。郡家と同じ場所には狭結駅が置かれた（第90図）。この地は幹線道路である古代山陰道の渡河地点、つまり陸上交通と水上交通の結節点であり、それ故に、郡家が置かれたとする（島根県古代文化センター編 2014）。古墳が造られた当時も、すぐ西側には神戸川が流れおり、重要な交通要衝に上塙治築山古墳が築造された可能性が大きい。

桃崎の指摘は、まだ検証が必要であるが検討に値する所論であろう。

（3）小石棺の被葬者

本節第1項で本古墳の主たる被葬者は大石棺に、それに次ぐ人物が小石棺に埋葬されたと考えた。しかし、副葬品をみると小石棺に伴うものの方が豪華かつ豊富である。金銅冠や金銀装の馬具は出雲西部を支配下に置く「大首長」のものではなかった。ここから想起されるのは、松江市岡田山1号墳の家形石棺が成人男性を納めるには小さすぎることをとらえ、「おそらく大和に舍人として上番し彼地で客死した人物が」「骨化した状態で納められたと推測する」桃崎の指摘である（桃崎 2017）。これらを踏まえると、小石棺に埋葬された人物は、大和にトネリとして上番し、金銅冠や金銀装の馬具な

どを携えて帰郷したのちに亡くなり、埋葬された人物であったと推定できるのではなかろうか⁽⁴⁾。

4 上塩治築山古墳の特色

上塩治築山古墳は、6世紀の第4四半期に築造された直径約46mの円墳である。玄室に2つの家形石棺を納めた横穴式石室をもつ。墳丘・石室・石棺の規模からみて、被葬者は出雲西部を領域としたと推定できる。そして、上塩治築山古墳の特色を次のようにまとめることができる。

①最大の特色は、その保存状況が良好であることだ。周囲が民家と畑に取り囲まれ、墳丘の改変は著しいが、周溝や円筒埴輪などが地下に保存されており、墳丘規模が推定できる。また、石室、石棺、副葬品もよく残る。このように、墳丘・石室・石棺・副葬品がそれぞれ詳しく検討できる古墳は中国四国地方の大規模古墳では上塩治築山古墳の他にない。

②出雲西部を領域とした人物が埋葬される今市大念寺古墳には金銅履が、その後の上塩治築山古墳では金銅冠が出土する。同じ地域内で2代にわたって金銅履や金銅冠が副葬される地域は、今のところ中国四国地方では出雲西部しかない。

③列島の古墳には埴輪が並ぶのが一般的だが、本古墳では須恵器子持壺が加わる。出雲地域特有の形態をした子持壺と円筒埴輪が並ぶ外觀は、当方ならではの特色である。また、子持壺の導入や円筒埴輪の特徴から、上塩治築山古墳の段階に出雲から伯耆西部地域の連携が強化されたと推定した。

④以上のことから、大石棺の被葬者は、出雲西部を支配した山陰地方屈指の人物と推定できる。また、銅鏡の検討から、桃崎氏が推測する「ブレ駅家の駅長的な首長」との見方もできよう。小石棺の被葬者は、大和にトネリとして上番し、金銅冠や金銀装の馬具などの豪華な品を携えて帰郷した人物で、トネリのなかでも高い地位にいたことが推測できる。

以上、今回の報告では、古墳時代後期後半の葬送の実態に加え、当時の社会情勢の研究にまで踏み込みながら、上塩治築山古墳の特色を示した。今後の後期古墳研究の一助になれば幸いである。

今後は、出土品のさらなる研究と保護に合わせて、現地の墳丘及び石室・石棺も後世に残していく措置が必要である⁽⁵⁾。引き続き、貴重な文化財の保護及び活用に努めていきたい。

(坂本豊治)

註

- (1) 前方後円墳と円墳の規模比較が単純にはできないことから、主墳丘部を比較した。主墳丘部とは前方後円墳の場合は後円部、前方後方墳の場合は後方部となる。
- (2) 渡辺貞幸は出雲の大形古墳の動態から「6世紀中葉から後半には、東西出雲のそれに強大な世襲の最高首長をいたく政治体制が並立していた」、「全出雲を実質的に支配するような大首長はいまだ現れていないかった」と指摘する(渡辺 1986)。渡辺に従えば、上塩治築山古墳は出雲西部の首長墳で、同時期の出雲東部東部の首長墳には、松江市東澤寺古墳(前方後円墳全長67~70m)が推定できる。現状、石見部には対比できる古墳は見当らないものの、出雲西部への石見産須恵器の流入が確認される。しかし、それは限定的だから、石見

地域は別個のまとまりをもっていたと考えられる。

(3)『出雲國風土記』にいう「正西道（まにしのみち）」にある。

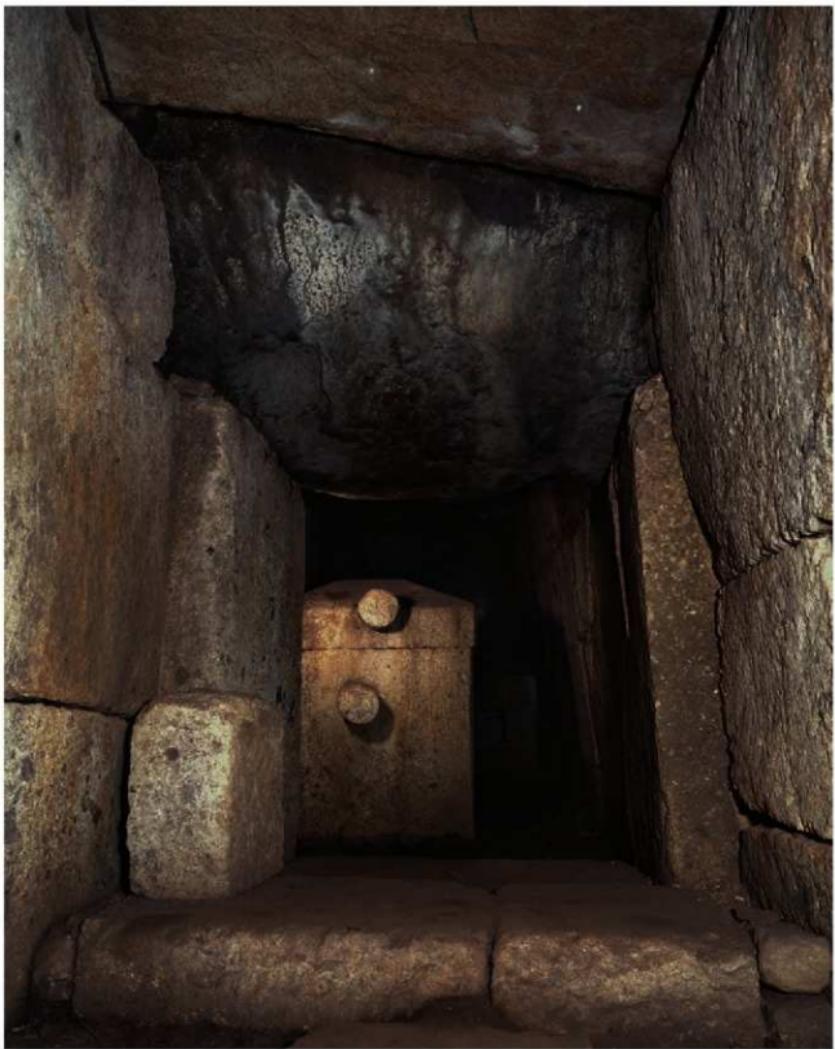
(4)桃崎は小石棺の被葬者を、同種馬具では例外的に、大形雲珠と心葉形透彫杏葉が伴っていること、被葬者に冠帽が添えられていることから、同種馬具保有者の頂点に立つ人物と考えている。額田部比羅夫のような、飾騎の隊長であったと考えることもできると指摘する（桃崎 2017）。

(5)2017（平成29）年11月8日、奈良文化財研究所保存科学研究室の方々に石室環境について、現地指導を受けた。これまでも墳丘からの雨漏りによる石棺の浸食が著しいことは懸念されていた（『県報告』）が、雨漏りではなく、結露によって生じた水分が塩類と反応し石棺や石室側壁を浸食していることが判明した（図版3）。結露は、石室が常時開口していることにより石室外で温度差が発生することに起因する。同じことは、国指定史跡の今市大念寺古墳でも起きている。

参考文献

- 江角健・穴道年弘編 2017『出雲国古代山陰道発掘調査報告書—出雲市三井II・杉沢・長原遺跡の調査—』出雲市の文化財報告33 出雲市教育委員会
- 太田宏明 2011『畿内政権と横穴式石室』 学生社
- 近藤義郎編 1991『前方後円墳集成』中国四国編 山川出版社
- 近藤義郎編 1992『前方後円墳集成』九州編 山川出版社
- 近藤義郎編 1992『前方後円墳集成』近畿編 山川出版社
- 近藤義郎編 1992『前方後円墳集成』中部編 山川出版社
- 島根県古代文化センター編 2014『解説 出雲國風土記』島根県教育委員会
- 下原幸裕 2006『西日本の終末期古墳』 中国書店
- 第2回九州前方後円墳研究会実行委員会編 1999『九州における横穴式石室の導入と展開』第2回九州前方後円墳研究会資料集
- 高島 敦 2006「「多重周濠」をめぐって」『八条遺跡』奈良県立橿原考古学研究所報告第94冊 奈良県教育委員会 394～399頁
- 中国四国前方後円墳研究会編 2013『横穴式石室の導入と展開』第16回研究集会
- 日本考古学協会 2007年度熊本大会実行委員会 2007『日本考古学協会 2007年度熊本大会研究発表資料集』
- 日本考古学協会 2010年度兵庫大会実行委員会 2010『日本考古学協会 2010年度兵庫大会研究発表資料集』
- 桃崎祐輔 2017「額田部の馬具 一心葉形十字文透馬具と虎頭鈴・多角形鈴をめぐって」出雲弥生の森博物館 弥生の森研究会 第66回例会資料
- 横穴式石室研究会事務局編 2007『研究集会 近畿の横穴式石室』 横穴式石室研究会
- 渡辺真幸 1986『山代・大庭古墳群と5・6世紀の出雲』『山陰考古学の諸問題』山本清先生喜寿記念論集刊行会 221～238頁

図 版



狭道から玄室をのぞむ

図版 2 塙丘外観



左側の林が塙丘（南西から）



塙丘近景（南西から）



大石棺（奥壁から）

図版4 石室(3)



開口部（南西から）



玄室から狭道をのぞむ



奥壁



櫛石（奥壁側から）



大石棺の横口（奥壁側から）



小石棺（手前は大石棺）



圖版 6 主要金屬製品・裝飾品



主要金屬製品



裝飾品



1



1(裏面)

図版 8 金装銀耳環・金銀装大刀 (1)



2

2

2



3

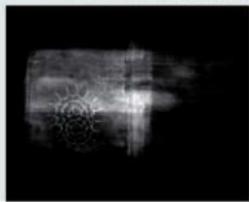
3

3

金装銀耳環



円頭大刀象嵌 X 線面像
(島根県立古代出雲歴史博物館撮影)



金銀装大刀



柄部



柄部

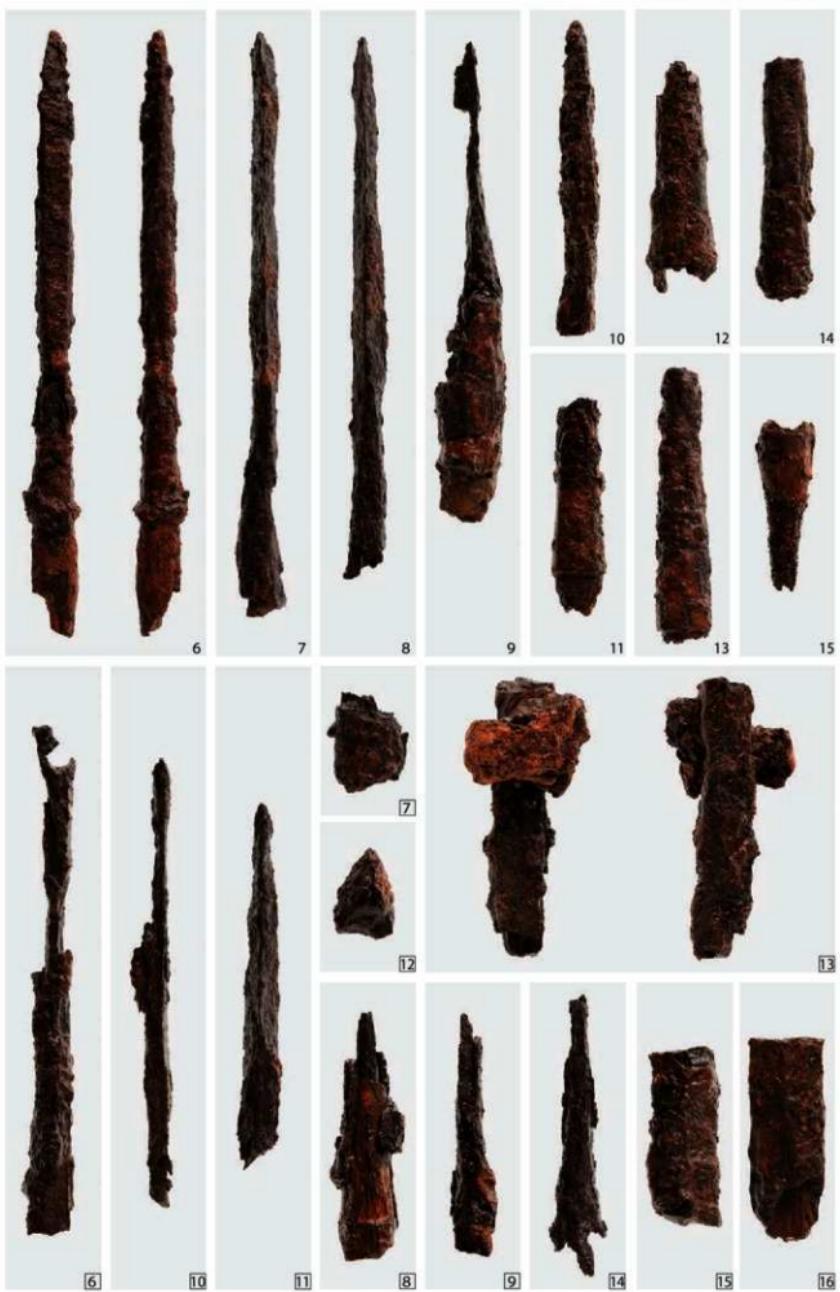


鞘部

図版 10 金銀装大刀 (3)・鉄刀・主要鐵矛身・石突



主要鐵矛身・石突





主要鉄鎌・鞍金具



16



17



18



22



19



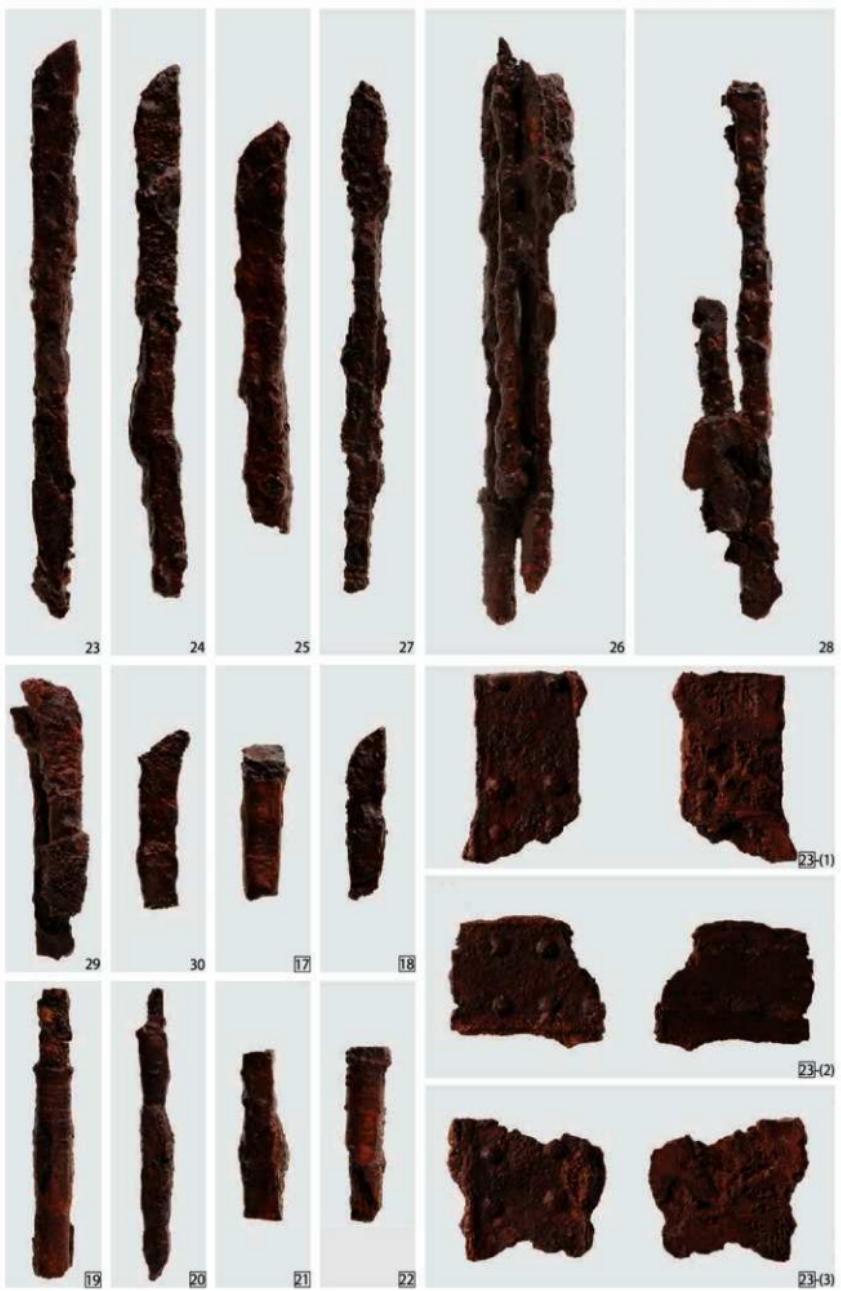
20



21



樹皮に塗布された水銀朱





金銀装錫板付唐・辻金具



右側の錫板



39



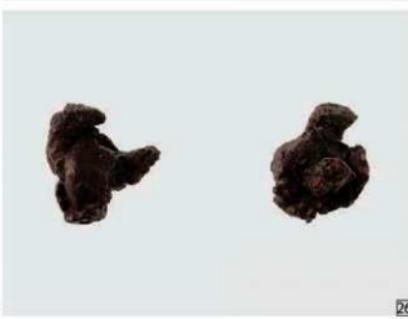
40



24



25



26



32

主要鞍金具



前輪

32-1



後輪

32-2



32-2



(32-2 覆輪裏側)

後輪覆輪



後輪覆輪

32-2



32-2

後輪覆輪の木質



32-2



28



31



29



27



30



32

鞍金具・鎧金具



金銀の雲珠・辻金具・杏葉



銀の雲珠・辻金具・杏葉



33



34



35

36



38

37・51



42



41



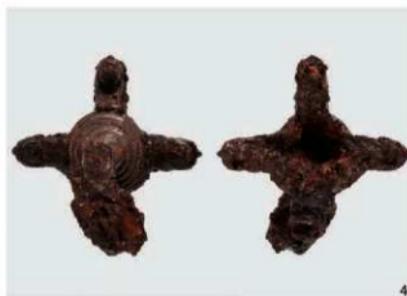
43



45



44



46



47



48



49



50



52



53



54

55



56



57



58



59



56



57



58



59

圖版 24 大形刀子・鹿角裝刀子

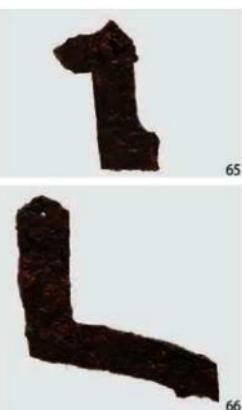




63

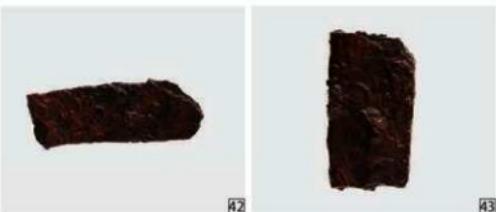


64



65

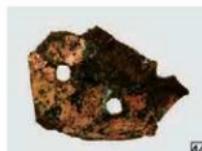
66



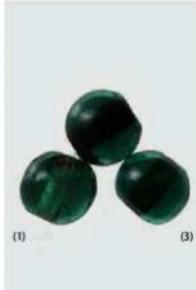
67

68

図版 26 不明金銅板・不明鉄製品・玉



46



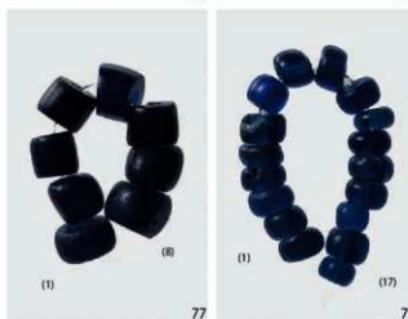
72

73



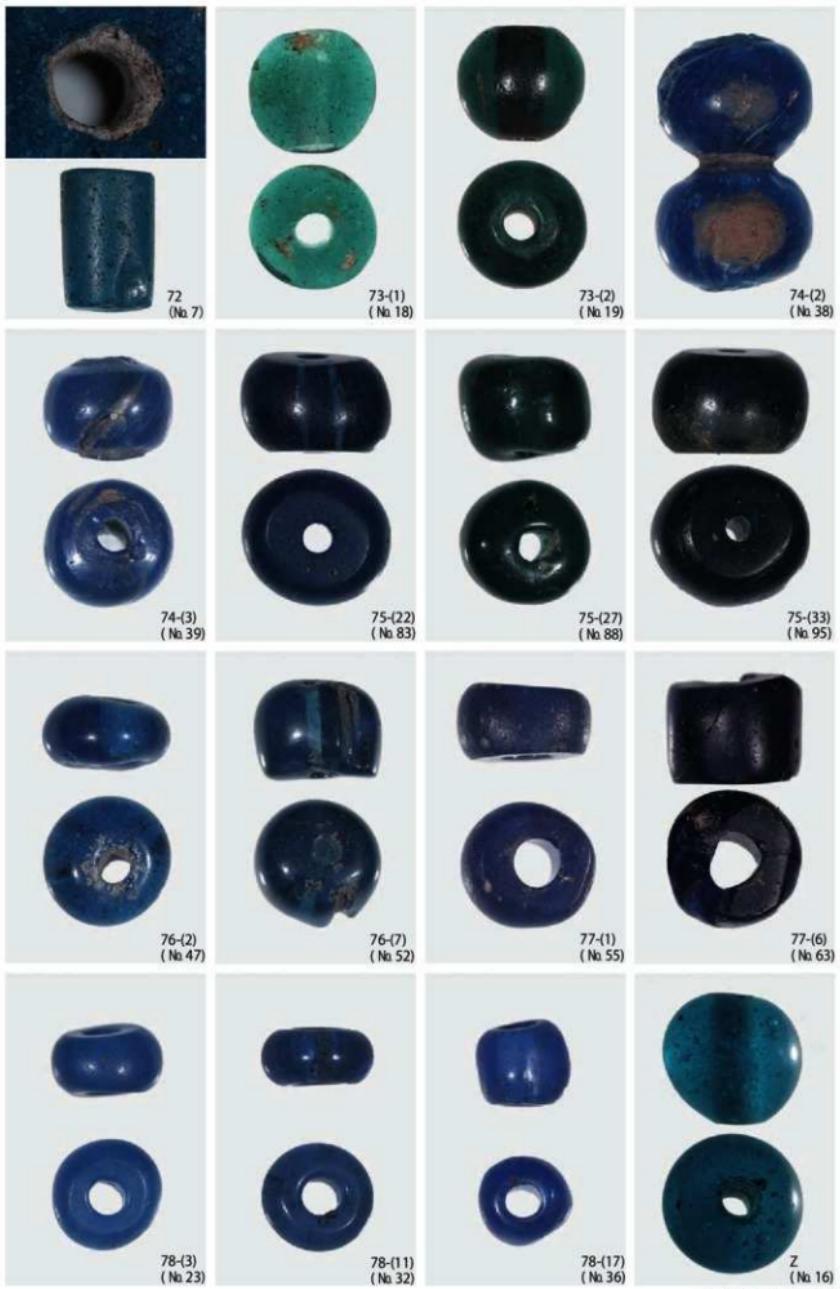
74

76



78







主要土製品



須恵器甕



81



82



83



84

図版 30　円筒埴輪（1）



85



86



87



88



47



48



49



50

図版 32 円筒埴輪 (3)



49-1



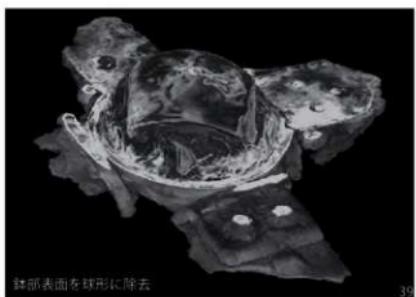
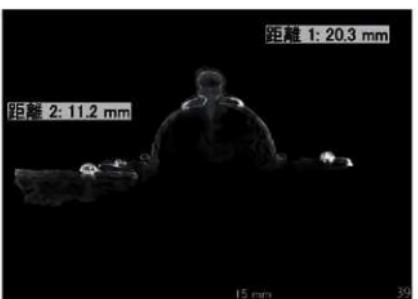
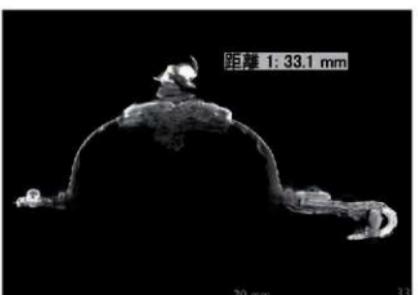
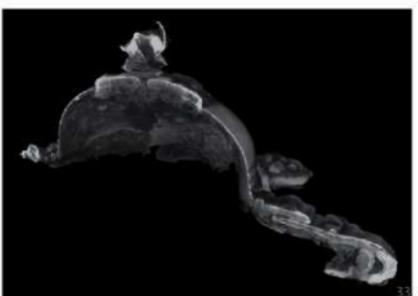
49-2



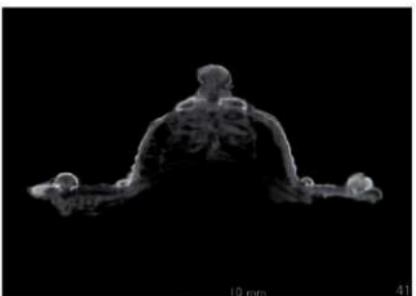
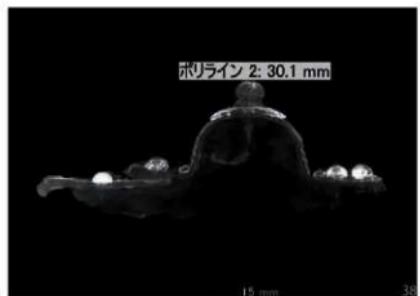
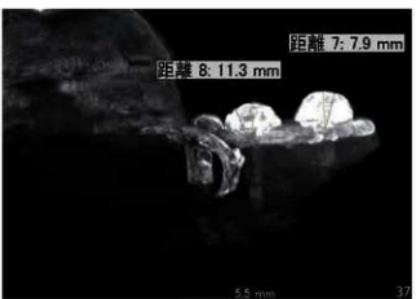
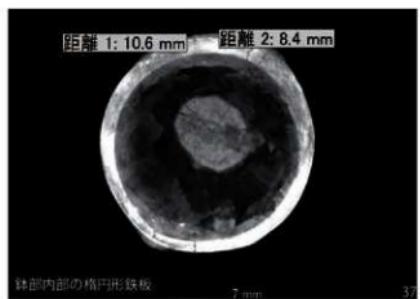
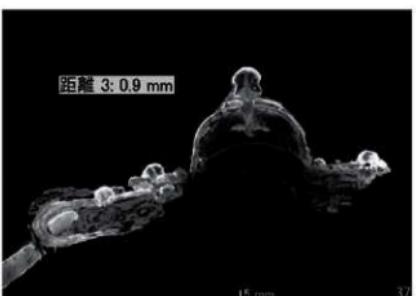
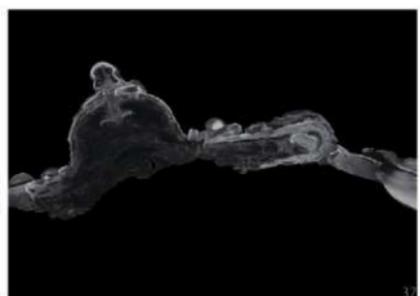
49-3

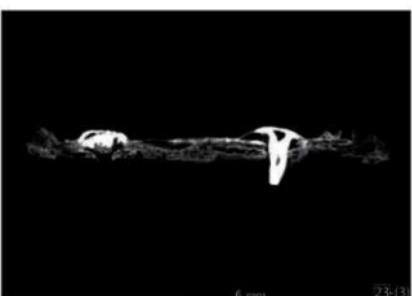
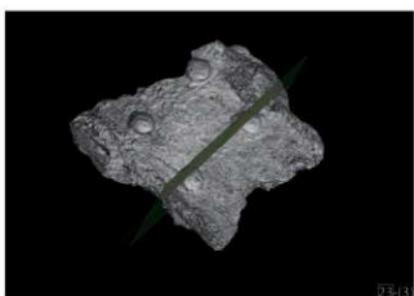
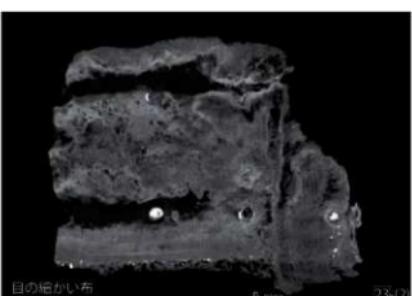
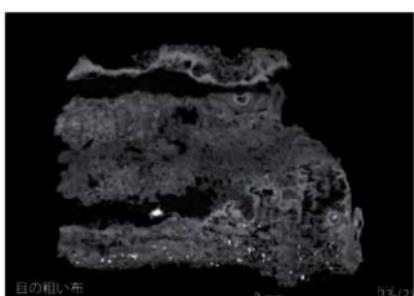
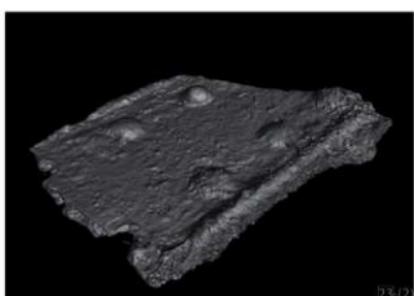
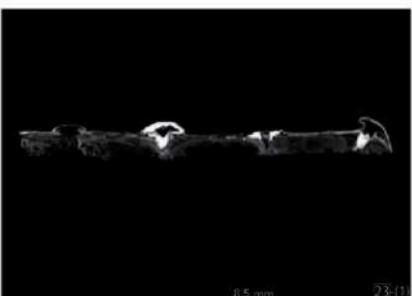
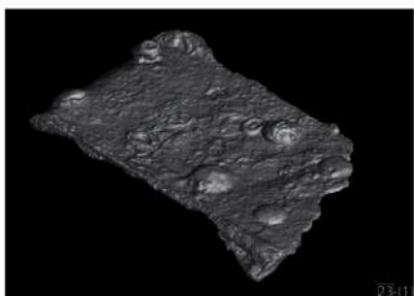


52



図版 34 馬具 CT 画像 (2)





報告書抄録

ふりがな	かみえんやつきやまこふんのさいけんとう					
書名	上塙治築山古墳の再検討					
シリーズ名	出雲弥生の森博物館研究紀要 第6集					
編著者名	坂本豊治（編） 上山晶子 景山このみ 田村朋美 花谷 浩					
編集機関	出雲市市民文化部文化財課 出雲弥生の森博物館					
所在地	〒693-0011 島根県出雲市大津町 2760 TEL (0853) 25-1841					
発行年月日	平成30年(2018)3月30日					
ふりがな	コード	北緯	東径	発掘期間	発掘面積	
所収遺跡遺名	所在地	市町村	遺跡番号			
かみえんやつきやまこふんのさいけんとう 上塙治築山 古墳	しまねけんじゆせきやま 島根県出雲市 かみえんやつきよう 上塙治町 262-6 ほか	W 29 (周囲遺跡地図)	35° 21' 0"	132° 45' 39"	— — —	— 発掘要因 —
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
上塙治築山 古墳	古墳	古墳時代後期 (6世紀第4四半期)	円墳 周溝 横穴式石室 刳抜式家形石棺	金銅冠 金銀装大刀 馬具 子持壺 円筒埴輪	出雲平野の 首長墳	
要約	上塙治築山古墳は、島根県出雲市上塙治町に所在し、出雲平野南部のほぼ中央の微高地上に造られた古墳時代後期後半（6世紀第4四半期）の円墳である。直径は約46mで、山陰地方では最長となる全長14.6mの切石積み横穴式石室を有し、玄室内には大小2つの刳抜式家形石棺が置かれる。墳丘・石室・石棺は、いずれも須恵器編年出雲4期前半（陶邑TK43末～TK209型式期）の出雲西部では最大・最長の規模をもつ。	主要な出土品は、金銅冠、金装銀耳環、金銀装大刀、鉄刀、鐵鎌、鐵矛、金銀装・銀装馬具、銅鏡、大形刀子、鹿角装刀子、鉄斧、鉤状鉄製品、須恵器子持壺、円筒埴輪などである。	1887(明治20)年に玄室から出土した遺物の出土位置の記録をもとに、大石棺には金銀装円頭大刀・銀装の馬具、小石棺には金銅冠・金銀装振環頭大刀・金銀装の馬具・鉤状鉄製品・玉類が伴うと推定する。	以上のことから大石棺の被葬者は、出雲西部を支配した山陰地方では指折りの人物と推定できる。	小石棺の被葬者は、大和にトネリとして上番し、金銅冠や金銀装の馬具などの豪華な品を携えて帰郷した可能性もある。	上塙治築山古墳は、墳丘・石室・石棺・出土品が良好に残存し、山陰地方の大形古墳における副葬品の実態を良く表し、中四国地方では他に例のない重要な古墳である。

2018年3月30日 発行

出雲弥生の森博物館研究紀要 第6集

上塩冶築山古墳の再検討

発 行 者 出雲弥生の森博物館
島根県出雲市大津町 2760

印 刷 者 有限会社 西村印刷